国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 37 号（通巻 70 号）

令和 5 年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

———2024———

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第 37 号(通巻 70 号)

令和 5 年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

———2024———

「国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　令和６年 3月18日」

巻頭言

令和 5 年度の精神保健研究所の業績年報をお届け致します.

令和 5 年度は 3 年余り続いたコロナ禍が明けた後，漸く以前の体制に復帰して研究活動が活性化した 1 年でした．しかしすぐさま，以前のような研究体制に戻ったわけではありません．ひとつには，在宅での研究が制度化され，特に実験に従事しない社会心理系の研究者の中には，在宅勤務に合わせた研究スタイルを発展させた者が少なくなく，しかもその新しいスタイルの中で生産的な活動の方法を見出していました．もちろん，コロナによる様々な制限は私たちの活動に多くの制約をもたらしましたが，その制約の中で論文執筆，調査研究，Web を利用した研修活動など，むしろ以前よりも活発に活動が行われた分野も多く，今年度はそうした遺産を引き継ぎながら，コロナ後の社会に合わせた研究スタイルを模索してきました.

その中で研究者同士の交流の機会が徐々に増えたことは非常に喜ばしいことと感じております．特に今年度末に開かれた精神保健研究所内の研究報告会では，3 年ぶりに対面の懇親会が開催され，この 3 年間の鬱憤を晴らすかのように大勢の研究者が参加し，至る所で活発な交流，意見交換がなされていました．精神保健研究所は実験室，研究室に引きこもって活動することは少なく，社会に開かれた，様々な医療関係者とのコミュニケーションの上に立った研究を重要な柱としています．この懇親会で久しぶりに触れた研究員たちの活気のあふれる交流は，この研究所の本来の姿を再び感じさせるものでした.

今年度はまた，多くの優れた研究成果が発表された 1 年でもありました．精神医学の雑誌の中で最も権威のある Molecular Psychiatry に 5 本，Psychological Medicine に 3 本の論文が掲載されたことを始め，コロナ禍の制約を一気に払拭するかのような極めて質の高い研究成果が発表されています．全体として，基礎研究が活発に行われる一方で，それ以上の，社会で生きている患者や市民を対象とした臨床研究，疫学研究が活性化していることが特徴と言えます．かつて，精神保健医療分野では実装活動の方が研究や論文発表に優先されると思われていたことを考えますと，隔世の感があります．ここに至るまで，研究所を指導し，また力を合わせてこられた歴代の先生方に深く敬意を表したいと思います.

精神保健研究所の長い歴史を通じて，市民のニーズに応えた研究を行い，その成果を現場に役立つ形で還元するという方針は一貫して受け継がれてきました．精研 70 周年事業として開設されたこころの情報サイトは，年間で 350 万回以上，閲覧されています．コロナ禍も明け，新しい時代の中で，当研究所の本来の目的のための活動がより活性化されるものと確信しております．皆様方の御支援，ご鞭撻を改めてお願い申し上げる次第です.

2024 年 3 月

国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所　所長　金　吉晴

目　　次

Ⅰ．精神保健研究所の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
1.　創立の趣旨及び沿革・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
2.　内部組織改正の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
3.　国立精神・神経医療研究センター組織図・・・・・・・・・・・・・・　12
4.　職員配置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
5.　精神保健研究所構成員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14

Ⅱ．研究活動状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17
1.　今年度の活動概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17
2.　公共精神健康医療研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19
3.　薬物依存研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　28
4.　行動医学研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　55
5.　児童・予防精神医学研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　67
6.　精神薬理研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　75
7.　精神疾患病態研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　79
8.　睡眠・覚醒障害研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　99
9.　知的・発達障害研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　113
10. 地域精神保健・法制度研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　128
11. ストレス・災害時こころの情報支援センター・・・・・・・・・・・　149

Ⅲ．研修実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　155

Ⅳ．ランチョンセミナー開催実績
および研究報告会プログラム・抄録集・・・・・・・・・・・・・　187
1.　ランチョンセミナー開催実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　187
2.　研究報告会プログラム・抄録集・・・・・・・・・・・・・・・・・・　188

Ⅴ．令和５年度委託および受託研究課題・・・・・・・・・・・・・・　214

Ⅰ．精神保健研究所の概要

1．創立の趣旨及び沿革

Ⅰ．創立の趣旨

本研究所は，精神衛生に関する諸問題について，精神医学，心理学，社会学，社会福祉学，保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的，包括的な研究を行うとともに，国，地方公共団体，病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識，技術に関する研修を行い，その資質の向上を図ることを目的として，昭和27年1月，アメリカのNIMHをモデルに厚生省の付属機関として設立された．

Ⅱ．精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際，国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された．これを踏まえ，厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され，昭和27年1月，千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された．

研究所の規模について，当初，厚生省は，1課8部60名程度の組織を構想していたが，財政事情等により，総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した．また，附属病院をもつことの重要性は，当時から認識されていたが，病院の新設は困難な情勢であったため，隣接する国立国府台病院と連携，協力することとされた．

その後，知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け，昭和35年10月1日，新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた．この結果，研究所の組織は，総務課，精神衛生部，児童精神衛生部，社会精神衛生部，精神身体病理部，精神薄弱部及び優生部の1課6部となった．

昭和36年には，国立精神衛生研究所組織細則が制定され，部課長のもとに心理研究室，生理研究室，精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた．それとともに，昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり，研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった．

昭和40年には，地域精神医療，社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い，社会復帰部が新設されるとともに，新たに精神発達研究室及び主任研究官（3名）が置かれた．また，昭和46年6月には，社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された．さらに，昭和48年には，人口の高齢化に伴って，痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に，老人精神衛生部が，翌昭和49年には，同部に老化度研究室が新設された．

昭和50年には，精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから，社会復帰部を社会復帰相談部に改組，精神衛生相談室を同部に移管した．また，昭和53年12月には，社会復帰相談庁舎が完成し，精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された．昭和54年には，研修各科の名称が医学課程，心理学課程，社会福祉学課程及び精神衛生

指導課程に改称されるとともに，新たに精神科デイ・ケア課程が新設された．翌昭和55年には，研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた．

Ⅲ．国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は，このような着実な歩みをたどった後，昭和61年10月，国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された．ここに，国立精神・神経センター精神保健研究所は，国立高度専門医療センターの一研究部門として，精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった．その際組織改正により，総務課が庶務課とされ，精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された．その結果，統合前の1課8部8室は，1課9部19室となり，研究・研修機能の強化が図られた．

半年後の昭和62年4月には，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され，二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した．これに伴い，庶務課は廃止され，精神・神経センター運営部（国府台地区）に研究所の事務部門（主幹，研究所事務係）が置かれた．また，同年10月には，心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ，平成元年10月には，社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された．

さらに，平成11年4月には，精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに，薬物依存研究部が組織改正により，心理社会研究室，依存性薬物研究室，診断治療開発研究室の3室編成となった．

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え，創立50周年パーティの開催，記念誌の発行，公開市民シンポジウムを行った．

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され，3室体制で，研究員の増員も認められ，研究所の組織は，11部27室体制（精神保健研修室を含む）となった．

平成17年4月には精神保健研究所は小平（武蔵）地区に移転し研究活動を開始した．

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により，自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と，成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた．

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され，また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり，研究所の組織は11部33室（精神保健研修室含）となった．

Ⅳ．独立行政法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し，調査，研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供，技術者の研修等を行う独立行政法人の名称，目的，業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした，「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により，それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された．

我が国立精神・神経センターは「精神疾患，神経疾患，筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり，精神保健研究所も内部の組織が改正された．

自殺予防総合対策センターは，自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室の3室編成.

精神保健計画部は，精神保健計画研究部へ名称変更され，統計解析研究室，システム開発研究室の2室編成.

薬物依存研究部は，心理社会研究室，依存性薬物研究室，診断治療開発研究室の3室編成.

心身医学研究部は，ストレス研究室，心身症研究室の2室編成.

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され，精神発達研究室，児童期精神保健研究室，思春期精神保健研究室の3室編成.

成人精神保健部は，成人精神保健研究部へ名称変更され，精神機能研究室，診断技術研究室，認知機能研究室，犯罪被害者等支援研究室，災害等支援研究室の5室編成.

老人精神保健部は，精神薬理研究部へ名称変更され，精神薬理研究室，気分障害研究室の2室編成.

社会精神保健部は，社会精神保健研究部へ名称変更され，社会福祉研究室，社会文化研究室，家族・地域研究室の3室編成.

精神生理部は，精神生理研究部へ名称変更され，精神生理機能研究室，臨床病態生理研究室の2室編成.

知的障害部は，知的障害研究部へ名称変更され，診断研究室，治療研究室，発達障害支援研究室の3室編成.

社会復帰相談部は，社会復帰研究部へ名称変更され，精神保健相談研究室，援助技術研究室の2室編成.

司法精神医学研究部は，制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室の3室編成.

以上，自殺予防総合対策センター及び11部，計33室となった.

また，研究所の事務部門は，主幹が研究所事務室長となり，研究所事務係とともに，研究所の所属となった.

平成23年4月，事務部門の組織変更が行われ，研究所事務室は総務部の所属となった.

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により，情報支援研究室の1室が認められた.

以上，自殺予防総合対策センター，災害時こころの情報支援センター及び11部，計34室となった.

平成24年1月，千葉県市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから，創立60周年を迎え，記念祝賀会を開催し，創立60周年記念誌を発行した.

平成27年4月1日，独立行政法人から国立研究開発法人へ改組.

Ⅴ．国立研究開発法人後の編成等

平成28年4月1日，自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設，自殺実態・統計分析室，自殺総合対策研究室，自殺未遂者・遺族支援等推進室，地域連携推進室の4室編成.

以上，自殺総合対策推進センター，災害時こころの情報支援センター及び11部，計35室となった.

平成29年10月1日，社会精神保健研究部（1部3室）を廃止し，その機能の一部を精神保健計画研究部へ移管（1室），併せて精神疾患病態研究部（1部2室）を増設.

平成30年4月1日，精神保健研究所の組織改編を行った.

社会復帰研究部（1部2室）と司法精神医学研究室（1部3室）を地域・司法精神医療研究部として統合，臨床援助技術研究室，精神保健サービス評価研究室，司法精神保健研究室，制度運用研究室の3室編成.

心身医学研究部（1部2室）と成人精神保健研究部（1部5室）を行動医学研究部として統合，精神機能研究室，診断技術研究室，認知機能研究室，災害等支援研究室，ストレス研究室，心身症研究室の6室編成.

災害時こころの情報支援センター（1室）をストレス・災害時こころの情報支援センターへ改名，情報支援研究室，犯罪被害者等支援研究室の2室編成.

精神保健計画研究室（1部3室）を精神医療政策研究部へ改名，保健福祉連携研究室，政策評価研究室，精神医療体制研究室，NDB集計企画担当室の4室編成.

児童・思春期精神保健研究部（1部3室）を児童・予防精神医学研究部へ改名，児童・青年期保健研究室，精神疾患早期支援・予防研究室の2室編成.

精神薬理研究部（1部2室）2室を改名，分子精神薬理研究室，向精神薬研究開発室の2室編成.

知的障害研究部（1部3室）を知的・発達障害研究部へ改名，発達機能研究室，知的障害研究室の2室編成.

精神生理研究部（1部2室）を睡眠・覚醒障害研究部へ改名.

以上，自殺総合対策推進センター，ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部，計33室となった.

令和2年4月1日，自殺総合対策推進センターを廃止，厚生労働大臣指定（調査研究等）法人いのち支える自殺対策推進センターに業務を継承.

令和2年11月1日，精神医療政策研究部を公共精神健康医療研究部（1室（NDB集計企画担当室）を廃止）に名称変更.

以上，ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部，計28室となった.

沿　　革

事項 年次	所　　長	組　織　等　経　過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過（精神衛生研究所設置の附帯決議採択）
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢　良臣 （国立国府台病院長兼任）	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として，千葉県市川市に国立精神衛生研究所設置総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に，社会学部を社会精神衛生部に，生理学形態学部を精神身体病理部に，優生学部を優生部に名称変更し，精神薄弱部を新設
36年4月		精神衛生研修室，心理研究室，精神衛生相談室及び生理研究室を新設
36年6月		厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され，医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
36年10月	内村　祐之	
37年4月	尾村　偉久 （公衆衛生局長が所長事務取扱）	
38年7月	若松　栄一 （公衆衛生局長が所長事務取扱）	
39年4月	村松　常雄	主任研究官を置く
40年7月		社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成（5カ年計画）
44年4月		総務課長補佐を置く
46年4月	笠松　　章	
46年6月		社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設

49年7月		老人精神衛生部に老化度研究室を新設
50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤　正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成（2カ年計画）
54年4月		研修課程の名称を医学課程，心理学課程，社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し，精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成（講義室・図書室・研修生宿舎）
58年1月	土居　健郎	
58年10月		老人精神衛生部に老人保健研究室を新設
60年4月	高臣　武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により，国立高度専門医療センターの設置を決定
61年9月		厚生省組織令の一部改正により，国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定
61年10月		国立高度専門医療センターの一つとして，国立武蔵療養所，同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し，国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組，精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設，1課9部19室となる
62年4月	島薗　安雄 （総長が所長事務取扱）	厚生省組織規程の一部改正により，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し，2病院，2研究所となる 庶務課廃止，研究所に主幹を置く
62年6月	藤縄　　昭	
62年10月		心身医学研究部（ストレス研究室，心身症研究室）と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大塚　俊男	
9年4月	吉川　武彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり，心理社会研究室と依存性薬物研究室となり，診断治療開発研究室を新設

		精神薄弱部を知的障害部に名称変更
13年1月	堺　　宣道	
14年1月		精神保健研究所創立50周年
14年6月	高橋　清久 （総長が所長事務取扱）	
14年8月	今田　寛睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設（制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室）
16年4月	金澤　一郎 （総長が所長事務取扱）	
16年7月	上田　　茂	
17年4月		市川市（国府台）から小平市（武蔵地区）に移転
17年8月	北井　曉子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設（自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室），成人精神保健部の増設（犯罪被害者等支援研究室，災害時等支援研究室）
19年6月	加我　牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となる 8つの研究部の名称を変更（精神保健計画研究部，児童・思春期精神保健研究部，成人精神保健研究部，精神薬理研究部，社会精神保健研究部，精神生理研究部，知的障害研究部，社会復帰研究部）し，知的障害研究部に発達障害支援研究室を新設，11部33室（室長定数29）となる 所長補佐及び自殺予防総合対策センター副センター長を置く
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設（情報支援研究室）
25年4月	野田　　広	
25年7月	福田　祐典	

27年4月		国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所となる
27年9月	冨澤　一郎	
27年12月	中込　和幸	
28年4月		自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設（自殺実態・統計分析室，自殺総合対策研究室，自殺未遂者・遺族支援等推進室，地域連携推進室）
29年10月		社会精神保健研究部を廃止 精神疾患病態研究部を新設（基盤整備研究室，病態解析研究室），精神保健計画研究部精神医療体制研究室を増設
30年4月		4つの部を2つの部へ統合，また７研究部の名称を変更（地域・司法精神医学研究部，行動医学研究部，ストレス・災害時こころの情報支援センター，精神医療政策研究部，児童・予防精神医学研究部，知的・発達障害研究部，睡眠・覚醒障害研究部）及び室名変更等再編し，結果，2センター，11部35室から9部33室となる
31年1月	金　　吉晴	
令和2年4月		自殺総合対策推進センター（4室）を廃止，厚生労働大臣指定（調査研究等）法人いのち支える自殺対策推進センターに業務を継承
2年11月		精神医療政策研究部を公共精神健康医療研究部（1室を廃止）に名称変更し，現在の1センター9部28室となる
4年4月		地域・司法精神医療研究部を地域精神保健・法制度研究部に名称変更

2. 内部組織改正の経緯

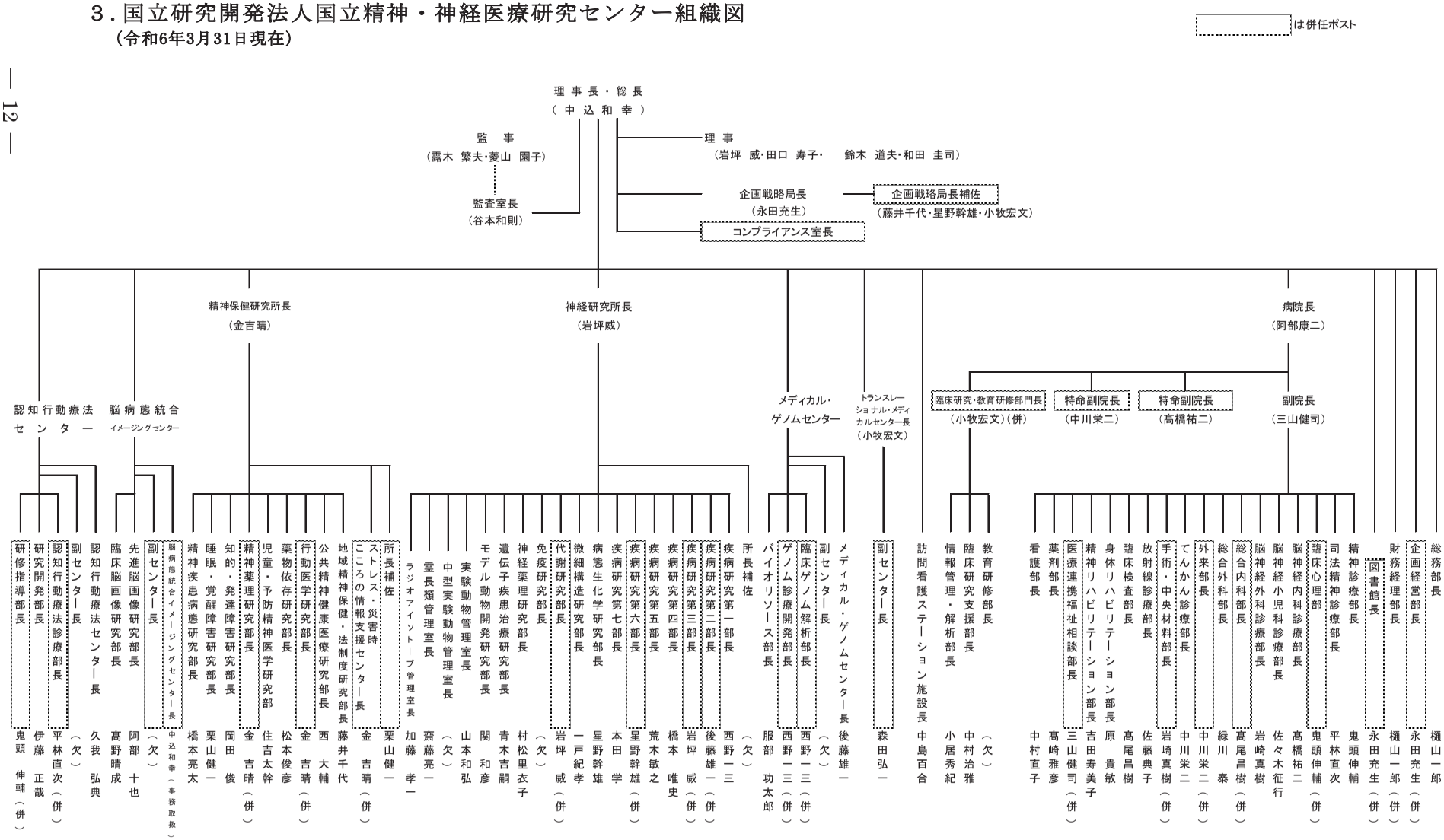
	国立精神衛生研究所										国立精神・神経センター精神保健研究所
組織	創立昭和27年1月	35年10月	36年6月	40年7月	46年6月	48年7月	49年7月	50年7月	58年10月	61年4月	61年10月
	総務課	→	総務課 精神衛生研修室 (6月)							総務課 精神衛生研修室	庶務課 精神衛生研修室
											精神保健計画部 統計解析研究室
											薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室
	心理学部	精神衛生部	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)					精神衛生部 心理研究室		精神衛生部 心理研究室	
						老人精神衛生部	老人精神衛生部 老化研究室		老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室	老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室
											老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室
	児童精神衛生部	→	→	児童精神衛生部 精神発達研究室						児童精神衛生部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室
	社会学部	社会精神衛生部			社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室					社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室
	生理学形態学部	精神身体病理部	精神身体病理部 生理研究室 (4月)							精神身体病理部 生理研究室 (4月)	精神生理部 精神機能研究室
	優生学部	優生学部								優生部	
		精神薄弱部								精神薄弱部	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室
				社会復帰部				社会復帰相談部 精神衛生相談室		社会復帰相談部 精神衛生相談室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室

国立精神・神経センター精神保健研究所									独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所	
62年4月	62年10月	元年10月	11年4月	13年4月	15年10月	18年10月	20年6月	21年10月	平成22年4月	平成23年12月
運営部庶務第二課 精神保健研修室	運営部庶務第二課 運営部企画室 精神保健研修室			運営部政策医療 企画課 精神保健研修室		運営局 政策医療企画課 精神保健研修室	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係	
						自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室			自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室	
										災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室
	精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室					精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室			精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室	
	薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	
	心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室					心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	
	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室					成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室			成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	
	老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室					老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室			精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	
	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室					児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室			児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	
	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室					社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室			社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	
	精神生理部 精神機能研究室					精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室	精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	
	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	
	社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室				社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室			社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	
					司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室			司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所						
平成27年4月	平成28年4月	平成29年10月	平成30年4月	令和2年4月	令和2年11月	令和4年4月
研究所事務室 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係
自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室			
災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室			ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室
精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室		精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室 精神医療体制研究室	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室	公共精神健康医療研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室	公共精神健康医療研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室
薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室
心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室
成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室		成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室				
精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室		精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室
児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室
社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室						
精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室
知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室
社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室	地域精神保健・法制度研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室 司法精神保健研究室 制度運用研究室
司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室				
		精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室

3．国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター組織図

（令和6年3月31日現在）



4. 職員配置（令和6年3月31日現在）

- 所長（金 吉晴）
  - 所長補佐（栗山 健一（併））
  - ストレス・災害時こころの情報支援センター長（金 吉晴）（併）
    - 情報支援研究室長（欠）
    - 犯罪被害者等支援研究室長（欠）
  - 公共精神健康医療研究部長（西 大輔）
    - 保健福祉連携研究室長（堀口 寿広）
    - 政策評価研究室長（臼田 謙太郎）
    - 精神医療体制研究室長（欠）
  - 薬物依存研究部長（松本 俊彦）
    - 心理社会研究室長（嶋根 卓也）
    - 依存性薬物研究室長（富山 健一）
    - 診断治療開発研究室長（高野 歩）
  - 行動医学研究部長（金 吉晴）（併）
    - 精神機能研究室長（成田 瑞）
    - 診断技術研究室長（小川 眞太朗）
    - 認知機能研究室長（堀 弘明）
    - 災害等支援研究室長（大沼 麻実）
    - ストレス研究室長（井野 敬子）
    - 心身症研究室長（関口 敦）
  - 児童・予防精神医学研究部長（住吉 太幹）
    - 児童・青年期精神保健研究室長（白間 綾）
    - 精神疾患早期支援・予防研究室長（欠）
  - 精神薬理研究部長（金 吉晴）（併）
    - 分子精神薬理研究室長（三輪 秀樹）
    - 向精神薬研究開発室長（古家 宏樹）
  - 精神疾患病態研究部（橋本 亮太）
    - 基盤整備研究室（松本 純弥）
    - 病態解析研究室長（三浦 健一郎）
  - 睡眠・覚醒障害研究部長（栗山 健一）
    - 精神生理機能研究室長（吉池 卓也）
    - 臨床病態生理研究室長（北村 真吾）
  - 知的・発達障害研究部長（岡田 俊）
    - 発達機能研究室長（石井 礼花）
    - 知的障害研究室長（欠）
  - 地域精神保健・法制度研究部長（藤井 千代）
    - 臨床援助技術研究室長（佐藤 さやか）
    - 精神保健サービス評価研究室長（山口 創生）
    - 司法精神保健研究室長（小池 純子）
    - 制度運用研究室長（黒田 直明）

5．精神保健研究所構成員（令和5年度）

所長	秘書室	
金　吉晴	奥村　和香子 木船　妙子	客員研究員：張　賢徳(5.9.1～) 科研費研究員：横山　知加

部名	部長	室長	研究員	リサーチフェロー ○テクニカルフェロー	科研費研究員 ○科研費研究補助員 □科研費心理療法士 △科研費医療社会事業専門員	科研費研究助手 ○科研費事務助手	ｾﾝﾀｰ研究助手 ○ｾﾝﾀｰ研究補助員	ｾﾝﾀｰ事務助手	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	研究生 ○実習生
ストレス・災害時 こころの情報支援センター	金　吉晴(併任)								関口　敦 小川　眞太朗 井野　敬子 大沼　麻実 成田　瑞	前田　正治　富田　博秋 高橋　晶　本橋　豊 宮本　有紀　木津喜　雅 種市　康太郎 秋山　剛		
公共精神健康医療研究部	西　大輔	堀口　寿広 臼田　謙太郎	羽澄　恵	三宅　美智 片岡　真由美	古野　考志 澤田　宇多子 中下　綾子 飯田　真子 神川　ちあき ○櫻庭　亜希子 ○穴澤　恵美子 (～5.9.30) ○鈴木　和香子 ○島田　知恵 (5.5.11～)					竹島　正 安西　信雄 今井　健二郎 杉山　雄大 東　尚弘 久保田　明子 中村　江里 後藤　基行 本屋敷　美奈 佐々木　那津 岡崎　絵美		北村　真紀子 辻田　あづさ 飯島　由佳 伊藤　友香 (5.8.1～)
薬物依存研究部	松本　俊彦	嶋根　卓也 富山　健一 高野　歩 (5.7.1～)		水野　聡美	猪浦　智史 加藤　隆 瓜生　美智子 新田　慎一郎 喜多村　真紀 堤　史織 片山　宗紀 近藤　あゆみ 長島　努 (～5.4.30) 山田　里奈 (5.7.1～) 青木　彩香 (5.7.1～) ○庄司　淑子 ○福田　百合子 ○三輪　奈都子 ○清水　悦子 ○亀井　翠 ○白鳥　美佳	○野本　かなえ ○大木　舞 ○阿部　正幸 (5.10.1～)	中野　真紀 (～5.4.30) ○中野　真紀 (5.5.1～)		今村　扶美 船田　大輔 (～5.10.14) 川地　拓 山田　美紗子 沖田　恭司 槙野　絵里子 石井　香織	尾崎　茂　村瀬　華子 宮永　耕　新海　浩之 森田　展彰　姫川　立 谷渕　由布子　松田　正彦 平田　豊明　引地　和歌子 池田　和隆　川口　貴子 大嶋　栄子　山田　千佳 高野　歩　Tooru Nemoto (～5.6.30)　大宮　宗一郎 成瀬　暢也　白川　教人 三島　健一　佐久間　寛之 境　泉洋　林　神奈 山田　正夫　(5.7.1～) 池田　朋広 鈴木　秀人 奥村　泰之 引土　絵未 古田島　浩子 高橋　哲 山口　重樹 宮地　尚子		今井　航平 田中　紀子 花岡　晋平 邱　冬梅 髙木　のり子 山本　泰輔 青木　彩香 (～5.6.30) 熊倉　陽介 池上　大悟 菊池　美名子 江島　智子 水野　有紀 宇佐美　貴士 金澤　由佳 村上　真紀 大淵　拓真 古市　亘 千葉　奈津子 藤本　真理子 大野　昴紀 (5.7.11～) 梅村　二葉 (5.9.1～) 長谷川　翔大 (5.10.1～) 磯島　学 (6.1.1～)
行動医学研究部	金　吉晴(併任)	堀　弘明 関口　敦 小川　眞太朗 井野　敬子 成田　瑞 大沼　麻実		伊藤(丹羽)　まどか 井上　智子 (5.10.1～) ○成田　恵 ○中野　稚子 ○島津　友梨	船場　美佐子 (～5.9.30) 高村　恒人 小原　千郷 勝沼　るり ○吉田　冬子 ○石塚　鮎子 (5.5.1～6.30) ○國重　寛子 (5.6.1～8.31)	○宮田　ともみ ○金杉　直子 (～5.11.3) ○吉武　美喜 (5.5.1～) ○石塚　鮎子 (5.7.1～) ○兼山　桃子 (5.8.1～) ○杉浦　裕子 (5.8.1～) ○神保　智子 (5.9.4～) ○水野　恵子 (5.10.1～) ○後藤　真理子 (5.12.1～)	○國重　寛子 (～5.5.31) ○石塚　鮎子 (～5.4.30)	吉武　美喜 (～5.4.30) 兼山　桃子 (～5.7.31) 後藤　真理子 (～5.11.30) 水野　恵子 (～5.9.30)	富田　吉敏 蔵下　智子 加藤　愛理 (5.8.1～)	兒玉　直樹　安藤　哲也 西園マーハ文　林　明明 藤井　靖　大滝(成田)　涼子 守口　善也　(～5.11.10) 寺澤　悠理　中島　実穂 小西　聖子　石田　牧子 加茂　登志子　大友　理恵子 永岑　光恵　松岡　潤 井筒　節　今井　理紗 堤　敦朗　横田　悠季 福地　成　平野　好幸 松本　和紀　(5.7.1～) 中島　聡美　船場　美佐子 田中　英三郎　(5.10.1～) 宮本　純子　白川　美也子 藤村　朗子　(5.12.1～) 筧　亮子　坂口　昌徳 芋野　龍馬　(6.2.1～) 櫻井　鼓 岡崎　純弥 堀　有伸 牧田　潔	佐藤　啓 ○八澤　智子 (～5.4.30)	赤井　利奈 菅原　まゆみ 井上　朋子 荒川　和歌子 堀江　美智子 藤内　温美 大村　靖子 土嶺　章子 利重　裕子 尾花　高志 吉川　真由 VABULNIK MARIIA 岡野　宏紀 石渡　小百合 河西　ひとみ 松尾　侑佳 Siti Nurul Zhahara (5.7.1～) 長野　智美 (5.7.1～) 小林　加奈 (5.8.1～)

部名	部長	室長	研究員	リサーチフェロー ○テクニカルフェロー	科研費研究員 ○科研費研究補助員 □科研費心理療法士 △科研費医療社会事業専門員	科研費研究助手 ○科研費事務助手	ｾﾝﾀｰ研究助手 ○ｾﾝﾀｰ研究補助員	ｾﾝﾀｰ事務助手	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	研究生 ○実習生
行動医学研究部										須賀　楓介 袴田　優子 伊藤　真利子 森野　百合子 宮本　悦子 中山　未知 野間　俊一 田中　聡 林　公輔		宮下　采子 (5.10.1～) 深川　珠央 (5.12.1～) 小池　颯希 (6.1.23～) ○道川　由佳子 ○関場　遥 (6.2.1～)
児童・予防精神医学研究部	住吉　太幹	松元　まどか (～5.11.30) 白間　綾		末吉　一貴 Andrew Mark Stickley 星野　大 (～5.9.30) 山田　理沙 (5.10.1～)	長谷川　由美 山田　理沙 (～5.9.30) 廣永　成人 (～5.11.30) 飯島　和樹 (～5.11.30) ○住吉　佐和子 (5.5.15～) □宋　恵恩 (5.4.10～) □宮坂　岳 (5.4.10～) □古橋　恵美子 (5.5.12～) △本田　ゆかり (6.1.1～)	○山野　真由子 ○福本　美好子		佐藤　綾		神尾　陽子　池澤　聡 髙橋　秀俊　上原　隆 樋口　悠子　信川　創 數井　裕光　西田　圭一郎 石井　良平 住吉　チカ 川崎　康弘 鈴木　道雄 菊知　充 小坂　浩隆		荻野　和雄 海老島　健 岡　琢哉 齊藤　彩 山田　悠至 稲川　拓磨 原口　英之 星野　大 (5.10.1～)
精神薬理研究部	金　吉晴(併任)	古家　宏樹 三輪　秀樹		上條　諭志 中武　優子	○村松　浩美 (～5.7.31)		○村松　浩美 (5.8.1～)			澤　幸祐 木村　英雄 木村　由佳 山田　光彦 山田　美佐		寺尾　真実 小林　桃子 川島　友子 松谷　真由美
精神疾患病態研究部	橋本　亮太	松本　純弥 三浦　健一郎		長谷川　尚美 髙麗　雄介	山縣　眞美子 宮川　希 杉崎　友美 (5.5.1～) ○木村　哲也 ○北川　航 ○伊藤　颯姫 (～5.9.30) ○宮山　未来乃 (～5.6.30) ○河上　優稀 ○鈴木　暁 (5.9.1～) □小池　奉菜 □新谷　茉莉果 □瀧浪　貴夢ｶﾞｰﾈｨﾃｨｶｽ	荒木　美紗江 (5.10.16～)			久保田　智香 佐藤　英樹 竹田　康二 柏木　宏子 髙野　晴成 石川　夏絵 林　大祐 一戸　紀孝 渡邊　惠 樋口　早子 五十嵐　俊 中川路　太一 (6.1.16～)	尾崎　紀夫　菊地　正隆 鬼塚　俊明　橋本　直樹 中村　元昭　近江　翼 新田　淳美　宇野　洋太 富田　博秋　菱本　明豊 中谷　明弘　新井　誠 橋本　均　吉田　正俊 中澤　敬信　藤本　美智子 大井　一高　岡田　直大 福永　雅喜　阿竹　聖和 根本　清貴　古郡　規雄 藤野　陽生　酒井　佳永 渡邊　嘉之　石丸　径一郎 牧之段　学　山下　典生 中島　振一郎　椎野　智子 伊賀　淳一　小高　文聰 松尾　幸治　住吉　チカ 髙橋　努　豊巻　敦人 宮田　淳　栗岩　信夫 疋田　貴俊　山形　弘隆 山森　英長　中川　敦夫 安田　由華　竹内　啓善 沼田　周助　岡田　研一 中川　伸　小笠原　一能 吉村　玲児　飯田　仁志 久住　一郎　山崎　龍一 池田　学　森田　健太郎 小澤　健太郎　福本　健太郎 市橋　香代　(5.5.23～) 髙江洲　義和　馬場　元 山田　恒　(5.9.12～) 堀　輝　香月　あすか 稲田　健　(5.10.24～) 大石　智　村岡　寛之 渡邊　衡一郎　(5.12.12～) 松本　直通　越智　紳一郎 (5.12.12～) 坪井　貴嗣 (5.12.12～) 岡田　剛 (5.12.12～) 肥田　道彦 (5.12.12～) 小池　進介 (5.12.12～)	本多　宏充 髙橋　亘 竹中　陽平 狩野　明彦 富永　樹 久保野　雄亮 黒田　夏未 橋本　竜我 橋本　真也 青木　陽平 (5.6.19～) 宮下　悠希 (5.6.19～) 石倉　麗音奈 (5.6.19～)	末金　彰 村田　篤信 井手　健太 石田　剛士 松井　佑里香 佐藤　美緒 清水　善仁 佐々木　祥乃 中静　れみ 志村　純子 吉田　恵 島崎　敦也 辻　菜々実 西村　晃萌 伊藤　颯姫 (5.10.1～) 森　啓輔 (5.11.28～) 青木　由未加 (5.11.28～) 藤兼　大輔 (6.2.14～)

部名	部長	室長	研究員	リサーチフェロー ○テクニカルフェロー	科研費研究員 ○科研費研究補助員 □科研費心理療法士 △科研費医療社会事業専門員	科研費研究助手 ○科研費事務助手	ｾﾝﾀｰ研究助手 ○ｾﾝﾀｰ研究補助員	ｾﾝﾀｰ事務助手	併任研究員	客員研究員	外来研究員 ○補助員	研究生 ○実習生
睡眠・覚醒障害研究部	栗山　健一	北村　真吾 吉池　卓也		河村　葵 ○TRIPATHI SRISHTI (5.7.18～)	岡邨　しのぶ 伏見　もも (～5.9.30) 五月女　杏 (5.10.1～) ○源馬　未来	○柳原　朱 ○串馬　絵奈	○大嶋　美奈子		都留　あゆみ 松井　健太郎 羽澄　恵 長尾　賢太朗 (5.6.19～)	内山　真　玉置　應子 兼板　佳孝　鈴木　正泰 大川　匡子　村上　裕樹 井上　雄一　吉村　道孝 樋口　重和　太田　英伸 本多　真　綾部　直子 上田　泰己　駒田　陽子 池田　正明　田中　克俊 山寺　亘　金子　宜之 守口　善也　坂口　昌徳 福永　道郎　尾崎　章子 榎本　みのり　志村　哲祥 有竹　清夏　大橋　由基 亀井　雄一　橋本　英樹 渡辺　和人　竹島　正浩 三島　和夫　角谷　寛 西村　勝治　(5.6.27～) 岡島　義　岩本　邦弘 梶　達彦　(5.6.27～) 阿部　又一郎　小曽根　基裕 高橋　英彦　(5.6.27～) 肥田　昌子　佐伯　圭吾 (6.1.23～)	江藤　太亮 岡部　聡美 (～6.1.31) ○半谷　千明 ○神矢　直子 ○宮代　遥 ○落合　聖香 ○小倉　真奈美 (5.5.9～)	元村　祐貴 長尾　賢太朗 (～5.6.18) 國枝　泰希 柴﨑　佳奈 内海　智博 斎藤　かおり 伊豆原　宗人 高橋　恵理矢 矢嶌　智貴 木附　集 船山　欣弘 船山　美香 伏見　もも (5.10.1～) 南學　正仁 (5.10.1～) ○齋藤　夢加 ○飛留間　優子 ○獺口　真南 ○今野　瑞葉 ○馬場　美伊 ○中田　海舟 (以上6名 5.5.1～5.10.31)
知的・発達障害研究部	岡田　俊	石井　礼花		江頭　優佳 林　小百合 請園　正敏	高田　美希			秋月　由紀子 (～5.7.31/ 6.3.1～) 鈴木　道久 (～6.1.23) 久保村　加代 (5.8.21～5.10.6) 増喜　奈由子 (5.8.21～)	中川　栄二	加我　牧子　加賀　佳美 軍司　敦子　小沢　浩 竹市　博臣　岩垂　喜貴 安村　明　高野　裕治 曾田　千重　堀内　史枝 宇佐美　政英　小平　雅基 佐藤　弥　趙　朔 金生　由紀子　鈴木　太 久島　周　小川　しおり 稲田　尚子　義村　さや香 辻井　農亜　山内　彩 黒田　美保　波多野（後藤）文 吉川　徹　魚野　翔太 稲垣　真澄		崎原　ことえ 田中　美歩 白川　由佳 眞神　花帆 奥貫　奈津恵 熊澤　綾 石橋　佳奈 小谷　暁子 (5.7.25～) 山口　利緒 (5.8.29～) ○松田　千皓 (5.7.25～) ○飯島　鈴音 (5.7.25～)
地域精神保健・法制度研究部	藤井　千代	佐藤　さやか 山口　創生 小池　純子 黒田　直明	小塩　靖崇	塩澤　拓亮 (～5.4.30) 川口　敬之 岩永　麻衣 白井　香 阿部　真貴子 (5.6.1～)	阿部　真貴子 (～5.5.31) 岡野　茉莉子 五十嵐　百花 羽田　彩子 髙嶋　里枝 奈良　麻結 (5.6.1～) ○石塚　公太 (～5.5.31) ○檜垣　早苗 ○田中　純子 ○細谷　章子 ○山口　芙実子		三輪　靖子		平林　直次 柏木　宏子 竹田　康二	瀬戸屋　雄太郎　菊池　安希子 伊藤　順一郎　曽雌　崇弘 橋(北村)　薫子　松長　麻美 吉田　光爾　下平　美智代 杉山　直也　安間　尚徳 美濃　由紀子　佐竹　直子 三澤　孝夫　吉浜　文洋 河野　稔明　(5.5.1～) 松本(市川)　佳子　関　英一 柑本　美和　(5.5.1～) 横山　惠子 稲垣　中 堀口　雅則 北村　俊則 野口　正行 鈴木　浩太		田村　早織 小黒　早紀 (～5.11.30) 山田　裕貴 小川　亮 上嶋　大樹 塩澤　拓亮 (5.5.1～) 杉浦　寛奈 (5.12.1～)
地域精神保健・法制度研究部 所沢アウトリーチ事業			(看護師) 中西　清晃 榎本　美智子 (医療社会事業専門員) 西内　絵里沙 (作業療法士) 大迫　直樹 (～5.12.31) 山崎　さおり (6.1.1～)	(科研費ﾃｸﾆｶﾙﾌｪﾛｰ) 山崎　さおり (～5.12.31)	糸繰　朝美 □河原崎　容佳							

Ⅱ．研究活動状況

1．今年度の活動概要

Ⅰ．概要

1）　人事

令和 5 年度の精神保健研究所所長は前年度に引き続き金 吉晴が所長を務めた（行動医学研究部長，ストレス・災害時こころの情報支援センター長，精神薬理研究部長を併任）.

本年度の常勤研究員人事(再任を除く)は，下記のとおりである.

4 月 1 日に，行動医学研究部災害等支援研究室長 大沼麻実が採用された．7 月 1 日に，薬物依存研究部診断治療開発研究室長 高野 歩が採用された.

令和 5 年度退職者は，児童・予防精神医学研究部精神疾患早期支援・予防研究室長 松元まどか（11 月 30 日付），精神保健研究所長 金 吉晴（3 月 31 日付），公共精神健康医療研究部長 西 大輔（同日付），知的・発達障害研究部長 岡田 俊（同日付），精神薬理研究部向精神薬研究開発室長 古家宏樹（同日付），精神疾患病態研究部病態解析研究室長 三浦健一郎（同日付）.

2）　概況

精神保健研究所は，患者さんやご家族，国民に役立つ研究を実践し，国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を担う一方で，研究発表分野でも精力的な活動を行っている．令和 5 年度には英文原著 123 編，和文原著 16 編，和文総説 105 編，英文著書 3 編，和文著書 46 編を報告した（分担執筆含む）．また，学会発表としては国際学会で 77 件，国内学会で 263 件の発表を果たした．主要学会等では，若手研究者を中心に優秀賞や奨励賞等の学会賞を計 10 件受賞した．詳細は各研究部の活動状況を参照されたい.

第 35 回精神保健研究所研究報告会を令和 6 年 3 月 20 日に開催し，優秀発表賞（青申賞）に橋本亮太（精神疾患病態研究部），三浦健一郎（精神疾患病態研究部），古家宏樹（精神薬理研究部），若手奨励賞に中武優子（精神薬理研究部）が選ばれた．詳細はプログラム・抄録集を参照されたい.

精神保健研究所は，専門家を対象とした各分野の研修（精神保健福祉，薬物依存，摂食障害，発達障害，災害時心理対応等）を行っている．令和 5 年度の研修は，新型コロナウイルスの影響が減少したことを踏まえ，対面研修が復活した．オンライン研修も引き続き実施され，対面研修（ハイブリッド含む）4 回，オンライン研修 20 回を合計 3,012 名が受講した（詳細は後述）.

Ⅱ．精神保健研究所プレスリリース一覧

日付	件名	担当
2023 年 4 月 3 日	こころの情報ナビゲーター拠点をめざして 「こころの情報サイト」公開のお知らせ	所長　金 吉晴
2023 年 4 月 20 日	「摂食障害相談ほっとライン」の情報が YouTube の「精神的危機に関する情報パネル」に表示されるようになりました	行動医学研究部 室長　関口 敦
2023 年 7 月 3 日	死別後に長引く悲嘆が共感性を抑制： 悲嘆の脳科学的メカニズムを解明	睡眠・覚醒障害研究部 室長　吉池 卓也
2023 年 8 月 4 日	脳体積による精神疾患の新たな分類を提案 認知・社会機能と関連、精神疾患の新規診断法開発への発展に期待	精神疾患病態研究部 部長　橋本 亮太
2023 年 9 月 11 日	診療ガイドラインの社会実装手法を初めて確立 誰もが推奨される医療を受けられるようになることへの期待	精神疾患病態研究部 部長　橋本 亮太
2023 年 10 月 2 日	「福井県摂食障がい支援拠点病院」が新たに指定！ 全国で 6 カ所目、北陸地方では 2 カ所目の支援拠点病院	行動医学研究部 室長　関口 敦
2023 年 10 月 31 日	記憶促進と統合失調症様行動抑制を発見 ―硫化水素とポリサルファイドの神経伝達物質放出制御を明らかに―	精神薬理研究部 室長　古家 宏樹
2023 年 12 月 14 日	ワクチン接種後の睡眠時間と獲得抗体価が相関	睡眠・覚醒障害研究部 （病院臨床検査部） 併任研究員　松井 健太郎
2024 年 1 月 22 日	神経性やせ症（拒食症）における脳灰白質体積の減少と症状の重症度との関連を明らかに ～大規模共同研究が新たな知見を提供～	行動医学研究部 室長　関口 敦
2024 年 2 月 16 日	睡眠を妨げる習慣を定量化する鍵に ～就寝を先延ばしする傾向を測定する日本語版尺度を開発～	睡眠・覚醒障害研究部 （公共精神健康医療研究部） 併任研究員　羽澄 恵
2024 年 3 月 1 日	心的外傷後ストレス障害（PTSD）の分子機構の解明 ―cAMP 情報伝達経路の過活性化が PTSD の原因となる―	所長　金 吉晴 行動医学研究部 室長　堀 弘明
2024 年 3 月 19 日	神経性やせ症（拒食症）の脳機能異常を網羅的に解明 世界初　多施設共同研究による fMRI データの大規模解析	行動医学研究部 室長　関口 敦

2. 公共精神健康医療研究部

Ⅰ. 研究部の概要

当研究部の英語標記である Public Mental Heath が示すように，当研究部は国民全体の精神健康増進および精神疾患の予防や精神疾患からの回復を目指して，疫学研究を中心とする幅広い学術的な研究と政策研究および政策に資する事業を実施している．今年度は主に，精神医療計画等に資する厚労省の指定研究，厚労省の事業で NCNP が受託した心のサポーター養成事業，COVID-19 感染後の心身への中長期的影響を検討する疫学研究，精神科医療機関の看護師を対象としたトラウマインフォームドケア研修の効果を検討する研究を行った．これらの活動は，他研究部や全国の精神病床をもつ医療機関，行政機関等との幅広い協働によって行われており，公共の精神健康・精神保健や精神医療に資する研究部としてのミッションに沿ったものと考えている．

研究部の構成

部長：西 大輔，室長：堀口寿広，臼田謙太郎，研究員：羽澄 恵，客員研究員：竹島 正，安西信雄，今井健二郎，杉山雄大，東 尚弘，久保田明子，中村江里，後藤基行，本屋敷美奈，佐々木那津，岡﨑絵美，リサーチフェロー：三宅美智，片岡真由美，科研費研究員：古野考志，澤田宇多子，中下綾子，神川ちあき，飯田真子，研究生：北村真紀子，辻田あづさ，飯島由佳，伊藤友香(8/1～)，研究補助員：穴澤恵美子(～9/30)，櫻庭亜希子，鈴木和香子，島田知恵(5/11～)

Ⅱ. 研究活動

1) 良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究

精神科と他の診療科との連携，地域の多様な生活支援との連携による良質かつ適切な精神医療の持続的な確保のための要件を明らかにし，その促進を図るモニタリングの体制と，今後の医療計画および障害福祉計画に資する指標を提案することを目的として研究を行った．本研究は A～E の 5 つの分担研究によって構成される．A 班：令和 5 年度は令和 4 年度に提案した指標，基準病床算定式に関する都道府県の医療計画担当課を対象とした調査を実施し実態把握に努めた．また，都道府県・政令指定都市の精神保健福祉主管課を対象にしたデータの利活用に関する研修を開催してデータの利活用を推進した．B 班：令和 5 年度は例年通り 630 調査の企画・立案・実施・集計を行った．また診療報酬の改定や昨年度調査までに確認されたエラー箇所の修正作業を行い，回答者負担が軽減された調査が実施できるように調査システムの最適化の検討を例年に引き続き行った．C 班：NDB（レセプト情報・特定健診等情報データベース）の分析を行い，各都道府県における医療計画と障害福祉計画の作成及び毎年度計画に必須である数値目標，指標等を抽出した．D 班：ReMHRAD（地域精神保健医療福祉資源分析データベース）について，本研究の他の分担研究の成果等を活用して，研究，行政，市民の利用を想定した，それぞれのニーズに対応できる構造化を進めた．令和 5 年度は自治体ごとの各医療福祉資源の増減を示すヒートマップ，各社会資源の情報が掲載される手引きの自動生成，630 調査で収集されている転帰情報，についてより詳細な表示を可能とする機能について検討を行った．E 班：措置通報及び措置入院の実態に関する研究．措置入院患者コホートについて，昨年度終了時までに追跡調査が終了しており，病状や状態の変化，提供された医療等のサービス，また退院後の転帰について結果の分析を行った．また，令和 5 年度は，警察官通報の実態について調査の実施と措置通報や措置入院の転帰にまつわる課題の検討を行った．（西，臼田，古野，北村）

2) 心のサポーター養成研修の効果評価に関する調査

厚生労働省より委託された「心のサポーター養成事業」の一環として開発された研修の有効性を明らかにすることを目的とした研究を行った．心のサポーター養成研修の受講者，研修を実施する

自治体の担当者，研修講師に対して自己記入式質問紙を実施し，受講による受講者の知識や態度の変化，ならびに自治体担当者や研修講師の研修への満足度を検討した．2022 年度受講者の 6 か月後調査および 2023 年度受講者の 3 か月後調査では，メンタルヘルスリテラシーや知識習得度等に関して有意な改善を認めた．本研究によって，今後全国に事業を普及していくために必要となる，一定程度の研修効果の科学的裏付を得ることができた．
（西，臼田，羽澄，中下，神川，片岡，澤田，飯田）

3）新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討

本研究では，新型コロナウイルス感染者における精神症状や罹患後身体症状の特徴および関連要因を明らかにするため，従来株とオミクロン株の新型コロナウイルス感染者を対象とした縦断調査を行っている．さらに，精神症状を緩和する策を明らかにするため，新型コロナ感染後の罹患後身体症状を有する者を対象にオンライン自助グループによる介入を行い，前後の変化を比較検討するとともに，当該研究に関するシステマティックレビューを行っている．

現行までの研究成果として，従来株とオミクロン株を比較した横断調査からは，差別を受ける可能性や抑うつが見られる可能性は後者の方が少ない一方，差別を受けたときに抑うつが見られる可能性は後者の方が多いとの示唆を得た．オミクロン株感染者を対象とした横断調査では，精神科既往歴やワクチン接種の有無と罹患後身体症状の関連を検討し，ワクチン接種の有無にかかわらず，精神科既往歴が有る者のほうが罹患後身体症状の出現リスクが高いことが示唆された．

また，従来株感染者の 3 時点目追跡調査とオミクロン株感染者の 2 時点目追跡調査のデータ収集，介入研究のデータ収集が完了するとともに，システマティックレビューでも該当文献の同定を完了した．今後は，新型コロナウイルス感染者の精神症状を中心とした予後とそれらにかかわる要因が明らかになると同時に，オンライン自助グループによる精神症状への効果が明らかになると期待される．（西，羽澄，片岡，臼田）

4）精神科医療機関に対するトラウマインフォームドケア研修の効果に関する検討

2020 年度に実施した精神保健福祉センターを対象とした TIC の実態に関する調査の追跡調査を実施した．3 年前の結果と比較して，全国的に TIC に関する認知度の向上および具体的な研修実施を行った割合が増加していることが示唆された．

精神科医療機関の看護職員（看護師・准看護師）・看護補助者を対象に動画を用いたトラウマインフォームドケア（Trauma Informed Care : TIC）研修を実施し，入院患者に対する隔離・身体拘束時間の短縮や看護師のメンタルヘルスの改善への効果について検証することを目的に，多施設非無作為化比較試験を実施した．

その結果，対照群に比較して介入群では，入院患者に対する身体拘束時間の短縮，看護職員の TIC に関連する態度の向上やバーンアウトに関連する情緒的消耗感の軽減が認められた．

この研究により，動画による簡便な研修方法でも，TIC の習得が可能であり，それにより身体拘束時間の短縮や看護職の心理的な疲労感の軽減に効果がある可能性が示唆された．今後は，より幅広い専門職に普及させることで，精神科医療機関の治療・労働環境の改善に寄与することが期待される．（西，三宅，羽澄，臼田）

5）6NC 連携による医療政策研究

当センターを含む 6 つの国立高度専門医療研究センター（6NC）の研究者が協力し，匿名レセプト情報・匿名特定健診等情報データベース（NDB）を用いて，NC が担う重要疾患等に関するエビデンスを創出し，政策調査・提言に関わる基盤情報を提供することで，「根拠に基づいた政策立案」や政策評価に貢献することを目指す課題である．

令和 5 年度は NDB データを厚生労働省より受領し，神経・筋疾患データの基礎加工および集計表の作成作業を進めた．また，実際にデータを取り扱いながらデータの取り扱い方法に関する検討

を行い，NDB データ管理の体制構築を推進した．（臼田，古野）

6）　医療的ケア児のインクルーシブ保育を実施

人工呼吸器や胃ろう等により医療的なケアを必要とする児童いわゆる「医療的ケア児」とその家族の社会参加を促進する目的で，東京都三鷹市および武蔵野市の参加を得て設置された協議会に参加して，訪問看護師が付き添い保育所で他の児童たちとともに保育を受ける「インクルーシブ保育」の実施に協力した．令和 5 年度は，三鷹市にて市民に向けてこれまでの活動報告会を開催した．（堀口）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・　一般社団法人 社会的包摂サポートセンター Chan Kan プロジェクト政策提言ワーキングチーム 検討委員（堀口）

(2) 専門教育面における貢献

・　武蔵野大学 非常勤講師（臼田）
・　立教大学 非常勤講師（羽澄）
・　小石川東京病院 臨床心理学的研究および実践指導（羽澄）
・　駒沢女子大学 精神看護学実習助手（三宅）

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・　国土交通省 総合政策局 バリアフリー政策課：令和 5 年度公共交通機関のバリアフリー基準等に関する検討会　構成員（堀口）
・　全国精神保健福祉センター長会 倫理審査委員会 委員（堀口）

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1)　Kataoka M, Kotake R, Asaoka H, Miyamoto Y, Nishi D: Research note reliability and validity of Japanese version of the trauma-informed care provider survey (TIC provider survey). BMC research notes, 16(1): 68, 2023.3.

2)　Hazumi M, Kataoka M, Usuda K, Narita Z, Okazaki E, Nishi D. Difference in the risk of discrimination on psychological distress experienced by early wave infected and late wave infected COVID-19 survivors in Japan. Sci Rep. 2023 Aug 12;13(1):13139. doi: 10.1038/s41598-023-40345-9. PMID: 37573383; PMCID:PMC10423270.

3)　Honyashiki M, Decoster J, Lo WTL, Shimazu T, Usuda K, Nishi D. Mental health reform processes and service delivery shift from the hospital to the community in Belgium and Hong Kong. Health Serv Insights. 2023 Nov 9; 16:11786329231211777. doi: 10.1177/11786329231211777. PMID: 37953915; PMCID: PMC10637138.

4) Hazumi M, Kawamura A, Yoshiike T, Matsui K, Kitamura S, Tsuru A, Nagao K, Ayabe N, Utsumi T, Izuhara M, Shinozaki M, Takahashi E, Fukumizu M, Fushimi M, Okabe S, Eto T, Nishi D, Kuriyama K: Development and validation of the Japanese version of the Bedtime Procrastination Scale (BPS-J). BMC Psychology 2(1):56,2024.
5) Nagao K, Yoshiike T, Okubo R, Matsui K, Kawamura A, Izuhara M, Utsumi T, Hazumi M, Shinozaki M, Tsuru A, Sasaki Y, Takeda K, Komaki H, Oi H, Kim Y, Kuriyama K, Hidehiko T, Miyama T, Nakagome K: Association between health anxiety dimensions and preventive behaviors during the COVID-19 pandemic among Japanese healthcare workers. Heliyon e22176-e22176, 2023.
6) Matsui K, Kuriyama K, Yoshiike T, Kawamura A, Nagao K, Izuhara M, Hazumi M, Inada K, Nishimura K: Relapse of schizophrenia associated with comorbid delayed sleep-wake phase disorder but not with evening chronotype. Schizophrenia research 261,34-35, 2023.

(2) 総説

1) 羽澄 恵：児童・思春期の睡眠の指導．小児保健研究 82(4)：360-364，2023.
2) 羽澄 恵：COVID-19 に起因する認知・感情と抑うつ・不安（精神症状）の関連性について．精神科臨床 9(3)：138-142，2023.

(3) 著書

(4) 研究報告書

1) 国立精神・神経医療研究センター（中込和幸，金 吉晴，西 大輔，藤井千代，久我弘典，黒田直明，臼田謙太郎，羽澄 恵，岡﨑絵美，小倉加奈子，片岡真由美，澤田宇多子，中下綾子，小塩靖崇，梅本育恵，牧野みゆき）：心のサポーター養成に係る調査・分析業務等一式
事業報告書．2023
2) 臼田謙太郎：感染時期による罹患後精神症状の比較検討．令和 5 年度精神・神経疾患研究開発費「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討（主任研究者：西 大輔）」令和 5 年度 分担研究報告書．2024.
3) 臼田謙太郎：令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「精神保健医療福祉分野におけるトラウマインフォームドケア活用促進のための研究（研究代表者：西 大輔）令和 5 年度分担研究報告書．2024.
4) 羽澄 恵：COVID-19 感染後の予後に関連する要因の検討．令和 5 年度精神・神経疾患研究開発費「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討（主任研究者：西 大輔）」令和 5 年度 分担研究報告書．2024.
5) 羽澄 恵：睡眠不足の維持増悪に関連する心理的機序の解明．科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））令和 5 年度 総括研究報告書．2024.
6) 三宅美智：精神障害当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証．科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究 C））令和 5 年度 総括研究報告書．2024.
7) 三宅美智：行動制限最小化の活動に参加する精神障害当事者のための育成プログラムの開発．科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究 C））令和 5 年度 総括研究報告書．2024.
8) 三宅美智：行動制限最小化のための教育資材の開発．令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究（研究代表者：杉山直也）」令和 5 年度分担研究報告書．2024.

(5) 翻訳

(6) その他

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 西 大輔：トラウマインフォームドケア．教育講演．第 129 回日本小児精神神経学会，神奈川，2023.6.11.
2) 西 大輔：周産期うつ病の影響とその対策．会長企画シンポジウム PSY1-3．第 23 回日本抗加齢医学会総会，東京，2023.6.9.
3) 西 大輔：PTSD と不安症の依存に関する疫学．シンポジウム S3 トラウマと不安症–併存する病態に対してどのような治療が可能なのかー. 第 22 回日本トラウマティック・ストレス学会，東京，2023.8.6.
4) 西 大輔：人と社会のためのパブリックメンタルヘルス．会長講演．第 30 回日本行動医学会学術総会，東京，2023.12.3.
5) 西 大輔：救援者・支援者のメンタルヘルスサポート．シンポジウム第 29 回日本災害医学会総会・学術集会，京都，2024.2.22.

(2) 一般演題

1) 堀口寿広，高梨憲司，佐藤彰一，曽根直樹：保育所における障害児虐待の発生頻度の推計．第 70 回日本小児保健協会学術集会，神奈川，2023.6.16-18.
2) 臼田謙太郎，西 大輔：トラウマインフォームドケアの行政機関での利活用の実態―精神保健福祉センター・保健所調査よりー．第 22 回日本トラウマティック・ストレス学会，東京，2023.8.5-6.
3) 羽澄 恵，松井健太郎，田淵貴大，大久保 亮，吉池卓也，北村真吾，河村 葵，長尾賢太朗，内海智博，伊豆原宗人，木附 隼，伏見もも，西 大輔，栗山健一：睡眠休養感は小児期逆境体験と精神的苦痛の関連を媒介する．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会，神奈川，2023.9.15.
4) 羽澄 恵，片岡真由美，臼田謙太郎，成田 瑞，岡﨑絵美，西 大輔：COVID-19 感染拡大初期と後期の感染者における被差別体験と精神的苦痛の関連の相違．第 30 回日本行動医学会学術総会，東京，2023.12.3.
5) 臼田謙太郎，三宅美智，西 大輔：精神保健福祉センター・保健所におけるトラウマインフォームドケアの普及状況．第 30 回日本行動医学会学術総会，東京，2023.12.3.
6) 浅岡紘季，小井土雄一，河嶌 譲，池田美樹，宮本有紀，西 大輔：COVID-19 パンデミック時の医療従事者における COVID-19 感染者の対応の決断の経験と PTSD 症状の関連．第 30 回日本行動医学会学術総会，東京，2023.12.3.
7) 澤田宇多子，飯田真子，臼田謙太郎，羽澄 恵，岡﨑絵美，小倉加奈子，片岡真由美，佐々木那津，小塩靖崇，松長麻美，梅本育恵，牧野みゆき，中下綾子，神川ちあき，黒田直明，久我弘典，藤井千代，西 大輔：心のサポーター養成事業による日本の地域住民のスティグマ低減効果の検討：前後比較試験．第 30 回日本行動医学会学術総会, 東京，2023.12.3.

(3) 研究報告会

(4) その他

1) 三宅美智：看護師の虐待問題 - 神出病院での事件を受けて - . 第 31 回精神科看護管理研究会，熊本，2023.8.18.

C．講演

1)　堀口寿広：クリティカルパス．日本精神科病院協会令和5年度通信教育シニアコース前期スクーリング，福岡，2023.7.12.
2)　羽澄 恵：よりよい睡眠について知ろう．渋谷区障害者就労支援センター，東京，2023.9.27.
3)　羽澄 恵：睡眠は私たちに本当に必要なのか．学校訪問型睡眠講座，高南中学校，東京，2023.11.11.
4)　西 大輔：トラウマインフォームドケアの普及に向けて．兵庫県こころのケアセンター主催こころのケアシンポジウム，オンライン，2023.11.17.
5)　羽澄 恵：明日に備えるよい睡眠について．中央区障害者就労支援センター，東京，2024.2.16.

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1)　西 大輔：日本行動医学会理事
2)　西 大輔：日本トラウマティック・ストレス学会理事
3)　堀口寿広：公益社団法人 日本小児保健協会 小児保健奨励賞研究助成選考委員
4)　堀口寿広：公益社団法人 日本小児科学会 小児科サブスペシャルティ連絡協議会 第三者委員
5)　羽澄 恵：日本睡眠学会 評議員

(3) 座長

1)　堀口寿広：第7回多職種のための投稿論文書き方セミナー．第 70 回日本小児保健協会学術集会，神奈川，2023.6.16-18
2)　目澤秀俊，堀口寿広：第 70 回日本小児保健協会学術集会，神奈川，2023.6.16-18.
3)　西 大輔：認知行動療法セミナー．日本周産期メンタルヘルス学会，東京，2023.10.28.
4)　西 大輔：健康格差対策への社会行動医学の活用．特別講演．第30回日本行動医学会学術総会，東京，2023.12.3.

(4) 学会誌編集委員等

1)　西 大輔：日本精神神経学会 PCN 編集委員
2)　西 大輔：日本トラウマティック・ストレス学会学会誌編集委員
3)　西 大輔：日本産業衛生学会編集委員
4)　西 大輔：日本周産期メンタルヘルス学会倫理委員
5)　堀口寿広：公益社団法人 日本小児保健協会「小児保健研究」誌 編集委員長
6)　堀口寿広：「チャイルド・ヘルス」誌 編集協力者
7)　三宅美智：日本精神科看護協会 査読委員

E．研修

(1) 研修企画

1)　心のサポーター養成事業，令和5年度 第1回こころサポーター指導者養成研修．オンライン，2023.6.25.
2)　心のサポーター養成事業，令和5年度 第2回こころサポーター指導者養成研修．オンライン，2023.9.4.
3)　心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 3 回こころサポーター指導者養成研修．愛媛，2023.11.2.
4)　心のサポーター養成事業，令和5年度 第4回こころサポーター指導者養成研修．オンライン，

2023.12.5.
5) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 1 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.7.13.
6) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 2 回こころサポーター養成研修．福島，2023.7.19
7) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 3 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.7.20.
8) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 4 回こころサポーター養成研修．山梨，2023.7.20.
9) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 5 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.7.25.
10) 心のサポーター養成事業, 令和 5 年度 第 6 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2023.8.1.
11) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 7 回こころサポーター養成研修．福島，2023.8.3.
12) 心のサポーター養成事業, 令和 5 年度 第 8 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2023.8.8.
13) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 9 回こころサポーター養成研修．福島，2023.8.9.
14) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 10 回こころサポーター養成研修．広島，2023.8.18.
15) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 11 回こころサポーター養成研修．東京，2023.8.22.
16) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 12 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.8.23.
17) 心のサポーター養成事業, 令和 5 年度　第 13 回こころサポーター養成研修. 和歌山, 2023.8.25.
18) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度　第 14 回こころサポーター養成研修．愛知，2023.8.26.
19) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度　第 15 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.8.28.
20) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度　第 16 回こころサポーター養成研修．福島，2023.8.28.
21) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 17 回こころサポーター養成研修．東京，2023.8.29.
22) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 18 回こころサポーター養成研修．神奈川，2023.9.5.
23) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 19 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.9.5.
24) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 20 回こころサポーター養成研修．和歌山，2023.9.5.
25) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 21 回こころサポーター養成研修．福岡，2023.9.8.
26) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 22 回こころサポーター養成研修．愛知，2023.9.9.
27) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 23 回こころサポーター養成研修．高知，2023.9.10.
28) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 24 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.9.11.
29) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 25 回こころサポーター養成研修．長崎，2023.9.11.
30) 心のサポーター養成事業, 令和 5 年度 第 26 回こころサポーター養成研修. 神奈川, 2023.9.11.
31) 心のサポーター養成事業, 令和 5 年度 第 27 回こころサポーター養成研修. 和歌山, 2023.9.11.
32) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 28 回こころサポーター養成研修．広島，2023.9.13
33) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 29 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.9.14.
34) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 30 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.9.19.
35) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 31 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.9.20.
36) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 32 回こころサポーター養成研修．山梨，2023.9.21.
37) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 33 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.9.21.

38) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 33 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.9.21.
39) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 34 回こころサポーター養成研修．広島，2023.9.21.
40) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 35 回こころサポーター養成研修．三重，2023.9.22.
41) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 36 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.9.22.
42) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 37 回こころサポーター養成研修．大阪，2023.9.22.
43) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 38 回こころサポーター養成研修．東京，2023.9.25.
44) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 39 回こころサポーター養成研修．埼玉，2023.9.25.
45) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 40 回こころサポーター養成研修．広島，2023.9.25.
46) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 41 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.9.26.
47) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 42 回こころサポーター養成研修．山梨，2023.9.26.
48) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 43 回こころサポーター養成研修．広島，2023.9.27.
49) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 44 回こころサポーター養成研修．長崎，2023.9.28.
50) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 45 回こころサポーター養成研修．愛知，2023.9.30.
51) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 46 回こころサポーター養成研修．神奈川，2023.10.2.
52) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 47 回こころサポーター養成研修．神奈川，2023.10.2.
53) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 48 回こころサポーター養成研修．福島，2023.10.2.
54) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 49 回こころサポーター養成研修．神奈川，2023.10.3.
55) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 50 回こころサポーター養成研修．長崎，2023.10.4.
56) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 51 回こころサポーター養成研修．東京，2023.10.6.
57) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 52 回こころサポーター養成研修．大阪，2023.10.6.
58) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 53 回こころサポーター養成研修．東京，2023.10.6.
59) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 54 回こころサポーター養成研修．新潟，2023.10.6.
60) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 55 回こころサポーター養成研修．神奈川，2023.10.10.
61) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 56 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.10.
62) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 57 回こころサポーター養成研修．東京，2023.10.10.
63) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 58 回こころサポーター養成研修．東京，2023.10.11.
64) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 59 回こころサポーター養成研修．神奈川，2023.10.11.
65) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 60 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.12.
66) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 61 回こころサポーター養成研修．長崎，2023.10.13.
67) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 62 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.13.
68) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 63 回こころサポーター養成研修．和歌山，2023.10.13.
69) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 64 回こころサポーター養成研修．愛知，2023.10.14.
70) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 65 回こころサポーター養成研修．神奈川，2023.10.16.
71) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 66 回こころサポーター養成研修．広島，2023.10.16.
72) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 67 回こころサポーター養成研修．兵庫，2023.10.17.
73) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 68 回こころサポーター養成研修．滋賀，2023.10.17.
74) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 69 回こころサポーター養成研修．山梨，2023.10.17.
75) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 70 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.18.
76) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 71 回こころサポーター養成研修．神奈川，2023.10.19.

77) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 72 回こころサポーター養成研修．宮城，2023.10.20.
78) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 73 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.20.
79) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 74 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.21.
80) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 75 回こころサポーター養成研修．兵庫，2023.10.23.
81) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 76 回こころサポーター養成研修．神奈川，2023.10.23.
82) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 77 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.24.
83) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 78 回こころサポーター養成研修．大阪，2023.10.24.
84) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 79 回こころサポーター養成研修．神奈川，2023.10.24.
85) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 80 回こころサポーター養成研修．千葉，2023.10.24.
86) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 81 回こころサポーター養成研修．新潟，2023.10.24.
87) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 82 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.26.
88) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 83 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.26.
89) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 84 回こころサポーター養成研修．大阪，2023.10.26.
90) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 85 回こころサポーター養成研修．東京，2023.10.28.
91) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 86 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.28.
92) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 87 回こころサポーター養成研修．大阪，2023.10.30.
93) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 88 回こころサポーター養成研修．兵庫，2023.10.31.
94) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 89 回こころサポーター養成研修．群馬，2023.10.31.
95) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 90 回こころサポーター養成研修．長崎，2023.10.31.
96) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 91 回こころサポーター養成研修．オンライン，2023.10.31.
97) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 92 回こころサポーター養成研修．兵庫，2023.11.3.
98) 心のサポーター養成事業，令和 5 年度 第 93 回こころサポーター養成研修．滋賀，2023.11.8.

(2) 研修会講師

1) 三宅美智：看護過程の基本．日本精神科看護協会主催，オンデマンド，2023.5.16-2024.3.8.
2) 三宅美智：観察と記録．日本精神科看護協会主催，オンデマンド，2023.5.16-2024.3.8.
3) 三宅美智：行動制限最小化看護 2 行動制限最小化の方略．日本精神科看護協会主催，オンライン，2023.6.14.
4) 西 大輔，三宅美智：トラウマ・インフォームドケアの基本と実践．日本精神科看護協会主催研修会，東京，2023.8.26.
5) 立森久照，臼田謙太郎：令和 5 年度 630 調査自治体担当者向け説明会．オンライン，2023.10.11.
6) 西 大輔，臼田謙太郎：第 1 回 精神保健医療福祉データ行政活用研修．オンライン．2023.11.6.
7) 西 大輔：かかりつけ医のためのトラウマの理解と基本的対応．石川県こころの健康センター主催　かかりつけ医スキルアップ研修，オンライン，2024.3.20.

F．その他

3. 薬物依存研究部

Ⅰ. 研究部の概要

薬物依存研究部は,「麻薬・覚せい剤等に関する実態調査結果に基づく勧告」(総務庁，平成 10 年 5 月）により，機能強化が要請され，平成 21 年度より研究室の改組及び 1 研究室の新設がなされ，下記のように 3 研究室体制となっている.

心理社会研究室

（1）薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること.

（2）薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること.

（3）薬物依存の予防及びその指導，研修の方法の研究に関すること.

依存性薬物研究室

（1）薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること.

（2）依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること.

（3）中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること.

診断治療開発研究室

（1）薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること.

（2）薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること.

（3）薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること.

人員構成は，次のとおりである.

部長：松本俊彦，心理社会研究室長：嶋根卓也，依存性薬物研究室長：富山健一，診断治療開発研究室長：高野 歩（7 月～），リサーチフェロー：水野聡美，客員研究員：淺沼幹人（岡山大学脳神経機構学分野），尾崎 茂（東京足立病院），宮永 耕（東海大学健康科学部），成瀬暢也（埼玉県立精神医療センター），森田展彰（筑波大学医学医療系），谷渕由布子（同和会千葉病院），三島健一（福岡大学薬学部），境 泉洋（徳島大学大学院），山田正夫（神奈川県立精神保健福祉センター），池田朋広（高崎健康福祉大学健康福祉学部），平田豊明（千葉県精神科医療センター），高野 歩（東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科，6 月まで），大嶋栄子（NPO 法人リカバリー），池田和隆（東京医学総合研究所），奥村泰之（東京都医学総合研究所），引土絵未（日本女子大学人間社会学部），古田島浩子（東京医学総合研究所），山口重樹（獨協医科大学医学部），宮地尚子（一橋大学大学院社会学研究科），高橋 哲（お茶の水女子大学生活科学部），村瀬華子（北里大学医療衛生学部），川口貴子（福岡市精神保健福祉センター），新海浩之（いのち支える自殺対策推進センター），蛭川 立（明治大学情報コミュニケーション学部）引地和歌子（東京都監察医務院），舩田正彦（湘南医療大学薬学部），山田千佳（京都大学東南アジア地域研究研究所），Tooru Nemoto（Public Health Institute），大宮宗一郎（上越教育大学教育学部），白川教人（横浜市こころの健康相談センター），佐久間寛之（さいがた医療センター），林 神奈（Simon Fraser University），科研費研究員：近藤あゆみ，喜多村真紀，新田慎一郎，加藤 隆，瓜生美智子，堤 史織，猪浦智史，片山宗紀，青木彩香（7 月～），山田里奈（7 月～）　併任研究員：今村扶美，川地 拓，山田美紗子（以上，病院臨床心理室），船田大輔，宇佐美貴士，沖田恭治（以上，病院第二精神科），槙野絵里子（司法精神診療部），石井香織（薬剤部），研究生：今井航平，花岡晋平，髙木のり子，田中紀子，邱 冬梅，山本泰輔，宇佐美貴士，菊池美名子，池上大悟，江島智子，水野有紀 ，金澤由佳，村上真紀，古市 亘，藤本真理子，大野昴紀，梅村二葉，長谷川翔大，礒島 学.

Ⅱ. 研究活動

A. 疫学的研究

1） 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究

本研究は，保護観察所と精神保健福祉センターなどの地域支援機関との橋渡しをしながら，保護観

察の対象となった薬物事犯者の長期転帰を調査する，「Voice Bridges Project 」である．平成 29 年 3 月から令和 5 年 12 月末までに，25 の精神保健福祉センターから計 851 名の保護観察対象者が調査に参加した．1 年後追跡完了者は 387 名，2 年後の追跡完了者は 232 名，3 年後の追跡完了者は 142 名であった（追跡率は 1 年後 79.8%，2 年後 77.3%，3 年後 73.6%）．約 1 年経過時点の累積断薬継続率は約 90%，2 年経過時点の累積断薬継続率も約 90%であり，3 年経過時点の累積断薬継続率は約 75%であった．（厚労省依存症調査・研究事業　松本俊彦）

2）　薬物使用に関する全国住民調査（2023 年）

本研究は，わが国で唯一，経年的に実施されている薬物使用に関する全国調査である．本研究は，1995 年より隔年で実施され，今回で 15 回目の全国調査となった．対象は，層化二段無作為抽出法（調査地点：250）によって無作為に選ばれた 15 歳から 64 歳までの一般住民 5,000 名であり，調査期間は 2023 年 10 月 16 日から 12 月 22 日までであった．計 3,114 名から調査票を回収し（回収率 62.3%），重複回答や除外基準に合致する対象者を除いた計 3,026 名を有効回答とした（有効回答率 60.5%）．違法薬物については，有機溶剤は有意に減少，大麻は有意に増加していた．過去 1 年以内に大麻を使った経験のある国民は約 20 万人，覚醒剤は約 11 万人と推計された．他の違法薬物は統計誤差範囲内であった．今回の調査では一般住民における市販薬の乱用経験を初めて調べた．市販薬の乱用経験率は約 0.8%であり，過去 1 年以内に市販薬の乱用経験のある国民は約 65 万人と推計された．（令和 5 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業．嶋根卓也，水野聡美，猪浦智史，邱 冬梅）

3）　大麻を乱用する少年における新たな大麻関連製品，危険ドラッグの乱用実態に関する研究

近年，高濃度に抽出された THC を含有する大麻ベイプ（リキッド，ワックスなど）の使用実態を明らかにすることを目的した．対象は，福岡県の少年用大麻再乱用防止プログラムに参加した 25 名の大麻使用少年のうち，研究参加の同意が得られた 20 名であった．対象者の 85%に大麻ベイプの使用が認められた．この結果は，少年たちの間で，従来の乾燥大麻だけではなく，電子タバコ型の大麻ベイプが広く浸透していることを示唆している．（厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業．嶋根卓也，舩田正彦）

4）　ダルク等の当事者団体による依存症回復支援の現状と課題に関する研究

厚生労働科学研究の一環として実施された「ダルク追っかけ調査」のデータベースを再分析し，当事者が主体となった依存症回復施設ダルクの有用性について検討するとともに，回復施設職員を対象とした意見交換会を実施し，ダルク等を取り巻く課題の抽出を行うことを目的とした．パネルデータ分析よって，施設に入所している状態であること，アルコールを飲まないことは，薬物の断薬状態を維持することにプラスの影響があることが明らかとなった．障害者福祉事業の広がりに伴い，依存症の当事者ではないスタッフ（非当事者スタッフ）を雇用する施設が増え，ダルク意見交換会に参加者した施設のうち 74%に非当事者スタッフが雇用されていることが明らかとなった．（厚労省依存症調査・研究事業．嶋根卓也，猪浦智史，喜多村真紀，水野聡美，大淵拓真，新海浩之，松本俊彦）

5）　覚醒剤事犯者の理解とサポートに関する研究

覚醒剤事犯者の物質使用障害の治療歴は，男性よりも女性の方が有意に高く（男性 15.8%，女性 42.4%），男性では DAST-20 のスコアと自殺念慮，女性では虐待経験と摂食障害の経験が治療歴と有意に関連していることが明らかとなった．自殺念慮の生涯経験率は男性 20.2%，女性 45.5% であり，女性のほうが有意に高かった．薬物使用のトリガーとしての月経前症状を持つ該当群は対照群よりも，覚醒剤を使用し始めた年齢が有意に低く，逮捕などにより身柄を拘束される直前の 1 カ月間の平均使用日数が多く，薬物問題の重症度が高いという結果が得られた．（厚労省依存症調査・研究事業．嶋根卓也，近藤あゆみ，喜多村真紀，松本俊彦）

6）　薬物使用と生活に関する全国高校生調査

薬物使用開始の好発年齢とされる高校生（主として 16～18 歳）を対象とした薬物使用に関する全国調査を実施し，高校生における薬物使用に関する基礎データを得ることを目的とした．高校生にお

ける市販薬の乱用経験（過去１年以内）は，高校生全体 1.6%，男性 1.2%．女性 1.7%と推計された．違法薬物の乱用経験（過去１年以内）は，大麻 0.16%，有機溶剤 0.10%．覚醒剤 0.07%であり，市販薬の乱用経験はその 10 倍以上高いことが明らかとなった．市販薬の乱用経験を持つ高校生は，乱用経験のない高校生と比較し，学校が楽しく，親しく遊べる友人がいない，親に相談できない，大人不在で過ごす時間が長いなど，社会的に孤立した状態に置かれていることが明らかとなった．（厚労省：依存症に関する調査研究事業．嶋根卓也，猪浦智史，喜多村真紀，松本俊彦）

Ｂ．臨床研究

1）　アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究

本研究の目的は以下の３つである．第１に，ギャンブル障害およびゲーム障害という２つの嗜癖行動のそれぞれに関して，心理社会的側面と生物学的側面の両面から病態と臨床的特徴を明らかにすること，第２に，覚醒剤使用障害に対する司法的および保健医療的施策の効果を検証し，新たに社会問題化している市販薬使用障害の臨床的特徴と治療のあり方を検討することである．そして第３に，物質使用障害の発症や症状維持に関する生物学的機序・病態を解明し，薬物療法の可能性を模索することである．本研究班では，この３つの目的を達成するために，総計９つの分担研究開発課題を設定し，研究を進めている．（精神・神経疾患研究開発費，松本俊彦）

2）　女性薬物依存症者の回復支援に関する研究

薬物問題を抱えた女性の治療と回復支援を考える支援者向けのオンライン講演会を開催し，その参加者 105 名を対象に，薬物問題をもつ女性の治療と回復支援に携わる支援者の実態把握に関する（匿名）オンラインアンケート調査を実施した．主な結果は以下の通りである．薬物問題をもつ女性の治療や回復支援に携わる機会がある支援者の 49.5%が，その支援を「非常に困難」と感じていた．薬物問題をもつ女性の支援に関連する様々な制度や取り組みについて「非常に重要」の回答割合が 50%以上と高かったのは，①家族や子どもを含めた一体的な支援体制，②女性の治療や支援に関連する機関や施設についての情報，③依存症支援とトラウマ治療との連携，④母親支援と子ども支援の連携，⑤医療と保健福祉との連携，⑥医療・保健福祉と司法・更生保護との連携，⑦支援者同士のネットワーク，⑧女性の治療や支援に関する教育・研修，であったが，そのうち①③④⑧については，取り組みの充実度が「全く足りていない」とする回答が約３割以上と高かった．以上の結果から，女性に関わる支援者の多くは困難を抱えながら支援している実態が示唆され，その改善に向けては，「家族や子どもを含めた一体的な支援体制」「依存症支援とトラウマ治療との連携」「母親支援と子ども支援の連携」「女性の治療や支援に関する教育・研修」の充実を重点的に行う必要がある．（厚生労働省依存症に関する調査研究事業．近藤あゆみ，大嶋栄子）

3）　処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究

本研究班では，1）精神医学・救急医学・法医学の観点から処方薬・市販薬乱用の健康被害を明らかにすること，2）乱用リスクの高い薬剤を把握すること，3）処方薬・市販薬使用障害患者の臨床的特徴を明らかにすること，4）処方薬・市販薬依存症の治療法を開発すること，5）薬局・救急医療での介入・支援方法を開発することを目的としている．この研究目的を遂行するために，本研究班では，依存症専門医療，救命救急医療，監察医務院，ドラッグストアという４つの異なるフィールドを生かした，５つの研究分担課題を設定し，市販薬・処方薬が引き起こす健康問題の実態を多面的に明らかにするとともに，治療および支援の介入のあり方を検討している．（松本俊彦，嶋根卓也: 厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業）

4）ハームリダクションに基づく支援の導入・普及に関する研究

ハームリダクション（HR）に基づく支援において重要な要素を支援者・当事者・家族それぞれの視点から明らかにすることを目的にフォーカスグループインタビューを実施した．対象者は，HR についての一定の知識を有する者で，物質使用に関して何らかの治療や支援を受けた経験がある当事者，当事者の家族，支援者とした．逐語録をコード化し類似するテーマごとにカテゴリ化し，「HR に基づく

支援において重要な要素」の項目を記述した．その結果，「違法薬物の使用や前科による差別・偏見を受けず，普通の生活ができる社会」「違法薬物を使用する人が逮捕された際に，刑に服するのではなく支援につなげる制度がある」等の項目が抽出された．今後これらの項目を使用したデルファイ調査を実施し，HR に基づく支援に関するコンセンサスを形成する．（厚労省依存症調査・研究事業．高野歩）

5）飲酒・薬物使用のリアルタイム測定と機械学習に基づく即時介入モデルの開発

セルフモニタリングとウェアラブル活動量計（Fitbit）によって日常生活における飲酒・薬物使用状況等のデータをリアルタイムに収集するプログラムを開発し，対象者の飲酒・薬物使用を予測するモデルを構築することを目的に研究計画を立案し，研究倫理審査の承認を得て研究対象者のリクルートを開始した．対象者は，①過去 1 ヶ月以内に飲酒があり，かつ，健康被害リスクを伴う飲酒がある人，②過去 3 ヶ月以内に覚醒剤または大麻使用があり，かつ，健康被害リスクを伴う覚醒剤または大麻使用がある人とし，4 週間 Fitbit を装着してもらい，1 日 3 回セルフモニタリングアプリに飲酒・薬物使用状況等を入力してもらう．これらのデータを連結し，機械学習の手法により飲酒・薬物使用の個々のパターンを分析する．将来的に日常生活場面で飲酒・薬物使用のリスクが高い状況を予測し，個々の飲酒・薬物使用状況に応じたモバイル版即時介入プログラムのプロトタイプを開発する．（文部科学省：2023 年度 基盤研究(B)．高野 歩）

C．基礎研究

1）NMDA 受容体を標的とする解析

NMDA 受容体を標的とする薬物の有害作用を迅速に予測する手法として， NMDA 受容体発現細胞を利用した評価法の確立を行った．NMDA 受容体は，グリシン存在下でグルタミン酸刺激を行うと，細胞外の Ca^{2+}を取り込むチャネル型受容体であり，本原理を利用して細胞内 Ca^{2+}濃度の変化を測定した．評価対象として，ケタミン誘導体およびデキストロメトルファン(DXM)を使用した．細胞内 Ca^{2+}に反応する特殊な蛍光指示薬と蛍光プレートリーダーを組み合わせ，薬物の添加による Ca^{2+}動態を解析したところ，ケタミン誘導体により濃度依存的に細胞内の蛍光強度が低下した．評価を行ったケタミン誘導体の一部は，我が国の規制薬物として，指定を受ける予定である．DXM の代謝物を評価したところ，代謝物デキストロファンにおいて DXM よりも強い NMDA 受容体拮抗作用を確認した．(令和 5 年度精神・神経疾患研究開発費．富山健一)

2）危険ドラッグの中枢作用と薬物依存性の解析

フェンタニルや覚醒剤などと類似の作用を持つ危険ドラッグの流通が世界的に拡大しつつある．本年度は，フェンタニルとは構造の異なる合成オピオイドあるブトニタゼン，合成カチノンである 3-CMC およびジペンチロン，解離性麻酔薬ケタミン類似化合物 2 フルオロデスクロロケタミンを利用して薬理学的特性，運動活性および薬物依存性の解析を行った．ブトニタゼンは，オピオイドμ受容体を介して中枢興奮作用を示し，さらに精神依存を誘発する恐れ，3-CMC およびジペンチロンはドパミントランスポーター阻害作用，2 フルオロデスクロロケタミンは NMDA 受容体の拮抗作用と中枢興奮作用を示し，いずれの薬物も精神依存の誘発を確認し乱用によって健康被害を示す危険性があると考えられる．（厚生労働省：危険ドラッグの依存性等に関する評価業務事業．富山健一）

3）危険ドラッグの中枢作用と薬物依存性の解析

本研究では，ヒト iPS 由来ドパミン神経を用いて，覚醒剤（methamphetamine）および合成カチノンの神経細胞毒性発現について検討し，薬物による細胞毒性の発現が明らかとなった．これまでの危険ドラッグの神経毒性の解析は，動物由来初代培養神経細胞や培養細胞株を用いる場合が多い．しかし，ヒトを想定した毒性発現の可能性の検討や動物愛護の観点から，ヒト由来 iPS 細胞から誘導した機能的神経細胞を用いることで，ヒトを反映した薬物特性の一端を収集可能になることが期待できる．（厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業．富山健一）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・市民向け講演会：(Ⅳ．研究業績 C．講演 参照)　・報道：(Ⅳ．研究業績 F．その他 参照)

(2) 専門教育面における貢献

・研修会・研究会

第 11 回薬物依存症に対する認知行動療法研究会，2020 年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業（薬物依存症回復施設職員研修，依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物））

・大学

早稲田大学人間科学学術院非常勤講師（松本俊彦），国立大学法人東京医科歯科大学非常勤講師（松本俊彦），国立大学法人東京大学非常勤講師（松本俊彦），国立大学法人岡山大学大学院医歯薬学総合研究科非常勤講師（嶋根卓也），東京薬科大学薬学部非常勤講師（嶋根卓也），津田塾大学非　常勤講師（嶋根卓也），昭和大学医学部薬理学兼任講師（嶋根卓也），東京医科歯科大学非常勤講師（高野 歩），浜松医科大学非常勤講師（高野 歩），東京大学大学院医学系研究科客員研究員（高野 歩）

・その他

日本アルコール・薬物医学会雑誌編集委員会（高野 歩，嶋根卓也）

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・政府委員会

厚生労働省医薬・生活衛生局「薬事・食品衛生審議会」臨時委員（松本俊彦），厚生労働省医薬・生活衛生局「依存性薬物検討会」構成員（松本俊彦），文部科学省生涯学習政策局「青少年を取り巻く有害環境対策の推進（依存症予防教育推進事業）」技術審査委員（松本俊彦），厚生労働省精神・障害保健課 「依存症の理解を深めるための普及啓発」に係る企画委員会委員（松本俊彦），文部科学省初等中等教育局「児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議」（松本俊彦），厚生労働省「依存症対策全国センター」事務局長（嶋根卓也），厚生労働省「依存症に関する調査研究部会」副会長（嶋根卓也），厚生労働省「令和 5 年度依存症の理解を深めるための普及啓発事業」企画委員（嶋根卓也），厚生労働省薬物乱用防止啓発訪問事業有識者検討会委員（嶋根卓也），厚生労働省医薬・生活衛生局総務課「医薬品の販売制度に関する検討会」参考人（嶋根卓也），法務省矯正研修所「効果検証業務（大麻使用歴を有する在院者に対する指導教材等の作成）」アドバイザー（嶋根卓也），法務省保護局観察課「薬物再乱用防止プログラムに関するワーキング・グループ」アドバイザー（嶋根卓也），法務省矯正研修所「効果検証業務（薬物依存離脱指導の充実化に係わる助言）」（嶋根卓也），内閣府「規制改革推進会議」ワーキング・グループ参考人（嶋根卓也）厚生労働省「依存性薬物検討会」参考人（富山健一）

・その他公的委員会

東京地方裁判所登録精神保健判定医（松本俊彦），独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員（松本俊彦），東京都立中部総合精神保健福祉センター　薬物乱用防止プログラム（OPEN）改訂監修者（嶋根卓也），福岡県「少年用大麻再乱用防止プログラムに係わる監査及び補正業務」（嶋根卓也），福岡県「大麻乱用防止教育用動画に係わる監修等業務」（嶋根卓也）埼玉県地方薬事審議会薬物指定審査委員会（富山健一）

・研究成果の行政貢献

令和 5 年厚生労働省告示第 5 号により，「濫用等のおそれのある医薬品」における「鎮咳去痰薬に限る」などの規定が除外され，指定範囲が拡大された．（嶋根卓也）

(5) センター内における臨床的活動

毎週月・木曜日に薬物依存症外来での診療を行うとともに，デイケアにて薬物再乱用防止のための集団認知行動療法プログラムを実施している．（松本俊彦，嶋根卓也，高野 歩）

Ⅳ．研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1) Katayama M, Sugiura K, Fujishiro S, Fujishiro S, Konishi J, Inada K, Shirakawa N, Matsumoto T：Factors influencing stigma among healthcare professionals towards people who use illicit drugs in Japan: a quantitative study. Psychiatry Clin Neurosci Rep. 2023;2:e125. https://doi.org/10.1002/pcn5.125

2) Masataka Y, Sugiyama T, Akahoshi Y, Nozaki C, Matsumoto T：Positive Urinalysis for△9-tetrahydrocannabinol (THC)in Hexahydrocannabinol (HHC) Users A Cross-sectional Study .Japanese Alcohol Study & Drug Dependence 58(1) ：23-30,2023.

3) Katayama M, Fujishiro So, Sugiura K, Konishi J, Inada K, Shirakawa N, Matsumoto T：Stigmatized attitudes of medical staff toward people who use drugs and their determinants in Japanese medical facilities specialized in addiction treatment. Neuropsychopharmacol Rep.2023;43:576–586. https://doi.org/10.1002/npr2.12380

4) Tanibuchi Y, Omiya S, Usami T, Matsumoto T：Clinical characteristics of over-the-counter(OTC) drug abusers in psychiatric practice in Japan: Comparison of single and multiple OTC product abusers. Neuropsychopharmacol Rep. 2024;00:1–11. https://doi.org/10.1002/npr2.12415

5) Mizuno S, Shimane T, Inoura S, Matsumoto T. Situational factors affecting abstinence from drugs: Panel data analysis of patients with drug use disorders in residential drug use treatment. Psychiatry Clin Neurosci Rep. 2024;3:e174. https://doi.org/10.1002/pcn5.174

6) Tsutsumi S, Takano A, Usami T, Kumakura Y, Kanazawa Y, Takebayashi T, Sugiyama D, Matsumoto T: Risk and protective factors for early dropout from telephone monitoring for individuals with drug convictions in community mental health centers in Japan. J Subst Use Addict Treat. 2024 Mar 15:209347. doi: 10.1016/j.josat.2024.209347.

7) Kondo A, Shimane T, Takahashi M, Kobayashi M, Otomo M, Takeshita Y, Matsumoto T: Sex differences in the characteristics of stimulant offenders with a history of substance use disorder treatment. Neuropsychopharmacology Reports, DOI: 10.1002/npr2.12357, 2023.

8) Hrada T, Kanamori S, Baba T, Takano A, Nomura K, Frederick A, Perelta R,Shirasaka T: Sociodemographic profiles and determinants of relapse risks among people with substance use disorders in the Philippines: A survey in community and residential care settings：Drug and Alcohol Dependence 250：110924,2023

Takano A, Ono K, Nozawa K, Sato M, Onuki M, Sese J, Yumoto Y, Matsushita S, Matsumoto T：Wearable Sensor and Mobile App-based mHealth Approach for Investigating Substance Use and Related Factors in Daily Life: Protocol for an Ecological Momentary Assessment Study，JMIR Research Protocols,12: e44275,2023.

9) 高野 歩，熊倉陽介，松本俊彦：アルコール問題に対するハームリダクションアプローチ－理念と海外における実践を中心に－．精神神経学雑誌 125 (5)：352-364，2023．https://doi.org/10.57369/pnj.23-052.

10) 片山宗紀，藤城 聡，稲田 健，松浦良昭，山田貴志，白川教人，松本俊彦：自治体の支援者のスティグマ解消策としての当事者と専門職との協働による研修の有効性．日本アルコール関連問題学会雑誌 24(2)：89-94，2023.

11) 高橋 哲，鈴木愛弓，近藤あゆみ，服部真人，小林美智子，喜多村真紀，嶋根卓也：覚醒剤事犯受刑者における自殺念慮の生涯体験率とその関連要因の検討．自殺予防と危機介入，第 44 巻 1 号，1-8, 2024.

12) 喜多村真紀，嶋根卓也，高橋 哲，小林美智子，大伴真理惠，鈴木愛弓，松本俊彦： 薬物使用の

トリガーとしての月経前症状を持つ女性の特徴－覚醒剤使用のメリット・デメリットに焦点を当てて．　女性心身医学,28(3),2024.

(2) 総説

1) 松本俊彦：ゲーム障害と神経発達症－アディクション臨床と児童青年期臨床の交差点．そだちの科学 40：84-86，2023.
2) 松本俊彦：依存症をどのように聞き出したらよいか．精神科治療学 38(4)：449-454，2023.
3) 沖田恭治, 松本俊彦：物質およびアルコール使用障害の診断・治療において望まれる対応と検査．精神医学 65(6)：891-898，2023.
4) 松本俊彦：日本社会精神医学会相模原事件特別委員会で考えたこと．日本社会精神医学会 32(2)：154-159，2023.
5) 松本俊彦：自傷と市販薬乱用の理解と援助．子どもの虐待とネグレクト 25(2)：175-181，2023.
6) 松本俊彦：非自殺性自傷 non-suicidal self-injury について．福岡行動医学雑誌 29(1)：11-18，2023.
7) 松本俊彦：アディクションとその周辺 発刊にあたり．精神科治療学 38 増刊号 ：3-4，2023.
8) 松本俊彦：アディクションとは何か－凝り性や没頭と何が違うのか？－．精神科治療学 38 増刊号：10-14，2023.
9) 松本俊彦：自己治療仮説．精神科治療学 38 増刊号：54-58，2023.
10) 松本俊彦：物質使用症の概念・症候・診断．精神科治療学 38 増刊号：84-88，2023.
11) 宇佐美貴士，松本俊彦：ベンゾジアゼピン受容体作動薬使用症．精神科治療学 38 増刊号：174-177，2023.
12) 松本俊彦：薬物使用症治療における司法的対応の原則. 精神科治療学 38 増刊号：188-191，2023.
13) 松本俊彦：痛みアディクションとしての自傷行為とボディモディフィケーション．精神科治療学 38 増刊号：332-336，2023.
14) 松本俊彦：なぜ子どもの自殺が増えているのか？．月間 生徒指導 53(12)：12-15，2023.
15) 松本俊彦：日本の大麻政策再考．中央公論 137(12)：162-169，2023.
16) 松本俊彦：わが国の大麻政策の現状と課題．臨床精神薬理 26(12)：1191-1199，2023.
17) 宇佐美貴士，松本俊彦：処方薬，OTC 医薬品，個人輸入医薬品による使用障害の現状と課題－疫学的観点から－．臨床精神薬理 26(12)：1131-1137，2023.
18) 松本俊彦，山口重樹：わが国の緩和医療・慢性疼痛医療施設における医療用麻薬の不適切使用に関する調査．日本アルコール・薬物医学会雑誌 58(2)：3-17，2023.
19) 松本俊彦：自傷と市販薬乱用．日本社会精神医学会雑誌 32(4)：348-354，2023.
20) 松本俊彦：性被害を受けた少年たちの心理社会的特徴－旧ジャニーズ事務所における性加害事件から思うこと．心と社会 54(4)：74-84，2023.
21) 松本俊彦：自殺に至る精神医学的機序と自殺予防．賠償科学 49：96-107，2023.
22) 松本俊彦：薬物依存症のサイエンス．BRAIN and NERVE 76(1)：81-87，2024.
23) 松本俊彦：誰がために臨床家はいる．臨床心理学 24(2)：177-182，2024.
24) 松本俊彦：薬物事件報道と人権－改正大麻取締法成立の陰に．心と社会 55(1)：101-108，2024.
25) 嶋根卓也：依存症治療における薬剤師の役割：医療品の乱用・依存を例として．日本アルコール関連学会雑誌，24(2)：15-19，2023.
26) 嶋根卓也：大麻を使う若者たちとのコミュニケーション－有効な，有効ではない予防教育－．刑政 134(7)：38-49，2023.
27) 嶋根卓也：薬物問題の現状と課題－疫学と国の対策－．Ⅱアディクション各論－1.物質使用症，精神科治療学第 38 巻増刊号：78-83，2023.
28) 嶋根卓也：子どもたちの市販薬乱用の現状と対応．特集・子どもたちの生命を守るために－自死予防を中心に．教育と医学 71(6)：73-79，2023.

29) 富山健一：行動薬理学から見たアディクション―動物を用いた条件付け場所嗜好性試験―, 精神科治療学, 38, 39-43, 2023.
30) 富山健一：危険ドラッグ：蔓延の現状と基礎知識, 健康教室, 2, 94-97, 2024.
31) 近藤あゆみ：【アディクションとその周辺】アディクション各論　物質使用症　物質使用症の治療総論　物質使用症に対する心理社会的治療　薬物問題をもつ女性に対する支援　アディクションとトラウマ双方に配慮した治療法「Seeking Safety」, 精神科治療学，38 巻増刊，111-115, 2023.

(3) 著書

1) 松本俊彦：薬物依存症地域支援の方法．こころの支援と社会モデル トラウマインフォームドケア・組織変革・共同創造，金剛出版，東京，pp184-192，2023.
2) 松本俊彦：薬物依存症臨床における ADHD．発達障害の精神病理Ⅳ－ADHD 編－,星和書店，東京，pp65-87，2023.
3) 松本俊彦：1 章 物質使用症群 物質使用症の病態 心理社会的視点．講座 精神疾患の臨床 物質使用症又は嗜癖行動症群性別不合，中山書店，東京，pp55-63，2023.
4) 宇佐美貴士，松本俊彦：1 章 物質使用症群 物質使用症各論 その他の物質使用症．講座 精神疾患の臨床 物質使用症又は嗜癖行動症群性別不合，中山書店，東京，pp207-216，2023.
5) 松本俊彦，大塚篤司：一章 先生，髪の毛をまた抜いてしまいましたー「無理にやめなくていい」という選択ー．皮膚科医の病気をめぐる冒険 医療を超えたクロストークで巡りついた新しい自分，新興医学出版社，東京，pp8-35，2023.
6) 渡邊洋次郎，松本俊彦：【対談】自己責任社会で弱さを抱えて生きていくー薬物・アルコール依存の経験から考える．弱さでつながり社会を変える，現代書館，東京，pp13-33，2023.
7) 松本俊彦：子どもの”やめられない”と向き合う．子どものからだと心白書 2023，ブックハウス HD，東京，pp23-25，2023.
8) 松本俊彦：処方薬依存症の治療. 今日の治療指針 私はこう治療している, 医学書院,東京, pp1058-1059，2024.
9) 松本俊彦：10 アルコール依存症治療薬　シアナミド. 精神科のくすり　ポイントチェック BOOK, 照林社，東京，pp320-321，2024.
10) 松本俊彦：10 アルコール依存症治療薬 ジスルフィラム．精神科のくすり　ポイントチェック BOOK，照林社，東京，pp322-323，2024.
11) 著者 中原ろく，監修 松本俊彦：死にたいと言ってください．双葉社，東京，　pp1-184，2023.
12) 松本俊彦 編集：「助けて」が言えない 子ども編．日本評論社，東京，pp1-285，2023.
13) 松本俊彦，田中紀子　：【監修】 風間暁【著】：学校で教えてくれない本当の依存症．合同出版株式会社，東京，pp1-233，2023.
14) 監修 松本俊彦：死にたいと言ってください(3)．双葉社，東京，pp1-182，2023.
15) 嶋根卓也：1 章 物質使用症群 物質使用症の疫学 薬物使用．物質使用症又は嗜癖行動症群 性別不合（講座 精神疾患の臨床）（樋口進　編），中山書店，東京，pp24-40,2023.
16) 嶋根卓也：Topics 大麻合法化とその影響. 物質使用症又は嗜癖行動症群 性別不合（講座 精神疾患の臨床）（樋口進　編），中山書店，東京，pp161-169,2023.
17) 嶋根卓也：Ⅱ-4 「助けて」という気持ちをクスリと一緒に飲み込んでしまう（「助けて」が言えない 子ども編）（松本俊彦　編），日本評論社，東京，pp166-177,2023.
18) 嶋根卓也：日本における薬物依存の現状．第 10 章 10.1 薬物依存，アルコール・薬物・ギャンブル・ゲームの依存ケアサポート（樋口進　監修），講談社，東京，pp122-135，2023.
19) 高野 歩：第 2 章　心理・社会的療法．　看護学専門分野教科書シリーズ 精神看護学援助論，理工図書，東京，pp137-144，2023.

(4) 研究報告書

1) 松本俊彦，宇佐美貴士，谷渕由布子，大宮宗一郎，高野 歩，水野聡美，沖田恭治，嶋根卓也：処方薬・市販薬依存症患者の実態と通院治療プログラムの開発に関する研究．令和5年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究（研究代表者 松本俊彦）総括・分担研究報告書：pp7-19，2024.
2) 松本俊彦，宇佐美貴士，熊倉陽介，高野 歩，金澤由佳，堤 史織：保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究．厚生労働省依存症に関する調査研究事業費補助金 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究（研究責任者 松本俊彦）研究報告書：pp1-47，2024.
3) 嶋根卓也，水野聡美，猪浦智史，邱 冬梅：薬物使用に関する全国住民調査（2023年）．令和5年度厚生労働行政推進調査事業費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」総括・分担研究報告書．2024.
4) 嶋根卓也，中島美鈴，牧草由紀夫，山口由美子，平井祥一，山崎裕宣，森 治美：大麻を乱用する少年における新たな大麻関連製品，危険ドラッグの乱用実態に関する研究．令和5年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「危険ドラッグと関連代謝産物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：舩田正彦）」分担研究報告書．2024.
5) 嶋根卓也，片山宗紀，榊原幹夫：大手チェーンドラッグストアにおける市販薬販売の実態に関する研究．令和5年度厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書．2024.
6) 富山健一：ヒト iPS 細胞より作成した機能的神経細胞を用いた危険ドラッグの有害作用の評価．令和5年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「精神活性物質の化学構造に基づく乱用危険性予測に関する研究（研究代表者：舩田正彦）」令和5年度分担研究報告書
7) 富山健一，舩田正彦：大麻に関する海外の規制状況と社会問題：米国及び加国の現状．令和5年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「麻をはじめとする薬物の効果的な予防啓発活動の実施及び効果検証に向けた調査研究（研究代表者：鈴木勉）」令和5年度分担研究報告書

(5) 翻訳

1) 松本俊彦 分担翻訳：14 パーソナリティ症群．シドニーブロック著 竹島正監訳「共生社会のための精神医学」，中央法規，東京，2024.
2) 松本俊彦 分担翻訳：15 物質使用とアディクション．マイケル・ベイジェント，マイケル・バターズビー著 竹島正監訳「共生社会のための精神医学」，中央法規，東京，2024.
3) 松本俊彦 監訳，小田嶋由美子 訳：カール・エリック・フィッシャー 依存症と人類 われわれはアルコール・薬物と共存できるのか．みすず書房，東京，pp1-344，2023.

(6) その他

1) 松本俊彦：依存症を専門とする精神科医が最近考えたこと．日本エッセイスト・クラブ会報 74：6-9，2023.
2) 松本俊彦：私たちがオーバードーズする理由．NHK テキスト きょうの健康 424 ： 54-57, 2023.
3) 松本俊彦：ソーシャルワークと多職種協働アプローチについて考える．精神療法 49(4) ： 543-

544，2023.

4) 松本俊彦：解題 人はなぜ薬物依存症になるのか．薬物依存症の日々 清原和博，235-247，2023.

5) 松本俊彦：人はなぜ自らを傷つけるのか？－痛みと傷痕の文化精神医学．みすず 728 ： 2-11，2023

6) 松本俊彦：【書評】臨床中毒学 第 2 版 上條吉人著．週間医学界新聞 3549 ： 6，2024.

7) 北垣邦彦，嶋根卓也，松本達朗，鈴木貴晃，松下妙子，樫山美智子：保護者向け薬物乱用防止パンフレット「NO! DRUG 薬物の誘惑は意外なほど身近に迫っています。」一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会，2024.

8) 大森和枝，加藤哲太，北垣邦彦，小出彰宏，嶋根卓也，高林修平，津田豊，横溝宇人：薬物乱用防止教室マニュアル（令和 5 年度改訂），日本学校保健会，東京，2024.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Shimane T, Inoura S, Kitamura M, Matsumoto T: Abuse of Over-The-Counter Medications and COVID-19 related stress among high school students: from a nationwide cross-sectional survey in Japan. International drug forum 2023, Bangkok, Thailand, 2023. 8. 7-9.

2) Shimane T, Inoura S, Kitamura M, Matsumoto T: Abuse of Over-The-Counter Medications and COVID-19 related stress among high school students: from a nationwide cross-sectional survey in Japan. Thailand Addiction Scientific Conference 2023, Chiang Mai, Thailand, 2023. 8. 9-11.

3) Nakashima M, Kodama N, Mori H, Shimane T: Development of juvenile cannabis relapse prevention program (F-CAN) focusing on communication skills with familiar people. 10th World Congress of Cognitive and Behavior Therapies. Soul, 2023.6.1.

4) 松本俊彦：【教育講演 4】ベンゾジアゼピン受容体作動薬乱用・依存症患者の理解と治療．第 15 回日本不安症学会学術大会，オンデマンド，2023.5.19～20.

5) 松本俊彦：【薬事小委員会主催セミナー：小児神経領域薬剤の薬物依存を検討する】人はなぜ薬物依存症になるのか．第 65 回日本小児神経学会学術集会，岡山，2023.5.25.

6) 松本俊彦：【シンポジウム 10】医薬品の乱用・依存の現状と未来に向けた課題．第 16 回日本緩和医療薬学会年会，兵庫，2023.5.28.

7) 松本俊彦：【基調講演】薬物関連精神疾患治療の現状．第 59 回日本肝臓学会サテライトシンポジウム，奈良，2023.6.17.

8) 松本俊彦：【シンポジウム 68】さまざまな精神科領域における身体症状症－専門的知見に基づく検討．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.23.

9) Matsumoto Toshihiko：【委員会シンポジウム 23（国際委員会）】Countermeasures for addiction in Japan．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.23.

10) 松本俊彦：【シンポジウム 82】物質使用症臨床における支持的精神療法－harm reduction psychotherapy の実践．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.24.

11) 松本俊彦：【教育講演 7】捕まらない薬物の乱用・依存～鎮痛薬および他の医薬品の乱用・依存．日本ペインクリニック学会第 57 回学術集会，佐賀，2023.7.14.

12) 松本俊彦：【全体シンポジウム】自傷と他害を考える．日本犯罪心理学会第 61 回大会，オンライン，2023.9.23.

13) 松本俊彦：【シンポジウム 6】依存症対策プロジェクトチーム：処方薬依存の現状と対応～精神科診療所ができること．日本精神科診療所協会第 29 回学術研究会，東京，2023.9.24.

14) 松本俊彦：【イブニングセミナー2】アルコールとうつ，自殺～「死のトライアングル」を防ぐために．第 31 回日本精神科救急学会学術総会，山口，2023.10.6.

15) 松本俊彦：【特別講演 1】人はなぜ薬物依存症になるのか～からだの痛みとこころの痛みの精神病理．第 5 回日本緩和医療学会関東甲信越支部学術集会 第 36 回栃木県緩和ケア研究会合同開催，栃木，2023.10.9.
16) 松本俊彦：【シンポジウム 3】アディクション臨床とトラウマ．2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.
17) 松本俊彦：【市民公開講座】「孤立の病」としての依存症～回復には集まる場所が必要だ～．2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.15.
18) 松本俊彦：【指導医講習会】てんかん専門医が知っておくべき薬物依存．第 56 回日本てんかん学会学術集会，東京，2023.10.19.
19) 松本俊彦：【特別講演】アディクションと自傷行為．第 33 回日本嗜癖行動学会秋田大会，オンライン，2023.11.18.
20) 松本俊彦：【特別講演 2】自分を傷つけずにはいられない～アディクションと自殺．第 130 回日本小児精神神経学会学術集会，香川，2023.11.26.
21) 松本俊彦：【教育講演 2】自分を傷つけずにはいられない人の理解と援助．第 3 回日本公認心理師学会学術集会，オンデマンド，2023.12.10.
22) 松本俊彦：【教育講演】トラウマとアディクションからの回復．第 29 回関西アルコール関連問題学会滋賀大会，滋賀，2023.12.17.
23) 松本俊彦：【Session 2C】精神科医としてオピオイドや違法薬物の使用者が抱える社会的孤独に向き合う．日本麻酔学会主催 International Conference on Anesthesia Patient Safety 2024，東京，2024.2.10.
24) 松本俊彦：【ディスカッションフォーラム 3】ディスカッション・フォーラム～専門家としての情報発信：援助者の陰性感情と社会の偏見を解消するために. 第 42 回日本社会精神医学会, 宮城, 2024.3.14.
25) 松本俊彦：【教育講演 4】日本社会精神医学会相模原事件特別委員会で考えたこと．第 42 回日本社会精神医学会，宮城，2024.3.14.
26) 嶋根卓也，高橋 哲，近藤あゆみ，大伴真理惠，小林美智子，秋田悠希，竹下賀子，松本俊彦：覚醒剤事犯者の理解とサポート：法務省法務総合研究所との共同研究．シンポジウム 21「依存症調査研究事業の成果紹介」第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.
27) 嶋根卓也，猪浦智史，喜多村真紀，松本俊彦：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用を例として-．シンポジウム 3「薬物過量摂取」第 50 回日本小児臨床薬理学会学術集会，大阪，2023.10.1.

(2) 一般演題

1) Takano A, Tokushige M, Ono K, Hiratani N, Asaoka H, Miyamoto Y, Tateno M：Changes in prevalence of gaming disorder among adolescent and young adult psychiatric and pediatric outpatients in Japan，The 8th International Conference on Behavioral Addictions (ICBA)，Incheon，2023.8.23-25
2) Ono K, Tokushige M, Hiratani N, Asaoka H, Miyamoto Y, Tateno M, Takano A：The relationship between family dysfunction and gaming disorder prevalence among adolescent and young adult outpatients in Japan: A longitudinal study，The 8th International Conference on Behavioral Addictions (ICBA)，Incheon，2023.8.23-25
3) Tateno M, Matsuzaki T, Takano A, Higuchi S：Gaming Disorder in Japan: From the perspective of a child and adolescent psychiatrist，The 8th International Conference on Behavioral Addictions (ICBA)，Incheon，2023.8.23-25
4) Takano A, Ono K, Sato M, Onuki M, Sese J, Matsumoto T：Impact of methamphetamine use

on cardiovascular risk and sleep deprivation: objective assessment using wearable activity tracker and mobile application, The College on Problems of Drug Dependence (CPDD) 85th Annual Scientific Meeting, Denver, 2023.6.17-21

5) Yasuma N, Imamura K, Watanabe K, Iida M, Takano A：Cannabis use in adolescence and the later onset of bipolar disorder: A systematic review and meta-analysis of prospective cohort studies, The College on Problems of Drug Dependence (CPDD) 85th Annual Scientific Meeting, Denver, 2023.6.17-21

6) 堤 史織，宇佐美貴士，高野 歩，熊倉陽介，金澤由佳，松本俊彦：薬物犯罪による保護観察対象者の地域支援からの脱落：Voice Bridges Project. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.

7) 新海浩之，嶋根卓也，松本俊彦：依存症回復施設につながる人の断薬・断酒状況の変化に関するカテゴリカル時系列分析：縦断調査からの知見. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.

8) 水野聡美，嶋根卓也，猪浦智史，松本俊彦：薬物依存者の断酒継続が断薬継続に及ぼす影響：薬物依存回復施設利用者のパネルデータを用いた研究. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.

9) 嶋根卓也，猪浦智史，喜多村真紀，松本俊彦：高校生における市販薬乱用の有病率の推計：薬物使用と生活に関する全国高校生調査 2021 より. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.

10) 宇佐美貴士，松本俊彦：市販薬関連精神障害の最近の傾向～全国の精神科医療施設における薬物関連障害の実態調査から～. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.

11) 沖田恭治，佐藤典子，木村有喜男，重本蓉子，釈迦堂充，齊藤友美，松本俊彦：アルコール使用障害を対象としたアミロイド PET/拡散尖度画像 MRI 研究. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.15.

12) 正高佑志，杉山岳史，赤星栄志，松本俊彦：日本の大麻使用障害と残遺性大麻関連障害のリスク因子に関する検討. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.15.

13) 喜多村真紀，嶋根卓也，高橋 哲，小林美智子，大伴真理恵，鈴木愛弓，松本俊彦：薬物関連問題に対する影響因としての月経前症状と ACE－全国の刑務所における「薬物事犯者に関する研究」より. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.15.

14) 片山宗紀，藤城 聡，杉浦寛奈，小西 潤，稲田 健，白川教人，松本俊彦：薬物使用のある人に対する依存症専門医療機関の医療者のスティグマ的態度と，影響を与える要因. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.15.

15) 石井香織，沖田恭治，船田大輔，勝海 学，松本俊彦：（ポスター）国立精神・神経医療研究センターにおける市販薬使用障害患者背景の後方視研究. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.15.

16) 高野 歩，大野昴紀，佐藤牧人，瀬々 潤，松本俊彦：（ポスター）覚醒剤使用が心拍数および睡眠に与える影響：ウェアラブル活動計量とスマホアプリを用いた計測. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.

17) 田中紀子，松本俊彦，常岡俊昭，上村敬一，金織来多：（ポスター）ギャンブル障害のスクリーニングツール「LOFT」の有用性と妥当性に関する研究. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.

18) 沖田恭治，喜多村真紀，岡野宏紀，齊藤友美，嶋根卓也，松本俊彦：（ポスター）物質使用障害を取り巻くスティグマを惹起・持続させる言語表現に関する質的研究. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.

19) 新海浩之，嶋根卓也：薬物依存回復施設につながる人の断薬状況の変化に関するカテゴリカル時

系列分析．日本犯罪心理学会第 61 回大会，オンライン，2023.9.23-24.

20）喜多村真紀，嶋根卓也： 大学生における物質使用関連問題に対する援助要請意図について－学内援助機関に焦点を当てて－．2023 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.

21）喜多村真紀，嶋根卓也，髙橋哲，小林美智子，大伴真理恵，鈴木愛弓，松本俊彦：薬物関連問題に対する影響因としての月経前症状とACE－全国の刑務所における「薬物事犯者に関する研究」より ．2023 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.15.

22）助友裕子，市瀬雄一，細川佳能，大浦麻絵，嶋根卓也，杉崎弘周，中川明日香，東尚弘：高等学校 2 年生のがんリスク認知の関連要因–がん対策推進に資するがん教育事業評価のための全国調査データの解析–．一般社団法人日本学校保健学会第 69 回学術大会，東京，2023.11.12.

23）喜多村真紀，沖田恭治，岡野 宏，嶋根卓也，松本俊彦：「ダメ。ゼッタイ。」という表現が違法薬物の使用経験を有する者に与える印象について．第 45 回全国大学メンタルヘルス学会総会，北海道，2023.12.21-22.

24）高野 歩：ハームリダクションの新たな展開：ハームリダクションに基づく治療的支援，第 119 回日本精神神経学会学術総会，横浜，2023.6.22-24.

25）高野 歩，大野幸子，山名隼人，松居宏樹，康永秀生：子どもの誕生による父親の飲酒行動の変化：健診データを用いた分析，日本臨床疫学会 第 6 回年次学術大会，東京，2023.11.11-12

26）高野 歩：ハームリダクションの意義と実践をディベート形式で考える 自己決定を支援や治療に生かすには，第 58 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，岡山，2023.10.13-15

27）安間尚徳，小竹理紗，大野昴紀，平谷七美，奈良麻結，知花文香，飯田真子，高野 歩：Harm Reduction Assessment Scale (HRAS)日本語版の作成と予備解析，第 58 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，岡山，2023.10.13-15

28）大野昴紀，徳重 誠，平谷七美，金子響介，浜村俊傑，宮本有紀，館農 勝，藤里紘子，伊藤正哉，高野 歩：日本語版 Internet Gaming Disorder Scale for Children (IGDS-C)の信頼性と妥当性の検証，第 58 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，岡山，2023.10.13-15

29）高野 歩，大野昴紀，佐藤牧人，瀬々 潤，松本俊彦：覚醒剤使用が心拍数および睡眠に与える影響：ウェアラブル活動量計とスマホアプリを 用いた計測，第 58 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，岡山，2023.10.13-15

30）高野 歩：今後のアディクション研究のデザインと成果発表，第 58 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，岡山，2023.10.13-15

31）白坂知彦，原田隆之，金森将吾，馬場俊明，高野 歩，野村和考，Villaroman Alfonso, Frederick I. Rey, Jasmin Peralta：フィリピン国 全数調査結果にみる薬物依存の現状，第 58 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会，岡山，2023.10.13-15

(3) 研究報告会

1） 松本俊彦，嶋根卓也：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部主催 合同報告会，オンライン，2023.3.15.

2） 嶋根卓也：薬物使用に関する全国住民調査（2023 年）．「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）研究成果報告会（オンライン），東京，2024.3.15.

3） 水野聡美，嶋根卓也，猪浦智史，松本俊彦：睡眠薬を常用する一般住民の心理社会的特徴に関する研究：薬物使用に関する全国住民調査の結果より．第 35 回国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会，2024.3.18.

4） 富山健一：大麻に関する海外の規制状況と社会問題：米国及び加国の現状（2023 年）．「大麻をは

じめとする薬物の効果的な予防啓発活動の実施及び効果検証に向けた調査研究」令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）研究成果報告会，東京，2024.2.8.

C．講演

1) 松本俊彦：事象と依存について．ファミリーサポートグループ主催 スペシャル講演，オンライン，2023.4.9.
2) 松本俊彦：依存症について．医療法人社団新新会多摩あおば病院主催 外部講師による講演会，東京，2023.4.11.
3) 松本俊彦：生きづらさの問題と依存対策～睡眠薬・アルコールなどの問題を絡めて．MSD 株式会社主催 睡眠・依存・アルコールを考える会，オンライン，2023.4.12.
4) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～思春期のリストカットと OD～．SC works GIFU 主催 3 周年記念講演会，オンライン，2023.4.16.
5) 松本俊彦：依存症について～家族の対応～．特定非営利活動法人川崎ダルク支援会主催 川崎ダルク家族会，神奈川，2023.5.13.
6) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺～死のトライアングルを避けるために～．大塚製薬株式会社徳島支店主催 第 50 会精神科認定薬剤師講習会，オンライン，2023.5.13.
7) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺～死のトライアングルを避けるために．大塚製薬株式会社高崎支店新潟出張所主催 アルコール依存症セミナー，新潟，2023.5.16.
8) 松本俊彦：誰がために医師はいる～依存症と自傷・自殺の臨床・研究から考えたこと．横浜市立大学主催 YCU リベラルアーツ入門，オンライン，2023.5.24.
9) 松本俊彦：最近の薬物乱用・依存の動向～2022 年全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患実態調査より～．住友ファーマ株式会社主催 依存症を考える WEB セミナー,オンライン，2023.5.26.
10) 松本俊彦：思春期のリストカットと市販薬乱用．奈良県小児科医会主催 第 69 回奈良県小児科医会学術集会，オンライン，2023.5.27.
11) 松本俊彦：「ダメ。ゼッタイ。」ではダメいま必要とされている薬物乱用防止教室とは．君津木更津薬剤師会学校薬剤師委員会主催 講演会，オンライン，2023.6.11.
12) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺～死のトライアングルを避けるために～．大塚製薬株式会社仙台支店主催 第 11 回宮城救急・精神医療懇話会，宮城，2023.6.13.
13) 松本俊彦：薬物依存症をもつ人を地域で支える．東京大学医学部附属病院精神神経科主催 東京大学職域・地域架橋型 価値に基づく支援者育成 C コース，東京，2023.6.18.
14) 松本俊彦：若者の自傷行為と自殺対策～若者へのメッセージ～．横浜市こころの健康相談センター主催 自殺対策出前講座，神奈川，2023.6.21.
15) 松本俊彦：子ども・若者の声にできない SOS～なぜ子どもの自殺が多いのか？～．小金井市教育委員会生涯学習部主催 令和 5 年度子どもの人権講座，東京，2023.7.2.
16) 松本俊彦：ケア，薬物依存症．東京藝術大学美術学部主催 履修証明プログラム Diversity on the Arts Project「ケア原理」，オンライン，2023.7.3.
17) 松本俊彦：思春期と自傷・自殺．一般社団法人日本家族計画協会主催 思春期保健セミナーコースⅡ（e ラーニング），配信，2023.7.4.
18) 松本俊彦：依存症と ADHD．武田薬品工業株式会社主催 ADHD Web カンファレンス～依存症からみた ADHD の治療戦略を考える～，東京，2023.7.6.
19) 松本俊彦：最近の薬物乱用・依存の動向．大塚製薬株式会社主催 アディクションからの回復を考える会，京都，2023.7.8.
20) 松本俊彦：薬物依存症臨床における ADHD～児童青年期精神医学との交差点～．武田薬品工業株式会社主催 ADHD Premium Seminar－子どもの ADHD を診るために今，考えること，東京，

2023.7.16.

21) 松本俊彦：自傷行為とその対応について.文部科学省初等中等教育局主催 児童生徒の自殺予防に関する普及啓発協議会，岩手，2023.7.19.

22) 松本俊彦：薬物作用モデルについて．東京大学大学院総合文化研究科主催 シンポジウム「精神科の薬を問い直すー薬の使い方，減らし方，やめ方をめぐって」，東京，2023.8.5.

23) 松本俊彦：もしも「死にたい」と言われたら･･･．社会福祉法人 盛岡いのちの電話主催 2023年度自殺予防公開講座，岩手，2023.8.6.

24) 松本俊彦：最近の薬物乱用・依存の動向．大塚製薬株式会社主催 Rrcovery From Addiction，大阪，2023.8.18.

25) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～自傷行為の理解と援助～．浜松医科大学医学部児童青年期精神医学講座主催 第21回浜松医大精神医学･児童精神医学オンライン講座, オンライン，2023.8.20.

26) 松本俊彦：もしも「死にたい」と言われたら～思春期の自殺予防のためにできること～. 認定NPO法人CAPNA主催 CAPNA市民公開講座，愛知，2023.8.23.

27) 松本俊彦：若年女性の生きづらさを考える～自傷行為の理解と援助～. 豊島区池袋保健所主催 令和5年度ゲートキーパー講座，オンライン，2023.8.25.

28) 松本俊彦：ミャンマーの違法薬物ビジネスの現状に対する日本型支援の可能性と限界について．特定非営利活動法人東京ソテリア主催 講演会，東京，2023.8.29.

29) 松本俊彦：「ダメ。ゼッタイ。」ではない薬物乱用防止教育～捕まらない薬物の時代を考える．京都府教育委員会主催 令和5年度薬物乱用防止教室講習会，京都，2023.8.30.

30) 松本俊彦：ドラッグストアで買える「ドラッグ」とは？～「捕まらない薬物」～．国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター主催 第9回NCNPメディア塾，東京，2023.9.1.

31) 松本俊彦：「助けて」が言えない～SOSを出さない若者に何ができるか～．神奈川県精神保健福祉センター主催 神奈川県自殺対策講演会，オンライン，2023.9.9.

32) 松本俊彦：依存症の回復とその支援について．特定非営利活動法人ホームレス支援全国ネットワーク主催 講演会，東京，2023.9.19.

33) 松本俊彦，東畑開人：「ふつうの相談」刊行記念イベント対談，東京，2023.9.23.

34) 松本俊彦：生きづらさの問題と依存対策～睡眠薬の問題を絡めて．MSD株式会社主催 依存症と社会を考察する研究会，東京，2023.9.27.

35) 松本俊彦：社会内処遇の意義と実践について．一般社団法人東京精神保健福祉士協会主催 普及啓発セミナー，東京，2023.10.1.

36) 松本俊彦：【特別講演2】依存症の本質と学生への関わり方．第61回全国大学保健管理研究集会主催 講演，石川，2023.10.4.

37) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬・生活衛生局監視指導・麻薬対策課中毒係主催 令和5年度再乱用防止対策講習会，山形，2023.10.18.

38) 松本俊彦：世界一やさしい依存症入門．医療法人横田会主催 60 周年記念講演会，オンライン，2023.10.21.

39) 松本俊彦：もしも死にたいと言われたら～自殺リスクの評価と対応．第一東京弁護士会，オンライン，2023.10.24.

40) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～不安・うつと自傷行為．神戸精神科臨床研究会 持田製薬株式会社 吉富薬品株式会社 共催 第29回神戸精神科臨床研究会，兵庫，2023.10.28.

41) 松本俊彦：自傷行為への対応と理解．京都健康教育サークル サークルひとみ主催 学習会，オンライン，2023.11.5.

42) 松本俊彦：依存症と人類～人はなぜ依存症になるのか．国立民族学博物館主催 みんぱく公開講演会，東京，2023.11.10.

43) 松本俊彦：ミャンマーの違法薬物ビジネスの現状に対する日本型支援の可能性と限界について．

特定非営利活動法人東京ソテリア主催 講演会，東京，2023.11.12.

44) 松本俊彦：若者が大人に対して安心して助けを求められるようになること，そして若者に助けて欲しいと思える大人になるために必要なこと．群馬県立高崎女子高等学校主催 PTA 教養講座，2023.11.15.

45) 松本俊彦：いま求められる薬物乱用防止教育とは？．龍谷大学宗教部主催 現代的課題と建学の精神公開プログラム，オンライン，2023.11.17.

46) 松本俊彦：生きづらさの問題と依存対策～睡眠薬の問題を絡めて．MSD 株式会社主催 National Network for the Generation，オンライン，2023.11.20.

47) 松本俊彦：世界一やさしい依存症入門．山形県依存症関連問題研究会主催 世界一やさしい依存症入門 山形ーわかりやすい支援者物語，動画，2023.11.26.

48) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない～「助けて」が言えない．鳥取県立精神保健福祉センター主催 第 32 回心の健康フォーラム，オンライン，2023.12.5.

49) 松本俊彦：【指定発言】救急科のホンネ 精神科のホンネ．住友ファーマ株式会社主催 第 2 回多摩地域リエゾン会議，東京，2023.12.5.

50) 町田 康，松本俊彦：しらふで生きる，ということ．東京都立中部総合精神保健福祉センター主催 令和 5 年度東京都依存症対策普及啓発フォーラム，東京，2023.12.8.

51) 松本俊彦：子どもたちの物質乱用にどう向き合うのかー問題の背景と関わりについてー．地方独立行政法人山梨県立病院機構 山梨県立北病院主催 子どもの心に関する講演会，山梨，2023.12.12.

52) 松本俊彦：「助けて」が言えない SOS を出さない人に支援者は何ができるか．久留米大学医学部看護学科主催 特別講義，オンライン，2023.12.13.

53) 松本俊彦：自分のお酒の飲み方が気になる人へ．キヤノンマーケティングジャパン株式会社主催 適正飲酒についての講演会，動画，2023.12.29.

54) 松本俊彦：かしこいアルコールとの付き合い方．キヤノンマーケティングジャパン株式会社主催 適正飲酒についての講演会，動画，2023.12.29.

55) 松本俊彦：心理ケアの社会的実装を行う上でのポイント．筑波大学医学医療系主催 実践者向け講義，オンライン，2023.12.26.

56) 松本俊彦：10 代の 10 人に一人いるってご存じですか？オーバードーズ・自傷行為 もしそういう子に出会ったら．認定 NPO 法人 3keys 主催 第 24 回 Child Issue Seminer，東京，2024.1.9.

57) 松本俊彦：思春期の自傷について 教員としての理解と対応．女子美術大学付属高等学校・中学校主催 講演会，東京，2024.1.10.

58) 松本俊彦：若者を中心とした薬物や自殺の問題について．北九州市立精神保健福祉センター主催 薬物依存症特別講演会，2024.1.24.

59) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺～死のトライアングルを避けるために～．大塚製薬株式会社主催 ALL FOR YOUR SMILE in 北九州，オンライン，2024.1.24.

60) 松本俊彦：世界一やさしい依存症入門：やめられないのは誰かのせい？（14 歳の世渡り術）．成城大学治療的司法研究センター主催 学生サポーター懇親会，オンライン，2024.1.25.

61) 松本俊彦：わが国におけるハームリダクションの課題と可能性．武田薬品工業株式会社主催 関西 Meet the Expert in Psychiatry，大阪，2024.1.27.

62) 松本俊彦：子どもの自殺予防～自殺念慮への対応～．岐阜児童相談研究会主催 第 2 回岐阜児童相談研究セミナー，オンライン，2024.1.28.

63) 松本俊彦：自傷行為へのケアについて～周囲の大人の対応～．厚木児童思春期精神保健ネットワーク推進委員会 厚木市教育委員会共催 令和 5 年度厚木児童思春期精神保健講座第 51 回ミニワークショップ，神奈川，2024.1.31.

64) 松本俊彦：最近の薬物依存症治療の考え方～ハームリダクション・サイコセラピー．住友ファーマ株式会社主催 森田療法研究会，東京，2024.2.3.

65) 松本俊彦：依存症 最近の動向．桜ヶ丘記念病院主催 院内学会教育講演，東京，2024.2.14.
66) 松本俊彦：子どものメンタルヘルス～自傷・市販薬 OD・自殺～．広島県保険医協会主催 広島県保険医協会医科臨床研究会，オンライン，2024.2.14.
67) 松本俊彦：若者の市販薬乱用・依存～自傷と自殺のあいだ～．公益社団法人日本精神神経科診療所協会主催 第 13 回自殺対策講演会，オンデマンド動画配信，2024.2.18.
68) 松本俊彦：依存症と報道．公益社団法人日本精神保健福祉士協会主催 第 5 回メディア連携セミナー，オンライン，2024.2.18.
69) 松本俊彦：保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究．東京保護観察所主催 令和 5 年度東京都薬物再乱用防止対策支援連絡協議会，東京，2024.2.20.
70) 松本俊彦：違法薬物は子の未来に不公平な影響を与えるか？．特定非営利活動法人東京ソテリア主催 支援者向け講演会，東京，2024.2.20.
71) 松本俊彦：依存症への理解と支援．社会福祉法人ベテスタ奉仕女母の家 婦人保護施設いずみ寮主催 講演会，東京，2024.2.21.
72) 松本俊彦：「助けて」が言えない人を支えるために．愛媛県臨床心理士会主催 2023 年度愛媛県臨床心理士会ワークショップ，愛媛，2024.2.23.
73) 松本俊彦：なぜ今「ハームリダクション」なのか～依存症支援の新しい考え方．愛媛県精神神経学会主催 愛媛県精神科同門会講演会，愛媛，2024.2.23.
74) 松本俊彦：「助けて」が言えずに自分を傷つける子どもたち～支援者ができること～．愛媛県心と体の健康センター主催 令和 5 年度思春期・青年期の自殺予防セミナー，愛媛，2024.2.24.
75) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない子どもたち．特定非営利活動法人いちごの会主催 市民講演会，大阪，2024.2.25.
76) 松本俊彦：患者の「死にたい気持ち」に対応するための心理状態の理解．世田谷区世田谷保健所主催 ゲートキーパー講座（医療従事者向け），東京，2024.2.27.
77) 松本俊彦：大学における薬物依存/乱用への対策について．九州大学学務部学生支援課主催 薬物依存・乱用防止にかかる九州大学 FD，オンライン，2024.2.28.
78) 松本俊彦：拒食・過食，自傷行為といった問題を抱える子どもたちに対する対応と援助．日本弁護士連合会主催 第 34 回全国付添人経験交流集会，京都，2024.3.1.
79) 松本俊彦：みんなで考えよう依存症の事．厚生労働省主催 依存症の理解を深めるためのトーク＆音楽ライブイベント，東京，2024.3.7.
80) 松本俊彦：「助けて」が言えないこども・若者たち～そして大人に何ができるか～．神戸市医師会・兵庫県司法書士会・兵庫県弁護士会・神戸市 主催 第 13 回自殺総合対策拡大会議，兵庫，2024.3.9.
81) 松本俊彦：なぜ子どもたちは，自傷とオーバードーズをするのか？．愛知県中警察署主催 青少年健全育成講演会，愛知，2024.3.13.
82) 松本俊彦：保護観察の対象となった薬物依存症者に対する回復支援に関する研究．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部主催 合同報告会，オンライン，2023.3.15.
83) 松本俊彦：医薬品乱用防止のために医療者にできること～緩和医療における医療用麻薬の不適切使用．東京歯科大学市川総合病院主催 緩和ケア講演会，千葉，2024.3.19.
84) 嶋根卓也：わが国における市販薬乱用の実態と課題「助けて」が言えない子どもたち．日本 OTC 医薬品協会主催「濫用のおそれのある医薬品対策について」意見交換会，東京，2023.4.25.
85) 嶋根卓也：大麻を使う若者たちとのコミュニケーションー有効な，有効ではない予防教育ー．杉並の子どもを薬物からまもる会，東京，2023.8.1.
86) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち　大麻と市販薬乱用を例に．大分県教育庁体育保健課主催　令和 5 年度大分県健康教育研究会，大分，2023.8.4.
87) 嶋根卓也：薬剤師向け 市販薬乱用・依存のゲートキーパー研修．薬剤師向け e-learning サービ

ス「MP ラーニング」，東京，2023.8.23.

88) 嶋根卓也 :「助けて」が言えない子どもたち : 市販薬の乱用・依存を例に．富山県心の健康センター富山県精神保健福祉協会共催　令和 5 年度　子どもの心の健康セミナー（オンライン），2023.9.12.

89) 嶋根卓也 :「助けて」が言えない子どもたち-市販薬と大麻の乱用を例に-. 福岡県薬剤師会主催　令和 5 年度第 3 回学校・環境衛生研修会，福岡，2023.10.7.

90) 嶋根卓也 : 米国における青少年の OTC 薬乱用に対する公衆衛生的対策について. 厚生労働省　第 9 回医薬品の販売制度に関する検討会，東京（オンライン），2023.10.30.

91) 嶋根卓也 :「助けて」が言えない子どもたち-市販薬と大麻の乱用・依存を例に．令和 5 年度薬物中毒対策連絡会議・再乱用防止対策講習会，神奈川，2023.11.1.

92) 嶋根卓也 :「助けて」が言えない若者たち : ゲートキーパーとしての薬剤師．新潟市薬剤師会自殺予防対策委員会主催，新潟，2023.11.4.

93) 嶋根卓也 :「声かけ」からはじまるメンタルヘルス支援-ゲートキーパーとしての薬局-．シオノギヘルスケア推進会　社長・責任者会議（動画提供），2023.11.11.

94) 嶋根卓也 : 大麻を使う若者たちとのコミュニケーション-有効な，有効ではない予防教育-Communicating with young people who use cannabis: What Works, what doesn't．令和 5 年度薬物中毒対策連絡会議・再乱用防止対策講習会，福井，2023.11.29.

95) 嶋根卓也 :「助けて」が言えない子どもたち-市販薬乱用を例として-．栃木県精神保健福祉センター主催　薬物依存フォーラム，栃木，2023.12.15.

96) 嶋根卓也 :「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用・依存を例に-．東京都薬事監視員協議会　薬事監視員向け講習会（動画提供），2024.1.25.

97) 嶋根卓也 : 近年の大麻使用の動向・市販薬等の乱用，当園での薬物非行指導．愛光女子学園主催東京地区矯正研究会，東京，2024.2.1.

98) 嶋根卓也 : 依存症の理解/近年の若者の薬物依存について，厚生労働省（文部科学省共催）薬物問題関連シンポジウム「若者の生きづらさと薬物依存症」，2024.2.27

99) 嶋根卓也 :「助けて」が言えない子どもたち-市販薬のオーバードーズや依存症を例として-．日本薬剤師会主催　行政薬剤師部会，東京，2024.3.18.

100) 嶋根卓也 :「助けて」が言えない子どもたち-市販薬乱用のゲートキーパーとしての薬剤師-．日本医薬品情報学会（JASDI）フォーラム，オンライン，2024.3.23.

101) 富山健一 : 大麻を巡る国際社会の動向 : 米国の状況について. 薬物乱用防止指導員研修会，埼玉，2023.10.24.

102) 富山健一 : 依存性物質 : 蔓延の現状と基礎知識．金沢大学・新学術創成研究機構・異分野融合セミナー，石川，2024.2.16.

103) 近藤あゆみ : 依存症と家族，浜松市精神保健福祉センター主催，令和 5 年度依存症オンライン講演会「薬物依存症について考える」，オンライン，2023.10.22.

104) 近藤あゆみ : 心理的境界線を意識した自由で親密なコミュニケーション Part2．親密編，多摩総合精神保健福祉センター主催，市民公開講座，東京都，2023.12.5

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1) 松本俊彦 : 日本アルコール・アディクション医学会 理事

2) 松本俊彦 : 日本臨床カンナビノイド学会 理事

3) 松本俊彦 : 日本社会精神医学会 理事

4)　松本俊彦：日本精神科救急学会　理事
5)　松本俊彦：日本青年期精神療法学会 理事
6)　松本俊彦：日本司法精神医学会 評議員
7)　嶋根卓也：日本アルコール･アディクション医学会 学術評議委員
8)　嶋根卓也：日本エイズ学会 代議員
9)　高野 歩：日本アルコール・アディクション医学会 理事，学術評議員，ハームリダクション特別委員会委員，国際委員会委員，学術賞選考委員会柳田知司生選考委員会委員，優秀論文賞選定委員会委員，総務委員会委員，プログラム・組織委員会（全 8 件）
10)　高野 歩：International Society for Biomedical Research on Alcoholism (ISBRA), Membership Committee
11)　高野 歩：日本精神保健看護学会，社会貢献委員会委員
12)　高野 歩：第 19 回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会，プログラム委員

(3) 座長

1)　松本俊彦，成瀬暢也：【司会】シンポジウム 26 一人からでも始められる物質使用障害の治療～その多様な実践から～．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.
2)　木村 充，松本俊彦：【司会】シンポジウム 21 依存症調査研究事業の成果紹介．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.
3)　嶋根卓也：一般演題（口演）AO3「薬物依存」座長．2023 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.
4)　嶋根卓也：一般演題（ポスター）AP3「薬物依存」座長．2023 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.
5)　嶋根卓也：令和 5 年度都道府県等依存症専門医療機関・相談員等合同全国会議，東京，2024.2.9.
6)　高野 歩：【座長】シンポジウム 14，2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.15.
7)　西 大輔，高野 歩：【座長】セミナー，第 19 回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会，東京，2023.10.28
8)　高野 歩：【司会】日本精神保健看護学会市民公開講座，東京，2024.2.3 高野 歩：【司会】日本精神保健看護学会市民公開講座，東京，2024.2.3
9)　高野 歩：【司会】薬物問題を抱えた女性の治療と回復支援を考える　Part.3, オンライン講演会，2024.02.17.

(4) 学会誌編集委員等

1)　松本俊彦：日本青年期精神療法学会　編集委員
2)　嶋根卓也：日本アルコール･アディクション医学会　編集委員会査読委員
3)　高野 歩：日本看護科学学会　和文誌専任査読委員
4)　高野 歩：日本精神保健看護学会　査読委員
5)　高野 歩：日本アルコール・アディクション医学会　編集委員会委員長

E．研修

(1) 研修企画

1)　松本俊彦：令和 5 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），Web，2023.7.11-12.
2)　松本俊彦：国立精神・神経医療研究センター薬物依存症センター主催 市民公開講座，東京，2023.8.25.

3) 松本俊彦：国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第36回薬物依存臨床医師研修際および第24回薬物依存臨床看護等研修会，オンライン，2023.9.6.
4) 松本俊彦：国立精神・神経医療研究センター主催 第15回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2023.11.6.
5) 松本俊彦：国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院薬物依存症センター主催 令和5年度東京都薬物依存症治療指導者養成研修，東京，2024.1.16.
6) 松本俊彦：2023年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 薬物依存症回復施設職員研修，オンライン，2024.2.6-7.

(2) 研修会講師

1) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助．社会福祉法人茨城いのちの電話主催 2023年度第1回全体研修会，オンライン，2023.6.25.
2) 松本俊彦：自殺について．岐阜県教育員会主催 令和5年度岐阜県小・中・義・高・特生徒指導研修会，オンライン，2023.7.5.
3) 松本俊彦：薬物問題に関連する法律．令和5年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），Web，2023.7.11.
4) 松本俊彦：薬物依存症と重複障害．令和5年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），Web，2023.7.12.
5) 松本俊彦：自殺ハイリスク者の理解と対応．一般社団法人日本いのちの電話連盟主催 三重センター研修，オンライン，2023.7.23.
6) 松本俊彦：自傷・自殺企図の理解と援助．常磐大学心理臨床センター主催 第30回公開研修，オンライン，2023.7.30.
7) 松本俊彦：若年者の大麻・市販薬依存の理解と援助．広島県立総合精神保健福祉センター主催 依存症対策支援者スキルアップ研修，オンライン，2023.8.1.
8) 松本俊彦：コロナ禍における子どものメンタルヘルス問題について～子どもの心の声に寄り添うために，私たちができること～．山形県小学校教育研究会 山形県中学校教育研究会 山形県高等学校教育研究会保健養護部会 山形県小中高等学校教育研究会養護教諭連絡協議会 共催 山形県養護教諭夏季研修会，山形，2023.8.2.
9) 松本俊彦：子ども・若者の自殺対策～自傷行為の理解と援助～．福岡県精神保健福祉センター主催 令和5年度自殺対策研修会，オンライン，2023.8.8.
10) 松本俊彦：もしも死にたいと言われたら～自殺リスクの評価と対応～．横浜市教育委員会主催 横浜市スクールカウンセラー研修会，神奈川，2023.8.9.
11) 松本俊彦：もしも「死にたい」と言われたら．静岡市こころの健康センター主催 令和5年度依存症関連問題研修会，オンライン，2023.8.16.
12) 松本俊彦：薬物依存症患者への対応の基礎 SMARPPの概要と改定のポイント．法務省矯正局成人矯正課 法務省保護局観察課共催 薬物依存対策研修，東京，2023.8.22.
13) 松本俊彦：SMARPP の実際・グループワーク演習① ②．法務省矯正局成人矯正課 法務省保護局観察課共催 薬物依存対策研修，東京，2023.8.22.
14) 松本俊彦：依存症の概論．国立精神・神経医療研究センター薬物依存症センター主催 市民公開講座，東京，2023.8.25.
15) 松本俊彦：自傷行為への理解と対応．足立区こども支援センターげんき主催 足立区教育相談 Aコース・Bコース・コーディネーター研修会，東京，2023.8.29.
16) 松本俊彦：依存症の理解と対応について．特定非営利活動法人あなたのいばしょ主催 研修，東京，2023.9.2.
17) 松本俊彦：薬物依存症臨床総論．国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第36回薬物依存臨床医師研修際および第24回薬物依存臨床看護等研修会，オンライ

ン，2023.9.6.

18）松本俊彦：急増する市販薬の乱用と過量服薬．尼崎市保健所主催 支援者対象研修，オンライン，2023.9.22.

19）松本俊彦：精神・神経に作用する薬剤の適正使用．公益社団法人神奈川県病院薬剤師会 武田薬品工業株式会社共催 令和5年度 Drug Information 研修会，神奈川，2023.10.10.

20）松本俊彦：もしも「死にたい」と言われたら～リスク評価から始める，自殺対策の基礎知識とスキル～．横須賀市保健所主催 自殺対策研修，神奈川，2023.10.11.

21）松本俊彦：アルコール依存症臨床の医療スタッフに伝えたいこと．公益社団法人井之頭病院主催 職員研修会，東京，2023.10.31.

22）松本俊彦：薬物依存症の理解～自殺予防の観点から～．東京都立多摩総合精神保健福祉センター主催 令和5年度依存症支援者研修，東京，2023.11.1.

23）松本俊彦：SMARPP の理念と意義．国立精神・神経医療研究センター主催 第15回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2023.11.6.

24）松本俊彦：SMARPP の実際．国立精神・神経医療研究センター主催 第15回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2023.11.6.

25）松本俊彦：薬物依存症臨床における司法的問題への対応．国立精神・神経医療研究センター主催 第15回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2023.11.6.

26）松本俊彦：もしも「死にたい」と言われたら～自殺リスクのアセスメントとその対応方法について．三鷹市健康福祉部健康推進課主催 令和 5 年度三鷹市自殺予防対策事業研修会，東京，2023.11.29.

27）松本俊彦：認知行動療法を用いた薬物依存症に対する集団療法の理念と意義．独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 令和 5 年度依存症に対する集団療法に係る研修，オンライン，2023.12.4.

28）松本俊彦：覚醒剤依存症と医療．法務省矯正研修所主催 任用研修過程高等科第55回研修，東京，2023.12.12.

29）松本俊彦：ギャンブル障害とは（総論）．昭和大学附属烏山病院主催 令和5年度依存症支援者研修，オンライン，2023.12.15.

30）松本俊彦：思春期青年期のクライシス．公益社団法人日本精神科医学会主催 令和 5 年度学術教育研修会，沖縄，2023.12.22.

31）松本俊彦：アルコール問題と自殺・自傷．独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 令和5年度アルコール依存症臨床医等研修，オンデマンド配信，2024.1.9～2024.2.19.

32）松本俊彦：オーバードーズについて．岡山市学校薬剤師会主催 岡山市学校薬剤師会研修会，オンライン，2024.1.12.

33）松本俊彦：薬物問題に関連する法律．国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院薬物依存症センター主催 令和5年度東京都薬物依存症治療指導者養成研修，東京，2024.1.16.

34）松本俊彦：薬物依存症と重複障害．国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院薬物依存症センター主催 令和5年度東京都薬物依存症治療指導者養成研修，東京，2024.1.17.

35）松本俊彦：児童・生徒の自殺予防．浜松市教育委員会主催 教育指導研修②，静岡，2024.1.19.

36）松本俊彦：困難さが重複する女性依存症者の支援をどう組み立てるか．特定非営利活動法人リカバリー主催 2023年度第3回女性依存症者に特化した全国支援者研修，オンライン，2024.1.20.

37）松本俊彦：アルコール・薬物依存症の理解と援助．特定非営利活動法人岡山高齢者・障害者支援ネットワーク主催 令和5年度特別研修会，オンライン，2024.1.21.

38）松本俊彦：自傷・自殺する子どもたち～もしも「死にたい」といわれたら．チャイルドライン「もしもしキモチ」主催 令和5年度チャイルドライン九州エリア合同研修会，オンライン，2024.2.4.

39）松本俊彦：自傷行為について．一般財団法人日本心理研修センター主催 実務基礎研修，動画収録，2024.2.6.

40) 松本俊彦：自傷・自殺のリスク評価と対応．2023 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 薬物依存症回復施設職員研修，オンライン，2024.2.6.
41) 松本俊彦：薬物依存者の治療と支援．法務総合研究所主催 第 58 回保護局関係職員高等科研修，東京，2024.2.13.
42) 松本俊彦：依存症についての理解と今後の支援のために．株式会社円グループ主催 法人研修会，東京，2024.2.13.
43) 松本俊彦：自傷と市販薬乱用の理解と対応．一般社団法人国分寺市医師会主催 学術研修会，東京，2024.2.21.
44) 松本俊彦：依存症支援．医療法人北仁会旭山病院主催 令和 5 年度第 2 回依存症支援者研修会，オンライン，2023.3.3.
45) 松本俊彦：自殺・自傷の理解と対応．法務省矯正研修所主催 令和 5 年度専門研修課程調査鑑別科（特別課程），東京，2024.3.5.
46) 松本俊彦：希死念慮・自傷行為を示す子どもへの支援のポイント．名古屋市教育委員会主催 令和 5 年度学校福祉専門員全体研修，オンライン，2024.3.5.
47) 松本俊彦：もし「死にたい」と言われたらどうしたらいいの？．焼津市健康福祉部主催 令和 5 年度精神保健福祉研修会，静岡，2024.3.12.
48) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない子どもの理解と援助～家族にできることは何か？．NPO 法人日本家族カウンセリング協会主催 2023 年度春季研修会，東京，2024.3.24.
49) 嶋根卓也：大麻ベイプを使用する少年の心理社会的特徴に関する研究．福岡県医療介護部薬務課主催　少年用大麻再乱用防止プログラム研修会，福岡，2023.5.23.
50) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬乱用を中心に-．岡山県精神保健福祉センター主催　令和 5 年度依存症専門研修（オンライン），2023.6.8.
51) 嶋根卓也：看護師に知ってほしい市販薬・処方薬依存について．看護部 SMARPP ワーキンググループ主催　薬物依存症に対する治療・看護に関する勉強会（オンライン），2023.7.13.
52) 嶋根卓也：薬剤師向け　市販薬乱用・依存のゲートキーパー研修．兵庫県薬剤師会主催　第 2 回薬剤師のための自殺ハイリスク者対応力向上研修（オンライン），兵庫，2023.8.20.
53) 嶋根卓也：近年の薬物使用の動向について～大麻を中心に～．法務省矯正局・保護局合同開催 令和 5 年度薬物依存対策研修，東京，2023.8.21.
54) 嶋根卓也：「ダメ，ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教育：あなたとあなたの大切な人を守るために．東京都立世田谷泉高等学校主催　教員研修，東京，2023.8.25.
55) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬乱用を例として-．横浜市医療安全課主催 薬物乱用防止指導者研修会，神奈川，2023.8.30.
56) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち：市販薬乱用を例として．栃木県教育委員会主催 薬物乱用防止教室研修会，栃木，2023.10.5.
57) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬乱用を中心に-．長野県教育委員会主催　薬物乱用防止教育研修会（オンライン），2023.10.24.
58) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用・依存を例として-．奈良県薬剤師会学校薬剤師部会第 1 回研修会，奈良，2023.10.29.
59) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用を例に-．山梨県教育庁主催　薬物乱用防止教育研修会，山梨，2023.11.16.
60) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用を例に-．鳥取県教育委員会主催　薬物乱用防止教育研修会（動画提供），2023.11.21.
61) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬のオーバードーズを例に-．高知県精神保健福祉センター，高知，2023.11.22.
62) 嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬と大麻の乱用・依存を例に-．公益社団法人

東京社会福祉士会　立ち直りを支える地域支援ネットワークづくり事業基礎研修（動画提供），2024.1.10.

63）嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬と大麻の乱用・依存を例に-．東京家庭裁判所立川支部主催　調査官研修，2024.1.19.

64）嶋根卓也：若者の薬物問題の現状とサポートについて．大阪府こころの健康総合センター主催　令和5年度「依存症相談対応・実践研修（A-2）」2024.2.2.

65）嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用・依存を例として-．島根県薬剤師会主催　令和5年度薬物乱用防止委員会研修会，島根（オンライン），2024.2.13.

66）嶋根卓也：①「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用・依存を例に．②大麻を使う若者たちとのコミュニケーション-有効な，有効ではない予防教育- Communicating with young people who use cannabis: What Works, what doesn't．山梨ダルク主催　職員向け研修，山梨，2024.2.15-16.

67）嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬と大麻の乱用・依存を例として-．山梨県立精神保健福祉センター主催　令和5年度依存症フォーラム（薬物関連問題相談事業研修会），山梨，2024.2.16.

68）嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用・依存を例として-．中野区児童相談所主催　第4回中野区児童福祉専門研修，東京，2024.2.19.

69）嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の乱用・依存を例として-．土浦薬剤師会主催　土浦三師会合同研修会，茨城，2024.2.21.

70）嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち：市販薬と大麻に関する最新情報．八王子ダルク主催　職員向け研修，東京，2024.2.23.

71）嶋根卓也：人はなぜ薬物にハマるのか-薬物依存症の理解と薬剤師による支援- 人間と薬学Ⅰ，東京薬科大学薬学部, 2023.5.15.

72）嶋根卓也：薬物 非行防止指導．愛光女子学園，東京，2023.6.19.

73）嶋根卓也：薬物乱用防止のお話：あなたとあなたの大切な人を守るために．横須賀市立衣笠中学校，神奈川（オンライン），2023.6.28.

74）嶋根卓也：薬物乱用防止のお話：あなたとあなたの大切な人を守るために．横須賀市立大津中学校，神奈川（オンライン），2023.6.28.

75）嶋根卓也：薬物乱用防止のお話：あなたとあなたの大切な人を守るために．横須賀市立不入斗中学校，神奈川（オンライン），2023.6.30.

76）嶋根卓也：日本における薬物依存症の理解と支援, 岡山（オンライン），岡山大学大学院医歯薬学総合研究科.2023.8.26.

77）嶋根卓也：薬物非行防止指導．愛光女子学園，東京，2023.9.4.

78）嶋根卓也：「ダメ，ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教育：あなたとあなたの大切な人を守るために．東京都立世田谷泉高等学校 第1部，第2部，東京，2023.9.27.

79）嶋根卓也：「ダメ，ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教育：あなたとあなたの大切な人を守るために．東京都立世田谷泉高等学校 第3部，東京，2023.9.27.

80）嶋根卓也：「ダメ，ゼッタイ」とは言わない薬物乱用防止教室．日本教育財団首都医校2023年度医療スペシャルゼミ（特別講義），東京，2023.10.6.

81）嶋根卓也：「助けて」が言えない若者たちー市販薬乱用を例にー．多文化・国際協力の実践（3），津田塾大学学芸学部多文化・国際協力学科，東京，2023.10.9.

82）嶋根卓也：薬物乱用・依存の疫学．慶応義塾大学学生実習，オンライン，2023.10.10.

83）嶋根卓也：「助けて」が言えない若者たち-ゲートキーパーとしての薬剤師-医療プロフェッショナリズム，東京薬科大学薬学部, 2023.11.13.

84）嶋根卓也：「助けて」が言えない子どもたち-市販薬の依存症を中心に-．ヒューマン・セクソロジ

ー(4)，津田塾大学学芸学部多文化・国際協力学科，東京，2023.12.4

85) 嶋根卓也：薬物非行防止指導．愛光女子学園，東京，2023. 12.18.

86) 嶋根卓也：精神医療系ブロックジョイント講義「依存」，昭和大学医学部, 2024.1.15.

87) 嶋根卓也：薬物使用と感染症（HIV・肝炎）．令和 5 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物）（オンライン），東京，2023.7.11-12.

88) 嶋根卓也：薬物乱用・依存の疫学-一般住民および青少年-．第 36 回薬物依存臨床医師研修・第 24 回薬物依存臨床看護等研修（オンライン），東京，2023.9.6-9.8.

89) 嶋根卓也：民間回復支援施設の活動と課題-．第 36 回薬物依存臨床医師研修・第 24 回薬物依存臨床看護等研修（オンライン），東京，2023.9.6-9.8.

90) 嶋根卓也：薬物乱用・依存の疫学．第 15 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2023.11.6-8.

91) 嶋根卓也：薬物依存症と性的マイノリティ・HIV 感染症．令和 5 年度薬物依存症回復施設職員研修（オンライン），東京，2024.2.6-2.7.

92) 嶋根卓也：薬物使用と感染症（HIV・肝炎）．令和 5 年度東京都依存症専門医療機関及び依存症治療拠点機関薬物依存症治療指導者養成研修，東京，2024.1.16-17.

93) 富山健一：大麻成分の医療用途と海外の状況．第 36 回薬物依存臨床医師研修・第 24 回薬物依存臨床看護等研修（オンライン），東京，2023.9.6-9.8.

94) 高野 歩：ハームリダクションの理念に基づく個別支援．第 15 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，東京，2023.11.6-8.

95) 高野 歩：グループワーク. 令和 5 年度薬物依存症回復施設職員研修（オンライン）, 東京, 2024.2.6-2.7.

96) 近藤あゆみ: 家族に対する相談支援，令和 5 年度薬物依存症治療指導者/依存症相談対応指導者/地域生活支援指導者養成研修（オンライン），2023.7.11.

97) 近藤あゆみ：依存症の家族支援，令和 5 年度　東京都依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），東京，2024.1.17.

98) 近藤あゆみ：多摩地域の地域連携～ひとつのケースをみんなで支える～，令和 5 年度　東京都依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物），東京，2024.1.17.

Ｆ．その他

1) 松本俊彦：市販薬への依存．NHK「きょうの健康」，2023.5.11.

2) 松本俊彦：10 代の「市販薬」乱用についての現状と問題点．TOKYO FM 「TOKYO NEWS RADIO～LIFE」，2023.5.13.

3) 松本俊彦：なぜ今, 未成年の間で大麻使用が拡大しているのか. NHK 山形「やまま る」, 2023.7.18.

4) 松本俊彦：なぜ今，未成年の間で大麻使用が拡大しているのか．NHK 東北 6 県放送「ウィークエンド東北」，2023.7.22.

5) 松本俊彦：十代の市販薬乱用について，夏休み中に注意喚起する．NHK ラジオセンター「Nラジ」，2023.7.27.

6) 松本俊彦：＃8 月 31 日の夜に．NHK Podcast,2023.8.16

7) 松本俊彦：”学校休ませるべきか”チェックリスト 支援団体などが開発. NHK「おはよう日本」, 2023.8.27.

8) 松本俊彦：市販薬過剰摂取．AbemaTV「Abema PRIME」，2023.9.1.

9) 松本俊彦：夏休みと東横キッズ．テレビ朝日「グッド！モーニング」，2023.9.11.

10) 松本俊彦：薬物依存について．RKB 毎日放送「Weekly Close Up」，2023.9.20.

11) 松本俊彦：「青い舌」で“トー横”集まる若者…危険が．日本テレビ「news zero」，2023.10.18.

12) 松本俊彦：大麻「使用罪」創設へ 国会で審議．TBS テレビ「NEWS23」，2023.11.20.

13) 松本俊彦：大麻グミによる体調不良や大学生の逮捕が相次ぐ中，大麻取締法改正案が衆院を通過．大麻をめぐる現状と行方とは．TBS ラジオ「萩上チキ Session」，2023.11.22.
14) 松本俊彦：10 代の薬物「市販薬」2014 年はゼロだったが…今は 65.2%．TBS テレビ「N スタ」，2023.11.23.
15) 松本俊彦：「現実逃避，でゲロ止まらず」トー横で蔓延する“オーバードーズ”　当事者と考える対応策．TBS テレビ「NEWS23」，2023.11.23.
16) 松本俊彦：深刻化するオーバードーズ・女性に多く見られるワケ.テレビ朝日「大下容子ワイド！スクランブル」，2023.11.23.
17) 松本俊彦：裏社会ジャーナリストが独自取材・若者の間で広まるオーバードーズ．TBS テレビ「サンデー・ジャポン」，2023.11.26.
18) 松本俊彦：ストロング系チューハイのシェア縮小について．TBS ラジオ「森本毅郎スタンバイ！」，2024.2.27.
19) 松本俊彦：10 代の「死にたい」に向き合う．女性のひろば，2023.4.2.
20) 松本俊彦：14 歳の君へ 半分の力で緩く生きよう．東奥日報，2023.4.21.
21) 松本俊彦：14 歳の君へ 半分の力で緩く生きよう．岐阜新聞，2023.4.23.
22) 松本俊彦：14 歳の君へ 半分の力で緩く生きよう．北日本新聞，2023.4.24.
23) 松本俊彦：半分の力で生きよう．福島民報，2023.4.24.
24) 松本俊彦：がんばり過ぎは良くない．愛媛新聞，202.4.25.
25) 松本俊彦：半分の力で緩く生きよう．佐賀新聞，2023.4.26.
26) 松本俊彦：半分の力で緩く生きよう．高知新聞，2023.4.30.
27) 松本俊彦：依存症「つながり」予防・回復 快楽ではなく苦痛・トラウマ症状に影響．朝日新聞，2023.5.1.
28) 松本俊彦：半分の力で緩く生きよう．山形新聞，2023.5.8.
29) 松本俊彦：半分の力で緩く生きよう．茨城こども新聞，2023.5.8.
30) 高知東生，松本俊彦：現代の肖像 高知東生 救い救われ生きてゆく．ARRA，2023.5.22.
31) 松本俊彦：薬物依存 患者と歩み，ともに闘う．産経新聞，2023.5.21.
32) 松本俊彦：半分の力で緩く生きよう.日本海新聞，2023.5.28.
33) 松本俊彦：半分の力で緩く生きて．新潟日報，2023.5.28.
34) 松本俊彦：無理せず，緩く生きよう．北海道新聞，2023.6.1.
35) 松本俊彦：半分の力で緩く生きて．秋田さきがけ，2023.6.2.
36) 松本俊彦：半分の力で緩く生きよう．.神戸新聞，2023.6.2.
37) 松本俊彦：SNS 服用量競い合い 体験投稿「恰好いい」．読売新聞，2023.6.3.
38) 松本俊彦：半分の力で緩く生きよう．南日本新聞，2023.6.4.
39) 松本俊彦：半分の力で緩く生きよう．宮崎日日新聞，2023.6.6.
40) 松本俊彦：心の問題は意外と身近に 半分の力で緩く生きよう．山梨日日新聞，2023.6.19.
41) 松本俊彦：「依存症」専門の精神科医・松本俊彦さんインタビュー薬物を手放すために必要なのは，刑罰ではなく治療と支援です．GQ JAPAN，2023.6.22.
42) 松本俊彦：「いないもの」にしない 孤立防ぐ地域社会構築訴え．岐阜新聞，2023.6.28.
43) 松本俊彦：薬物依存症．Medical Note，2023.7.20.
44) 松本俊彦：アルコール依存症と飲酒運転 オンライン・スペシャルトークイベント．ASK 通信，2023.7.10.
45) 松本俊彦：半分の力で緩く生きよう．京都新聞，2023.7.28.
46) 松本俊彦：がんばりすぎず緩く．福島民報，2023.8.7.
47) 松本俊彦：決して好きで痛い思いをしているわけではない･･･「リストカットを繰り返す少女たち」の悲しい共通点．PRESIDENT Online，2023.8.11.
48) 松本俊彦：夏休み明け「子どもの SOS」を見逃さないで！気づいた時に親が「頼る」先は．FNN

プライムオンライン，2023.8.22.

49) 石井志昂，松本俊彦：学校休ませるべき？支援団体がチェックリスト作成，LINE で公開．朝日新聞 DIGITAL，2023.8.28.

50) 石井志昂，松本俊彦：「学校休んだ方がいいよチェックリスト」開発，WEB 公開･･･悩む保護者の判断材料に．読売新聞オンライン，2023.8.28.

51) 石井志昂，松本俊彦：子どもを休ませるべき？不登校支援団体がチェックリスト．教育新聞，2023.8.28.

52) 松本俊彦：若者の市販薬乱用 死亡するケースも．岩手日日，2023.7.14.

53) 松本俊彦：若者の「市販薬」乱用 死亡するケースも．十勝毎日新聞，2023.8.7.

54) 松本俊彦：増える若者の「市販薬」乱用 臓器障害や死亡するケースも．北羽新報，2023.7.12.

55) 松本俊彦：登校どうする 親の悩み解消　休んだ方がいいよチェックリスト 不登校は子の防御反応．東京新聞，2023.8.26.

56) 松本俊彦：「学校行きたくない」接し方は 休むことで力取り戻す．中日新聞，2023.9.8.

57) 松本俊彦：カフェインに依存する子どもたちー背景には何が？「常にエネルギー不足な体質になる危険」医師が警笛．AERA dot，2023.10.7.

58) 松本俊彦：薬過剰摂取女性が 8 割 国は対策を強化.読売新聞夕刊，2023.10.4.

59) 松本俊彦：不登校を未然に防ぐ「学校内」に自由に過ごせる”場所”を板橋区の中学校．NHK 首都圏ナビ Web リポート，2023.1017.

60) 松本俊彦：若者蝕む市販薬の過剰摂取．公明新聞，2023.10.18.

61) 松本俊彦：ジャニー氏の性加害は必要悪「受け入れている人もいると思う」有名精神科医が指摘．東スポ Web，2023.10.29.

62) 松本俊彦：依存性ある成分を含有 市販薬の乱用が急増．千葉日報，2023.10.29.

63) 松本俊彦：若者の市販薬乱用急増 虐待や心の不調起因も．茨城新聞，2023.10.26.

64) 松本俊彦：市販薬乱用が急増 依存しやすい成分含有．静岡新聞，2023.10.31.

65) 松本俊彦：市販薬乱用による依存症増加 専門家「背景に生きづらさ」．大分合同新聞，2023.10.30.

66) 松本俊彦：市販薬乱用 背景に行きづらさ 若年女性中心に救急搬送増加．産経新聞，2023.10.19.

67) 松本俊彦：清原さんは「究極の仕事人間」だった･･･誰でも依存症になる可能性がある【薬物依存症＜上＞】．読売新聞オンライン，2023.11.8.

68) 松本俊彦：薬局で「ドラッグ」を買う子どもたち･･･市販薬の危険性【「薬物依存症＜下＞】．読売新聞オンライン，2023.11.9.

69) 松本俊彦：子どものリストカットやオーバードーズの理由は？保護者が「自傷はやめて」と感情的になるのはＮＧ．朝日新聞 EduA，2023.11.17.

70) 松本俊彦：依存症，「つながり」でケア 民博が講演会「民族と嗜好品」．産経新聞，2023.11.24.

71) 松本俊彦：精神科医の視点で見る この国の子どもたち．離島経済新聞，2023WINTER

72) 松本俊彦：大麻草から薬 解禁へ 法案きょう成立 大麻使用罪新設．朝日新聞，2023.12.6.

73) 松本俊彦：大麻使用罪の新設「抜け穴ふさぐため」海外では治療・支援に重点．朝日新聞 DIGITAL，2023.12.6.

74) 松本俊彦：海外では合法化も 大麻の使用罪新設へ 専門家「罰則より支援を」．朝日新聞アピタル，2023.12.6.

75) 松本俊彦：なぜリストカット（リスカ）をする？正しい理解と自傷行為のループから抜け出す方法など【松本俊彦氏監修】．LITALICO 発達ナビ，2023.12.11.

76) 松本俊彦：不登校の原因は？子どもとの向き合い方，新旧・進学や支援について【精神科医監修】．LITALICO 発達ナビ，2023.12.11.

77) 松本俊彦：日大アメフト部問題 連帯責任による廃部は疑問．北海道新聞，2023.12.8.

78) 松本俊彦：連帯責任での廃部は疑問だ．山梨日日新聞，2023.12.10.

79) 松本俊彦：かぜ薬の販売規制強化へ 20 歳未満の大量購入を禁止．日本経済新聞 全国版（朝刊），

2024.1.27.
80) 松本俊彦:若者のODはSOSのサイン 10代に急速に広がる市販薬の過剰摂取. AERA, 2024.3.11.
81) 嶋根卓也:「やめられないのがきつい」13歳で大麻，売人にも　中高生に広がる乱用．毎日新聞ニュースサイト社会面，2023.4.7.
82) 嶋根卓也：大麻　若者の孤独に浸透「害ない」ネット信じ．毎日新聞夕刊，2023.4.24.
83) 嶋根卓也：SNS服用量競い合い．情報偏食ゆがむ認知　第3部　揺れる教育現場4．読売新聞朝刊，2023.6.3.
84) 嶋根卓也：市販薬120錠飲み，搬送された少女　若者の間で広がる「オーバードーズ」の実態．弁護士ドットコムニュース，2023.6.15.
85) 嶋根卓也:広がる若者のオーバードーズ　市販薬業界は困惑「規制できない」「いたちごっこだ」．弁護士ドットコムニュース，2023.6.16.
86) 嶋根卓也:第211回国会（常会）質問主意書:質問第126号　若年層に広がる「オーバードーズ」の対策に関する質問主意書，参政党，2023.6.20.
87) 嶋根卓也：（情報提供）薬物使用と生活に関する全国高校生調査2021．読売テレビ「今田耕司のネタバレMTG」，2023.7.24.
88) 嶋根卓也：大麻密輸摘発の現場に変化．読売テレビ「ウェークアップ」，2023.8.12.
89) 嶋根卓也：成分改変大麻で健康被害　厚労省，対策本格化．信濃毎日新聞，長野，2023.9.4.
90) 嶋根卓也：「脱法」大麻で健康被害　4府県9人確認．岐阜新聞，岐阜，2023.9.4.
91) 嶋根卓也：はびこる脱法大麻　政府，禁止薬物に．福井新聞，福井，2023.9.4.
92) 嶋根卓也：「脱法」大麻で健康被害　拡大懸念，政府対策．山陽新聞，岡山，2023.9.4.
93) 嶋根卓也：「脱法」大麻広がり器具　健康被害確認，政府．中国新聞，広島，2023.9.4.
94) 嶋根卓也：「脱法大麻」国が実態調査　危険ドラッグ指摘．山陰中央新報，島根，2023.9.4.
95) 嶋根卓也：「脱法」大麻拡大懸念　有害物質の構造変え販売．佐賀新聞，佐賀，2023.9.4.
96) 嶋根卓也：「脱法」大麻で健康被害　厚労省が実態調査．大分合同新聞，大分，2023.9.4.
97) 嶋根卓也：大麻グミ「心臓爆発」菓子に薬物「軽いノリで」．毎日新聞，東京，2023.12.3.
98) 嶋根卓也：（社説）かぜ薬飲まずにすむ社会に．朝日新聞，東京，2023.12.3.
99) 嶋根卓也：生きていくのがしんどくて-オーバードーズ-1～4．朝日新聞，東京，2023.12.13-16.
100) 嶋根卓也：市販薬乱用対策20歳未満購入制限へ．岩手日報，岩手，2023.12.19.
101) 嶋根卓也：市販薬乱用対策で販売制度見直しへ．河北新報，宮城，2023.12.19.
102) 嶋根卓也：20歳未満多量購入禁止．京都新聞，京都，2023.12.19.
103) 嶋根卓也：市販薬多量購入禁止へ．中國新聞，広島，2023.12.19.
104) 嶋根卓也：若者の多量購入禁止へ．大分合同新聞，大分，2023.12.19.
105) 嶋根卓也：改正大麻取締法「使用罪」創設で浮かぶ新たな問題「医療用大麻」解禁で難病治療には新たな光も．東京経済ONLINE，2024.1.2.
106) 富山健一：大麻リキッドに関する情報提供．西日本新聞社社会部，2023.3.28.
107) 富山健一：大麻グミに関する問題と大麻取締法改正に伴う医療使用についての情報提供．毎日新聞社医療プレミア，2023.12.26.

4. 行動医学研究部

Ⅰ. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

成人を主な対象とした様々な精神健康上の問題，特にトラウマ性疾患，悲嘆についての病態解明，治療研究に取り組むとともに，自然災害，犯罪被害，虐待等におけるストレスを緩和し，効果的な治療と支援の研究を進め，代表的な病態である PTSD の神経科学的・遺伝学的な解明と治療研究を推進している．各種震災，事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに，効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる．

また，ストレス関連疾患，特に心身症や摂食障害，生活習慣病を対象に，Biopsychosocial モデルに基づき，心身相関の観点から病因や発症のメカニズム，病態を臨床的，基礎的に研究し，効果的な治療法や予防法を開発し，摂食障害全国支援センターが当研究部内に設置されている．

臨床面では研究部のスタッフがセンター病院心療内科・精神科外来で診療・研究に携わっている．

令和 5 年度の当研究部の構成は以下の通りである．部長：金 吉晴（併任）．心身症研究室長：関口 敦．認知機能研究室長：堀 弘明．診断技術研究室長：小川眞太朗．ストレス研究室長：井野敬子．精神機能研究室長：成田 瑞．災害等支援研究室長：大沼麻実．リサーチフェローは伊藤（丹羽）まどか，井上智子．テクニカルフェローは成田 恵，中野稚子，島津友梨．科研費研究員は船場美佐子，髙村恒人，小原千郷，勝沼るり．科研費研究補助員は吉田冬子，國重寛子．併任研究員は富田吉敏，蔵下智子，加藤愛理．外来研究員は佐藤 啓．研究生は赤井利奈，菅原まゆみ，井上朋子，荒川和香子，堀江美智子，藤内温美，大村靖子，土嶺章子，利重裕子，尾花高志，吉川真由，VABULNIK MARIIA，長野智美，Siti Nurul Zhahara，松尾侑佳，岡野宏紀，石渡小百合，河西ひとみ，小林加奈，宮下采子，深川珠央，小池颯希．実習生は道川由佳子，関場 遙．客員研究員として兒玉直樹，西園マーハ文，藤井 靖，守口善也，寺澤悠理，森野百合子，加茂登志子，小西聖子，永岑光恵，井筒 節，堤 敦朗，福地 成，松本和紀，中島聡美，田中英三郎，宮本純子，筧 亮子，藤村朗子，茅野龍馬，櫻井 鼓，堀 有伸，岡崎純弥，牧田 潔，須賀楓介，袴田優子，宮本悦子，中山未知，野間俊一，田中 聡，林 公輔，伊藤真利子，安藤哲也，林 明明，石田牧子，大滝涼子，中島実穂，大友理恵子，今井理沙，松岡 潤，横田悠季，平野好幸，白川美也子，坂口昌徳の各氏を迎えている．（順不同）

Ⅱ. 研究活動

1） 複雑性 PTSD に関する治療法と診断評価尺度の検証

複雑性PTSDに対する認知行動療法である，STAIR Narrative Therapyのワークショップ開催後，日本での指導者および治療者育成を進めてきた．また日本語版の国際トラウマ面接（ITI）および国際トラウマ質問票（ITQ）の妥当性研究を進め，現在までに44例のデータを収集し継続中．（金，丹羽，大滝，成田恵，中野，島津，蔵下）

2） PTSD の病態解明と治療効果予測法開発に向けた，遺伝子・バイオマーカー・心理臨床指標による多層的検討

トラウマ体験者（PTSD 群，非発症群）と健常者を対象とし，遺伝子解析・発現解析，内分泌・免疫系マーカー測定，自律神経機能解析，脳 MRI 計測，認知機能測定，心理・臨床評価を行い，PTSD の病因病態解明，客観的治療効果予測法の開発を目指す．現在までに 331 名のデータを収集し継続中．本年度は Molecular Psychiatry 誌や Brain Behavior Immunity-Health 誌に論文を発表した．（堀，関口，伊藤，林，丹羽，金，成田恵，河西，井野，吉田，中野，島津，蔵下）

3） PTSD に対するメマンチンの有効性に関する臨床試験

PTSD 患者において，抗認知症薬メマンチンの有効性を検討する．初めにオープン臨床試験を行い，すでに目標症例数である計 20 名を組み入れ，データ収集を完了した．顕著な症状改善効果が

得られ，忍容性も良好であった．この結果を受け，メマンチンの有効性と安全性を検証する RCT を開始している．並行して，メマンチン治療前後で遺伝子発現解析や内分泌・免疫系測定，脳 MRI 計測を行い，治療効果機序の解明および治療効果サロゲートマーカーの開発を目指す．（堀，小川，井野，成田瑞，関口，伊藤，成田恵，中野，金）

4）　PTSD に対するメマンチンの有効性及び安全性を評価する無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験

PTSD に対するメマンチンの有効性についての実証を進めるため，中等症以上の成人 PTSD 患者 40 例を目標として無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験を実施している（特定臨床研究：CR21-005）．服用開始から 13 週後の PTSD 症状に対する改善効果を主要評価項目とし，副次評価項目も併せてプラセボに対する実薬の優越性を検討する．R5 年度は患者組入れを開始し，Web サイト等リクルート体制の改善も行ない，被験者リクルートを継続中．（堀，小川，井野，成田瑞，丹羽，成田恵，中野，島津，蔵下，金）

5）　血液検査による統合失調症・気分障害の診断法の開発に関する研究

患者・健常者から血液を採取し，タンパク・mRNA・代謝物などを定量し，統合失調症や気分障害の診断法や分類，経過判定指標に役立つ分子の同定を目的とする．神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施し，すでに約 3,000 名の被験者のサンプルが集積されている．これらの血液サンプルを用いて上記の測定を行い，精神疾患のバイオマーカー候補を探索している．本年度は Journal of Affective Disorders 誌に論文を発表した．（堀，小川，吉田，石渡，土嶺）

6）　ヒト毛髪を用いた精神疾患バイオマーカーの探索

気分障害，精神病性障害，PTSD 等の精神疾患を対象として，毛髪中のステロイドホルモンなどの濃度を測定し，バイオマーカーの同定を目的とする．神経研究所疾病研究第三部，センター病院，MGC バイオリソース部との共同研究として実施しており，被験者リクルート中である．（堀，吉田，蔵下）

7）　情報処理バイアスを標的とした心理治療の有効性の検証とその神経生物学的機序の解明

ストレス関連精神障害に対するリスク保有者を対象として，記憶領域にも働きかける新しい CBM の有効性およびその神経作用機序について，北里大学，労働安全総合研究所等と共同で，fMRI や遺伝子，内分泌・免疫炎症系指標を用いて包括的な観点から検証している．本年度は Frontiers in Psychiatry 誌に論文を発表した．（袴田，堀）

8）　摂食障害支援拠点病院における相談・支援事例の調査

摂食障害支援拠点病院での相談・支援事例を収集，集積し，内容を解析し，摂食障害の支援体制モデルの確立に資するための研究を実施した．令和 4 年度は，全国を対象とした相談「ほっとライン」と 5 カ所の支援拠点病院の 2022 年 4 月～2022 年 11 月末までの相談事例延べ 1765 件を解析し報告書にまとめた．（小原，中野，井上，井野，関口）

9）　神経性過食症に対する認知行動療法の無作為比較試験

日本人の神経性過食症患者を対象に摂食障害の認知行動療法「改良版」（enhanced cognitive behavior therapy：CBT-E）の効果検証のため，東京大学，東北大学，九州大学，国立国際医療研究センター国府台病院，および当センターTMC との多施設共同無作為化比較試験を実施している．NCNP においてはすでに登録は終了し，協力施設においてもデータ収集が完了した．現在，データ固定に向けた作業を実施している．（小川，小原，関口，船場，富田，安藤）

10）過敏性腸症候群に対するビデオ教材を併用した認知行動療法プログラムのランダム化比較研究

過敏性腸症候群（IBS）に対するビデオ教材を併用した CBT プログラムの効果検証のため東京大学，東北大学，国立国際医療研究センター病院，同国府台病院および当センター病院，国際医療福祉大学成田病院，TMC との多施設共同無作為化比較試験を実施し，全施設で合計 35 例の IBS 患者より研究参加への同意を取得し，研究を継続し，年度内にデータ収集が完了する見込みである．（船場，関口，藤井，小原，富田，安藤）

11）内受容知覚訓練の認知神経科学的効果の検証

バイオフィードバックの手法を用いた内受容感覚訓練を実施し，認知神経科学的な効果を検証している．慶應大学文学部の寺澤悠理准教授（客員研究員）との共同研究で，延べ 22 名の健常大学生を対象とした訓練介入データを収集した．内受容感覚の訓練により，不安と身体症状が軽減し前島皮質を基軸とする脳回路変化を来すことを明らかにし，論文投稿中である．（関口，勝沼，寺澤）

12）摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出

摂食障害への認知行動療法（CBT）前後の縦断的観察研究を実施し，CBT 前後の脳 MRI，臨床データ，遺伝子発現データを収集し， CBT 効果の神経科学的エビデンスを創出することを目指す．本研究成果として，Molecular psychiatry 誌，Psychological medicine 誌に論文が受理され，電子版が出版されている．（関口，井野，小川，安藤，堀，勝沼，髙村，成田恵，中野，船場，小原，守口，冨田）

13）新型コロナウイルス感染症後症候群に対する経皮的耳介迷走神経刺激を用いた新規治療法の開発

Long COVID の患者に対する経皮耳介迷走刺激による治療研究を行う．コロナ疾病センターやコロナ後遺症外来と連携して，プロトコール開発を進めている．（関口，髙村，勝沼，井上）

14）病院 気分障害センターおよびバイオバンクとの共同研究

NCNP 病院・気分障害センターおよび NCNP バイオバンクと連携した共同研究課題を実施している．うつ病など多くの精神疾患の発症リスクは幼少期トラウマ（小児期逆境体験）の経験率に伴い上昇することが報告されているが，本課題ではこれまで気分障害センター外来を受診し，バイオバンクでの研究参加登録を頂いた方々の試料と情報を対象として，小児期逆境体験とうつ病など精神症状の発現とに関連する生物学的マーカーの探索を目的としている．（小川，堀，金）

15）病院 脳神経内科診療部との共同研究

NCNP 病院 脳神経内科診療部の外来／入院患者における「中枢神経系炎症性脱髄疾患の患者」を対象に，精神症状・高次機能障害を評価し，その特徴とリスク因子の関連性について「小児期逆境体験」や QOL に着目しながら広く解析することで，脳神経内科領域および精神科領域において将来的な医療・研究につなげるための基礎的データを探索的に収集している．（小川，堀，金）

16）摂食障害を抱える家族のピアサポーター研修プログラムの開発

摂食障害患者を抱える家族のピアサポーターを育成し，家族ピアサポーターによる家族相談会を開催する．相談会前後に質問紙調査及びインタビュー調査を行い，ピアサポーターおよび相談家族への効果を検証した．成果は国内外の学会発表を行い，英文論文も投稿予定である．（関口，森野，小原）

17）機能性精神疾患における心理的機能に関する研究

統合失調症患者，気分障害患者，健常対照者を対象に合計 2,700 名から取得した認知機能障害やパーソナリティ特性等の既存データを解析し，これらの患者における心理的特徴およびそれに寄与する要因を明らかにする． 神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施している．（堀，小川）

18）北茨城の被災地住民を対象とする精神医学的コホート研究

東日本大震災後に北茨城市の被災地住民に対するメンタルケアおよび調査・検体解析研究を実施した．その際に取得された既存資料・試料を新たに解析することで，うつ病や PTSD の発症リスクに関わる環境要因や遺伝要因を明らかにし，バイオマーカーの探索を行う．神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施している．（堀，小川，吉田）

19）都内の摂食障害治療支援に関する実態調査

東京都内の摂食障害治療体制の実態把握を行い，人口 1400 万人を抱える東京都民の摂食障害治療ニーズを支えるキャパシティを満たすかの確認をする．加えて，望ましい診療連携体制モデルを提示し，拠点病院を中心とした診療連携体制の構築の基礎資料の作成を目指す．（関口，井野，井上，神保，兼山）

20）良画で悪画を駆逐する～摂食障害の正しい知識の啓発および予防・支援に資する動画の作成・

普及活動～

摂食障害の発症や憎悪に寄与する SNS 上の動画のリスクの啓発を行い，同時に摂食障害の正しい知識を啓発する動画を作成する．（関口，井野，小原）

21）先進的MRI技術に基づく総合データベースと大規模コホートデータの連結による高齢者神経変性疾患の責任神経回路の解明

東北メディカル・メガバンク機構で収集している脳MRI画像データを解析し，精神神経疾患のバイオマーカーの特定を目指す．（関口，高村，勝沼）

22）思春期児童の心理社会的因子とメンタルヘルスの関連についての研究

東京都医学総合研究所と Tokyo Teen Cohort を対象とした共同研究を行った．性自認やその他の多様な心理社会的因子における複雑な関連を因果推論のフレームワークを用いて解析した．これらの結果は Psychological Medicine 誌に発表した．（成田瑞）

23）精神医学における標準化治療と評価法の実装研究

わが国の実装科学推進のための基盤を構築するために，6 つのナショナルセンター（NC）で連携しているコンソーシアム（N-EQUITY）にて，国内の実装研究の支援活動を行った．また，これまで「PTSD の持続エクスポージャー療法（PE）」研修を受講した医療従事者を対象に，PE の効果的な普及を妨げている要因を検証し，研修で学んだ成果を臨床に還元できる方法を検討するための調査についてデータを回収し分析した．（金）

24）心的外傷後ストレス障害に対するオンライン持続エクスポージャーの安全性と予備的有効性の検証

ウェブ会議システムを利用し，持続エクスポージャー療法を提供する単群前後比較の研究である．共同研究機関も合わせて 4 例のリクルートを終了した．（井野，金，藤内，中野，須賀，利重，田中）

25）心的外傷後ストレス障害に対する睡眠中音エクスポージャーの実施可能性確認研究（PTSD 睡眠中音刺激研究）

トラウマを想起させるテーラーメイドの音刺激を作成し，それを徐波睡眠中に聞かせる研究の実施可能性を検証する研究である．2024 年 1 月に倫理審査を通過し，今年度リクルートを開始する．（井野，金，中野，島津，成田恵，坂口）

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 摂食障害情報ポータルサイト（一般向け https://edcenter.ncnp.go.jp/edportal_general/，専門職向け https://edcenter.ncnp.go.jp/edportal_pro/）を運営し，市民および専門職への摂食障害の普及・啓発を行った令和 5 年 1 月～令和 6 年 1 月までの 12 ヶ月間で一般向け，専門向け合わせ 1,454,160 ページビュー，665,388 ユーザーのアクセスがあった．摂食障害全国支援センターの HP アクセス数が，80,954 ページビュー，前年比 191%と大幅に伸びた．（関口，井野，井上，船場，小原）

(2) 専門教育面における貢献

- 全国の行政職員向け研修会・各地の医師会，大学等の依頼を受け，災害精神保健，コロナ禍の心のケア，トラウマ対応，PTSD 治療，犯罪被害者対応，被災者・遺族対応に関する最新知見を提供している．（金）
- 連携大学教授：東京大学大学院医学系研究科（金）
- 特別招聘教授：慶応義塾大学環境情報学部（金）
- Adjunct professor：New York University（金）
- 客員教授：東北大学大学院医学系研究科・武蔵野大学（金），東北大学大学院医学系研究科（関口）
- 客員教員：早稲田大学人間科学学術院（金）

・　非常勤講師：京都大学医学部，学習院大学（金），筑波大学大学院人間総合科学学術院（堀，小川），名古屋市立大学大学院医学研究科，文教大学人間科学部，愛知学院大学心身科学部(井野)，文教大学人間科学部（丹羽）

(3) 精研の研修の主催と協力

・　令和 5 年度精神保健に関する技術研修．第 2 回 強迫症対策医療研修 基本コース（オンライン）．2023.7.26.（金）

・　令和 5 年度精神保健に関する技術研修．第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修（前半オンライン，後半対面）．2023.8.31-9.1, 9.20-22.（金，井野，成田恵）

・　令和 5 年度精神保健に関する技術研修．摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～（オンライン）．第 6 回 2023.5.13，第 7 回 2023.12.3.（関口，井野，井上，船場，小原）

・　令和 5 年度精神保健に関する技術研修. 第 20 回摂食障害治療研修会（オンライン）. 2023.7.12-14.（関口，井野，船場，小原）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

①　公的委員会

・　厚生労働省「健康増進総合支援システム（e―ヘルスネット）」情報専門委員（金，関口）

②　摂食障害治療支援センター設置運営事業

平成 26～令和元年度に続き NCNP が摂食障害全国基幹センターに指定され，令和 3 年度より摂食障害全国支援センター（全国支援センター）に改称され，事務局実施責任者（センター長）を関口が，実施担当者を井野，井上，船場，中野，小原が担当した．令和 5 年 10 月に福井県に摂食障がい支援拠点病院が 2 年連続で新規指定された. 全国摂食障害対策連絡協議会開催及び全国支援センターの設置運営を行い，摂食障害支援拠点病院を統括，ポータルサイトを運営および記事の更新をした．医療従事者を対象にした「摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療」を 2 回（2023 年 8 月，12 月），摂食障害入院治療研修『入院治療の留意点とコツ』を 1 回（2024 年 1 月）オンライン開催した．また，新規支援拠点病院の設置のために，「摂食障害治療拠点病院設置準備研修会」をウェブ開催し，医療施設・自治体関係者などが参加した．また，国立国際医療研究センター国府台病院に委託をして，全国の患者・家族・医療関係者を対象とした摂食障害の電話相談窓口『摂食障害「相談ほっとライン」』を継続している．（精神保健等国庫補助金：関口，井野，井上，中野，船場，小原）

(5) センター内における臨床的活動

・　センター病院に併任し，外来診療を行っている．（堀，井野）

・　摂食障害患者の認知行動療法を実施している．（井野，成田恵，船場，小原，中野）

(6) その他

・　国際緊急援助隊(JDR)医療チーム登録者（井野）

・　警察庁　令和 5 年度犯罪被害類型別等調査に係る企画分析会議　構成員（井野）

Ⅳ. 研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1)　Hori H, Yoshida F, Ishida I, Matsuo J, Ogawa S, Hattori K, Kim Y, Kunugi H: Blood mRNA expression levels of glucocorticoid receptors and FKBP5 are associated with depressive disorder and altered HPA axis. J Affect Disord 349: 244-253, 2024.

2)　Kawanishi H, Hori H, Yoshida F, Itoh M, Lin M, Niwa M, Narita M, Otsuka T, Ino K, Imai R, Fukudo S, Kamo T, Kunugi H, Kim Y: Suicidality in civilian women with PTSD: Possible link to childhood maltreatment, proinflammatory molecules, and their genetic variations. Brain Behav Immun Health 30: 100650, 2023.

3)　Nagao K, Yoshiike T, Okubo R, Matsui K, Kawamura A, Izuhara M, Utsumi T, Hazumi M,

Shinozaki M, Tsuru A, Sakai Y, Takeda K, Komaki H, Oi H, Kim Y, Kuriyama K, Takahashi H, Miyata T, Nakagome K: Association between health anxiety dimensions and preventive behaviors during the COVID-19 pandemic among Japanese healthcare workers. Heliyon 9 (11) : 1-9, 2023. : https://doi.org/10.1016/j.heliyon.2023.e22176

4) Hakamata Y, Hori H, Mizukami S, Izawa S, Yoshida F, Moriguchi Y, Hanakawa T, Inoue Y, Tagaya H: Blunted diurnal interleukin-6 rhythm is associated with amygdala emotional hyporeactivity and depression: a modulating role of gene-stressor interactions. Front Psychiatry 14: 1196235, 2023.

5) Yamada R, Fujii T, Hattori K, Hori H, Matsumura R, Kurashimo T, Ishihara N, Yoshida S, Sumiyoshi T, Kunugi H: Discrepancy between clinician-rated and self-reported depression severity is associated with adverse childhood experience, autistic-like traits, and coping styles in mood disorders. Clin Psychopharmacol Neurosci 21: 296-303, 2023.

6) Shiwaku H, Katayama S, Gao M, Kondo K, Nakano Y, Motokawa Y, Toyoda S, Yoshida F, Hori H, Kubota T, Ishikawa K, Kunugi H, Ikegaya Y, Okazawa H, Takahashi H: Analyzing schizophrenia-related phenotypes in mice caused by autoantibodies against NRXN1α in schizophrenia. Brain Behav Immun 111: 32-45, 2023.

7) Kawai K, Tachimori H, Yamamoto Y, Nakatani Y, Iwasaki S, Sekiguchi A, Kim Y, Tamura N: Trends in the effect of COVID-19 on consultations for persons with clinical and subclinical eating disorders. BioPsychoSocial medicine 17:(1), 29-29, 2023.

8) Hamatani S, Matsumoto K, Andersson G, Tomioka Y, Numata S, Kamashita R, Sekiguchi A, Sato Y, Fukudo S, Sasaki N, Nakamura M, Otani O, Sakuta R, Hirano Y, Kosaka H, Mizuno Y: Guided Internet-Based Cognitive Behavioural Therapy for Women with Bulimia Nervosa: Protocol for Multicentre Randomised Controlled Trial in Japan. JMIR Res Protoc 12: e49828, 2023.

9) Tose K, Takamura T, Isobe M, Hirano Y, Sato Y, Kodama N, Yoshihara K, Maikusa N, Moriguchi Y, Noda T, Mishima R, Kawabata M, Noma S, Takakura S, Gondo M, Kakeda S, Takahashi M, Ide S, Adachi H, Hamatani S, Kamashita R, Sudo Y, Matsumoto K, Nakazato M, Numata N, Hamamoto Y, Shoji T, Muratsubaki T, Sugiura M, Murai T, Fukudo S, Sekiguchi A: Systematic reduction of gray matter volume in anorexia nervosa, but relative enlargement with clinical symptoms in the prefrontal and posterior insular cortices: a multicenter neuroimaging study. Molecular psychiatry doi:10.1038/s41380-023-02378-4 2024.

10) Caihua W, Tachimori H, Yamaguchi H, Sekiguchi A, Li Y, Yamashita Y: A multimodal deep learning approach for the prediction of cognitive decline and its effectiveness in clinical trials for Alzheimer's disease. Translational psychiatry 14:(1), 105, 2024.

11) Narita Z, DeVylder J, Bessaha M, Fedina L: Associations of self-isolation, social support, and coping strategies with depression and suicidal ideation in U.S. young adults during the COVID-19 pandemic. Int J Ment Health Nurs. 32(3): 929-937, 2023.

12) Narita Z, Oh H, Koyanagi A, Wilcox HC, DeVylder J: Association of a history of incarceration and solitary confinement with suicide-related outcomes in a general population sample from two U.S. cities. Arch Sui Res. doi:10.1080/13811118.2023.2279523, 2023.

13) Yamada Y, Narita Z, Sueyoshi K, Inagawa T, Yokoi Y, Hirabayashi N, Shirama A, Sumiyoshi T: Electrode montage for transcranial direct current stimulation governs its effect on symptoms and functionality in schizophrenia. Front Psychiatry 14: 1243859, 2023.

14) Hazumi M, Kataoka M, Usuda K, Narita Z, Okazaki E, Nishi D: Difference in the Risk of

Discrimination on Psychological Distress Experienced by Early Wave Infected and Late Wave Infected COVID-19 Survivors. Sci Rep. 13(1): 13139, 2023.

(2) 総説

1) 金 吉晴：複雑性 PTSD の臨床　複雑性 PTSD－疾患概念と診断基準．精神医学，65 (8): 1091-1099, 2023.
2) 金 吉晴：解離症群　DSM－5－TR の変更点とその意義．精神医学，65 (10): 1390-1394, 2023.
3) 堀 弘明：複雑性 PTSD の神経生物学 ―逆境的小児期体験(ACEs)と心的外傷後ストレス症(PTSD)の研究からの考察―．精神医学 65：1172-1182，2023.
4) 堀 弘明：PTSD への薬物療法．精神科 43：209-217，2023.
5) 堀 弘明：心的外傷後ストレス障害（PTSD）における環境要因と遺伝-環境相互作用―逆境的小児期体験に着目した検討．医学のあゆみ 288(7)：577-582，2024.
6) 堀 弘明：心的外傷後ストレス症における栄養学的問題．精神医学 66(3)：295-301，2024.
7) 関口 敦：【DSM-5 から DSM-5-TR へ-何が変わったのか】身体症状症及び関連症群 心身二元論からの脱却．精神医学　65(10)：1395-1399，2023.
8) 小川眞太朗：栄養素と脳機能．精神医学 66(3)：248-255，2024.
9) 丹羽まどか，加藤知子，大友理恵子，須賀楓介，大滝涼子，金 吉晴：STAIR Narrative Therapy 実践の勘所．トラウマティック・ストレス　21(1)：22-28，2023.
10) 丹羽まどか，金 吉晴：複雑性 PTSD に対する認知行動療法．臨床精神薬理　27 (1)，53-58，2024.
11) 菅原彩子，小原千郷，関口 敦，西園マーハ文，鈴木眞理．医療機関を受診していない摂食障害患者の支援ニーズに関する調査研究．心身医学 63(3)：241-250，2023.
12) 丹羽まどか：複雑性 PTSD に対する STAIR Narrative Therapy．精神医学 65(8)，1138-1143，2023.
13) 丹羽まどか：ストレスへの気づきとセルフケア．健康教室　75 (1)，pp94-97，2024.

(3) 著書

1) Hori H, Hakamata Y. Stress: Immunology and Inflammation: Handbook of Stress Series Volume 5. Fink G, ed.: Chapter 8. Inflammation and traumatic stress., Academic Press, London, pp65-75, 2023.
2) 金 吉晴：心的外傷後ストレス障害 posttraumatic stress disorder (PTSD)．福井次矢，高木 誠，小室一成：今日の治療指針 2024 年版－私はこう治療している：医学書院，東京，pp1073-1074，2024.

(4) 研究報告書

1) 関口 敦，井野敬子，中野稚子，成田 恵，小原千郷，船場美佐子，國重寛子，兼山桃子：令和 5 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」報告書．2024.

(5) 翻訳

(6) その他

1) 小川眞太朗：精神栄養学―脳とこころを支える食事と栄養．ストレス＆ヘルスケア 249：2-4，2023.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 金 吉晴：ありふれた精神疾患としての PTSD．第 119 回日本精神神経学会学術総会，シンポ

ジウム 28　現代の common disease としての不安障害～その正常と病的の境界とは, 神奈川, 2023.6.22. オンデマンド配信，2023.7.10-2023.10.10.

2) 金 吉晴：複雑性 PTSD に対するトラウマ焦点化治療の適用と工夫．第 22 回日本トラウマティック・ストレス学会　指定シンポジウム企画，東京，2023.8.6．オンデマンド配信.

3) 金 吉晴，丹羽まどか：複雑性 PTSD に対する心理療法：STAIR Narrative Therapy の基礎を学ぶ. ワークショップ 9, 第 23 回日本認知療法・認知行動療法学会, 広島, 2023.12.1-2023.12.3, オンデマンド配信，2023.12.11-2024.2.4.

4) 金 吉晴：摂食障害とトラウマ. 日本心身医学会北海道支部第 49 回例会　特別講演, 北海道, 2024.2.18.

5) 金 吉晴，堀 弘明：「トラウマ性ストレスの解明：心理社会・行動・分子の多層統合的検討 」. 「多階層ストレス疾患の克服」キックオフシンポジウム，東京，2024.2.27.

6) 関口 敦：心身症のバイオマーカーを求めて. 教育講演, 第 134 回日本心身医学会関東地方会, 東京，2024.1.24.

7) 関口 敦：摂食障害脳画像データベースの構築とバイオマーカーの探索．教育講演 4，第 26 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2023.10.21-22.

8) 丹羽まどか：STAIR Narrative Therapy の複雑性 PTSD への適用と工夫．シンポジウム S6, 複雑性 PTSD に対するトラウマ焦点化治療の適用と工夫．第 22 回日本トラウマティック・ストレス学会大会，東京，2023.8.6.

(2) 一般演題

1) Narita Z, Yoshikawa M, Kim Y: Telemedicine-based exposure therapies for PTSD: a systematic review of randomized controlled trials. International Society for Traumatic Stress Studies 39th Annual Meeting, Los Angeles, USA, 2023.11.1-4.

2) Sekiguchi A, Takamura T, Tose K, Sudo Y, Chhatkuli RB, Isobe M, Hirano Y, Yoshiuchi K, Sato Y, Kodama N, Yoshihara K, Takakura S, Ino K, Moriguchi Y: EDNI's Advances in Anorexia Nervosa: Multicenter Brain Imaging & Machine Learning Biomarkers. International Conference on Eating Disorders (ICED) 2024, New York, USA, 2024.3.16.

3) Sekiguchi A, Takamura T, Tose K, Sudo Y, Chhatkuli RB, Isobe M, Hirano Y, Yoshiuchi K, Sato Y, Kodama N, Yoshihara K, Takakura S, Ino K, Moriguchi Y: Neuroimaging via the EDNI Project: Discovering MRI-Based Biomarkers for Anorexia Nervosa and Their Future Prospects. American Psychosomatic Society 81st Annual Scientific Meeting, Brighton, UK, 2024.3.20-23.

4) Yamauchi Y, Ino K, Zempo K: Auditory VR Generative System for Non-Experts to Reproduce Human Memories Through Natural Language Interactions. In SIGGRAPH Asia 2023 Posters (SA '23), Article 6, 1-2, Association for Computing Machinery, New York, USA, 2023.8.6-10.

5) Narita Z: Association of sugary drinks, carbonated beverages, vegetable and fruit juices, sweetened and black coffee, and green tea with subsequent depression: a five-year cohort study. Society of Epidemiology Research Mid-Year Meeting. Toronto, Canada, 2024.3.8.

6) 小川眞太朗，堀 弘明，井野敬子，成田 瑞，丹羽まどか，成田 恵，中野稚子，金 吉晴：心的外傷後ストレス障害（PTSD）に対するメマンチンの有効性および安全性を評価する無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験：研究プロトコール．第 22 回 日本トラウマティック・ストレス学会，東京（オンデマンド配信），2023.8.5-6.

7) 廣方美沙，山本ゆりえ，吉田さやか，田村奈穂，関口 敦，井野敬子，金 吉晴，河合 啓介：摂食障害全国支援センター「相談ほっとライン」相談内容の検討．第 64 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，横浜，2023.7.1-2.

8) 山本ゆりえ，廣方美沙，吉田さやか，田村奈穂，関口 敦，金 吉晴，河合啓介: 摂食障害全国支援センター「相談ほっとライン」活動報告．第 26 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2023.10.21-22
9) 関口 敦，井野敬子，竹林淳和，佐藤康弘，福土 審，波多伴和，髙倉 修，佐野滋彦，内藤暢茂，田村奈穂，河合啓介: 摂食障害診療連携モデルの構築と人口規模に応じた診療連携の整備．第 26 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2023.10.21-22.
10) 鈴木眞理，西園マーハ文，小原千郷，関口 敦，森野百合子，菅原彩子，河上純子，宮島絵理: 摂食障害を抱える家族のピアサポート研修プログラムの開発．第 26 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2023.10.21-22.
11) 宮島絵理，小原千郷，森野百合子，西園マーハ文，関口 敦，菅原彩子，河上純子，鈴木眞理: 摂食障害の家族ピアサポーター登録者の特徴．第 26 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2023.10.21-22.
12) 小原千郷，宮島絵理，森野百合子，西園マーハ文，関口 敦，菅原彩子，河上純子，鈴木眞理: 摂食障害の家族ピアサポーターの体験に焦点を当てたフォーカスグループインタビュー. 第 26 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2023.10.21-22.
13) 須藤佑輔，大田淳子，鎌下莉緒，Bhusal Chhatkuli Ritu，濱谷沙世，沼田法子，松本浩史，中里道子，佐藤康弘，磯部昌憲，兒直樹，吉原一文，高村恒人，守口善也，関口 敦，平野好幸: 神経性やせ症における島皮質の安静時脳機能変化の解明. 第 26 回日本摂食障害学会学術集会，東京，2023.10.21-22.

(3) 研究報告会

1) 関口 敦 : 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出．2023 年度戦略的国際脳科学研究推進プログラム 〔国際脳〕 進捗報告会，オンライン，2024.1.12.

(4) その他

1) 関口 敦，井野敬子 : 令和 5 年度第 1 回全国摂食障害対策連絡協議会．令和 5 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」，オンライン，2023.7.24.
2) 関口 敦，井野敬子 : 令和 5 年度第 2 回全国摂食障害対策連絡協議会．令和 5 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」，オンライン，2024.2.5.

C．講演

1) 金 吉晴 :「複雑性 PTSD の意義と展望」．神戸精神医療講習会 ～うつ病と複雑性 PTSD～，オンライン，2023.5.18.
2) 金 吉晴 : 複雑性 PTSD の臨床．第 15 回日本不安症学会学術大会，東京，2023.5.19．オンデマンド配信，2023.5.19-2023.6.30.
3) 金 吉晴 : PTSD と複雑性 PTSD の治療の動向．精神科領域 Web セミナーin 埼玉，オンライン，2023.6.28.
4) 金 吉晴 : 複雑性 PTSD の臨床．岐阜県精神科医会「秋の研究会」，岐阜（オンデマンド配信），2023.9.9.
5) 金 吉晴 : 複雑性 PTSD の意義と展望について．第 92 回兵庫県精神医療学術講習会，兵庫（オンデマンド配信），2023.10.21.
6) 金 吉晴 : PTSD の病態と治療．PTSD の病態と治療クルズス，東京，2023.10.30.
7) 金 吉晴 : こころのセルフケア～アフターコロナ時代のストレスマネジメント～．令和 5 年度　こころの健康づくり講演会，東京，2023.12.22.
8) 金 吉晴 : 精神病理学にとってのトラウマ／歴史と現在．特別シンポジウム 外傷の精神病理，愛知，2024.1.20.

9)　金 吉晴：複雑性 PTSD と子どもの発達．240309【関西】精神科疾患の病態を考える，大阪，2024.3.9.
10)　金 吉晴：トラウマと ADHD－注意症状のマネジメント－．成人 ADHD 治療薬の新たな可能性－併存疾患の観点から－ in tokyo，東京，2024.3.23.
11)　関口 敦：摂食障害治療支援センター設置運営事業～診療連携モデル．帝京大学医学部精神神経科学講座，集談会，東京，2023.9.5.
12)　関口 敦：摂食障害のバイオマーカー探索：多施設共同研究の利点と課題．第 22 回 浜松医大精神医学・児童精神医学オンライン講座，2024.2.12.
13)　関口 敦：摂食障害治療支援センター設置運営事業～診療連携モデルと設置準備支援．高知医療再生機構講演会，高知，2024.3.5.

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1)　Kim Y：WPA（世界精神医学会協会）倫理委員会 常任委員
2)　金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会　理事
3)　金 吉晴：自殺予防学会　理事
4)　金 吉晴：日本不安症学会　プログラム委員
5)　堀 弘明：日本生物学的精神医学会　評議員
6)　関口 敦：日本心身医学会　代議員，幹事
7)　関口 敦：日本摂食障害学会　評議員，学術交流委員会，ガイドライン作成委員
8)　井野敬子：トラウマティック・ストレス学会　理事　広報委員長
9)　井野敬子：日本精神神経学会　災害対策委員

(3) 座長

1)　金 吉晴：基調講演「鬼は内、福は外」－トラウマケアと暮らし－，第 22 回 日本トラウマティック・ストレス学会，東京，2023.8.5.
2)　金 吉晴：複雑性 PTSD：虐待のトラウマ．第 9 回 NCNP メディア塾，東京，2023.9.1.
3)　丹羽まどか，金 吉晴：シンポジウム S6．複雑性 PTSD に対するトラウマ焦点化治療の適用と工夫．第 22 回日本トラウマティック・ストレス学会大会，東京，2023.8.6.

(4) 学会誌編集委員等

1)　Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
2)　Hori H: Frontiers in Psychiatry, review editor for Molecular Psychiatry section
3)　Narita Z: Asian Journal of Psychiatry, early career editorial board member

E. 研修

(1) 研修企画

1)　金 吉晴：令和 5 年度精神保健に関する技術研修．第 2 回 強迫症対策医療研修 基本コース．オンライン，2023.7.26.
2)　金 吉晴：令和 5 年度精神保健に関する技術研修．第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修．オンライン，　2023.8.31-9.1，東京，2023.9.20-22.
3)　金 吉晴：2023 年度　厚生労働省認知行動療法研修事業，心的外傷後ストレス障害に対する認知行動療法研修．オンライン，2024.2.2.
4)　関口 敦，井野敬子，小原千郷，船場美佐子：摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来

治療～第 6 回．令和 5 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2023.5.13.

5) 関口 敦，井野敬子，小原千郷，船場美佐子，中野稚子：第 20 回摂食障害治療研修．オンライン，2023.7.12-14.

6) 髙倉 修，北島智子，井野敬子，小原千郷，関口 敦：摂食障害治療支援コーディネーター研修会．令和 5 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2023.9.28.

7) 関口 敦，井野敬子，小原千郷，井上智子：摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～第 7 回．令和 5 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2023.12.3.

8) 関口 敦，井野敬子：摂食障害入院治療研修「入院治療の留意点とコツ」第 2 回．令和 5 年度摂食障害治療支援センター設置運営事業．オンライン，2024.1.19.

(2) 研修会講師

1) 金 吉晴：Prolonged Exposure Therapy. 第 17 回 Prolonged Exposure Therapy 講習会，東京（オンデマンド配信），2023.5.5

2) 金 吉晴：PTSD の診断と評価．令和 5 年度精神保健に関する技術研修　第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修，オンライン，2023.8.31.

3) 金 吉晴：PTSD の病理．令和 5 年度精神保健に関する技術研修　第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修，オンライン，2023.8.31.

4) 金 吉晴：PE の治療研究．令和 5 年度精神保健に関する技術研修　第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修，オンライン，2023.8.31.

5) 金 吉晴：PE の概観．令和 5 年度精神保健に関する技術研修　第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修，オンライン，2023.9.1.

6) 金 吉晴：治療プログラムの説明、治療同盟．令和 5 年度精神保健に関する技術研修　第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修，オンライン，2023.9.1.

7) 金 吉晴：想像エクスポージャー．令和 5 年度精神保健に関する技術研修　第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修，東京，2023.9.21.

8) 金 吉晴，井野敬子：回避の取り扱い．令和 5 年度精神保健に関する技術研修　第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修，東京，2023.9.21.

9) 金 吉晴：PTSD 治療の維持（怒り、宿題コンプライアンス）．令和 5 年度精神保健に関する技術研修　第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修，東京，2023.9.21.

10) 金 吉晴：技法の修正　アンダーエンゲージメント、ロールプレイ．令和 5 年度精神保健に関する技術研修　第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修，オンライン，2023.9.22.

11) 金 吉晴，井野敬子：PE を円滑に遂行するために．令和 5 年度精神保健に関する技術研修　第 4 回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修，東京，2023.9.22.

12) 堀 弘明：PTSD の神経科学と薬物療法．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2023.12.20-21.

13) 堀 弘明：PTSD の神経科学と薬物療法．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2，オンライン，2024.1.17-18.

14) 丹羽まどか，金 吉晴：複雑性 PTSD．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2023.12.20-21.

15) 丹羽まどか，金 吉晴：複雑性 PTSD．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2，オンライン，2024.1.17-18.

16) 丹羽まどか：対人援助職のためのセルフケア．令和 5 年度相談業務研修・相談業務上級研修，オンライン，2023.10.19-20.

17) 丹羽まどか：支援者のセルフケア．令和 5 年度千葉県子ども・若者支援協議会人材育成研修，千葉（オンライン），2024.1.30.

Ｆ．その他

1)　金 吉晴：心の病気、症状や支援策集約　国立センターがサイト開設．時事ドットコム，北海新聞，信濃毎日新聞，他 9 社．2023.4.8.

2)　金 吉晴，丹羽まどか：人と親密な関係を築けない複雑性 PTSD　誰もが抱えるトラウマ．朝日新聞デジタル，2023.7.1.

3)　金 吉晴，丹羽まどか：うつ病でよみがえる親に叱られた記憶　私が受けたトラウマの治療．朝日新聞デジタル，2023.7.1.

4)　金 吉晴：医療ルネサンス No.8076 トラウマからの解放，母から暴力 PTSD に．読売新聞，2023.8.16.

5)　金 吉晴：医療ルネサンス No.8077 トラウマからの解放，記憶の直視 繰り返し克服．読売新聞，2023.8.17.

6)　金 吉晴，丹羽まどか：複雑性 PTSD 治療の焦点は．朝日新聞，2023.8.23.

7)　金 吉晴：医療ルネサンス No.8082 トラウマからの解放，認知症薬用いた研究も．読売新聞，2023.8.24.

8)　金 吉晴：PTSD の治療に合成麻薬、4 割が寛解　新たな治療法になる可能性も．朝日新聞 DIGITAL，2023.10.10.

9)　金 吉晴：「PTSD 治療に合成麻薬」？ 慎重論も．朝日新聞，2023.11.29.

10)　喜田 聡，金 吉晴，堀 弘明，福島穂高：東大など、心的外傷後ストレス障害(PTSD)の分子機構の一端を解明．マイナビニュース，2024.3.4.

11)　喜田 聡，金 吉晴，堀 弘明：PTSD の分子機構 東大が解明 cAMP の過活性化で深刻化．科学新聞，2024.3.22.

5. 児童・予防精神医学研究部

Ⅰ. 研究部の概要

児童・予防精神医学研究部は，精神疾患の早期介入および予防，児童・青年期のメンタルヘルス，ならびに関連する領域に関する調査研究および情報発信を行っている．早期介入・予防に向けた活動としては，国際標準として用いられている認知機能の評価法を本邦で用いるための整備，経頭蓋直流刺激を用いた患者のリカバリーを促進する治療法の開発研究など，多角的に活動を展開している．さらに，メンタルヘルスに及ぼす影響のインターネット調査，児童・青年期のコホート研究などを継続し，神経生理学的指標を用いた新たな評価法の開発も手掛けている．

人員構成は以下のとおりである．部長：住吉太幹，精神疾患早期支援・予防研究室室長：松元まどか（～11 月），児童・青年期精神保健研究室室長：白間 綾，リサーチフェロー：飯島和樹（～11 月），Andrew M. Stickley，末吉一貴，山田理沙，星野 大（～9 月），科研費研究員：長谷川由美，廣永成人（～11 月），客員研究員：神尾陽子，池澤 聡，中村 亨，上野佳奈子，青木保典，石井良平，住吉チカ，樋口悠子，川崎康弘，鈴木道雄，高橋秀俊，數井 裕，小坂浩隆，菊知 充，松本吉央，上原 隆，信川 創，西田圭一郎，研究生：荻野和雄，海老島 健，岡琢 哉，山田悠至，稲川拓磨，齊藤 彩，原口英之，科研費心理療法士，科研費社会事業専門員，科研費研究補助員，科研費事務助手，　センター事務助手.

Ⅱ. 研究活動

1） 部長室より：住吉が代表研究者となり，精神疾患における認知機能障害の評価や治療介入に関する研究を，NCNP 内の他部署および国内外の医療機関や企業と協働し，以下を実施している.

A) ニューロモデュレーションの精神疾患への応用に関する研究（住吉，末吉，長谷川，和田，山田）経頭蓋直流刺激(tDCS)を用いた統合失調症など精神疾患の認知機能障害の治療研究を展開している．現在，統合失調症患者の日常生活技能に対する tDCS の改善効果に関する無作為化臨床試験(FEDICS)が，病院 CREP などから支援を受け進行中である．また，統合失調症の社会認知機能向上の tDCS の効果に関する本邦初の特定臨床研究（SEDICS）において，患者の機能的転帰への効果を検討した．以上は研究生の山田悠至医師（司法精神診療部），稲川拓磨医師（精神診療部）らと共に行っている．2023 年度は tDCS 陽極刺激がターゲットとする脳部位により，認知機能、日常生活技能への効果に差異を生じることを専門誌に公表した．また，これらの tDCS 研究に関する内容を英文著書として発信した.

B) 大うつ病性障害患者を対象とした中央評価の妥当性に関する予備研究～対面評価と情報通信技術を介した遠隔評価との一致性の検討～(CENTRAD 研究)（住吉，長谷川 他）大うつ病性障害患者を対象とした，代表的なうつ症状評価尺度である MADRS について，対面による評価と中央評価者による情報通信機器を介した，評価の一致の確認を目的とする．日本神経精神薬理学会のトランスレーショナル・メディカル・サイエンス委員会の活動の一つであり，慶應大学，東京女子医大学，杏林大学，青山学院大学，ひもろぎクリニック，病院 CREP，IBIC の支援を受けた．2023 年度は収集したデータを解析し，英文原著論文として公表した.

C) 精神病超ハイリスク(UHR)者のサイトカイン濃度，活動量，睡眠指標を対象としたコホート研究（住吉）統合失調症（精神病）の前駆状態と親和性が高い UHR 者を対象とした，全国 10 の医療研究機関が協働する UHR 者を 2 年間追跡するコホート研究である．令和 5 年度末時点で UHR 者と健常対象者それぞれ 52 名，28 名からデータを得て解析中である．現在，炎症性サイトカインの血中濃度や活動量が，UHR 者の機能的転帰に及ぼす影響を解析している.

D) 統合失調症に関する各国への政策提言書(Schizophrenia -Time to Commit to Policy Change)（住吉）世界精神医学会や国際統合失調症学会で交流を持つ欧州および北米の専門家らとともに執筆し，Oxford Health Policy Forum 社より発信した．同書には統合失調症のリスク因子や病態生理

の理解および治療法の進歩とともに，当事者のニーズが盛り込まれている．

2）精神疾患早期支援・予防研究室（松元，飯島，廣永）

（1）精神疾患患者における「自己」の神経回路病態の解明

「自己」が，脳領域間のどのような相互作用によって形成され，精神疾患患者においてどのような異常を来しているのか，脳イメージング法により検討している．

主観的に感じる「喜び」の大きさを定量化するため，既に経済学において定式化されている決定効用の測定課題を用いて，健常者の脳活動を MEG（magnetoencephalography）により計測した．行動データを各種数理モデル（Expected utility model, Prospect theory model）でフィッティングし，対応する神経回路ダイナミクスを同定した．

自身の行為およびその結果を自分で制御できている感覚（「自己主体感」）の神経回路ダイナミクスを明らかにするため，探索課題を用いて，健常者の脳活動を MEG により計測・解析した．自らの行動によって予測する外界の変化と実際の結果によって生じる予測誤差について，脳活動のデコーディングを行った．

自身の一連の行為についての記憶（「自伝的記憶」）とその評価の脳内メカニズムを明らかにするため，バーチャルリアリティ（VR）体験中の被験者の身体の動き，視線・瞳孔径等の生体信号など，身体的運動を伴う仮想モビリティ体験の履歴を行動データとして記録するシステムを構築した．

（2）非ヒト霊長類を用いた「自己」の神経回路基盤の解明

非ヒト霊長類のマーモセットにおいて，自ら発声している際の皮質脳波（ECoG）の解析を行った．グレンジャー因果性解析により，発声の制御に関わる前頭葉の活動と聴覚野の活動との関係性について検討した．

3） 児童・青年期精神保健研究室

（1）長期化する COVID-19 パンデミックがメンタルヘルスに及ぼす影響のインターネット調査（Stickley, 白間，住吉）

長期化するコロナ禍は身体的な影響にとどまらず，日本人のメンタルヘルスに大きな影響を与えている可能性がある．本研究では全国規模のインターネット調査を行い，発達障害症状や精神病症状などに注目した調査を行った．その結果，精神病様症状をもつ個人での希死念慮の増加を見出した．また調査で得た大規模サンプルの分析から，ADHD 症状と精神病様症状の関連(，経済／社会的要因とメンタルヘルスの関連などを報告した．

（2）ウェアラブル・デバイスを用いた生体情報の数理解析研究（白間，住吉）

実用的で高機能なウェアラブル端末の急速な普及によって，日常生活を送る人びとからさまざまな生体データの収集が可能になった．本研究では千葉工業大学 信川研究室との共同研究により，アイトラッカーやスマートウォッチなどの端末から得られた生体データから，推論などの人間の認知機能や，生体リズム，運動機能などについて，計算論的アプローチや複雑性解析などを用いた研究を行なっている．また NCNP で構築が進む精神疾患レジストリと連携し，精神疾患患者の治療反応性や社会生活に影響を及ぼす生物学的指標の開発に向け研究に取り組んでいる．

4） 気分障害の認知機能障害評価バッテリーに関する研究（末吉，長谷川，住吉）

気分障害における認知機能障害を評価する簡便なテストバッテリー，Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry (SCIP)と Brief Assessment of Cognition In Affective Disorders (BAC-A)の信頼性・妥当性を検討している．SCIP は国際双極性障害学会が推奨する簡便な測定法であり，精神疾患患者の認知機能を短時間で評価できる．BAC-A は従来の認知機能領域に加え，情動刺激が認知機能へ与える影響を評価できる．現在，多施設共同でデータ収集を継続しており，予備的な解析結果を国際気分障害学会（2023 年 12 月，ミラノ）で報告した．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・2023 年度気分障害センター市民公開講座（2023.9.2）を企画・開催(住吉).

・講演：Transcranial direct current stimulation for enhancing cognition and functionality in patients with schizophrenia (World Mental Health Day 2023 International Webinar Series 2, 2023, 9)（住吉）

(2) 専門教育面における貢献

・ 研究と臨床の橋渡しを目指すカンファレンス「児童・予防精神医学研究会」を統合失調症早期診断・治療センターと共催(2023, 9)（住吉）

・ 研究成果の国際的な発信力向上を目指し,医学英語のベテラン講師がセンター職員による医学英語論文に対し指導を行うセミナーを，病院 CREP との共催で開催（2024.1.31）（住吉）

(3) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・ クロザリル適正使用委員会委員（住吉）

(4) センター内における臨床的活動

・ センター病院 統合失調症専門外来・初診：毎週月曜日（住吉）

・ センター病院 気分障害センター外来・初診：毎週月曜日（住吉）

・ センター病院 一般再来：毎週金曜日（住吉）

・ センター病院 こころのリスク診療枠：隔週月曜日（住吉）

(5) その他

メディア発信：

・Cognitive enhancement in psychiatric conditions. China Clinical Medical Television Talk Show. 8th Congress of Asian Congress of Neuropsychopharmacology, Xi’an, 2023, 9（住吉）

・清瀬健幸大学 TV「こころの健康と病気の予防」出演（2024.2.24）（住吉）.

Ⅳ．研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1) Sumiyoshi T, Morio Y, Kawashima T, Tachimori H, Hongo S, Kishimoto T, Watanabe K, Otsubo T, Oi H, Nakagome K, Ishigooka J: Feasibility of remote interviews in assessing disease severity in patients with major depressive disorder: A pilot study. Neuropsychopharmacology Reports,2024 doi: 10.1002/npr2.12411

2) Stickley A, Shirama A, Sumiyoshi T. Perceived discrimination and mental health in the Japanese general population. International Journal of Social Psychiatry 2023 207640231175248.

3) Stickley A, Shirama A, Sumiyoshi T. Psychotic experiences, perceived stress, and suicidal ideation among the general population during the COVID-19 pandemic: Findings from Japan. Schizophrenia Research 2023 260.

4) Stickley A, Shirama A, Sumiyoshi T. Financial debt, worry about debt and mental health in Japan. BMC psychiatry 2023 23(1) 761-76.

5) Stickley A, Shirama A, Sumiyoshi T. Are attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms associated with negative health outcomes in individuals with psychotic experiences? Findings from a cross-sectional study in Japan. Frontiers in Psychiatry 2023 14 1133779.

6) Stickley A, Sumiyoshi T, Kondo N, Leinsalu M, Inoue Y, Ruchkin V, Shin JI, McKee M. Psychological distress and voting behaviour in nine countries of the former Soviet Union. Scientific Reports 2023;13:22709. doi: 10.1038/s41598-023-49071-8.
7) Stickley A, Shirama A, Sumiyoshi T. Perceived discrimination and loneliness in the Japanese general population. Asian Journal of Psychiatry 2023;84:103576. doi: 10.1016/j.ajp.2023.103576.
8) Yamada R, Miyashita K, Hashimoto T. M, Hironaka N, Takada K, Shigeta M, & Miyata H. Prevalence and Clinical Significance of Psychiatric Comorbidities with Gambling Disorder in 12 Clinical Settings in Japan. J Addict Med., 17(2), 140-146, 2023.
9) Yamada R, Wada A, Stickley A, Yokoi Y, Sumiyoshi T. Effect of 5-HT1A Receptor Partial Agonists of the Azapirone Class as an Add-On Therapy on Psychopathology and Cognition in Schizophrenia: A Systematic Review and Meta-Analysis. Int J Neuropsychopharmacol. 2023;26(4):249-258. doi:10.1093/ijnp/pyad004
10) Yamada R, Fujii T, Hattori K, Hori H, Matsumura R, Kurashimo T, Ishihara N, Yoshida S, Sumiyoshi T, Kunugi H. Discrepancy between Clinician-rated and Self-reported depression severity is associated with adverse childhood experience, autistic-like traits, and coping styles in mood disorders. the official scientific journal of the Korean College of Neuropsychopharmacology 2023;21(2):296-303. doi:10.9758/cpn.2023.21.2.296
11) Yamada R, Wada A, Stickley A, Yokoi Y, Sumiyoshi T. Augmentation therapy with serotonin1A receptor partial agonists on neurocognitive function in schizophrenia: A systematic review and meta-analysis. Schizophrenia research. Cognition 2023;34:100290. doi:10.1016/j.scog
12) Yamada Y, Sumiyoshi T. Preclinical evidence for the mechanisms of transcranial direct current stimulation in the treatment of psychiatric disorders; A systematic review. Clinical EEG and Neurosicence 2023;54:601-610
13) Yamada Y, Narita Z, Inagawa T, Yokoi Y, Hirabayashi N, Shirama A, Sueyoshi K, Sumiyoshi T. Electrode montage for transcranial direct current stimulation governs its effect on symptoms and functionality in schizophrenia Frontiers in Psychiatry 2023 14 1243859.
14) Ohnuma A, Narita Z, Tachimori H, Sumiyoshi T, Shirama A, Kan C, Kamio Y, Kim Y: Association between media exposure and mental health among children and parents after the Great East Japan Earthquake. European Journal of Psychotraumatology 2023;14(1):2163127.
15) Kato M, Kikuchi T, Watanabe K, Sumiyoshi T, Moriguchi Y, Astrom O, Christensen M: Goal attainment scaling for depression: validation of the Japanese GAS-D tool in patients with major depressive disorder. Neuropsychiatric Diseases and Treatment 2024;20:49-64
16) Nakagome K, Tachimori H, Endo S, Murakami K, Azekawa T, Hongo S, Niidome K, Kojima Y, Yamada S, Oi H, Sumiyoshi T: A multicenter, single-arm, open-label interventional study of adherence to brexpiprazole during switching from previous antipsychotic drugs in patients with schizophrenia or schizoaffective disorder. Neuropsychopharmacology Reports, 2024 doi: 10.1002/npr2.12416
17) Ruchkin V, Stickley A, Koposov R, Sukhodolsky DG, Isaksson J. Depressive symptoms and anger and aggression in Russian adolescents. Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health 2023;17(1):130. doi: 10.1186/s13034-023-00677-w.
18) Koposov R, Stickley A, Sukhodolsky D, Ruchkin V. Bulimia symptoms and anger and aggression among adolescents. BMC Public Health 2023; 23(1):833.doi: 10.1186/s12889-023-15664-1.

19) Koposov R, Stickley A, Isaksson J, Ruchkin V. Enuresis in young offenders – a study on prevalence and mental health comorbidity. Frontiers in Psychiatry 2024 doi: 10.3389/fpsyt.2024.1328767. Online ahead of print.

(2) 総説

1) 吉村直記，和田 歩，住吉太幹: 統合失調症における脳刺激法の位置づけ．特集「統合失調症の今を知る」精神科治療学 38(7): 807-13, 2023.
2) 山田悠至，末吉一貴，和田 歩，山田理沙，住吉太幹：経頭蓋直流電気刺激(tDCS)の臨床総論．精神科 43:431-36, 2023.
3) 山田悠至，住吉太幹：統合失調症の神経認知機能・社会認知機能の検査バッテリー．臨床精神医学 52:1155-61, 2023.
4) 白間 綾：瞳孔計測から捉える精神疾患：反射，覚醒，情動，推論．計測と制御 62：624-629, 2023.
5) 和田 歩，末吉一貴，山田理沙，住吉太幹．統合失調症診療のフロントライン Part2 統合失調症における認知機能障害の意義と治療の展望．　臨床精神医学 2023；52(5): 527-533.
6) 山田悠至，和田歩，末吉一貴，山田理沙，住吉太幹.電気けいれん療法(ECT)と経頭蓋直流電気刺激(tDCS)の最先端 経頭蓋直流電気刺激(tDCS)の臨床総論．　精神科　2023；43(4)：431-436.

(3) 著書

1) Galderisi S, Kaur D, Keri P, Lennox B, Marder S, Matthews-Hayes T, McDaid D, Muller S, Nolan F, Nordentoft M, Pavalkis D, Sauders J, Sumiyoshi T; Schizophrenia – Time to Commit to Policy Change. Oxford Health Policy Forum CIC, 2024.
2) Yamada Y. Sumiyoshi T: Social cognitive impairments as a target of non-invasive brain stimulation for functional outcomes in schizophrenia. In Wei Wu (Ed). Oxytocin and Social Function. IntechOpen, London, 2023.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Sumiyoshi T, Yamada R: 5-HT1A receptor agonists in the treatment of psychopathology and cognitive impairment of schizophrenia. In Symposium “How Pharmacology Drives Therapeutics: The Impact of Novel and Biased 5-HT1A Receptor Agonists on the Treatent of Serotonergic Disorders” (Organized by Sumiyoshi T.); 34th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology, 2023, 5, 8, Montreal. (Invited lecture)
2) Sumiyoshi T: Validity of remote interviews in assessing disease severity in patients with major depressive disorder: Facilitation of decentralized clinical trials in Japan. 2023 Mental Health Internstional Symposium of Asian Consortium of National Mental Health Institutes, 2023, 9, 12 Seoul (2023, 6, 12-13) (Invited lecture)
3) Sumiyoshi T: Addressing subjective symptoms and objective outcomes in mood disorders. 8th Congress of Asian Congress of Neuropsychopharmacology, In Symposium Forum on the neuropsychopharmacology: Novel drug and new target (Part I). 2023, 9, 23 西安 (2023, 9, 22-24) (Invited lecture)
4) Sumiyoshi T. Psychoneurobiology research and personalized treatment of schizophreni. In symposium “WPA publication session”. 23rd WPA World Congress of Psychiatry 2023, 9. 30 Vienna, (2023, 9, 28 – 10,1) (Invited lecture)
5) Sumiyoshi T. Translational direct current stimulation in the treatment of schizophrenia; perspectives on functional improvement and monitoring methods. 5th Annual Congress on

Psychiatry 2024, 2, 8 Madrid, (2024, 2, 8 - 9) (Invited lecture)

6) 樋口悠子，住吉太幹，立野貴大，中島 英，金子直史，水上祐子，赤崎有紀子，笹林大樹，高橋努, 辻井農亜, 鈴木道雄 : 早期サイコ―シスにおけるミスマッチ陰性電位を用いた予後予測．シンポジウム「ミスマッチ陰性電位の精神疾患におけるバイオマーカー応用」．第 119 回日本精神神経学会学術総会，横浜，2023.6.22 (6.22-6.24).

7) 住吉太幹：うつ病患者のリカバリーにおける認知・社会機能評価の役割：シンポジウム「うつ病におけるリカバリーをいかにして評価し、アプローチしていくか」．第 20 回日本うつ病学会総会/第 39 回日本ストレス学会・学術総会，仙台，2023.7.21 (7.21-7.22).

8) 住吉太幹：復職・就活のタイミングと機能的転帰の評価：シンポジウム「休職・復職はどの様に判定すべきか」．第 42 回日本社会精神医学会，仙台，2024.3.15 (3.14-3.15).

9) 山田悠至，住吉太幹．経頭蓋直流刺激(tDCS)を用いた精神疾患治療研究の動向．シンポジウム「ニューロモデュレーションの最前線」．第 45 回日本生物学的精神医学会，沖縄 2023.11.7 (2023.11.6-7).

10) 山田悠至，住吉太幹．経頭蓋直流刺激の精神・神経疾患に対する作用機序の考察．シンポジウム「Transcranial electrical stimulation の臨床応用の汎用性」．第 53 回日本臨床神経生理学会学術大会，福岡 2023.11.30 (2023.11.30-12.2).

11) 山田理沙．　物質依存と行動嗜癖の併存症に関する共通点と差異 ―観察研究に基づく検討―，2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，2023 年 10 月．

(2) 一般演題

1) Sumiyoshi C, Ito S, Matsumoto J, Fujino H, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Miura K, Sumiyoshi T, Hashimoto R; Development of a feedback system regarding attainable work hours in patients with schizophrenia. 23rd WPA World Congress of Psychiatry 2023, 9. 30 Vienna, (2023, 9, 28 – 10,1)

2) Yamada Y, Narita Z, Inagawa T, Yokoi Y, Hirabayashi N, Shirama A, Sueyoshi K, Sumiyoshi T; Electrode montage for transcranial direct current stimulation governs its effect on symptoms and functionality in schizophrenia. 23rd WPA World Congress of Psychiatry 2023, 9. 30 Vienna, (2023, 9, 28 – 10,1)

3) Shirama A, Sumiyoshi T.: Impaired belief updating in schizophrenia is liked to reduced sensitivity of pupillary response to prediction uncertainty. NEURO 2023, Sendai, 2023.8.1-8.4.

4) Shirama A, Sumiyoshi T.: Impaired active inference in schizophrenia is liked to reduced sensitivity of pupillary response to prediction uncertainty. NEURO 2023, Washington D.C., 2023.11.11-11.15.

5) 上野 歩，関口雅也，信川 創，白間 綾，高橋哲也，戸田重誠：アイトラッカーにより検出された瞬きの頻度に基づく，注意欠如・多動障害の特定．電子情報通信学会，広島，2024.3.4-3.8.

6) Sueyoshi K, Hasegawa Y, Tsutsumi Y, Matsuo K, Sumiyoshi T.: Validity of the Brief Assessment of Cognition in Affective Disorders (BAC-A) Japanese version: preliminarily analysis of data from patients with mood disorders and healthy controls. 2023 Conference of the International Society for Affective Disorders, Milan, 2023.12.14-16.

7) Hasegawa Y, Sueyoshi K, Tsutsumi Y, Matsuo K, Sumiyoshi T.: The development of Japanese version of the Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry; Towards the feasible assessment of cognitive function in clinical settings. 2023 Conference of the International Society for Affective Disorders, Milan, 2023.12.14-16.

8) 山田理沙．統合失調症の精神病症状に対するセロトニン 1A 受容体部分作動薬の増強療法に関するメタ解析，第 31 回日本医学会総会，2023 年 4 月．

9) Yamada R, Wada A, Stickley A, Yokoi Y, Sumiyoshi T. Effect of 5-HT1A receptor partial agonists of the azapirone class as an add-on therapy on psychopathology and cognition in schizophrenia: A systematic review and meta-analysis, 34th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology, May 2023.
10) 山田理沙，和田 歩，Stickley A，横井優磨，住吉太幹．統合失調症の精神病症状に対するセロトニン 1A 受容体部分作動薬の増強療法に関するメタ解析，第 53 回日本神経精神薬理学会 ，2023 年 9 月.

(3) 研究報告会

(4) その他

C．講演

1) 住吉太幹:統合失調症の認知機能障害への対応 ; 最近の動向. 第 6 回認知機能リハビリテーション情報交換会. 京都, 2023.6.24
2) 住吉太幹: 精神疾患の先端的な治療 ; 気分障害センターの紹介. 石川県議会議員 NCNP 視察 2023.7.20
3) 住吉太幹 : 電気生理学的観点にもとづく精神疾患の予防・リカバリー :「モーニングセミナー 2」. 第 45 回日本生物学的精神医学会年会. 名護市，2023.11.7 (11.5-11.7).
4) 住吉太幹: うつ病における難治例の治療およびリカバリーへの方略. 岡山県精神神経科診療所協会学術講演会. オンライン開催，2024.3.14.

D．学会活動

(1) 学会主催

1) 第 8 回 Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder 研究会・年会. 2023 年 5 月 20(日)小平市

(2) 学会役員

1) Sumiyoshi T : World Psychiatric Association Section on Psychoneurobiology, Chair
2) Sumiyoshi T : EEG & Clinical Neuroscience Society, Councilor
3) Sumiyoshi T : International Society of Bipolar Disorder; Cognition Task Force, Member
4) 住吉太幹 : 日本脳科学関連学会連合 産学連携諮問委員会 分散型臨床試験タスクフォース長
5) 住吉太幹 : Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder 研究会，代表理事
6) 住吉太幹 : 日本生物学的精神医学会　理事
7) 住吉太幹 : 日本神経精神薬理学会　評議員，編集委員
8) 住吉太幹 : 日本臨床精神神経薬理学会　評議員
9) 住吉太幹 : 日本統合失調症学会　評議員
10) 住吉太幹 : 日本うつ病学会　評議員
11) 住吉太幹 : 日本精神保健・予防学会　評議員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

1) Sumiyoshi T: Clinical Psychopharmacology and Neuroscience, Associate Editor
2) Sumiyoshi T: Neuropsychopharmacology Reports, Section Editor
3) Sumiyoshi T: Frontiers in Pharmacology, Associate Editor

4)　Sumiyoshi T: Clinical EEG and Neuroscience, Editorial Board Member
5)　Sumiyoshi T: Schizophrenia Research Cognition, Editorial Board Member

E．研修

(1) 研修企画

1)　住吉太幹:令和 5 年度第 1 回合同研究会　精神保健研究所　児童・予防精神医学研究会　/　病院　統合失調症早期診断・治療センター　/　気分障害センター, 2023.10.4.

F．その他

1)　住吉太幹: 国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 知財・法務課長
2)　松元まどか：日米科学技術協力事業「脳研究」分野研究計画委員会委員

6. 精神薬理研究部

Ⅰ. 研究部の概要

精神薬理研究部では，最終目標を「精神疾患の克服を目指した研究開発を行い，研究成果を目の前の医療に活かす」と定義し，当センターの事業計画における位置づけを明確化している．具体的には，わが国において重要な政策課題となっている精神疾患に焦点を当て，精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い，非臨床ステージにおける創薬研究を中心とした精神神経疾患の治療介入法の研究開発を行っている．

精神薬理研究部には，分子精神薬理研究室と向精神薬研究開発室の 2 室が所属している．令和五度常勤研究員は，部長の金 吉晴，分子精神薬理研究室長の三輪秀樹，向精神薬研究開発室長の古家宏樹の 3 名であった．リサーチフェローは，上條諭志，中武優子の 2 名であった．客員研究員は，澤 幸祐（専修大学人間科学部心理学科教授），木村英雄（山陽小野田市立山口東京理科大学薬学部薬学分野教授），木村由佳（山陽小野田市立山口東京理科大学薬学部客員研究員），山田光彦（東京家政学院大学人間栄養学部病態生理学研究室教授），山田美佐であった．研究生は，小林桃子，寺尾真実，川島友子，松谷真由美であった．科研費研究補助員は，村松浩美であった．

Ⅱ. 研究活動

1） 実験動物を利用した研究

三輪室長が，東京都医学総合研究所との共同研究において，筆頭著者・責任著者として執筆した論文「Normal cortical laminar formation in RP58+/– mice」が，Molecular Psychiatry 誌の IMAGE セクションに選出され掲載された．この研究は，昨年度末 Molecular Psychiatry 誌に掲載された「The mouse model of intellectual disability by ZBTB18/RP58 haploinsufficiency shows cognitive dysfunction with synaptic impairment」の内容を補足する報告である．この研究では，染色体異常である 1q43-44 微小欠失症候群は知的障害を発症するが，その原因の一つが，転写抑制因子 ZBTB18/RP58 の欠失と考えられており，さらに知的障害患者の中に，RP58 遺伝子自身の突然変異が多く報告され，RP58 ハプロ不全が，知的障害の原因になると考えられている．本研究では，RP58 ハプロ不全の知的障害のモデルとして，RP58 ヘテロ欠損マウスを解析し，興奮性シナプスの異常であることを示唆し，モデルマウスとしての有用性を示した．今後，転写抑制因子 RP58 の標的遺伝子を同定することにより，その機序を解明し，RP58 ハプロ不全患者の知的障害の予防法，治療法の開発の糸口を得ることが期待される．

古家室長が山陽小野田市立山口東京理科大学との共同研究において，筆頭筆者として執筆した論文「Hydrogen sulfide and polysulfides induce GABA/glutamate/D-serine release, facilitate hippocampal LTP, and regulate behavioral hyperactivity」が Scientific Reports 誌に掲載された．この研究では，硫化水素とポリサルファイドが，脳内における主要な神経伝達物質であるガンマアミノ酪酸（GABA），グルタミン酸，そして，記憶にかかわる NMDA 受容体の活性を亢進するコアゴニスト D-セリン等の放出促進を行うことを見出した．これまで毒性を示す高濃度硫化水素によってこれら伝達物質放出が抑制されることが知られていたが，生理的濃度での伝達物質放出促進という新しい作用機構を発見した．また，硫化水素/ポリサルファイドの脳内主要生合成酵素 3-メルカプトピルビン酸イオウ転移酵素（3MST）と標的分子 TRPA1 チャネルそれぞれの欠損動物を作成し，記憶の形成には 3MST によって生合成される硫化水素/ポリサルファイドおよびポリサルファイドの標的分子 TRPA1 チャネルが関わっていることが明らかとなった．さらに，3MST 欠損動物では，統合失調症様行動が認められ，これら分子の不足が統合失調症に繋がることを示唆した．本研究成果は，硫化水素/ポリサルファイド，その生合成酵素と標的分子が，統合失調症の新たな創薬開発に繋がることが期待される．

上條リサーチフェローは，発達期の小脳活動異常が自閉症スペクトラム（ASD）様の症状を引き

おこすという「ASD 発達期小脳機能異常仮説」に注目し，発達期小脳プルキンエ細胞の活動を可逆的に抑制できるモデルマウスの系を確立した．生後 11 日から 15 日までの 5 日間の小脳プルキンエ細胞の活動抑制により，オス特異的に社会性の低下および協調運動機能の異常がひきおこされることを見出した．また，小脳プルキンエ細胞の活動抑制を行ったマウスでは，成体における聴覚刺激の処理に異常が見られることを見出し，ASD および随伴する感覚処理の異常が，発達期の小脳活動の異常という共通の原因から生じる可能性を示した．ASD は 4:1 と男児に多く，発達性協調運動障害（DCD）を高率に併発することが報告されており，DCD もまた男児に多い．我々は，両疾患の共通の原因として小脳機能の異常があり，発達期のオス小脳は異常活動に対して脆弱であるという「オス小脳脆弱仮説」を提唱し，研究を進めている．

中武優子リサーチフェローは，うつ病などの発症要因となる心理的ストレスが伝達される仕組みの解明に取り組んだ．他個体の示す苦痛を繰り返し目撃したマウスは，まるで自身が同じ苦痛を受けたようにうつ様症状を示すが，他個体の苦痛を目撃する際に島皮質のオキシトシン受容体発現細胞を薬理学的あるいは光遺伝学的に抑制すると，マウスはうつ様行動を示さなかった．このことから，心理的ストレスの伝達において島皮質内のオキシトシンシグナルが重要な働きをしている可能性が示唆された．

これらの実験動物を利用した研究の成果を臨床研究と双方向にトランスレーションすることで，これまで困難とされてきた向精神薬の創薬研究をより合理的に進めることができるものと期待される．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

プレスリリース，マスメディア等にて普及啓発活動を行った．

Ⅳ．研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1) Kobayashi-Tanabe M, Furuie H, Yamada M, Yamada M: Characterization of a WD-repeat family protein WDR3 in the brain of WDR3 hetero knockout mice. Brain Res 1;1800:14818, 2023.
2) Hirai S, Miwa H, Shimbo H, Nakajima K, Kondo M, Tanaka T, Ohtaka-Maruyama C, Hirai S, Okado H: The mouse model of intellectual disability by ZBTB18/RP58 haploinsufficiency shows cognitive dysfunction with synaptic impairment. Mol Psychiatry 28(6):2370-2381 2023.
3) Kawashima Y, Yamada M, Furuie H, Kuniishi H, Akagi K, Kawashima T, Noda T, Yamada M: Effects of riluzole on psychiatric disorders with anxiety or fear as primary symptoms: A systematic review. Neuropsychopharmacol Rep 43(3):320-327, 2023.
4) Furuie H, Kimura Y, Akaishi T, Yamada M, Miyasaka Y, Saitoh A, Shibuya N, Watanabe A, Kusunose N, Mashimo T, Yoshikawa T, Yamada M, Abe K, Kimura H: Hydrogen sulfide and polysulfides induce GABA/glutamate/D-serine release, facilitate hippocampal LTP, and regulate behavioral hyperactivity. Sci Rep 13(1):17663, 2023.

(2) 総説

1) 三輪秀樹：統合失調症とスピンドル（活動睡眠科学の仮説-睡眠機能と睡眠制御の謎を紐解く．連載第 11 回-）．睡眠医療 17(3) 通巻 70 号別冊：371-377, 2023.

(4) 研究報告書

1) 上條諭志，三輪秀樹，山田光彦：発達期の小脳活動異常による ASD 病態形成過程の解明―発達期の小脳活動による「社会脳」の形成―．明治安田こころの健康財団，2023.

2) 上條諭志：ASD モデルマウスにおける感覚情報処理機構の多領野カルシウムイメージングを用いた解析．国立精神・神経医療研究センター 神経研究所，2023.

(5) その他

1) 上條諭志：ASD モデルマウスにおける感覚情報処理機構の多領野カルシウムイメージングを用いた解析．ニュースレター，2023.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Furuie H, Ukezono M, Okada T, Yamada M: Social facilitation of feeding behavior in a schizophrenia rat model. The 11th Congress pf the Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allid Professions (ASCAPAP)2023, Kyoto, 2023.5.26-28.

2) Ukezono M, Takano Y, Furuie H, Nakatake Y, Shirakawa Y, Sayuri H, Egashira Y, Uono S, Takada M Okada T: The effect of lesion in the anterior cungulate cortex on social facilitation in rat. The 11th Congress pf the Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allid Professions(ASCAPAP)2023, Kyoto, 2023.5.26-28.

3) 三輪秀樹：「クラウドファンディングで日本の科学をもっと元気に！」九州大学・佐々木裕之先生「60 年間の謎に挑む：三毛猫遺伝子探索プロジェクト」他．日本科学振興協会年次大会，東京，2023.10.8.

4) 三輪秀樹：「『こころを動かされること』を科学しよう」．ランチョンセミナー（JT 主催）日本科学振興協会年次大会，東京，2023.10.9.

(2) 一般演題

1) Kamijo S, Yamada M, Miwa H：Sex-specific expression of social communication deficits by transient　inactivation of developing Purkinje neurons. 第 53 回日本神経精神薬理学会年会，東京，2023.9.7-9.

2) Kamijo S, Yamada M, Miwa H: Transient inactivation of developing Purkinje neurons causes male-specific social deficits. Society for Neuroscience (SFN) Annual Meeting 2023, Washington D.C, 2023.11. 11-15.

3) Furuie H, Nakatake Y: Subchoronic treatment with MK-801 during neonatal period decreased social interaction in adult rats. Society for Neuroscience (SFN) Annual Meeting 2023 , Washington D.C, 2023.11. 11-15.

4) Nakatake Y, Furuie H, Inoue YU, Inoue T, Yoshizawa K, Yamada M: Effects of oxytocin signaling on the transmission of social stress in mice. Society for Neuroscience (SFN) Annual Meeting 2023, Washington D.C, 2023.11. 11-15.

5) Nakatake Y, Furuie H, Inoue YU, InoueT, Yoshizawa K, Yamada M：The involvement of the oxytocin signaling in the transmission of social stress in mice”, Society for Neuroscience, Washington, D.C, 2023.11.11-15.

6) 古家宏樹，中武優子：新生仔期 MK-801 投与ラットの社会的相互作用を障害する．第 53 回日本神経精神薬理学会年会，東京，2023.9.7-9.

7) 中武優子，古家宏樹，山田光彦：幼少期トラウマ刺激が成体期の情動およびストレス脆弱性に及ぼす影響，第 53 回日本神経精神薬理学会年会，東京，2023.9.7-9.

8) 高城美保，笠井智香，黒田順平，小川夏葵，中武優子，山田大輔，斎藤顕宜，吉澤一巳：炎症性疼痛モデルマウスに対する心理的ストレスの影響．第 53 回日本神経精神薬理学会年会，東京，2023.9.7-9.

(3) 研究報告会

1) 上條諭志，三輪秀樹，山田光彦：発達期の小脳活動異常による ASD 病態形成過程の解明―発達期の小脳活動による「社会脳」の形成―．令和 5 年度神経研究所報告会，東京 2023.7.
2) 中武優子，古家宏樹：不快情動の伝染における前部島皮質オキシトシンシグナルの役割．令和 5 年度『ゲノム編集技術を用いたモデル動物作出による精神神経疾患の病態解明』開発費 3-1 班会議，東京，2023.10.19.
3) 中武優子：心理的ストレスがうつ様行動を引き起こすメカニズムの理解．薬物・精神・行動の会，東京，2023.10.19.
4) 古家宏樹，木村由佳，山田美佐，山田光彦，木村英雄：アミノ酸神経伝達とラットの行動調節における硫化水素およびポリサルファイドの機能の検討．令和 5 年度精神保健研究所研究報告会，東京，2024.3.18.
5) 中武優子，古家宏樹，山田光彦：島皮質内オキシトシンシグナルは心理的ストレスの伝達を仲介する，令和 5 年度精神保健研究所研究報告会，東京，2024.3.18.

(4) その他

1) 古家宏樹：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 5 年度研究報告会 青申賞受賞，2024.3.18.
2) 中武優子：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 5 年度研究報告会 若手奨励賞受賞，2024.3.18.

C．学会活動

(1) 学会役員

1) 三輪秀樹：日本科学振興協会 理事

(2) 座長

1) 中武優子：心理的ストレスの感受性・抵抗性に関与する神経基盤（シンポジウムコメンテーター），第 97 回日本薬理学会年会，神戸，2023.12.20.

7. 精神疾患病態研究部

Ⅰ. 研究部の概要

精神疾患病態研究部では，精神疾患の克服とその障害の支援のための先駆的研究活動を展開している．精神疾患の生物学的な研究と精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動をより発展させて全国レベルで展開することを目標としている．精神疾患の生物学的な研究は，認知社会機能，脳神経画像，神経生理機能などの中間表現型及びゲノムなどの生体試料を用いて，統合失調症，気分障害，発達障害などの幅広い精神疾患について疾患横断的に検討することにより，病態を解明し，新たな診断法・治療法の開発を行っている．この研究は，当研究部においてのみ行うものではなく，国立精神・神経医療研究センターの他の研究部門および日本全国44 の精神疾患関連研究機関の共同研究体制である COCORO（Cognitive Genetics Collaborative Research Organization：認知ゲノム共同研究機構）を運営しオールジャパン体制で遂行している．精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動は，EGUIDE プロジェクト（Effectiveness of GUIdeline for Dissemination and Education in psychiatric treatment：精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究）という全国 47 大学を含む 303 医療機関の共同研究組織を牽引し，全国でガイドラインの講習を行い，その効果検証を行っている．本年度は，COCORO と EGUIDE において，今まで行ってきた研究の集大成である成果が得られた．

令和 5 年度の人員構成は次のとおりである．部長：橋本亮太，室長：三浦健一郎，松本純弥，リサーチフェロー：長谷川尚美，髙麗雄介，科研費心理療法士：小池春菜，新谷茉莉果，瀧浪貴夢ガーネヴィカス，科研費研究員：宮川 希，山縣眞美子，杉崎友美，科研費研究補助員：木村哲也，北川 航，伊藤颯姫，宮山未来乃，河上優稀，鈴木 暁，科研費研究助手：荒木美紗江，併任研究員：久保田智香，佐藤英樹，柏木宏子，竹田康二，髙野晴成，石川夏絵，林 大祐，一戸紀孝，渡邉 惠，樋口早子，五十嵐 俊，外来研究員 12 名，客員研究員 72 名，研究生 17 名．

Ⅱ. 研究活動

A. 精神疾患の病態解明と診断法・治療法の開発研究

1) 精神疾患の脳神経画像研究（松本，三浦，髙野，伊藤，杉崎，橋本）

精神疾患の脳神経画像研究は，COCORO の主なメンバーである大阪大学（藤本，山森，安田客員研究員），生理学研究所（福永客員研究員），筑波大学（根本客員研究員），東京大学（岡田客員研究員），北海道大学（橋本直樹客員研究員），山口大学（中川客員研究員），京都大学（宮田客員研究員），富山大学（高橋客員研究員），名古屋大学（尾崎客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），榊原病院（鬼塚客員研究員），昭和大学（中村客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），産業医科大学（吉村客員研究員），奈良医科大学（牧之段客員研究員），慈恵医科大学（小高客員研究員），広島大学，日本医科大学などの多施設共同研究にて行っている．統合失調症を中心に三次元脳構造画像解析，拡散テンソル画像解析，安静時機能的 MRI 解析などを行っている．また，脳病態統合イメージングセンター（IBIC）臨床脳画像研究部の高野部長と共に，Integrative Brain Imaging Support System（IBISS：アイビス）による脳 MRI 画像データの品質評価及び管理システムの構築を行っている．国際的な脳神経画像の巨大コンソーシアムである ENIGMA との共同研究も引き続き行っている．

4 大精神疾患（統合失調症，双極症，抑うつ症，自閉スペクトラム症）の 5,549 名の被験者の MRI 脳構造画像を用いた大脳皮質厚と表面積をメタ解析し，統合失調症，双極症，抑うつ症にて皮質厚が薄く，統合失調症，抑うつ症にて皮質面精機が小さいことを見出した．68 の大脳皮質脳部位における皮質厚と面積の減少パターンの共通性を解析したところ，皮質厚については統合失調症，双極症，抑うつ症において共通しており，皮質面積については統合失調症，

抑うつ症，自閉スペクトラム症において共通していた（松本，橋本，三浦，Matsumoto et al, Mol Psychiatry，2023）．同じく 4 大精神疾患の患者 2,526 名と健常者 3,078 名の MRI 脳構造画像を用いた大脳皮質下領域の体積をメタ解析し，統合失調症，双極症，抑うつ症にて側脳室体積が大きく海馬が小さいなどの共通の特徴を見出した．これらの大脳皮質下領域の体積によるクラスタリング解析により 4 つの類型（脳バイオタイプ）に分類され，この分類は認知機能および社会機能と関連した．本研究は精神疾患を脳画像データによって臨床的意義のある患者群に層別化することに成功したため，客観的検査に基づく新たな精神疾患の疾患概念の提案に繋がる成果と考えられる（橋本，三浦，松本，Okada et al，Mol Psychiatry，2023）．本論文は，プレスリリースを行った．これらの研究により，今年度は 8 編の論文成果があった．

2）　精神疾患の眼球運動研究（三浦，松本，髙麗，伊藤，橋本）

精神疾患の眼球運動研究は，大阪大学（藤本，山森，安田客員研究員），名古屋大学（尾崎客員研究員），東京大学，奈良医科大学（牧之段客員研究員），北海道大学（橋本直樹，吉田，岡田客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），京都大学（宮田客員研究員），生理学研究所（福永客員研究員）などどの多施設共同研究にて行っている．眼球運動と認知機能を用いた統合失調症の診断マーカーの社会実装化を企業と，アカデミアの 9 医療機関の共同研究にて推進しており，眼球運動と認知機能の組合せが統合失調症の良い診断マーカーなり得ること等の成果が得られた（三浦，松本，牧之段，橋本，Okazaki et al, Psychiatry Clin Neurosci，2023）．また，医療現場で実施可能なタブレット機器にて簡便に測定できる医療機器プログラム開発を進め，タブレット実装を行い，統合失調症と健常者の鑑別に役立つ成果が得られた．また，この研究により，特許出願（特願 2023-217104「補正装置，補正方法，及び，補正プログラム」）を行った．これらの研究により，今年度は 2 編の論文成果があった．

3）　認知社会機能プロジェクト（橋本，松本，三浦，伊藤）

広く診療で使えるような統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法を開発し，2,000 例程度のデータを COCORO にて集積して解析し，普及のため各地で講習会などを行っている．認知機能障害は，簡略版 WAIS で測定する推定知能と Japanese Adult Reading Test（JART）で測定する推定病前知能の差にて算出したものである．例年行っている日本統合失調症学会のワークショップは 2024 年 4 月に実施する予定である．精神症状と認知社会機能検査データから，労働時間のアウトカムを予測し統合失調症患者にフィードバックするシステムを開発し，住吉らが複数の国際学会において発表した．今年度は 3 編の論文成果があった．

4）　精神疾患のゲノム・生体試料・分子メカニズム研究（橋本，松本，三浦）

精神疾患のゲノム・生体試料研究は，国内においては大阪大学（藤本，山森，安田，橋本 均客員研究員），名古屋大学（尾崎客員研究員），東京農業大学（中澤客員研究員），東京大学（菊地客員研究員），徳島大学（沼田客員研究員），岐阜大学（大井客員研究員），奈良医科大学（牧之段客員研究員），東京都医学研究所（新井客員研究員），福島県立医科大学などとの共同研究，そして国外においては双極性障害におけるリチウムの治療反応性の遺伝学研究のコンソーシアムである ConLiGen や ENIGMA との共同研究を中心に行っている．統合失調症に認められる 3q29 欠失や自閉スペクトラム症で認められる POGZ 変異の iPS 細胞における機能解析を行い，徐々に成果が得られている．神経研究所微細構造研究部（一戸部長：併任）と自閉スペクトラム症に関する共同研究を引き続き行っている．これらの研究により，今年度は 7 編の論文成果があった．

B．精神科医療の普及・均てん化に関する研究

1）　精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動：EGUIDE プロジェクト（長谷川，久保田，佐藤，柏木，三浦，松本，橋本）

EGUIDE プロジェクトは，精神科医に対してガイドラインの教育の講習を行い，ガイドラインの効果を検証する社会実証研究である．EGUIDE プロジェクトの主なメンバーである杏林大学（渡邊客員研究員），北里大学（稲田客員研究員），獨協医科大学（古郡客員研究員），兵庫医科大学（山田客員研究員），福岡大学（堀客員研究員）など，24 名の客員研究員と共に共同研究を実施している．対象とするガイドラインは，統合失調症薬物治療ガイドライン，うつ病治療ガイドライン，精神疾患を合併した，或いは合併の可能性のある妊産婦の診療ガイドと統合失調症に合併する肥満・糖尿病の予防ガイドであり，日本神経精神薬理学会，日本うつ病学会，日本臨床精神神経薬理学会，日本精神神経学会のバックアップを受けて行っている．2016 年に開始した EGUIDE プロジェクトは，本年度 47 大学 303 医療機関が参加する巨大なプロジェクトになり，毎年 10 回以上の講習会を全国で行い，延べ 4,200 名以上が講習を受講した．EGUIDE プロジェクトにおける検証活動は，講習受講直後のガイドラインの理解度の向上，その後のガイドラインを遵守した治療行動調査における実践度の向上，処方行動を診療の質（Quality Indicator: QI）という形で測定し，例えば統合失調症患者の退院時の抗精神病薬単剤治療率というような QI を設定し，経時的に測定することにより，講習の効果の有無についての検討を行っている．たった一日の講習を受けることにより統合失調症とうつ病の両方のガイドラインに対する理解度が顕著に向上すること実証し，そのガイドラインの実践度も顕著に向上し，それが 2 年間持続することを示してきた．また，この講習を受講した受講者の満足度は非常に高いことも報告してきた．更に，Covid 感染症の影響で，対面講習からウェブ講習に切り替えたが，ウェブ講習においても対面講習と同様に理解度及び満足度が得られることを示した．一方で，ウェブ講習が一般的になり，緊張感をもってコミュニケーションをとることの難しさも徐々に明らかになり，対面講習の必要性が明らかになってきたため，本年度は全面的に対面講習に戻し，受講者の高い満足度が得られ，理解度の向上も引き続き認められた．

本年度の成果として最も重要なものは，ガイドライン講習の講習効果を立証したことである．今までに，統合失調症とうつ病のそれぞれに対する標準的な治療である抗精神病薬単剤 治療率と抗うつ薬単剤治療率がたった 50-60%程度であり，しかも，0～100%と病院によって大きくばらついており，均てん化（全国どこでも標準的な専門医療を受けられるよう，医療技術等の格差の是正を図ること）が必要であることを明らかにしてきた．そこで，参加医療機関の統合失調症患者 7,405 名とうつ病患者 3,794 名において，ガイドライン推奨治療の施行割合を，ガイドライン講習に参加した医師が担当しているか否かで比較し，ガイドライン講習の講習効果を検討した．統合失調症では，推奨治療である他の向精神薬の併用の有無を問わない抗精神病薬単剤治療率，抗不安薬・睡眠薬の処方なし治療率，他の向精神薬の併用のない抗精神病薬単剤治療率が，受講医師の方が受講しない医師に比べ有意に高い結果であった．うつ病でも，推奨治療である他の向精神薬の併用のない抗うつ薬単剤治療率，抗不安薬・睡眠薬の処方なし治療率が，受講医師の方が受講しない医師に比べ有意に高かったことが明らかになった．これらの結果から，ガイドラインの推奨治療の普及に対する，ガイドライン講習会の有効性を見出した．本研究により，講習会の受講が，診療ガイドラインの知識を増やすことに加えて，処方もガイドラインの推奨に沿ったものに変容させることが示された．現在様々な医療領域において，診療ガイドラインが作成されているが，臨床現場で実際に活用される，すなわち，社会実装されるためにはどうすればよいのかは明確ではなかった．特に，日本においては他の診療科領域を含めても初めての成果であり，精神科領域においては世界で初めての成果である．本成果により，精神科医がこの講習を受講することにより，精神疾患患者が標準的な治療を全国どこでも受けられるようになることが期待された．このような講習会活動が，精神科領域のみではなく，全ての診療領域や全ての診療ガイドラインにおいて行われるようになれば，診療ガイドラインの社会実装が進み，全国のどこにいても，誰もが診療ガイドラインの推奨する治療を受けることができるようになることが期待された．

統合失調症の薬物療法において，長時間作用型注射抗精神病薬（LAI）は再発防止に有効で

あることが知られているが，LAI の使用頻度や他の向精神薬の併用について，詳細な状況は日本では分かっていないため統合失調症 2,518 名にて調査したところ，LAI の使用頻度は 10.4% であり，LAI 群では，非 LAI 群に比べ，抗精神病薬の併用が有意に多く，投与量も有意に多いが，抗不安薬／睡眠薬の併用が有意に少なかった．このような実態から LAI 処方時には抗精神病薬の併用に気を付ける必要があることが明らかになった（長谷川, 松本, 三浦, 橋本, Onitsuka et al, Journal of Clinical Psychopharmacology, 2023）.

統合失調症においてもうつ病においても，その主剤である抗精神病薬と抗うつ薬の単剤治療が推奨され，向精神薬の併用は原則的に推奨されていない．そこで，入院前後で実際に処方がどのように変わるかについて検討を行った．驚くべきことに，入院前後に主剤が単剤であるか多剤であるかは変わらないことが多く，入院前後で処方が全く変わらない完全漫然処方が 10-20%も存在することが分かった．更に，主剤が多剤から単剤になると他の向精神薬の併用も減り，単剤から多剤になると他の向精神薬が増えることがわかった．入院前の外来治療から単剤治療を心掛け，入院中においても同様に心掛けを継続する必要があることが示された（長谷川，松本，三浦，橋本，Hashimoto et al, BMC Psychiatry, 2023）.

このように日本の精神科診療実態調査では，全国の平均値や病院ごとの平均値を検討して検討しているが，一人一人の患者については，どれぐらいガイドラインに準拠した治療を行っているかを評価する方法はなく，ガイドランの全ての臨床疑問を網羅して解釈をした上で，患者に説明して共同意思決定を行うこととなる．精神科医はもちろんガイドラインを踏まえた適切な解釈をできるように精進すべきであるが，患者がその全てを同じように理解することは困難である．そこで，患者がより理解しやすくなるように，処方がどれぐらいガイドラインに一致しているかという指標（Individual fitness score: IFS）を昨年度に作成した．この IFS は，最もガイドラインに適合している処方を 100 点とし，ガイドラインにて勧められていない治療を行うと減点を行い，最低点を 0 点とするようにしている．この際に最も重要なことは，統合失調症においてもうつ病においても，下位診断（統合失調症：治療抵抗性，うつ病：軽症／中等症・重症/精神病性）によって推奨される治療が異なるため，最もガイドラインに適合している治療が異なるということである．例えば統合失調症においては第二世代抗精神病薬単剤治療を行うと 100 点であり，抗精神病薬や向精神薬の併用を行うと一剤あたり 10～20 点を減点される．治療抵抗性統合失調症においては，クロザピン治療を行うと 100 点となり，クロザピン治療を行っていなければ 40 点の減点となる．このような IFS を用いた診療場面として，統合失調症患者が不眠を訴え睡眠薬の処方を希望した際に，IFS が 80 点から 60 点になることを説明し，ガイドラインでは不眠の場合にはその原因を精査することになっていることから，問診を行って，不眠の理由は幻聴の悪化とわかり，抗精神病薬の用量が不十分なので増量するという対応を行うというような流れとなる．患者にとっては，点数にて自身の処方と標準的な治療との違いが理解しやすく，標準的な治療を行うことについて説明することによって，治療に対する理解を深めやすくなると考えられる画期的な研究成果である．

この IFS の意義について，統合失調症患者さん 400 名において「ガイドライン一致率」が高いと陽性陰性症状評価尺度（PANSS）を用い評価した精神症状が軽いことが見いだされ，2 年間以上の経過の中で「ガイドライン一致率」の改善度と精神症状の改善度との間に正の相関関係があることが見出された（長谷川，松本，三浦，橋本，Kodaka et al, Int J Neuropsychopharmacol, 2023）．また「ガイドライン一致率」が高いほど，統合失調症の社会機能的転帰の一つである労働時間が長いことが見いだされた（伊藤，長谷川，松本，三浦，橋本，Ito et al, Schizophrenia (Heidelb), 2023）．これらの成果は，「ガイドライン一致率」を高めることが統合失調症患者の症状や社会機能の改善に役立つことを示唆している．このように，ガイドラインの普及教育検証活動を全国で行い，論文成果は 6 編であった．

2）　精神科治療ガイドラインの作成・改訂（橋本）

ガイドラインの推奨治療の普及に対する，ガイドライン講習会の有効性を見出し，精神科医に対するガイドラインを用いた教育が行われることにより，より適切な治療が広く行われることにつながる可能性を示した．これについてはプレスリリースを行い社会に広く発信し医学系情報メディアを中心に注目を集め広くインターネット等で取り上げられた．これらの活動を通じて，得られた知見を次に作成する統合失調症診療ガイドラインに生かす予定である．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・　2022 年度に作成し 2023 年 2 月に公開した専門家向けの統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 の当事者・支援者用の統合失調症薬物治療ガイドを 2023 年 10 月に出版し，当事者の疑問に沿って，薬の効果や副作用など最新の薬物治療についてわかりやすい言葉で説明している（橋本）．

(2) 専門教育面における貢献

・　統合失調症やうつ病などのガイドラインの作成を行い，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動である EGUIDE プロジェクトを全国展開している．EGUIDE プロジェクトにおいては，統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国の精神科医を対象に行い，その医療機関における治療に影響を与えるかどうかについての検討を行い，精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果を検証している．令和 5 年度は，統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国 20 か所で行い，47 以上の医療機関，延 400 名の精神科医が参加した（長谷川，久保田，柏木，橋本）．

・　国立大学法人 大阪大学の医学系研究科，連合小児発達学研究科においては招へい教授として，奈良県立医科大学においては非常勤講師として，精神医学研究の指導や知見の教授を行っている（橋本）．

(3) 精研の研修の主催と協力

・　2023 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修で第 2 回目のうつ病の標準治療研修，統合失調症の標準治療研修を行った（柏木，長谷川，橋本）．

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・　2023 年 4 月に，日本精神神経学会，日本生物学的精神医学会，日本神経精神薬理学会，日本うつ病学会など 13 の精神医学関連諸学会がまとめた「精神疾患の克服と障害支援にむけた研究推進の提言」に日本精神神経学会事務局，提言作成ワーキンググループ長として作成した．また，6 月には，「精神疾患の克服と障害支援にむけた研究推進の提言 当事者・家族・一般向け版」も提言作成ワーキンググループ長として作成した．その後は，各種省庁，PMDA，製薬協などに説明し，政策立案に資する活動を行った（橋本）．

(5) センター内における臨床的活動

・　外来診療において，連携新患，統合失調症外来をそれぞれ週に 1 回の新患枠の診察及び，再診を週に半日行っている．専門として，統合失調症及び発達障害の診療を行い，病院内外からの紹介を受け，セカンドオピニオン対応も行っている（橋本）．

(6) その他

Ⅳ．研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1) Okada N, Fukunaga M, Miura K, Nemoto K, Matsumoto J, Hashimoto N, Kiyota M, Morita K, Koshiyama D, Ohi K, Takahashi T, Koeda M, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Hasegawa N, Narita H, Yokoyama S, Mishima R, Kawashima T, Kobayashi Y, Sasabayashi D, Harada K, Yamamoto M, Hirano Y, Itahashi T, Nakataki M, Hashimoto RI, Tha KK, Koike S, Matsubara T, Okada G, van Erp TGM, Jahanshad N, Yoshimura R, Abe O, Onitsuka T, Watanabe Y, Matsuo K, Yamasue H, Okamoto Y, Suzuki M, Turner JA, Thompson PM, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R: Subcortical volumetric alterations in four major psychiatric disorders: a mega-analysis study of 5604 subjects and a volumetric data-driven approach for classification. Molecular Psychiatry Online ahead of print.

2) Schijven D, Postema MC, Fukunaga M, Matsumoto J, Miura K, de Zwarte SMC, van Haren NEM, Cahn W, Hulshoff Pol HE, Kahn RS, Ayesa-Arriola R, Ortiz-Garcia de la Foz V, Tordesillas-Gutierrez D, Vazquez-Bourgon J, Crespo-Facorro B, Alnæs D,Dahl A, Westlye LT, Agartz I, Andreassen OA, Jonsson EG, Kochunov P, Bruggemann JM, Catts SV, Michie PT, Mowry BJ, Quide Y, Rasser PE, Schall U, Scott RJ, Carr VJ, Green MJ, Henskens FA, Loughland CM, Pantelis C, Weickert CS, Weickert TW,de Haan L, Brosch K, Pfarr JK, Ringwald KG, Stein F, Jansen A, Kircher TTJ, Nenadic I, Kramer B, Gruber O, Satterthwaite TD, Bustillo J, Mathalon DH, Preda A, Calhoun VD, Ford JM, Potkin SG, Chen J, Tan Y, Wang Z, Xiang H, Fan F,Bernardoni F, Ehrlich S, Fuentes-Claramonte P, Garcia-Leon MA, Guerrero-Pedraza A, Salvador R, Sarro S, Pomarol-Clotet E, Ciullo V, Piras F, Vecchio D, Banaj N, Spalletta G, Michielse S, van Amelsvoort T, Dickie EW, Voineskos AN, Sim K,Ciufolini S, Dazzan P, Murray RM, Kim WS, Chung YC, Andreou C, Schmidt A,Borgwardt S, McIntosh AM, Whalley HC, Lawrie SM, du Plessis S, Luckhoff HK, Scheffler F, Emsley R, Grotegerd D, Lencer R, Dannlowski U, Edmond JT, Rootes-Murdy K, Stephen JM, Mayer AR, Antonucci LA, Fazio L, Pergola G, Bertolino A,Diaz-Caneja CM, Janssen J, Lois NG, Arango C, Tomyshev AS, Lebedeva I, Cervenka S, Sellgren CM, Georgiadis F, Kirschner M, Kaiser S, Hajek T, Skoch A, Spaniel F, Kim M, Kwak YB, Oh S, Kwon JS, James A, Bakker G, Knochel C, Stablein M, Oertel V, Uhlmann A, Howells FM, Stein DJ, Temmingh HS, Diaz-Zuluaga AM, Pineda-Zapata JA, Lopez-Jaramillo C, Homan S, Ji E, Surbeck W, Homan P, Fisher SE, Franke B, Glahn DC, Gur RC, Hashimoto R, Jahanshad N, Luders E, Medland SE, Thompson PM, Turner JA, van Erp TGM, Francks C: Large-scale analysis of structural brain asymmetries in schizophrenia via the ENIGMA consortium. Proc Natl Acad Sci U S A 4:120(14):e2213880120, 2023.

3) Kitamura S, Matsuoka K, Takahashi M, Hiroaki Y, Ishida R, Kishimoto N, Yasuno F, Yasuda Y, Hashimoto R, Miyasaka T, Kichikawa K, Kishimoto T, Makinodan M.: Association of adverse childhood experience-related increase in neurite density with sensory over-responsivity in autism spectrum disorder: A neurite orientation dispersion and density imaging study. J Psychiatr Res 161: 316-323, 2023.

4) Hashimoto N, Yasui-Furukori N, Hasegawa N, Ishikawa S, Hori H, Iida H, Ichihashi K, Miura K, Matsumoto J, Numata S, Kodaka F, Furihata R, Ohi K, Ogasawara K, Iga JI, Muraoka H, Komatsu H, Takeshima M, Atake K, Kido M, Nakamura T, Kishimoto T, Hishimoto A, Onitsuka T, Okada T, Ochi S, Nagasawa T, Makinodan M, Yamada H, Tsuboi T, Yamada H, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: Change of prescription for patients with schizophrenia or major depressive disorder during admission: real-world prescribing

surveys from the effectiveness of guidelines for dissemination and education psychiatric treatment project. BMC Psychiatry 23(1): 473, 2023.

5) Okazaki K, Miura K, Matsumoto J, Hasegawa N, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Makinodan M, Hashimoto R: Discrimination in the clinical diagnosis between patients with schizophrenia and healthy controls using eye movement and cognitive functions. Psychiatry Clin Neurosci 77(7): 393-400, 2023.

6) Tachi R, Ohi K, Nishizawa D, Soda M, Fujikane D, Hasegawa J, Kuramitsu A, Takai K, Muto Y, Sugiyama S, Kitaichi K, Hashimoto R, Ikeda K, Shioiri T: Mitochondrial genetic variants associated with bipolar disorder and Schizophrenia in a Japanese population. Int J Bipolar Disord 11(1): 26, 2023.

7) Ohi K, Nishizawa D, Sugiyama S, Takai K, Fujikane D, Kuramitsu A, Hasegawa J, Soda M, Kitaichi K, Hashimoto R, Ikeda K, Shioiri T: Cognitive performances across individuals at high genetic risk for schizophrenia, high genetic risk for bipolar disorder, and low genetic risks: a combined polygenic risk score approach. Psychol Med 53(10): 4454-4463, 2023.

8) Onitsuka T, Okada T, Hasegawa N, Tsuboi T, Iga JI, Yasui-Furukori N, YamadaN, Hori H, Muraoka H, Ohi K, Ogasawara K, Ochi S, Takeshima M, Ichihashi K, Fukumoto K, Iida H, Yamada H, Furihata R, Makinodan M, Takaesu Y, Numata S, Komatsu H, Hishimoto A, Kido M, Atake K, Yamagata H, Kikuchi S, Hashimoto N, Usami M, Katsumoto E, Asami T, Kubota C, Matsumoto J, Miura K, Hirano Y, Watanabe K, Inada K, Hashimoto R: Combination Psychotropic Use for Schizophrenia With Long-Acting Injectable Antipsychotics and Oral Antipsychotics: A Nationwide Real-World Study in Japan. J Clin Psychopharmacol 43(4): 365-368, 2023.

9) Kodaka F, Ohi K, Yasuda Y, Fujimoto M, Yamamori H, Hasegawa N, Ito S, Fukumoto K, Matsumoto J, Miura K, Yasui-Furukori N, Hashimoto R: Relationships Between Adherence to Guideline Recommendations for Pharmacological Therapy Among Clinicians and Psychotic Symptoms in Patients With Schizophrenia. Int J Neuropsychopharmacol 26(8): 557-565, 2023.

10) Sakai Y, Ito S, Matsumoto J, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Hasegawa N, Ishimaru K, Miura K, Hashimoto R: Longitudinal characteristics of insight and clinical factors in patients with schizophrenia. Neuropsychopharmacol Rep 43(3): 373-381, 2023.

11) Kageyama M, Yokoyama K, Ichihashi K, Noma S, Hashimoto R, Nishitani M, Okamoto R, Solomon P: A peer-led learning program about intimate and romantic relationships for persons with mental disorders (AIRIKI): co-creation pilot feasibility study. BMC Psychiatry 23(1): 767, 2023.

12) Hasegawa N, Yasuda Y, Yasui-Furukori N, Yamada H, Hori H, Ichihashi K, Takaesu Y, Iida H, Muraoka H, Kodaka F, Iga JI, Hashimoto N, Ogasawara K, Ohi K, Fukumoto K, Numata S, Tsuboi T, Usami M, Hishimoto A, Furihata R, Kishimoto T, Nakamura T, Katsumoto E, Ochi S, Nagasawa T, Atake K, Kubota C, Komatsu H, Yamagata H, Ide K, Takeshima M, Kido M, Kikuchi S, Okada T, Matsumoto J, Miura K, Shimazu T, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: Effect of education regarding treatment guidelines for schizophrenia and depression on the treatment behavior of psychiatrists: A multicenter study. Psychiatry Clin Neurosci 77(10): 559-568, 2023.

13) Matsumoto J, Fukunaga M, Miura K, Nemoto K, Okada N, Hashimoto N, Morita K, Koshiyama D, Ohi K, Takahashi T, Koeda M, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Ito S, Yamazaki R, Hasegawa N, Narita H, Yokoyama S, Mishima R, Miyata J, Kobayashi Y, Sasabayashi D, Harada K, Yamamoto M, Hirano Y, Itahashi T, Nakataki M, Hashimoto RI,

Tha KK, Koike S, Matsubara T, Okada G, Yoshimura R, Abe O, van Erp TGM, Turner JA, Jahanshad N, Thompson PM, Onitsuka T, Watanabe Y, Matsuo K, Yamasue H, Okamoto Y, Suzuki M, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R: Cerebral cortical structural alteration patterns across four major psychiatric disorders in 5549 individuals. Mol Psychiatry 28(11): 4915-4923, 2023.

14) Matsumoto J, Miura K, Fukunaga M, Nemoto K, Koshiyama D, Okada N, Morita K, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Ito S, Hasegawa N, Watanabe Y, Kasai K, Hashimoto R: Association Study Between White Matter Microstructure and Intelligence Decline in Schizophrenia. Clin EEG Neurosci 54(6): 567-573, 2023.

15) Ito S, Ohi K, Yasuda Y, Fujimoto M, Yamamori H, Matsumoto J, Fukumoto K, Kodaka F, Hasegawa N, Ishimaru K, Miura K, Yasui-Furukori N, Hashimoto R: Better adherence to guidelines among psychiatrists providing pharmacological therapy is associated with longer work hours in patients with schizophrenia. Schizophrenia (Heidelb) 9(1): 78, 2023.

16) Ito S, Matsumoto J, Hashimoto R, Ishimaru K: Development of the Delusional Interpretation Scale and examination of related variables. PCN rep 2(4): e156, 2023.

17) Boen R, Kaufmann T, van der Meer D, Frei O, Agartz I, Ames D, Andersson M, Armstrong NJ, Artiges E, Atkins JR, Bauer J, Benedetti F, Boomsma DI, Brodaty H, Brosch K, Buckner RL, Cairns MJ, Calhoun V, Caspers S, Cichon S, Corvin AP, Facorro BC, Dannlowski U, David FS, de Geus EJC, de Zubicaray GI, Desrivieres S, Doherty JL, Donohoe G, Ehrlich S, Eising E, Espeseth T, Fisher SE, Forstner AJ, Uya LF, Frouin V, Fukunaga M, Ge T, Glahn DC, Goltermann J, Grabe HJ, Green MJ, Groenewold NA, Grotegerd D, Hahn T, Hashimoto R, Hehir-Kwa JY, Henskens FA, Holmes AJ, Haberg AK, Haavik J, Jacquemont S, Jansen A, Jockwitz C, Jonsson EG, Kikuchi M, Kircher T, Kumar K, Le Hellard S, Leu C, Linden DE, Liu J, LoughnanR, Mather KA, McMahon KL, McRae AF, Medland SE, Meinert S, Moreau CA, Morris DW, Mowry BJ, Muhleisen TW, Nenadic I, Nothen MM, Nyberg L, Owen MJ, Paolini M, Paus T, Pausova Z, Persson K, Quide Y, Marques TR, Sachdev PS, Sando SB, Schall U, Scott RJ, Selbæk G, Shumskaya E, Silva AI, Sisodiya SM, Stein F, Stein DJ, Straube B, Streit F, Strike LT, Teumer A, Teutenberg L, Thalamuthu A, Tooney PA, Tordesillas-Gutierrez D, Trollor JN, Ent DV, van den Bree MBM, van Haren NEM, Vazquez-Bourgon J, Volzke H, Wen W, Wittfeld K, Ching CRK, Westlye LT, Thompson PM, Bearden CE, Selmer KK, Alnæs D, Andreassen OA, Sonderby IE: Beyond the Global Brain Differences: Intra-individual Variability Differences in 1q21.1 Distal and 15q11.2 BP1-BP2 Deletion Carriers. Biol Psychiatry 95(2):147-160, 2024.

18) Yamagata H, Fujii Y, Ochi S, Seki T, Hasegawa N, Yamada H, Hori H, Ichihashi K, Iga J, Ogasawara K, Hashimoto N, Iida H, Ohi K, Tsuboi T, Numata S, Hishimoto A, Usami M, Katsumoto E, Muraoka H, Takaesu Y, Nagasawa T, Komatsu H, Miura K, Matsumoto J, Inada K, Nakagawqa S, Hashimoto R: Effect of the guideline education program on anticholinergic and benzodiazepine use in outpatients with schizophrenia and major depressive disorder: The effectiveness of guidelines for Dissemination and education in psychiatric treatment (EGUIDE) project. Psychiatry Research Communications 4:100158, 2024.

19) Ou AH, Rosenthal SB, Adli M, Akiyama K, Akula N, Alda M, Amare AT, Ardau R, Arias B, Aubry JM, Backlund L, Bauer M, Baune BT, Bellivier F, Benabarre A, Bengesser S, Bhattacharjee AK, Biernacka JM, Cervantes P, Chen GB, Chen HC, Chillotti C, Cichon S, Clark SR, Colom F, Cousins DA, Cruceanu C, Czerski PM, Dantas CR, Dayer A, Del Zompo M, Degenhardt F, DePaulo JR, Rtain B, Falkai P, Fellendorf FT, Ferensztajn-Rochowiak E,

Forstner AJ, Frisen L, Frye MA, Fullerton JM, Gard S, Garnham JS, Goes FS, Grigoroiu-Serbanescu M, Grof P, Gruber O, Hashimoto R, Hauser J, Heilbronner U, Herms S, Hoffmann P, Hofmann A, Hou L, Jamain S, Jimenez E, Kahn JP, Kassem L, Kato T, Kittel-Schneider S, Konig B, Kuo PH, Kusumi I, Lackner N, Laje G, Landen M, Lavebratt C, Leboyer M, Leckband SG, Jaramillo CAL, MacQueen G, Maj M, Manchia M, Marie-Claire C,Martinsson L, Mattheisen M, McCarthy MJ, McElroy SL, McMahon FJ, Mitchell PB, Mitjans M, Mondimore FM, Monteleone P, Nievergelt CM, Nothen MM, Novak T, Osby U, Ozaki N, Papiol S, Perlis RH, Pisanu C, Potash JB, Pfennig A, Reich-Erkelenz D, Reif A, Reininghaus EZ, Rietschel M, Rouleau GA, Rybakowski JK, Schalling M,Schofield PR, Schubert KO, Schulze TG, Schweizer BW, Seemüller F, Severino G,Shekhtman T, Shilling PD, Shimoda K, Simhandl C, Slaney CM, Squassina A, Stamm T, Stopkova P, Tighe SK, Tortorella A, Turecki G, Vieta E, Volkert J, Witt S, Wray NR, Wright A, Young LT, Zandi PP, Kelsoe JR: Lithium response in bipolardisorder is associated with focal adhesion and PI3K-Akt networks: a multi-omics replication study. Transl Psychiatry 14(1): 109, 2024.

20) Yoshida M, Miura K, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Iwase M, Hashimoto R: Visual salience is affected in participants with schizophrenia during free-viewing. Sci Rep 14(1): 4606, 2024.

21) Lo T, Kushima I, Kimura H, Aleksic B, Okada T, Kato H, Inada T, Nawa Y, Torii Y, Yamamoto M, Kimura R, Funabiki Y, Kosaka H, Numata S, Kasai K, Sasaki T, Yokoyama S, Munesue T, Hashimoto R, Yasuda Y, Fujimoto M, Usami M, Itokawa M, Arai M, Ohi K, Someya T, Watanabe Y, Egawa J, Takahashi T, Suzuki M, Yamasue H, Iwata N, Ikeda M, Ozaki N: Association between copy number variations in parkin (PRKN) and schizophrenia and autism spectrum disorder: A case-control study. Neuropsychopharmacol Rep 44(1): 42-50, 2024.

22) Yamazaki R, Matsumoto J, Ito S, Nemoto K, Fukunaga M, Hashimoto N, Kodaka F, Takano H, Hasegawa N, Yasuda Y, Fujimoto M, Yamamori H, Watanabe Y, Miura K, Hashimoto R: Longitudinal reduction in brain volume in patients with schizophrenia and its association with cognitive function. Neuropsychopharmacol Rep 44(1): 206-215, 2024.

23) Mori D, Ikeda R, Sawahata M, Yamaguchi S, Kodama A, Hirao T, Arioka Y, Okumura H, Inami C, Suzuki T, Hayashi Y, Kato H, Nawa Y, Miyata S, Kimura H, Kushima I, Aleksic B, Mizoguchi H, Nagai T, Nakazawa T, Hashimoto R, Kaibuchi K, Kume K, Yamada K, Ozaki N: Phenotypes for general behavior, activity, and body temperature in 3q29 deletion model mice. Transl Psychiatry 14(1): 138, 2024.

24) Arihisa W, Kondo T, Yamaguchi K, Matsumoto J, Nakanishi H, Kunii Y, Akatsu H, Hino M, Hashizume Y, Sato S, Sato S, Niwa SI, Yabe H, Sasaki T, Shigenobu S, Setou M: Lipid-correlated alterations in the transcriptome are enriched in several specific pathways in the postmortem prefrontal cortex of Japanese patients with schizophrenia. Neuropsychopharmacol Rep 43(3): 403-413, 2023.

25) Itagaki S, Ohnishi T, Toda W, Sato A, Matsumoto J, Ito H, Ishii S, Yamakuni R, Miura I, Yabe H. Reduced dopamine transporter availability in drug-naïve adult attention-deficit/hyperactivity disorder. PCN Rep 3(1):e177, 2024.

26) 稲垣 中，橋本亮太，稲田 健，坪井貴嗣，三島和夫，小路純央，齊尾武郎，安田由華，横井優磨，小田陽彦，加藤正樹，岸田郁子，岸本泰士郎，齊藤卓弥，冨田 哲，古郡規雄，松尾幸治，渡邊衡一郎，木下利彦，三木和平，三野 進，三村 將: 精神科で本当に必要な薬は何か？：精神科領域の安定確保医薬品に関する意識調査. 精神神経学雑誌 125(11): 932-943，2023.

(2) 総説

1) 越智紳一郎, 橋本亮太：統合失調症の薬物治療ガイドラインとその普及・教育・検証活動. 65(4): 463-471，2023.
2) 橋本亮太，中込和幸，統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 年度版改訂のポイント．日本病院薬剤師会雑誌 59(4): 344-348，2023.
3) 三浦健一郎，松本純弥，長谷川尚美，橋本亮太：画像・生理学的指標による統合失調症診断の可能性．臨床精神医学 52(5): 475-481，2023.
4) 山田 恒，橋本亮太：抗精神病薬（統合失調症治療薬）．BRAIN and NERVE 75(5): 579-584，2023.
5) 山﨑龍一，三浦健一郎，松本純弥，橋本亮太：脳神経画像の解析と縦断データに基づく，精神疾患の治療効果および予後に関する層別化．月刊精神科 42(6): 738-744，2023.
6) 稲田 健，橋本亮太，古郡規雄：どのようにして作成されたか 特集 1／統合失調症薬物治療ガイドライン 2022．月刊精神科 43(1): 1-6，2023.
7) 堀 輝，橋本亮太：統合失調症薬物治療ガイドラインの社会実装に向けた取り組み．月刊精神科 43(1): 72-77，2023.
8) 松本純弥，三浦健一郎，根本清貴，安田由華，橋本亮太：精神疾患における画像診断の最前線−現状と今後の可能性−．月刊インナービジョン 39(1): 56-59，2024.

(3) 著書

1) 橋本亮太（日本神経精神薬理学会・日本臨床精神神経薬理学会 統合失調症薬物治療ガイド 2022 ワーキンググループ）：患者と支援者のための統合失調症薬物治療ガイド 2022．新興医学出版，東京，pp1-64，2023.
2) 稲田 健，橋本亮太：第 IX 章精神疾患「統合失調症」．日常診療に活かす診療ガイドライン UP-TO-DATE 2024-2025．メディカルレビュー社，東京，pp614-619，2024.

(4) 研究報告書

1) 橋本亮太：発達障害のリスク遺伝子の同定．2023 年度科学研究費助成事業特別推進研究「発達障害に関わる神経生物学的機構の霊長類的基盤の解明（代表：高田昌彦）」2023 年度研究成果報告書．2024.
2) 橋本亮太，三浦健一郎，松本純弥，安田由華：精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究．2023 年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）2023 年度 委託研究開発成果報告書．2024.
3) 橋本亮太，三浦健一郎，松本純弥，安田由華：AI 技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究．2023 年度日本医療研究開発機構 医工連携・人工知能実装研究事業 2023 年度 委託研究開発成果報告書．2024.
4) 橋本亮太，三浦健一郎，松本純弥：iPS 細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究．2023 年度日本医療研究開発機構 脳とこころの研究推進プログラム（精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト）2023 年度 委託研究開発成果報告書．2024.
5) 橋本亮太：気分障害と統合失調症の疾患連続性に関する脳画像等の総合的解析研究．2023 年度日本医療研究開発機構 戦略的国際脳科学研究推進プログラム「縦断的 MRI データに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明（研究開発代表者：岡本泰昌）」2023 年度 委託研究開発成果報告書．2024.
6) 橋本亮太：脳神経画像の解析と縦断データに基づく，精神疾患の治療効果及び予後に関する層別化．2023 年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）「精神疾患レジストリの利活用による治療効果，転帰予測，新たな層別化に関する研究（研究開発代表

者：中込和幸)」2023 年度 委託研究開発成果報告書．2024.

7) 橋本亮太：解析対象 ASD/SCZ 家系の選定と臨床情報の収集．2023 年度日本医療研究開発機構 ゲノム医療実現バイオバンク利活用プログラム：B-Cure ゲノム医療実現推進プラットフォーム・先端ゲノム研究開発事業「精神疾患の個別化医療を実現するためのゲノム・空間オミクス多施設共同研究（研究開発代表者：徳永勝士)」2023 年度 委託研究開発成果報告書．2024.

8) 三浦健一郎：眼球運動の状況予測性解析法の研究開発と疾患横断的理解．2023 年度日本医療研究開発機構 革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト「双方向トランスレーショナルアプローチによる精神疾患の脳予測性障害機序に関する研究開発（研究開発代表者：小池進介)」2023 年度 委託研究開発成果報告書．2024.

9) 三浦健一郎, 松本純弥, 長谷川尚美：精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究．2023 年度科学研究費助成事業 基盤研究（C）研究成果報告書．2024.

10) 松本純弥，三浦健一郎，長谷川尚美：精神疾患の病前推定知能と脳構造画像についての疾患横断的大規模多施設研究．2023 年度科学研究費助成事業 基盤研究（C）研究実施状況報告書．2024.

11) 長谷川尚美：精神疾患の処方行動における治療ガイドラインの普及と教育の効果検証．2023 年度科学研究費助成事業 若手研究成果報告書．2024.

12) 長谷川尚美：精神科領域の治療ガイドラインの普及と教育が実臨床の治療行動に及ぼす効果の検証．2023 年度科学研究費助成事業 若手研究実施状況報告書．2024.

(5) 翻訳

(6) その他

1) 岩田仲生，稲田 健，橋本亮太，古郡規雄：Round Table Discussion【座談会】,「統合失調症薬物治療ガイドライン」全面改訂を語る．精神科臨床 Legato 9(1)： 4-11，2023.

2) 橋本亮太：精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動-EGUIDE プロジェクト-（精神医療奨励賞受賞講演）．精神神経学雑誌 125(9): 799-807，2023.

3) 橋本亮太：精神科医療の世界を変えるための研究とは-病態研究から社会実装研究まで（第 41 回日本精神医学会教育講演）．日本社会精神医学会雑誌 32(4): 318-326，2023.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 橋本亮太：脳神経画像の解析と縦断データに基づく，精神疾患の治療効果及び予後に関する層別化．第 119 回日本精神神経学会，横浜，2023.6.23.

2) 橋本亮太：診療ガイドラインの普及とその検証．第 119 回日本精神神経学会，横浜，2023.6.23.

3) 中澤敬信，橋本 均，橋本亮太：精神疾患の基礎臨床連携研究．第 46 回日本神経科学大会，仙台，2023.8.3.

(2) 一般演題

1) Igarashi S, Tsuboi T, Hasegawa N, Ochi S, Muraoka H, Fukumoto K, Kodaka F, Iga J, Ohi K, Takaesu Y, Kashiwagi H, Tagata H, Iida H, Komatsu H, Numnata S, Matsumoto J, Miura K, Yasui-Furukori N, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: Real world survey on psychopharmacology after electroconvulsive therapy in patients with depression: the Effectiveness of Guidelines for Dissemination and Education in Psychiatric Treatment (EGUIDE) project. 34th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology, Montreal, 2023.5.8.

2) Muraoka H, Fukumoto K, Hasegawa N, Yasui-Furukori N, Kodaka F, Ohi K, Kashiwagi H,

Matsumoto J, Miura K, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: Effectiveness of The EGUIDE Program on The Treatment of Major Depressive Disorder In Japan: The Importance of Severity Assessment. 34th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology, Montreal, 2023.5.8.

3) Ohi K, Nishizawa D, Sugiyama S, Takai K, Fujikane D, Kuramitsu A, Hasegawa J, Soda M, Kitaichi K, Hashimoto R, Ikeda K, Shioiri T: Cognitive Performances across Individuals at High Genetic Risk for Schizophrenia, High Genetic Risk for Bipolar Disorder, and Low Genetic Risks: A Combined Polygenic Risk Score Approach. 2023 Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS), Toronto, 2023.5.13.

4) Hashimoto N, Nemoto K, Fukunaga M, Matsumoto J, Miura K, Okada N, Morita K, Koshiyama D, Ohi K, Takahashi T, Koeda M, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Hasegawa N, Ito S, Narita H, Yokoyama S, Mishima R, Kawashima T, Kobayashi Y, Sasabayashi D, Harada K, Yamamoto M, Hirano Y, Itahashi T, Nakataki R, Hashimoto R, Tha KK, Koike S, Matsubara T, Okada G, Yoshimura R, Abe O, Onitsuka, Watanabe Y, Matsuo K, Yamasue H, Okamoto Y, Suzuki M, Ozaki N, Kasai K, Hashimoto R: Mega-analysis of differentiation of schizophrenia using structural MRI with consideration of scanner differences. 2023 Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS), Toronto, 2023.5.13.

5) Sumiyoshi C, Ito S, Matsumoto J, Fujino H, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Miura K, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Experiential Negative Symptoms and Self-reliance Predict Work Outcome in Patients with Schizophrenia. 2023 Congress of the Schizophrenia International Research Society (SIRS), Tronto, 2023.5.14.

6) Sumiyoshi C, Ito S, Matsumoto J, Fujino H, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Miura K, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Development of a practical chart to Predicting work outcome attainable work hours in patients with schizophrenia: Development of a feedback system. 23rd WPA World Congress of Psychiatry (WCP 2023), Vienna, 2023.9.29.

7) Takemura A, Miura K: Single-unit activity in cortical area medial superior temporal (MST) area associated with short-latency ocular following responses (OFRs): Evidence for temporal impulseresponse function of the visual system. SFN Neuroscience 2023, Washiington DC, 2023.11.12.

8) Ono S, Miyamoto T, Miura K, Kizuka T: Evaluation of cortical visuomotor function using smooth pursuit eye movements in athletes. SFN Neuroscience 2023, Washiington DC, 2023.11.12.

9) 長谷川尚美，安田由華，古郡規雄，市橋香代，堀 輝，飯田仁志，村岡寛之，稲田 健，渡邊衡一郎，橋本亮太：統合失調症とうつ病の治療に対する EGUIDE プロジェクトの効果．第 31 回日本医学会総会（6 NC リトリートポスターセッション），東京，2023.4.22.

10) 松本純弥，福永雅喜，三浦健一郎，岡田直大，根本清貴，藤本美智子，肥田道彦，宮田 淳，大井一高，中瀧理仁，吉村玲児，岡本泰昌，原田健一郎，橋本直樹，鬼塚俊明，山本真江里，山末英典，髙橋 努，渡邊嘉之，笠井清登，橋本亮太：多施設共同研究による統合失調症と双極性障害の大脳皮質構造画像解析．第 119 回日本精神神経学会学術総会，横浜，2023.6.22.

11) Matsumoto J，Fukunaga M，Miura K，Nemoto K，Okada N Hashimoto N，Morita K，Koshiyama D，Ohi K，Takahashi T，Koeda M，Yamamori H，Fujimoto M，Yasuda Y，Hasegawa N, Narita H, Yokoyama S, Mishima R, Kawashima T, Kobayashi Y, Sasabayashi D，Harada K，Yamamoto M，Hirano Y，Itahashi T，Nakataki M，Hashimoto RI，Tha K，Koike S，Matsubara T，Okada G，Yoshimiura R，Abe O，Onitsuka T，Watanabe Y，Matsuo K，Yamasue H，Okamoto Y，Suzuki M，Ozaki N，Kasai K，Hashimoto R：Cortical structural

mega-analysis across four major psychiatric disorders in 5432 individuals. 第 119 回日本精神神経学会学術総会，横浜，2023.6.22.

12) 福本健太郎，稲田 健，小高文聰，長谷川尚美，村岡寛之，堀 輝，市橋香代，安田由華，飯田仁志，大井一高，松本純弥，三浦健一郎，古郡規雄，渡邊衡一郎，大塚耕太郎，橋本亮太：統合失調症薬物治療ガイド/うつ病治療ガイドラインに基づいた治療適合度（individual fitness score)の開発．第 119 回日本精神神経学会学術総会，横浜，2023.6.23.

13) 中村敏範，降籏隆二，長谷川尚美，大槻 玲，小高文聰，古郡規雄，村岡寛之，坪井貴嗣，越智紳一郎，市橋香代，堀 輝，三浦健一郎，松本純弥，沼田周助，渡邊衡一郎，稲田 健，鷲塚伸介，橋本亮太：統合失調症・うつ病入院患者の睡眠薬処方の年次推移の検討，シンポジウム．第 119 回日本精神神経学会学術総会，横浜，2023.6.23.

14) 北村聡一郎，松岡 究，高橋誠人，吉川裕晶，石田理緒，岸本直子，橋本亮太，安田由華，宮坂俊輝，吉川公彦，牧之段 学：NODDI を用いた自閉スペクトラム症の PTSD 症状と脳灰白質微小構造の関連についての検討．第 119 回日本精神神経学会学術総会，横浜，2023.6.23.

15) 越智紳一郎，小高文聰，長谷川尚美，古郡規雄，伊賀淳一，柏木宏子，小松 浩，田形弘実，坪井貴嗣，沼田周助，飯田仁志，五十嵐 俊，大井一高，高江洲義和，福本健太郎，村岡寛之，三浦健一郎，松本純弥，上野修一，渡邊衡一郎，稲田 健，橋本亮太：クロザピンが処方可能な施設体制と治療抵抗性の検討が統合失調症の抗精神病薬単剤治療に関連する．第 119 回日本精神神経学会学術総会，横浜，2023.6.24.

16) 鬼塚俊明，岡田剛史，長谷川尚美，坪井貴嗣，伊賀淳一，古郡規雄，山田直輝，堀 輝，村岡寛之，大井一高，小笠原一能，越智紳一郎，竹島正浩，市橋香代，福本健太郎，飯田仁志，山田恒，降籏隆二，牧之段 学，高江洲義和，沼田周助，小松 浩，菱本明豊，木戸幹雄，阿竹聖和，山形弘隆，菊地紗耶，橋本直樹，宇佐美政英，勝元榮一，浅見 剛，久保田智香，松本純弥，三浦健一郎，平野羊嗣，渡邊衡一郎，稲田 健，橋本亮太：持続性抗精神病注射薬剤（LAI）と経口抗精神病薬の併用薬の状況：日本における実態調査．第 119 回日本精神神経学会学術総会，横浜，2023.6.24.

17) 五十嵐俊，坪井貴嗣，長谷川尚美，越智紳一郎，村岡寛之，福本健太郎，小高文聰，伊賀淳一，大井一高，高江洲義和，柏木宏子，田形弘実，飯田仁志，小松 浩，沼田周助，三浦健一郎，松本純弥，古郡規雄，稲田 健，渡邊衡一郎，橋本亮太：うつ病入院患者における修正型電気けいれん療法後の維持薬物療法の処方実態調査－EGUIDE プロジェクトより－．第 20 回日本うつ病学会総会，仙台，2023.7.21.

18) 村岡寛之，福本健太郎，長谷川尚美，古郡規雄，小高文聰，大井一高，柏木宏子，松本純弥，三浦健一郎，稲田 健，渡邊衡一郎，橋本亮太：大うつ病性障害の治療における EGUIDE プログラムと重症度記載の有効性の検討．第 20 回日本うつ病学会総会，仙台，2023.7.21.

19) 降籏隆二，中村敏範，大槻 玲，長谷川尚美，小高文聰，古郡規雄，村岡寛之，坪井貴嗣，越智紳一郎，市橋香代，堀 輝，三浦健一郎，松本純弥，沼田周助，稲田 健，渡邊衡一郎，橋本亮太：うつ病入院患者の睡眠薬処方と EGUIDE 講習会の教育効果の検討．第 20 回日本うつ病学会総会，仙台，2023.7.21.

20) 福本健太郎，稲田 健，小高文聰，長谷川尚美，村岡寛之，堀 輝，市橋香代，安田由華，飯田仁志，大井一高，越智紳一郎，井手健太，松本純弥，三浦健一郎，古郡規雄，渡邊衡一郎，橋本亮太：日本うつ病学会治療ガイドラインに基づいた治療適合度（individual fitness score)の開発．第 20 回日本うつ病学会総会，仙台，2023.7.21.

21) 宮山未来乃，三浦健一郎，伊藤颯姫，松本純弥，福永雅喜，石丸径一郎，藤本美智子，安田由華，山森英長，渡邉嘉之，橋本亮太：統合失調症における労働時間，認知機能障害及び大脳皮質厚の関連性．第 46 回日本神経科学大会，仙台，2023.8.3.

22) 吉田正俊，三浦健一郎，藤本美智子，山森英長，安田由華，岩瀬真生，橋本亮太：統合失調症患者のフリービューイングにおける視覚サリエンスの変容. 第 46 回日本神経科学大会, 仙台,

2023.8.4.

23) 長谷川尚美，山田 恒，堀 輝，古郡規雄，松本純弥，三浦健一郎，稲田 健，渡邊衡一郎，橋本亮太：EGUIDE プロジェクトの広がりと大規模多施設研究による real-world study．第 53 回日本神経精神薬理学会年会，東京，2023.9.7.

24) 伊藤颯姫，大井一高，安田由華，藤本美智子，山森英長，松本純弥，福本健太郎，小高文聰，長谷川尚美，石丸径一郎，三浦健一郎，古郡規雄，橋本亮太：統合失調症患者における薬物治療ガイドライン適合度と労働時間の関係．第 53 回日本神経精神薬理学会年会，東京，2023.9.8.

25) 竹田康二，野村照幸，髙橋未央，穐田祥子，高尾 碧，田上昭子，安田 新，松田太郎，和田博行，荒川育子，鈴木敬生，市橋佑香，柳 恵美子，立山和久，花田一郎，矢口勝彦，橋本亮太，平林直次：医療観察法病棟電子図書館プロジェクト．第 19 回日本司法精神医学会大会，東京，2023.9.8.

26) 阿竹聖和，堀 輝，古郡規夫，越智紳一郎，坪井貴嗣，伊賀淳一，市橋香代，渡邊衡一郎，稲田 健，橋本亮太：統合失調症患者における抗コリン薬処方率の EGUIDE 講習前後の変化．第 33 回日本臨床精神神経薬理学会学術集会，愛媛，2023.9.29.

27) 山田 恒，本山美久仁，井出健太，今村弥生，長谷川尚美，三浦健一郎，松本純弥，渡邊衡一郎，稲田 健，橋本亮太：統合失調症・うつ病ガイドライン講習（EGUIDE プロジェクト）の参加施設への影響-ガイドライン講習に継続参加施設と初回参加施設での講習受講前臨床行動の比較．第 33 回日本臨床精神神経薬理学会学術集会，愛媛，2023.9.29.

28) 小高文聰，大井一高，安田由華，藤本美智子，山森英長，長谷川直美，伊藤颯姫，福本健太郎，松本純弥，三浦健一郎，古郡規雄，橋本亮太：統合失調症患者における統合失調症薬物治療ガイドに基づいた治療適合度（individual fitness score）の点数と精神症状との関連．第 33 回日本臨床精神神経薬理学会学術集会，愛媛，2023.9.28.

29) 越智紳一郎，堀 輝，坪井貴嗣，古郡規雄，市橋香代，岡田剛史，斉藤善貴，小高文聰，伊賀淳一，今村弥生，鬼塚俊明，高江洲義和，降籏隆二，上野修一，渡邊衡一郎，稲田 健，橋本亮太：統合失調症入院患者における下剤使用に関連する因子についての多施設共同診療録調査．第 33 回日本臨床精神神経薬理学会学術集会，愛媛，2023.9.28.

30) 五十嵐裕幸，宮田 淳，孫 樹洛，根本清貴，橋本亮太，三浦健一郎，松本純弥，福永雅喜，藤本美智子，笠井清登，髙橋 努，平野羊嗣，松原敏郎，山本真江里，大井一高，橋本直樹：統合失調症における側性化の変化：VBM による大規模比較研究．第 45 回日本生物学的精神医学会年会，沖縄，2023.11.7.

31) 伊藤颯姫，松本純弥，福永雅喜，三浦健一郎，根本清貴，岡田直大，橋本直樹，森田健太郎，越山太輔，大井一高，髙橋 努，肥田道彦，山森英長，藤本美智子，安田由華，山﨑龍一，長谷川尚美，成田 尚，横山仁史，三嶋 亮，宮田 淳，小林祐子，笹林大樹，原田健一郎，山本真江里，平野羊嗣，板橋貴史，中瀧理仁，橋本龍一郎，タ キンキン，小池進介，松原敏郎，岡田 剛，吉村玲児，阿部 修，鬼塚俊明，渡邊嘉之，松尾幸治，山末英典，岡本泰昌，鈴木道雄，尾崎紀夫，笠井清登，橋本亮太：多施設共同研究による drug free の統合失調症患者における大脳皮質構造への疾患の効果の検討．第 45 回日本生物学的精神医学会年会，沖縄，2023.11.7.

32) 松本純弥，福永雅喜，三浦健一郎，根本清貴，岡田直大，橋本直樹，森田健太郎，越山太輔，大井一高，髙橋 努，肥田道彦，山森英長，藤本美智子，安田由華，伊藤颯姫，山﨑龍一，長谷川尚美，成田 尚，横山仁史，三嶋 亮，宮田 淳，小林祐子，笹林大樹，原田健一郎，山本真江里，平野羊嗣，板橋貴史，中瀧理仁，橋本龍一郎，タ キンキン，小池進介，松原敏郎，岡田 剛，吉村玲児，阿部 修，鬼塚俊明，渡邊嘉之，松尾幸治，山末英典，岡本泰昌，鈴木道雄，尾崎紀夫，笠井清登，橋本亮太：児童思春期発症のうつ病の多施設大規模データによる大脳皮質構造解．第 45 回日本生物学的精神医学会年会，沖縄，2023.11.7.

33) 長谷川尚美，山田 恒，堀 輝，古郡規雄，松本純弥，三浦健一郎，稲田 健，渡邊衡一郎，橋本亮太：統合失調症とうつ病における治療ガイドラインと大規模多施設研究による real-world

study．第 45 回日本生物学的精神医学会年会，沖縄，2023.11.7.

34) 三浦健一郎，吉田正俊，森田健太郎，藤本美智子，安田由華，山森英長，髙橋潤一，宮田聖子，岡崎康輔，松本純弥，豊巻敦人，牧之段 学，橋本直樹，鬼塚俊明，笠井清登，尾崎紀夫，橋本亮太：視覚サリエンス処理の精神疾患間の比較．第 45 回日本生物学的精神医学会年会，沖縄，2023.11.7.

35) 鮎澤有希子，河野翔太郎，大友愛佳，片山沙香，濱田萌々子，福島穂高，三浦大樹，橋本 均，橋本亮太，中澤敬信：患者 iPS 細胞由来分化神経細胞を用いた自閉スペクトラム症関連遺伝子 POGZ の機能解析．第 97 回日本薬理学会年会年会，神戸，2023.12.15.

36) Zhao X，Kaneko T，Kimura K，Lu W，Nonomura S，Nakazawa T，Hashimoto R，Inoue K，Takata T: Generation of a marmoset model for neurodevelopmental disorders through brain-wide transgene delivery in neonates. 第 13 回 生理研-ヒト進化センター-脳研 合同シンポジウム，新潟，2024.2.1

37) 秋本祐弥，福島穂高，三浦大樹，橋本 均，橋本亮太，中澤敬信：環境エンリッチメントによる 3q29 領域欠失導入マウスの精神疾患様行動の回復．日本農芸化学会 2024 年度東京大会，東京，2024.3.25

38) 片山沙香，河野翔太郎，鮎澤有希子，大友愛佳，三浦大樹，福島穂高，橋本亮太，橋本 均，中澤敬信：2p16.3 領域欠失変異を有する自閉スペクトラム症患者の iPS 細胞由来分化神経系細胞の機能解析．日本薬学会第 144 年会，横浜，2024.3.29

39) 清水将海，片上 舜，岡田真人，菅生(宮本)康子，林 和子，松田圭司，三浦健一郎，Eldridge M.A.G.，Saunders R.C.，Richmond B.J，松本有央：TEO 野と TE 野におけるカテゴリー情報処理の違い．日本神経科学大会，2023.8.3.

(3) 研究報告会

1) 橋本亮太：COCORO の概要．第 20 回 COCORO 合同会議，東京，2023.6.4.

2) 橋本亮太，三浦健一郎，松本純弥，菊地正隆，中澤敬信：iPS 細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究．日本医療研究開発機構 精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト 第 2 回分科会，東京，2023.9.27

3) 橋本亮太：COCORO の概要．第 21 回 COCORO 合同会議，2023.12.10.

4) 三浦健一郎，吉田正俊，森田健太郎，藤本美智子，安田由華，山森英長，髙橋潤一，宮田聖子，岡崎康輔，松本純弥，豊巻敦人，牧之段 学，橋本直樹，鬼塚俊明，笠井清登，尾崎紀夫，橋本亮太：精神疾患における視覚サリエンス処理の異常—計算論的モデルを用いた解析による疾患間の比較—．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所令和 5 年度研究報告会，東京，2024.3.18.

5) 安田由華，伊藤颯姫，松本純弥，岡田直大，福永雅喜，根本清貴，三浦健一郎，橋本直樹，大井一高，髙橋 努，肥田道彦，山森英長，藤本美智子，長谷川尚美，小池進介，中村元昭，岡田剛，宮田 淳，沼田周助，鬼塚俊明，吉村玲児，中川 伸，渡邊嘉之，尾崎紀夫，橋本亮太：脳画像のデータ駆動型スクリーニングによる側脳室拡大と認知機能障害をもつ新たな診断分類の提案．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所令和 5 年度研究報告会，東京，2024.3.18.

6) 三浦健一郎：精神疾患横断的サリエンシー解析．第 20 回 COCORO 合同会議，2023.6.4.

7) 三浦健一郎：精神疾患横断的サリエンシー解析．第 21 回 COCORO 合同会議，2023.12.10.

8) 松本純弥：ENIGMA_CDJ_Cortical．第 20 回 COCORO 合同会議，2023.6.4.

9) 松本純弥：JART10000 プロジェクト．第 20 回 COCORO 合同会議，2023.6.4.

10) 松本純弥：精神 DB における脳画像 QC システムの構築．第 21 回 COCORO 合同会議，2023.12.10.

11) 伊藤颯姫：drug free 統合失調症患者の大脳皮質構造特徴．第 21 回 COCORO 合同会議，

2023.12.10.

(4) その他

1) 橋本亮太：精神科医療の世界を変えるための研究を展望する～病態研究から社会実装研究まで～．第 58 回精研ランチョンセミナー，東京，2023.5.22.

C．講演

1) 橋本亮太：アクセプトされる精神医学研究論文の書き方ー査読コメントへの対応のコツー，CNS CONFERENCE，久留米，2023.4.18.

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1) 橋本亮太：日本神経精神薬理学会 理事，評議員，広報委員会委員，国際学術委員会委員，トランスレーショナル・メディカルサイエンス(TMS)委員会イノベーションサイエンス部会委員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長（通称：EGUIDE 委員会），統合失調症診療ガイドライン委員長，診療ガイドライン委員会委員長，薬事委員会委員，統合失調症薬物治療ガイド 2022 作成ワーキンググループ
2) 橋本亮太：日本精神神経学会 PCN 編集委員会委員，薬事委員会委員，精神医学研究推進委員会委員，PCN Reports 編集委員会，ガイドライン検討委員会委員，提言作成ワーキンググループ，着床前診断に関するワーキンググループ 2022 年度委員，PCN を育てる PI ワーキンググループメンバー
3) 橋本亮太：日本神経化学会 評議員，脳研究推進委員会委員
4) 橋本亮太：日本統合失調症学会 評議員
5) 橋本亮太：日本臨床精神神経薬理学会 評議員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長（通称：EGUIDE 委員会）
6) 橋本亮太：日本うつ病学会 評議員，気分障害の治療ガイドライン検討委員会委員，精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長（通称：EGUIDE 委員会）
7) 橋本亮太：日本生物学的精神医学会 理事，将来計画委員会委員（顧問），広報委員会委員，関連学会対応委員会副委員長，評議員
8) 橋本亮太：日本神経科学学会 学術多様性委員会委員
9) 橋本亮太：World Congress Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicu(国際神経精神薬理学会) International Scientific Programme Committee (ISPC) member
10) 橋本亮太：脳科学学会連合 脳科学将来構想委員会副委員長

(3) 座長

1) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症はどのように治療すべきか：我々の合意形成を目指して．第 119 回日本精神神経学会，横浜，2023.6.23.
2) 橋本亮太：次世代の精神医学研究のあり方：知の統合による課題解決に向けて．第 119 回日本精神神経学会，横浜，2023.6.23.
3) 橋本亮太：アディクション科学と神経科学．第 46 回日本神経科学大会，仙台，2023.8.2.
4) 橋本亮太，林 朗子：疾患横断的アプローチより迫る精神疾患病態生理の新潮流．第 46 回日本神経科学大会，仙台，2023.8.3.
5) 橋本亮太，橋本 均：若手研究者が考える基礎臨床連携研究とは？．第 46 回日本神経科学大会，仙台，2023.8.3.

6)　橋本亮太：精神科領域の医療技術評価における診療ガイドラインとレジストリの役割とは？．第 53 回日本神経精神薬理学会年会，東京，2023.9.8.

(4) 学会誌編集委員等

1)　橋本亮太：日本精神神経学会機関誌「Psychiatry and Clinical Neuroscience」編集委員会委員
2)　橋本亮太：日本精神神経学会機関誌「Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports」編集委員会委員
3)　橋本亮太：日本神経精神薬理学会機関誌「Neuropsychopharmacology Reports」「日本神経精神薬理学雑誌」編集委員会委員

E．研修

(1) 研修企画

1)　橋本亮太：大阪精神科診療所協会 統合失調症薬物治療ガイドライン 2023 講習会．オンライン，2023.7.8.
2)　橋本亮太：第 20 回日本うつ病学会総会 EGUIDE プロジェクトワークショップ，うつ病患者における妊娠への対応．仙台，2023.7.21.
3)　橋本亮太：大阪精神科診療所協会 うつ病治療ガイドライン 2023 講習会．オンライン，2023.7.29.
4)　橋本亮太：2023 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 2 回統合失調症の標準治療研修．オンライン，2023.8.27.
5)　橋本亮太：第 19 回日本司法精神医学会大会 治療を拒否する統合失調症患者との面接-治療同盟の構築を目指して．2023.9.9.
6)　橋本亮太：第 53 回日本神経精神薬理学会年会ワークショップ 診療技術向上ワークショップ～希死念慮のあるうつ病患者への治療介入を学ぶ～．東京，2023.9.9.
7)　橋本亮太：第 53 回日本神経精神薬理学会年会ワークショップ 上手な診療の受け方のコツ（うけコツ）～統合失調症薬物治療ガイド 2022 を用いた心理教育ファシリテーター養育講座．東京，東京，2023.9.9.
8)　橋本亮太：2023 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 2 回うつ病の標準治療研修．オンライン，2023.9.10.
9)　橋本亮太：第 33 回日本臨床精神神経薬理学会学術集会 診療技術向上ワークショップ～希死念慮のあるうつ病患者への治療介入を学ぶ～．愛媛，2023.9.29.
10) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 統合失調症のガイドライン講習．富山，2023.9.30.
11) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 うつ病のガイドライン講習．富山，2023.10.1.
12) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 統合失調症のガイドライン講習．大阪，2023.10.14.
13) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト近畿地区講習 うつ病のガイドライン講習．大阪，2023.10.15.
14) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 統合失調症のガイドライン講習．東京（NCNP），2023.10.15.
15) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東 2 講習 統合失調症のガイドライン講習．東京（慈恵会医大），2023.10.22.
16) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト東北地区講習 統合失調症のガイドライン講習．仙台，2023.10.21.
17) 橋本亮太：EGUIDE プロジェク東北地区講習 うつ病のガイドライン講習．仙台，2023.10.22.
18) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 うつ病のガイドライン講習．東京（NCNP），2023.10.29.

19) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト九州地区講習 統合失調症のガイドライン講習．福岡，2023.11.11.
20) 橋本亮太：EGUIDE プロジェク九州地区講習 うつ病のガイドライン講習．福岡，2023.11.12.
21) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト神奈川講習 統合失調症のガイドライン講習．川崎，2023.11.18.
22) 橋本亮太：EGUIDE プロジェク神奈川講習 うつ病のガイドライン講習．川崎，2023.11.19.
23) 橋本亮太：EGUIDE プロジェク関東 2 講習 うつ病のガイドライン講習．東京（慈恵会医大），2023.11.23.
24) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北海道講習 統合失調症のガイドライン講習．札幌，2023.11.25.
25) 橋本亮太：EGUIDE プロジェク北海道講習 うつ病のガイドライン講習．札幌，2023.11.26.
26) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト四国地区講習 統合失調症のガイドライン講習．徳島，2023.11.25.
27) 橋本亮太：EGUIDE プロジェク四国地区講習 うつ病のガイドライン講習．徳島，2023.11.26.
28) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト信州講習 統合失調症のガイドライン講習．長野，2023.12.2.
29) 橋本亮太：EGUIDE プロジェク信州講習 うつ病のガイドライン講習．長野，2023.12.3.

(2) 研修会講師

1) 橋本亮太：治療抵抗性．大阪精神科診療所協会 統合失調症薬物治療ガイドライン 2023 講習会．オンライン，2023.7.8.
2) 橋本亮太：軽症．大阪精神科診療所協会 うつ病治療ガイドライン 2023 講習会．オンライン，2023.7.29.
3) 橋本亮太：精神病性．大阪精神科診療所協会 うつ病治療ガイドライン 2023 講習会．オンライン，2023.7.29.
4) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．2023 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 2 回統合失調症の標準治療研修．オンライン，2023.8.27.
5) 橋本亮太：2023 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 2 回統合失調症の標準治療研修．オンライン，2023.8.27.
6) 橋本亮太：児童思春期．2023 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 2 回うつ病の標準治療研修．オンライン，2023.9.10.
7) 橋本亮太：うつ病の標準治療研修とは．2023 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 2 回うつ病の標準治療研修．オンライン，2023.9.10.
8) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 統合失調症のガイドライン講習．富山，2023.9.30.
9) 橋本亮太：EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 統合失調症のガイドライン講習．富山，2023.9.30.
10) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 うつ病のガイドライン講習．富山，2023.10.1.
11) 橋本亮太：児童思春期．EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 うつ病のガイドライン講習．富山，2023.10.1.
12) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 統合失調症のガイドライン講習．東京（NCNP），2023.10.15.
13) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．EGUIDE プロジェクト関東 2 講習 統合失調症のガイドライン講習．東京（慈恵会医大），2023.10.22.
14) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト関東 2 講習 統合失調症のガイドライン講習．東京（慈恵会医大），2023.10.22.

15) 橋本亮太：睡眠障害とその対応．EGUIDE プロジェクト関東 1 講習　うつ病のガイドライン講習．東京（NCNP），2023.10.29.
16) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト神奈川講習　統合失調症のガイドライン講習．川崎，2023.11.18.
17) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．　EGUIDE プロジェクト神奈川講習　統合失調症のガイドライン講習．川崎，2023.11.18.
18) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェクト神奈川講習　統合失調症のガイドライン講習．川崎，2023.11.18.
19) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェク神奈川講習　うつ病のガイドライン講習．川崎，2023.11.19.
20) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェク神奈川講習　うつ病のガイドライン講習．川崎，2023.11.19.
21) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェク関東 2 講習　うつ病のガイドライン講習．東京（慈恵会医大），2023.11.23.
22) 橋本亮太：児童思春期．EGUIDE プロジェク関東 2 講習　うつ病のガイドライン講習．東京（慈恵会医大），2023.11.23.
23) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェクト信州講習　統合失調症のガイドライン講習．長野，2023.12.2.
24) 橋本亮太：治療計画の策定．EGUIDE プロジェクト信州講習　統合失調症のガイドライン講習．長野，2023.12.2.
25) 橋本亮太：治療抵抗性統合失調症．EGUIDE プロジェクト信州講習　統合失調症のガイドライン講習．長野，2023.12.2.
26) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェクト信州講習　統合失調症のガイドライン講習．長野，2023.12.2.
27) 橋本亮太：趣旨説明及び理解度記入．EGUIDE プロジェク信州講習　うつ病のガイドライン講習．長野，2023.12.3.
28) 橋本亮太：治療計画の策定．　EGUIDE プロジェク信州講習　うつ病のガイドライン講習．長野，2023.12.3.
29) 橋本亮太：理解度の解説とフィードバック．EGUIDE プロジェク信州講習　うつ病のガイドライン講習．長野，2023.12.3.

Ｆ．その他

【受賞】

1) 橋本亮太：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　令和五年度研究報告会　青申賞（優秀発表賞），「脳画像のデータ駆動型スクリーニングによる側脳室拡大と認知機能障害をもつ新たな診断分類の提案」，2024.3.18.
2) 橋本亮太ほか：Top Downloaded Article（論文ダウンロード賞），Psychiatry Clin Neurosci 誌，2022.1.1～2022.12.31，対象論文 Onitsuka T，Hirano Y，Nakazawa T，Ichihashi K，Miura K，Inada K，Mitoma R，Yasui-Furukori N，Hashimoto R: Toward recovery in schizophrenia: Current concepts，findings，and future research directions. Psychiatry Clin Neurosci 76(7): 282-291，2022. DOI: 10.1111/pcn.1334，2024.3.21.
3) 三浦健一郎：国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　令和五年度研究報告会　青申賞（優秀発表賞），」「精神疾患における視覚サリエンス処理の異常―計算論的モデルを用いた解析による疾患間の比較―」，2024.3.18.

【その他】

1) 橋本亮太，三浦健一郎，ほか：特許出願 特願 2023-217104「発明の名称：補正装置，補正方法，及び，補正プログラム」2023.12.22.
2) 橋本亮太：精神疾患の克服と障害支援にむけた研究推進の提言，2023 年 4 月，日本精神神経学会，日本生物学的精神医学会，日本神経精神薬理学会，日本うつ病学会など 13 の精神医学関連諸学会がまとめたもの 日本精神神経学会事務局，提言作成メンバーとして参画． 2023.4. https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/20230401.pdf
3) 橋本亮太：精神疾患の克服と障害支援にむけた研究推進の提言 当事者・家族・一般向け版，2023 年 6 月，日本精神神経学会，日本生物学的精神医学会，日本神経精神薬理学会，日本うつ病学会など 13 の精神医学関連諸学会がまとめたもの，研究代表者の橋本が提言作成ワーキンググループ長として参画．
2023.6.https://www.jspn.or.jp/modules/forpublic/index.php?content_id=64
4) 橋本亮太：研究会主宰．第 20 回 COCORO 合同会議，オンライン，2023.6.4.
5) 橋本亮太：プレスリリース．脳体積による精神疾患の新たな分類を提案 認知・社会機能と関連，精神疾患の新規診断法開発への発展に期待，（NCNP，東京大学共同）（Molecular Psychiatry）2023.8.4.
6) 橋本亮太：総合司会．2023 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修第 2 回統合失調症の標準治療研修，オンライン，2023.8.27.
7) 橋本亮太：プレスリリース．診療ガイドラインの社会実装手法を初めて確立 誰もが推奨される医療を受けられるようになることへの期待，（NCNP，秋田大学，岩手医科大学，愛媛大学，北里大学，杏林大学，慶応義塾大学，東京大学，徳島大学，獨協医科大学，兵庫医科大学，福岡大学共同）（Psychiatry and Clinical Neuroscience）2023.9.9.
8) 橋本亮太：総合司会．2023 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修第 2 回うつ病の標準治療研修，オンライン，2023.9.10.
9) 橋本亮太：総合司会．EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 統合失調症のガイドライン講習．富山，2023.9.30.
10) 橋本亮太：総合司会．EGUIDE プロジェクト北陸地区講習 うつ病のガイドライン講習．富山，2023.10.1.
11) 橋本亮太：総合司会．EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 統合失調症のガイドライン講習．東京（NCNP），2023.10.15.
12) 橋本亮太：総合司会．EGUIDE プロジェクト関東 2 講習 統合失調症のガイドライン講習．東京（慈恵会医大），2023.10.22.
13) 橋本亮太：総合司会．EGUIDE プロジェクト関東 1 講習 うつ病のガイドライン講習．東京（NCNP），2023.10.29.
14) 橋本亮太：総合司会．EGUIDE プロジェクト神奈川講習 統合失調症のガイドライン講習．川崎，2023.11.18.
15) 橋本亮太：総合司会．EGUIDE プロジェク神奈川講習 うつ病のガイドライン講習．川崎，2023.11.19.
16) 橋本亮太：総合司会．EGUIDE プロジェク関東 2 講習 うつ病のガイドライン講習．東京（慈恵会医大），2023.11.23.
17) 橋本亮太：総合司会．EGUIDE プロジェクト信州講習 統合失調症のガイドライン講習．長野，2023.12.2.
18) 橋本亮太：総合司会．EGUIDE プロジェク信州講習 うつ病のガイドライン講習．長野，2023.12.3.
19) 橋本亮太：研究会主宰．第 21 回 COCORO 合同会議，オンライン，2023.12.10.

8. 睡眠・覚醒障害研究部

Ⅰ. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

睡眠・覚醒障害研究部では，睡眠，意識，認知，感情，意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ，その制御メカニズムを明らかにし，これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害，気分障害，不安障害，認知症性障害，神経・発達障害などの病態および治療法を解明することを目的としている．このため，精神生理学，時間生物学，神経薬理学，分子生物学，神経内分泌学，脳画像解析学などの手法を用いて，学際的な研究を進めている．

部長１名，室長２名に加え，リサーチフェロー1名，テクニカルフェロー1名，科研費研究員２名，研究補助員２名，事務助手２名，国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている．

研究部の構成

部長：栗山健一．精神生理機能研究室長：吉池卓也．臨床病態生理研究室長：北村真吾．リサーチフェロー：河村 葵．テクニカルフェロー：TRIPATHI SRISHTI. 併任研究員：松井健太郎（センター病院），都留あゆみ（センター病院），羽澄 恵（公共精神健康医療研究部），長尾賢太朗（センター病院）．客員研究員：内山 真（日本大学），兼板佳孝（日本大学），大川匡子（睡眠総合ケアクリニック代々木），井上雄一（医療法人社団絹和会），樋口重和（九州大学），本多 真（東京都医学総合研究所），上田泰己（東京大学），池田正明（埼玉医科大学），山寺 亘（東京慈恵会医科大学），守口善也（ルンドベックジャパン），福水道郎（瀬川記念小児神経学クリニック），榎本みのり（東京工科大学），有竹清夏（埼玉県立大学），亀井雄一（上諏訪病院），渡辺和人（明治大学），三島和夫（秋田大学），西村勝治（東京女子医科大学），梶 達彦（あいせいかいココロのクリニック），阿部又一郎（伊敷病院），岡島 義（東京家政大学），高橋英彦（東京医科歯科大学），肥田昌子（ＨＫＧ合同会社），玉置應子（国立研究開発法人理化学研究所），鈴木正泰（日本大学），村上裕樹（大分大学），吉村道孝（愛知東邦大学），太田英伸（秋田大学），綾部直子（秋田大学），駒田陽子（東京工業大学），田中克俊（北里大学），志村哲祥（東京医科大学），大橋由基（洛和会音羽リハビリテーション病院），尾崎章子（東北大学），金子宜之（日本大学），坂口昌徳（筑波大学），橋本英樹（プロアシスト），竹島正浩（秋田大学），角谷 寛（滋賀医科大学），小曽根基裕（久留米大学），岩本邦弘（名古屋大学），佐伯圭吾（奈良県立医科大学）．そのほか科研費研究員２名，科研費研究補助員１名，センター研究補助員１名，科研費事務助手２名，外来研究員２名，外来研究補助員５名，研究生 13 名，実習生６名．

Ⅱ. 研究活動

1) 適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備（21FA1002）

厚生労働科学研究費補助金循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業（代表研究者：栗山健一，研究分担者：吉池卓也 他，研究協力者：北村真吾，綾部直子，河村 葵，岡邨しのぶ，松井健太郎，都留あゆみ，大槻 怜，長尾賢太朗，羽澄 恵，伏見もも 他）

本研究では主に，前研究事業「「健康づくりのための睡眠指針 2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究（19FA1009）」の成果として見出した，「睡眠の質」を反映し健康を維持するために目標となる「睡眠休養感」指標を社会実装するための準備を行う．「睡眠休養感」指標は，「睡眠時間」指標と相補的な関係を有し，国民の健康寿命延伸を測るための調査項目として組み込まれるとともに，各個人が日常生活の中で，健康維持・促進に役立てられるような指標とすべく，これに資するプラットフ

ォームを開発する．さらに，「睡眠休養感」を向上・改善に寄与する日常生活行動・習慣を調査し，生活・睡眠習慣に組み込むべき目標として具体に提示することも目標とする．さらに，国民の睡眠健康増進に寄与しうる，睡眠健診の有用性および実装可能性を検討するとともに，ウェアラブルデバイス等を用いた簡易睡眠測定の有用性も検証し，前述のプラットフォームに組み込み有用性を高める試みも検討する．本研究の成果は，「健康づくりのための睡眠ガイド 2023」に反映され，これに基づく睡眠健康の社会基盤を整備・発展させることに寄与する．

2）　睡眠ポリグラフデータバンクの拡充およびこれを活用した睡眠障害・精神神経疾患の病態解明と生理学的診断マーカー・治療法開発

精神・神経疾患研究開発費研究事業「睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンク構築研究（課題 番号 5-1）」（主任研究者：栗山健一，研究協力者：吉池卓也，北村真吾，松井健太郎，河村葵，伏見もも，木村綾乃，岡邨しのぶ）

本研究事業の目的は，わが国初にして最大の睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンクを構築することである．日本国内の主要な睡眠ポリグラフ実施機関と連携し，2013 年 1 月以降に睡眠ポリグラフを受検した患者の睡眠ポリグラフデータと，これに紐づいた患者背景情報・関連生体データを集約することで，睡眠障害および併存精神・神経疾患における新規バイオマーカーの探索，病態解明促進や新たな健康指標の定義を見越した生理学的検討を行う基盤とする．このために，厚生労働省や経済産業省，総務省が発行する医療情報システムに関する安全管理ガイドライン（3 省 2 ガイドライン）に準拠したセキュアなクラウドシステムを構築し，多施設で個別に保管されるデータを本事業用の統一データ集計フォーマットを用いてクラウドストレージ上に集約・管理することでデータバンク化を実現した．各共同研究施設にて本データバンクを活用した個別研究課題が進行中である（NCNP 研究課題名：睡眠休養感に関わる生理病態の研究）．

3）　睡眠時間の主観—客観乖離と健康不安が不眠症診断・健康転機に及ぼす影響の包括的検討

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C（研究代表者：栗山健一）

不眠症は「不眠に対する恐怖」と「生理的過覚醒」が病態の中核をなす症候群であるが，一部の患者は自身の睡眠に対して，眠れているにもかかわらず「全く眠れてない」という誤認を示す．睡眠障害国際分類（The International Classification of Sleep Disorders: ICSD）第 2 版では，「睡眠状態誤認」は逆説性不眠症（Paradoxical Insomnia: PI）という下位診断分類の特徴とされていたが，近年は多くの不眠症患者が共有する病態特性（スペクトラム）と考えられるようになった．「睡眠状態誤認」は，「漠とした健康障害への不安」を基に生じる認知構造として，身体症状症（疼痛性障害含む）と共通した特徴を示し，加齢に伴い増強する疾患共通の治療抵抗因子であると推測される．特に，大脳灰白皮質の萎縮性病変および脳微小血管障害を背景とした大脳白質病変が，この認知構造に関与している可能性が推測されるが，系統的に検討した研究はない．本研究は，上記病態関連性を検討するとともに，身体愁訴，疼痛症状との関連も検討項目に加え，不眠症と身体症状症等の精神疾患病態との関連性を検討することを目的とし行われた．

4）　個人の概日リズム特性の決定に対する出生後環境の寄与

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C（研究代表者：北村真吾）

朝型夜型の個人差はクロノタイプとも呼ばれ，連続的なスペクトラムである．概日リズム位相や周期と密接な関連を示すことから視交叉上核を中心とした生物時計機構の表現型のひとつと考えられている．双生児研究からクロノタイプの遺伝率は約 50%と見積もられ，複数の大規模なゲノムワイド関連研究（GWAS）でも共通した遺伝的多型が報告されるなど，生得的な側面がある．一方，クロノタイプを規定する環境要因に関する知見は乏しい．また，睡眠・覚

醒スケジュールや深部体温やメラトニンといった概日リズムの主要なマーカーでは 6〜12 週齢ごろに概日リズムが確立するが，確立時期に個人差がみられ，その要因も不明である．本研究では，概日リズム機能と密接な授乳形態と光環境に着目し，出生後 1 年間の縦断的評価を行い，クロノタイプ及び概日リズム確立時期に寄与する出生後要因を明らかにする目的で実施される．

5）　脳構造の可塑性ダイナミクスと気分障害病態の関連探索

文部科学省科学研究費助成事業 若手研究（研究代表者：吉池卓也）

双極性障害やうつ病を有する患者において，朝に増悪するうつ症状の日内変動が特徴的に出現するのみならず，体温調節，ホルモン分泌，時計遺伝子発現といった様々な生理指標の概日パターンが健常者と比べ変化することが知られている．近年，ヒトの灰白質及び白質の容積が同日内で変化することが明らかにされ，脳の粗大な構造変化（構造的可塑性）の生理学的意義が議論されるようになった．しかし，構造的可塑性が精神疾患においていかなる変化を示し，病態及び治療といかに関係するかは明らかにされていない．本研究は，磁気共鳴画像（MRI）の解析手法のうち，脳表面形態計測法や白質微細構造解析法を用い，気分障害患者の臨床症状，治療反応性，高次認知機能との関連を検討することにより，特定の脳部位における構造変化を描出し，新たな病態指標を開発することを目的として行われる．

6）　概日リズム睡眠覚醒障害の遺伝要因とその発症分子メカニズム

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C（研究代表者：肥田昌子）

概日リズム睡眠－覚醒障害のサブタイプの一つである非 24 時間睡眠－覚醒リズム障害と関連する遺伝要因を調べるため，非 24 時間睡眠－覚醒リズム障害患者 12 例を対象に次世代シーケンシングによるエクソーム配列解析を行い，合計 5,829,346 種のバリアントを検出した．信頼度が低いバリアントを除くと 31,932 種，リード数が少ないバリアントを除くと 25,373 種となり，そのうち 23,515 種が既知，1,858 種が新規であることが判明した．これまでに特定されている時計遺伝子群のメンバーではなく，概日リズムや睡眠・覚醒調節に関連する可能性があり，新規バリアントが検出された遺伝子に着目し，非 24 時間睡眠-覚醒リズム障害患者合計 64 例を対象にサンガーシーケンスを実施した．その結果，既知 5 種，新規 2 種の合計 7 種のバリアントが検出された．これらのバリアントが非 24 時間睡眠－覚醒リズム障害の発症や病態に関わるかを明らかにするためには機能解析をはじめとする他のアプローチが必要であるが，本研究の結果は概日リズムや睡眠・覚醒調節に関わり得る新たな遺伝子の存在を示唆している．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は，都民・市民のための公開講座，講演会などにおいて睡眠と健康づくり，睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた．NHK および民放テレビ，ラジオ，オンラインサイト，新聞，雑誌等のメディアを通して，睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った．

(2) 専門教育面における貢献

各研究員は，国内各地の学術集会，研究会，談話会，医師会講演会などで睡眠障害，気分障害，認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した．栗山健一は東京農工大学（客員教授），滋賀医科大学（客員教授），東京慈恵会医科大学（客員教授），早稲田大学（客員教授）など教育機関において学生教育の援助を行った．北村真吾は，京都大学（非常勤講師），神奈川大学（非常勤講師），埼玉県立大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った．吉池卓也は武蔵野大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った．

また，研究員は日本睡眠学会，日本時間生物学会，日本生物学的精神医学会，日本公衆衛生学会，不眠研究会，睡眠学研究会，関東睡眠障害懇話会，日本生理人類学会，関東脳核医学研究会などにおける理事，評議員，世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った．

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

全ての研究員は，厚生労働科学研究（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備（研究代表者：栗山健一）に参画し，厚生労働省健康日本 21（第 2 次）による「健康づくりのための睡眠指針」アップデートの際に活用される新たな睡眠健康指標の普及・活用基盤開発・整備に貢献した．

栗山健一は，厚生労働行政推進調査事業費（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）次期健康づくり運動プラン作成と推進に向けた研究（研究代表者：辻一郎）に参加し，健康日本 21（第三次）における国民の健康づくりのための休養（睡眠）プラン策定に貢献した．

栗山健一は，厚生労働科学研究（障害者政策総合研究事業）睡眠薬・抗不安薬の処方実態調査ならびに共同意思決定による適正使用・出口戦略のための研修プログラムの開発と効果検証研究（研究代表者：高江洲義和）に参加し，主に共同意思決定方針策定に貢献した．

栗山健一は，厚生労働省 国民健康・栄養調査企画解析検討会に委員として参加した．

栗山健一，吉池卓也は，厚生労働省 健康づくりのための睡眠指針の改定に関する検討会に委員として参加した．

栗山健一は，厚生労働省 健康日本 21（第三次）推進専門委員会に参考人として参加した．

栗山健一は，独立行政法人 医薬品医療機器総合機構専門委員として専門協議に参加した．

(5) センター内における臨床的活動

栗山健一，吉池卓也，河村 葵は，国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来での診療および臨床研究を行った．

栗山健一は，7 つの睡眠薬および覚醒維持薬開発治験の施設責任者を務め，吉池卓也，河村 葵はこれの分担医師として治験に参加した．

(6) その他

栗山健一は，精神保健判定医として複数の医療観察法裁判に参加し，同法の有機的・機能的運用に貢献した．

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Izuhara M, Matsui K, Okubo R, Yoshiike T, Nagao K, Kawamura A, Tsuru A, Utsumi T, Hazumi M, Sasaki Y, Takeda K, Komaki H, Oi H, Kim Y, Kuriyama K, Miyama T, Nakagome K. Association of COVID-19 preventive behavior and job-related stress with the sleep quality of healthcare workers one year into the COVID-19 outbreak: a Japanese cross-sectional survey. Biopsychosoc Med 18: 8. 2024. DOI: 10.1186/s13030-024-00304-w

2) Hazumi M, Kawamura A, Yoshiike T, Matsui K, Kitamura S, Tsuru A, Nagao K, Ayabe N, Utsumi T, Izuhara M, Shinozaki M, Takahashi E, Fukumizu M, Fushimi M, Okabe S, Eto T, Nishi D, Kuriyama K. Development and validation of the Japanese version of the

Bedtime Procrastination Scale (BPS-J). BMC Psychol 12: 1–14, 2024. DOI: 10.1186/s40359-024-01557-4

3) Izuhara M, Matsui K, Yoshiike T, Kawamura A, Utsumi T, Nagao K, Tsuru A, Otsuki R, Kitamura S, Kuriyama K. Association between sleep duration and antibody acquisition after mRNA vaccination against SARS-CoV-2. Front Immunol 14: 1–9, 2023. DOI: 10.3389/fimmu.2023.1242302

4) Nagao K, Yoshiike T, Okubo R, Matsui K, Kawamura A, Izuhara M, Utsumi T, Hazumi M, Shinozaki M, Tsuru A, Sasaki Y, Takeda K, Komaki H, Oi H, Kim Y, Kuriyama K, Takahashi H, Miyama T, Nakagome K. Association between health anxiety dimensions and preventive behaviors during the COVID-19 pandemic among Japanese healthcare workers. Heliyon 9, e22176, 2023. DOI: 10.1016/j.heliyon.2023.e22176

5) Yoshiike T, Benedetti F, Moriguchi Y, Vai B, Aggio V, Asano K, Ito M, Ikeda H, Ohmura H, Honma M, Yamada N, Kim Y, Nakajima S, Kuriyama K. Exploring the role of empathy in prolonged grief reactions to bereavement. Sci Rep 13, 7596, 2023. DOI: 10.1038/s41598-023-34755-y

6) Yoshiike T, Kawamura A, Utsumi T, Matsui K, Kuriyama K. A prospective study of the association of weekend catch-up sleep and sleep duration with mortality in middle-aged adults. Sleep Biol Rhythms 21, 409–418, 2023. DOI: 10.1007/s41105-023-00460-6

7) Melloni EMT, Paolini M, Dallaspezia S, Lorenzi C, Poletti S, d'Orsi G, Yoshiike T, Zanardi R, Colombo C, Benedetti F. Melatonin secretion patterns are associated with cognitive vulnerability and brain structure in bipolar depression. Chronobiol Int 40, 1279–1290, 2023. DOI: 10.1080/07420528.2023.2262572

8) Matsui K, Kimura A, Nagao K, Yoshiike T, Kuriyama K. Treatment of sleep - related eating disorder with suvorexant: A case report on the potential benefits of replacing benzodiazepines with orexin receptor antagonists. Psychiatry Clin Neurosci Reports 2, 2–5, 2023. DOI: 10.1002/pcn5.123

9) Matsui K, Kuriyama K, Yoshiike T, Kawamura A, Nagao K, Izuhara M, Hazumi M, Inada K, Nishimura K. Relapse of schizophrenia associated with comorbid delayed sleep-wake phase disorder but not with evening chronotype. Schizophr Res 261, 34–35, 2023. DOI: 10.1016/j.schres.2023.09.009

10) Nakajima S, Kaneko Y, Fujii N, Kizuki J, Saitoh K, Nagao K, Kawamura A, Yoshiike T, Kadotani H, Yamada N, Uchiyama M, Kuriyama K, Suzuki M. Transdiagnostic association between subjective insomnia and depressive symptoms in major psychiatric disorders. Front Psychiatry 14, 2023. DOI: 10.3389/fpsyt.2023.1114945

11) Saitoh K, Yoshiike T, Kaneko Y, Utsumi T, Matsui K, Nagao K, Kawamura A, Otsuki R, Otsuka Y, Aritake-Okada S, Kaneita Y, Kadotani H, Kuriyama K, Suzuki M. The effect of nonrestorative sleep on incident hypertension 1–2 years later among middle-aged Hispanics/Latinos. BMC Public Health 23, 1456, 2023. DOI: 10.1186/s12889-023-16368-2

12) Hida A, Iida A, Ukai M, Kadotani H, Uchiyama M, Ebisawa T, Inoue Y, Kitamura S, Mishima K. Novel *CLOCK* and *NR1D2* variants in 64 sighted Japanese individuals with non-24-hour sleep-wake rhythm disorder. Sleep 46, 1-3, 2023. DOI: 10.1093/sleep/zsad063, 2023.

13) Takaesu Y, Sakurai H, Aoki Y, Takeshima M, Ie K, Matsui K, Utsumi T, Shimura A, Okajima I, Kotorii N, Yamashita H, Suzuki M, Kuriyama K, Shimizu E, Mishima K, Watanabe K, Inada K. Treatment strategy for insomnia disorder: Japanese expert consensus. Front Psychiatry 14: 1168100, 2023. DOI: 10.3389/fpsyt.2023.1168100.

14) Kitajima T, Kuriyama K. Editorial: Circadian rhythm sleep-wake disorders: Pathophysiology, comorbidity, and management. Front Psychiatry 14: 1134798, 2023. DOI:10.3389/fpsyt.2023.1134798.

(2) 総説

1) 栗山健一：睡眠医療にかかわる近年の動向．特集 プライマリ・ケアでみる睡眠の悩み．治療 106(4): 372-375, 2024.
2) 栗山健一：特集にあたって．特集 うつ病のバイオマーカー開発の試み．精神医学 66(2): 123, 2024.
3) 栗山健一：生物学的指標（バイオマーカー）の定義．特集 うつ病のバイオマーカー開発の試み．精神医学 66(2)：124-129, 2024.
4) 栗山健一：健康日本 21 の 20 年の評価－休養に関する最終評価と今後の展望．特集 健康日本 21 の 20 年間の評価と次期プラン．公衆衛生 88(2): 159-165, 2024.
5) 内海智博，栗山健一：心的外傷およびストレス因関連障害群に関連する日中の眠気．特集「ねむい」を診わける　日中の眠気，起床困難．臨床精神医学 53(1): 65-74, 2024.
6) 栗山健一：8．概日リズム障害　特集 睡眠学の発展によせて．睡眠医療 17(4): 489-496, 2023.
7) 稲垣貴彦，栗山健一：特集にあたって．（企画）特集 子どものうつ病に気づく．精神医学 65(7): 971-972, 2023.
8) 栗山健一：不眠症 －研究・診療の最新知識（編集）別冊・医学のあゆみ．医歯薬出版株式会社．2023.4.20.
9) 吉池卓也：気分症における概日関連指標の開発.【特集】うつ病のバイオマーカー開発の試み．精神医学 66(2): 192-196, 2024.
10) 吉池卓也：不眠対策をすればせん妄を予防できるか―せん妄の病態に基づく治療戦略―．【特集】不眠・睡眠障害のインパクトと治療選択．精神科治療学 38(6): 689-695, 2023.
11) 吉池卓也：不眠の認知行動療法と睡眠薬の併用における効果と注意点.【特集】非薬物療法と薬物療法の併用におけるエビデンスと注意点．臨床精神薬理 26(5): 473-480, 2023.
12) 内海智博，吉池卓也：睡眠問題に着目した自殺予防.【特集】高齢者の睡眠問題と先制医療の取り組み．睡眠医療 17(3): 325-334, 2023.

(3) 著書

1) 栗山健一：過眠症（ナルコレプシーを含む）今日の治療指針 2024 年版．医学書院，pp1078-1080，2024.1.1.
2) 栗山健一：60 歳からの新しい睡眠習慣．河出書房新書，2023.12.30.
3) 栗山健一：レム睡眠行動障害・概日リズム睡眠-覚醒障害．睡眠薬・抗不安薬のエキスパートコンセンサス．高江洲義和・稲田健編著．新興医学出版社，pp140-144，2023.10.25.

(4) 研究報告書

1) 栗山健一：適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備.令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）（研究代表者：栗山健一）総括・分担研究報告書. pp 1-9, 2024.3.

(5) 翻訳

(6) その他

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) 栗山健一：概日リズム睡眠・覚醒障害群．第 4 回日本睡眠検査学会学術集会（教育講演），ウインクあいち（愛知県産業労働センター），2023.11.11.

2) 北島剛司，栗山健一：睡眠障害における概日リズムの役割と併存症．日本睡眠学会第 47 回定期学術集会，座長，日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜，2023. 9.15.

3) 鈴木正泰，栗山健一：うつ病の克服に睡眠学・時間生物学はどのように貢献できるか？日本睡眠学会第 47 回定期学術集会，座長，日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜，2023. 9.15.

4) 栗山健一：睡眠に着目したうつ病の新規診断法開発．日本睡眠学会第 47 回定期学術集会，シンポジスト，日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜，2023. 9.15.

5) 栗山健一，尾崎章子：健康づくりのための睡眠指針 2023（仮）の要旨と国民の睡眠健康改善目標．日本睡眠学会第 47 回定期学術集会，座長・コーディネーター，日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜，2023.9.16.

6) 駒田陽子，志村哲祥，松井健太郎，羽澄 恵，河村 葵，栗山健一：子ども・青少年における睡眠指針．日本睡眠学会第 47 回定期学術集会，シンポジスト，日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜，2023.9.16.

7) 尾崎章子，岡島 義，大橋由基，松井健太郎，栗山健一：高齢者における睡眠指針．日本睡眠学会第 47 回定期学術集会，シンポジスト，日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜，2023.9.16.

8) 栗山健一：プログラム医療機器が切り拓く不眠症治療の次世代型アプローチ（塩野義製薬）：不眠症に対する治療用アプリの臨床的位置づけ．日本睡眠学会第 47 回定期学術集会，ランチョンセミナー・演者，日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜，2023.9.15.

9) 栗山健一：不眠症治療の新展開（エーザイ）．日本睡眠学会第 47 回定期学術集会，ランチョンセミナー・座長，日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜，2023.9.15.

10) 鈴木正泰，栗山健一：気分障害の睡眠　up-to-date－病態理解から診断・治療法開発へ－　第 119 回日本精神神経学会学術総会，座長，パシフィコ横浜，2023.6.22.

11) 北村真吾：睡眠・リズムにみられる個人差．2023 年度日本生理人類学会栄養研究部会・睡眠研究部会合同部会（特別講演），米沢，2023.9.23.

12) 北村真吾：地域差にみられる睡眠・リズムの多様性．第 77 回日本人類学会大会，シンポジウム，仙台，2023.10.7.

13) 北村真吾：ヒト概日リズム周期の決定. 2023 年度日本生理人類学会秋期フロンティアミーティング，シンポジウム，東京，2023.11.18.

14) Yoshiike T: The development of circadian-related response predictors of wake therapy and beyond in mood disorders. 4th Congress of Asian Society of Sleep Medicine, Bangkok, 2023.12.11.

15) Yoshiike T: Neurobehavioral understanding of empathy in prolonged grief reactions. NOGIN Workshop 2023, The University of Arizona, 2023.11.4.

16) Yoshiike T: Chronotherapeutics for Mood Disorders. The 10th Congress of Asian Sleep Research Society and Asian Forum of Chronobiology, Istanbul/Online, 2023.4.1.

17) 福水道郎，林雅晴，木村一恵，長尾ゆり，野崎真紀，川井未知子，小島泰子，星野恭子，松井健太郎，都留あゆみ，長尾賢太朗，木附 隼，河村 葵，吉池卓也，栗山健一，住友典子，佐久

間啓：睡眠と神経発達症．てんかんと神経発達症と睡眠の関連性．第 56 回日本てんかん学会学術集会，シンポジスト，京王プラザホテル，2023.10.20.

18) 吉池卓也，栗山健一：健康づくりのための睡眠指針 2023（仮）の要旨と国民の睡眠健康改善目標睡眠時間と睡眠休養感．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2023.9.16.

19) 吉池卓也，栗山健一：睡眠の主観・客観評価、量的・質的評価が睡眠医療にもたらすもの．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2023.9.16.

20) 大槻 怜，松井健太郎，都留あゆみ，長尾賢太朗，内海智博，羽澄 恵，綾部直子，福水道郎，吉池卓也，栗山健一：パンデミックにおける社会的同調因子の減少と睡眠・覚醒相後退障害．睡眠障害における概日リズムの役割と併存症．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15.

21) 市場智久，河村 葵，長尾賢太朗，車井祐一，藤井彰夫，吉村 篤，吉池卓也，栗山健一：眼周囲温熱刺激による入眠促進と末梢皮膚放熱．睡眠障害における概日リズムの役割と併存症．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15.

22) 吉池卓也，栗山健一：認知・情動への光の作用．人の睡眠・心身機能に対する光の作用．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15.

23) 吉池卓也，長尾賢太朗：睡眠・概日リズム異常に基づいた気分障害の治療法開発．うつ病の克服に睡眠学・時間生物学はどのように貢献できるか？日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15.

24) 吉池卓也：高齢者の睡眠：加齢と認知症の観点から．睡眠と認知症．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，座長・シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15.

25) 吉池卓也：気分障害の治療ターゲットとしての睡眠・概日リズム異常．気分障害の睡眠 up-to-date－病態理解から診断・治療法開発へ―．第 119 回日本精神神経学会学術総会，シンポジスト，パシフィコ横浜ノース，2023.6.22.

(2) 一般演題

1) Yoshiike T, Utsumi T, Kawamura A, Nagao K, Matsui K, Kuriyama K: Lifetime history of insomnia disorder associates with elevated peripheral C-reactive protein independently of lifetime history of depressive and anxiety disorders: Cross-sectional analysis of Cleveland Family Study. 12th Conference of the International Society for Affective Disorders, University of Milan, 2023.12.15.

2) Yoshiike T, Benedetti F, Moriguchi Y, Vai B, Aggio V, Adano K, Ito M, Honma M, Yamada N, Kim Y, Nakajima S, Kuriyama K: Prolonged grief symptoms diminish neural activity during empathy for pain in others other than the deceased. 12th Conference of the International Society for Affective Disorders, University of Milan, 2023.12.15.

3) Yoshiike T, Yajima T, Utsumi T, Ooka T, Matsuda Y, Eto T, Kawamura A, Nagao K, Matsui K, Ito M, Nakajima S, Kuriyama K: A protective role of loss-related avoidance against vagal dysregulation among bereaved adults. 12th Conference of the International Society for Affective Disorders, University of Milan, 2023.12.16.

4) Nagao K, Yoshiike T, Hayashi D, Igarashi S, Matushima S, Matsui K, Kito S, Kuriyama K: Rapid change in time perception predicts treatment response to repetitive transcranial magnetic stimulation for major depressive disorder. 12th Conference of the International

Society for Affective Disorders, University of Milan, 2023.12.15.

5) 内海智博，吉池卓也，兼板佳孝，有竹清夏，松井健太郎，河村 葵，長尾賢太朗，繁田雅弘，鈴木正泰，栗山健一：地域一般高齢男性における睡眠時間の主観－客観乖離と死亡転帰との関連．第 45 回日本生物学的精神医学会年会，万国津梁館，2023.11.6-7.

6) 長尾賢太朗，吉池卓也，河村 葵，松井健太郎，岡邨しのぶ，内海智博，都留あゆみ，伊豆原宗人，篠崎未生，羽澄 恵，栗山健一：睡眠・覚醒相後退障害の入院治療効果と注意機能の関連．第 45 回日本生物学的精神医学会年会，万国津梁館，2023.11.6-7.

7) 吉池卓也，内海智博，長尾賢太朗，栗山健一：睡眠休養感と総死亡リスクの縦断的関連．第 82 回日本公衆衛生学会総会，つくば国際会議場，2023.10.31.

8) 内海智博，吉池卓也，兼板佳孝，長尾賢太朗，栗山健一：高齢男性における睡眠時間の主観－客観乖離と健康との関連．第 82 回日本公衆衛生学会総会，つくば国際会議場，2023.10.31.

9) 長尾賢太朗，吉池卓也，内海智博，栗山健一：COVID-19 パンデミック下の感染予防施策推進における健康不安の重要性．第 82 回日本公衆衛生学会総会，つくば国際会議場，2023.10.31.

10) 内海智博，吉池卓也，兼板佳孝，有竹清夏，松井健太郎，河村 葵，長尾賢太朗，繁田雅弘，鈴木正泰，栗山健一：地域一般高齢男性における睡眠時間の主観－客観乖離と健康転帰との縦断的関連．第 38 回日本老年精神医学会秋季大会，日本教育会館（東京），2023.10.13.

11) 内海智博，吉池卓也，有竹清夏，松井健太郎，河村 葵，長尾賢太朗，伏見もも，都留あゆみ，木附 隼，羽澄 恵，栗山健一：地域高齢男性における客観的な短時間睡眠を伴う不眠と概日活動リズムとの横断的関連．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.16.

12) 木附 隼，松井健太郎，吉池卓也，都留あゆみ，長尾賢太朗，河村 葵，内海智博，伊豆原宗人，松島 舜，羽澄 恵，北村真吾，鈴木正泰，栗山健一：外来患者における睡眠モニタリングデバイスの紛失・破損に関わる要因調査．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.16.

13) 伊豆原宗人，松井健太郎，吉池卓也，河村 葵，内海智博，長尾賢太朗，都留あゆみ，大槻 怜，北村真吾，栗山 健一：mRNA ワクチンによる抗体価上昇と睡眠時間の関連．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15.

14) 羽澄 恵，松井健太郎，田淵貴大，大久保亮，吉池卓也，北村真吾，河村 葵，長尾賢太朗，内海智博，伊豆原宗人，木附 隼，伏見もも，西 大輔，栗山健一：睡眠休養感は小児期逆境体験と精神的苦痛の関連を媒介する．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15.

15) 長尾賢太朗，吉池卓也，河村 葵，松井健太郎，木附 隼，内海智博，松島 舜，岡邨しのぶ，栗山健一：睡眠・覚醒相後退障害の入院治療と注意機能の関連．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15.

16) 長尾賢太朗，吉池卓也，林 大祐，五十嵐俊，松島 舜，松井健太郎，都留あゆみ，鬼頭伸輔，栗山健一：うつ病に対する反復経頭蓋磁気刺激の時間認知と治療効果予測．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15.

17) 木村綾乃，松井健太郎，齊藤友里香，都留あゆみ，木附 隼，松島 舜，吉池卓也，長尾賢太朗，河村 葵，内海智博，伊豆原宗人，羽澄 恵，向井洋平，高橋祐二，栗山健一：レビー小体型認知症における幻視と入眠期急速眼球運動の関係性．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15-17.

18) 中島英，金子宜之，藤井伸邦，木附 隼，斎藤かおり，長尾賢太朗，河村 葵，吉池卓也，角谷寛，山田尚登，内山 真，栗山健一，鈴木正泰：主要精神疾患における不眠と抑うつとの関連．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会合同大会，パシフィコ

横浜ノース，2023.9.15.

19）長尾賢太朗，吉池卓也，河村 葵，松井健太郎，岡邨しのぶ，内海智博，都留あゆみ，伊豆原宗人，木附 隼，篠崎未生，羽澄 恵，栗山健一：睡眠・覚醒相後退障害の入院治療効果予測因子の検討．第 119 回日本精神神経学会学術総会，パシフィコ横浜ノース，2023.6.23.

20）内海智博，吉池卓也，有竹清夏，松井健太郎，河村 葵，長尾賢太朗，伏見もも，都留あゆみ，木附 隼，羽澄 恵，斎藤かおり，鈴木正泰，栗山健一：地域高齢男性を対象とした睡眠充足度と概日活動リズムの関連．第 119 回日本精神神経学会学術総会，パシフィコ横浜ノース，2023.6.23.

21）Yoshiike T, Utsumi T, Matsui K, Nagao K, Saitoh K, Otsuki R, Aritake-Okada S, Suzuki M, Kuriyama K: Restorative sleep restores sleep loss and excessive time in bed in middle-aged and older adults. SLEEP2023, Indiana Convention Center, 2023.6.5.

22）Utsumi T, Yoshiike T, Kaneita Y, Aritake-Okada S, Matsui K, Nagao K, Saitoh K, Otsuki R, Shigeta M, Suzuki M, Kuriyama K: Association of subjective-objective discrepancy in sleep duration with all-cause mortality in community-dwelling older men. SLEEP2023, Indiana Convention Center, 2023.6.5.

23）内海智博，吉池卓也，兼板佳孝，有竹清夏，松井健太郎，河村 葵，長尾賢太朗，繁田雅弘，鈴木正泰，栗山健一：地域高齢男性における睡眠時間誤認と死亡転帰との関連．6NC リトリートポスターセッション，東京国際フォーラム，2023.4.22.

24）Aoi Kawamura, Kentaro Matsui, Takuya Yoshiike, Yuichi Inoue, Masahiro Takeshima, Motohiro Ozone, Masahiro Suzuki, Kenichi Kuriyama. Establishment of a polysomnography databank for sleep disorders in Japan. SLEEP2023, Indiana Convention Center, 2023.6.3-7.

25）河村 葵，角谷 寛，鈴木正泰，栗山健一，内山 真，山田尚登，SEEDs Study 研究グループ：携帯型脳波計を用いたうつ病の客観的生理指標の開発に関わる予備的調査．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15-17.

26）河村 葵，松井健太郎，吉池卓也，木村綾乃，都留あゆみ，長尾賢太朗，木附 隼，内海智博，伊豆原宗人，岡邨しのぶ，伏見もも，北村真吾，竹島正浩，岩本邦弘，角谷 寛，鈴木正泰，小曽根基裕，三島和夫，井上雄一，栗山健一：国内における睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンクの構築．第 45 回日本生物学的精神医学会年会，万国津梁館, 2023.11.6-7.

27）江藤太亮，岡部聡美，北村真吾：恒常条件下における主観的・客観的眠気の乖離の時間変化．日本生理人類学会第 84 回大会，九州大学，2023.6.17.

28）榎本みのり，江藤太亮，北村真吾：小児の第一夜効果のマクロ・ミクロ睡眠構造における検討．日本生理人類学会第 84 回大会，九州大学，2023.6.17.

29）江藤太亮，岡部聡美，北村真吾：恒常条件下での主観的・客観的眠気の乖離にみられる日内変動とクロノタイプとの関連性．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15-17.

30）江藤太亮，北村真吾：屋外夜間光の明るさはクロノタイプや社会的ジェットラグと関連するが、主観的睡眠の量と質には関連しない：衛星データを用いた検討．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15-17.

31）江藤太亮，北村真吾，久保智英，西村悠貴，池田大樹，Ana Adan：短縮版朝型夜型質問紙（rMEQ）日本語版の作成と心理測定的特性の検証．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15-17.

32）榎本みのり，江藤太亮，北村真吾：学童期小児における第一夜効果の脳波特性．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15-17.

33) 岡部聡美，江藤太亮，北村真吾：マインドワンダリングと睡眠中の夢の類似性：日内変動を切り口とした検討．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15-17.
34) 北村真吾，肥田昌子，榎本みのり，三島和夫：非 24 時間睡眠覚醒リズム障害患者の主観的眠気にみられる恒常性機能評価．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15-17.
35) 近藤恭平，駒田陽子，北村真吾：日本の COVID-19 による社会規制前後の睡眠-覚醒行動：首都圏と地方圏の比較から．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15-17.
36) 元村祐貴，北村真吾，大場健太郎，勝沼るり，寺澤悠理，肥田昌子，守口善也，三島和夫：主観-客観的眠気指標に共通して認められる fMRI 機能的結合変化：KSS と PVT による検討．日本睡眠学会第 45 回定期学術集会・第 30 回日本時間生物学会学術大会 合同大会，パシフィコ横浜ノース，2023.9.15-17.
37) 櫻井理紗，熊谷千尋，星本弘之，北村真吾，渡辺 浩，三井誠二，渡部大介，平松治彦，美代賢吾： 6NC 電子カルテ情報統合データベースにおける JLAC11 の導入の検討．第 43 回医療情報学連合大会・第 24 回日本医療情報学会学術大会，神戸ファッションマート，2023.11.22.

(3) 研究報告会

(4) その他

C．講演

1) 栗山健一：「健康づくりのための睡眠ガイド 2023 の概要」．NCNP 病院睡眠障害センター市民公開講座 2023（日本睡眠学会/厚生労働省後援），オンライン，2024.3.16.
2) 栗山健一：「健康づくりのための睡眠ガイド 2023 ～約 10 年ぶりの改訂～」．不眠症診療 Web セミナー（エーザイ主催），オンライン，2024.3.1.
3) 栗山健一：「精神障害と睡眠障害との相互関係」．徳島大学精神科講演（徳島大学），2024.2.14.
4) 栗山健一：「不眠症の基本的理解と対処法」．西北五精神科医会（エーザイ主催），オンライン，2024.2.9.
5) 栗山健一：「患者さんが不眠症状を訴えたときに考えること～診断から治療まで～」．2023 年度第 2 回日本大学医学部附属板橋病院病診連携講演会（日本大学医師会/MSD 共済），MSD 株式会社 新宿事務所，2024.2.7.
6) 栗山健一：「睡眠力アップ講座」．令和 5 年度文京区精神保健講演会（文京区保健センター），文京区汐見地域活動センター 2 階会議室，2024.1.19.
7) 栗山健一：「うつ病と睡眠」．令和 5 年度うつ病セミナー・家族セミナー，藤沢市役所・藤沢病院，オンライン，2023.12.7.
8) 栗山健一：「健康づくりは良い睡眠から」．協会けんぽ勉強会，オンライン，2023.11.29.
9) 栗山健一：「健康づくりは良い睡眠から」．小平市役所メンタルヘルス研修会，小平市役所 6 階大会議室，2023.11.15.
10) 栗山健一：「女性の睡眠障害とうつ」．足立区こころといのちの講演会，東京芸術センター「天空劇場」，2023.9.27.
11) 栗山健一：「身体疾患と不眠」．首都圏 サイコオンコロジー研究会（エーザイ主催），エーザイ株式会社本社会議室，2023.9.22.
12) 栗山健一：「高齢者の睡眠障害」．西淀病院研修会，西淀病院 のざと診療所 3 階会議室，2023.9.8.
13) 栗山健一：「概日リズム睡眠・覚醒障害と精神疾患」．第 33 回東海睡眠障害研究会（東海睡眠障害

研究会/ エーザイ共催），エーザイ名古屋コミュニケーションオフィス 6F 大ホール，　2023.9.3.
14）栗山健一：施設見学プログラム 質の良い睡眠とは ～睡眠を測る～．NCNP メディア塾，2023.9.1.
15）栗山健一：「睡眠の質評価における睡眠休養感の有用性～睡眠障害臨床から公衆衛生まで～」．Sleep＆Mental Health Symposium ～病院の不眠対策を考える～（MSD 主催），ANA インターコンチネンタルホテル東京 B1F プロミネンス，2023.7.30.
16）栗山健一：「睡眠の質を上げて健康寿命を延ばそう」．蔵王町こころの健康づくり講演会，蔵王町ふるさと文化会館，2023.7.28.
17）栗山健一：「不眠症治療における薬物療法の位置づけ」．第 12 回精神療法・薬物療法研究会（京都大学精神神経科・MSD 主催），オンライン，2023.7.24.
18）栗山健一：「睡眠休養感欠如は不眠症状か」．Sleep Forum2023（MSD 主催），TKP 名古屋栄カンファレンスルーム），2023.7.24.
19）北村真吾：「ぐっすり眠って、すっきり起きよう 」．学校訪問型睡眠講座（公益財団法人 神経研究所 睡眠健康推進機構），小山市立小山小学校，2023.09.06.
20）吉池卓也：「年代ごとに異なる適正な睡眠量と質：睡眠時間と睡眠休養感の両立」．NCNP 病院睡眠障害センター市民公開講座 2023（日本睡眠学会/厚生労働省後援），オンライン，2024.3.16.
21）Yoshiike T: The modulation of brain plasticity by sleep deprivation in mood disorders. 192nd IIIS seminar, International Institute for Integrative Sleep Medicine, 2024.1.17.
22）吉池卓也：「意外と知らない睡眠の効用～良い目覚めのために～」．令和 5 年度出張睡眠市民公開講座，草加市保健センター，2023.10.23.
23）吉池卓也：「加齢・併存症を考慮した高齢者の不眠治療」．高齢者不眠症 WEB セミナー（MSD 主催），オンライン，2023.10.20.
24）吉池卓也：「高齢者の不眠と認知症」．Hybrid Sleep Management Seminar（MSD 主催），ルミエール府中，ハイブリッド，2023.7.25.
25）吉池卓也：「睡眠・生体リズムの液性調節と不眠」．内分泌みらい研究カンファレンス（MSD 主催），慶應義塾大学病院（ハイブリッド），2023.7.20.
26）河村 葵：「女性睡眠外来の現場から」．睡眠フロンティアオンライン Seminar（MSD 主催），オンライン，2023.10.20.

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1）栗山健一：日本睡眠学会　理事・評議員
2）栗山健一：日本時間生物学会　評議員
3）栗山健一：日本生物学的精神医学会　評議員
4）肥田昌子：日本時間生物学会　評議員
5）肥田昌子：日本睡眠学会　評議員
6）北村真吾：日本時間生物学会　評議員
7）北村真吾：日本生理人類学会　理事
8）北村真吾：日本睡眠学会　評議員
9）吉池卓也：日本時間生物学会　評議員
10）吉池卓也：日本睡眠学会　評議員
11）吉池卓也：日本生物学的精神医学会　評議員
12）河村 葵：日本睡眠学会　評議員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

1) 栗山健一：日本睡眠学会　倫理委員会　委員長
2) 栗山健一：日本睡眠学会　利益相反委員会　副委員長
3) 栗山健一：日本睡眠学会　用語委員会　副委員長
4) 栗山健一：日本睡眠学会　睡眠研究支援委員
5) 栗山健一：日本睡眠学会　将来構想委員
6) 栗山健一：日本睡眠学会　機関誌編集委員
7) 栗山健一：日本睡眠学会　SBR Associate Editor
8) 栗山健一：日本睡眠学会　災害対策ワーキンググループ 副委員長
9) 吉池卓也：日本総合病院精神医学会誌　編集委員
10) 吉池卓也：日本総合病院精神医学会　治療戦略検討委員
11) 吉池卓也：日本睡眠学会　認定試験委員会試験問題作成委員
12) 北村真吾：日本生理人類学会誌　副編集委員長
13) 北村真吾：Journal of Physiological Anthropology Editorial Board
14) 北村真吾：Biology Editorial Board

E．研修

(1) 研修企画

(2) 研修会講師

F．その他

1) 栗山健一：10 年ぶり指針改定 世代で違う「睡眠時間と死亡リスク」．特別読物，pp36-38，週刊新潮，2024.3.28.
2) 栗山健一：寝ても疲れが取れないなら要チェック！あなたの睡眠の質 大丈夫ですか？ | 健康イベント＆コンテンツ | スマート・ライフ・プロジェクト．厚生労働省，Web https://www.smartlife.mhlw.go.jp/event/sleep_quality/.2024.3.22.
3) 栗山健一：良質な睡眠をとって心身ともに健康な毎日を過ごす みんなのミカタ（東京新聞 140th）睡眠のミカタ．東京新聞（16 面）日刊，2024.3.15.
4) 栗山健一：“みみより！くらし解説　あなたは大丈夫？睡眠の新常識．NHK ニュース　【キャスター】岩渕梢，【解説】吉川美恵子，2024.1.31.
5) 栗山健一：第 3 部 加齢関連疾患とその周辺⑱　入眠困難 工夫で解決可能に　老化と寿命の謎を探る 33．信濃毎日新聞（9 面）日刊，2024.1.29.
6) 栗山健一：最新データで導く快適睡眠への道．すこやかファミリー vol.833，（株）法研，pp6-11，2024 年 2 月号.
7) 栗山健一：第 3 部 加齢関連疾患とその周辺⑰　睡眠時間年齢とともに短く　老化と寿命の謎を探る 32．信濃毎日新聞（9 面）日刊 2024.1.22.
8) 栗山健一：第 3 部 加齢関連疾患とその周辺⑯　多様で重要な役割担う睡眠　老化と寿命の謎を探る 31．信濃毎日新聞（9 面）日刊，2024.1.15.
9) 栗山健一：～眠りに満足してますか？新“睡眠ガイド”～．ラジオ「NHK ジャーナル」，NHK ラジオ第一放送，2024.1.10.
10) 栗山健一：足裏が熱く眠れない．からだの質問箱　読売新聞（9 面）日刊，2024.1.5.
11) 栗山健一：睡眠改善で健康づくり 1．睡眠がおよぼす健康への影響－健康リスクを知っておこう．地方公務員安全と健康フォーラム，vol.126, pp28-29, 2023 年 12 月号.

12) 栗山健一：シニアの睡眠の質を高める快眠のヒント．NHK テキスト きょうの料理，2023 年 11 月号 PR.
13) 栗山健一：シニアの睡眠の質を高める快眠のヒント．NHK テキスト きょうの健康，2023 年 11 月号 PR.
14) 栗山健一：健康 NAVI 特集　睡眠時間＋睡眠休養感が健康のカギ！．Health & Life 第 467 号，pp6-11，2023 年 Autumn 10 月号.
15) 栗山健一：体のお悩みなんでも Q&A　睡眠編．irodori FUJIFILM，pp8-11，2023 年 9 月号.
16) 栗山健一：なんでも健康相談　眠れなくて困っています．NHKテキスト きょうの健康，pp113，2023 年 8 月号.
17) 栗山健一：健康特集「睡眠休養感」を高めて目覚めスッキリ！．ハルメク，pp79-85，2023 年 7 月号.
18) 栗山健一：睡眠中に突然叫ぶ　レム睡眠行動障害．八重山毎日新聞日刊，2023.6.2.
19) 栗山健一：大声で寝言１０年続く母．からだの質問箱．読売新聞（14 面）日刊，2023.6.2.
20) 栗山健一：夢に反応 体が動く レム睡眠行動障害．四国新聞日刊，2023.5.19.
21) 栗山健一：レム睡眠行動障害　睡眠中に突然叫ぶ．釧路新聞日刊，2023.5.17.
22) 栗山健一：睡眠休養感をアップする方法．サンデー毎日合併号，pp120-121，2023.5.7,5.14.
23) 栗山健一：レム睡眠行動障害 夢に応じて体が動く．十勝毎日新聞日刊，2023.4.24.
24) 栗山健一：睡眠中 突然叫ぶ、殴る レム睡眠行動障害．函館新聞日刊，2023.4.23.
25) 栗山健一：夢に反応 叫び声や暴力 レム睡眠行動障害．河北新報日刊，2023.4.21.
26) 栗山健一：レム睡眠行動障害 突然叫ぶ、殴る．岩手日日日刊，2023.4.6.
27) 栗山健一：夢を見て突然叫ぶ レム睡眠行動障害．苫小牧民報日刊，2023.3.30.
28) 栗山健一：日本人の睡眠時間・睡眠の季節性変化．日本テレビ NewsEvery，2023.3.8.
29) 栗山健一：NHK ラジオ「健康ライフ」．NHK ラジオ第一放送，5 回（「睡眠休養感」、「睡眠の誤解」、「3 つのポイントで不眠改善」、「眠れない夜はどうする」、「シニアの不眠対策」）再放送，2023.3.6-310.
30) 栗山健一：「なぜ寝言は出るの？…大人の場合、頻度が増えてきたら要注意」．yomiDr. 読売新聞夕刊，2023.2.18. yomiDr. 読売新聞オンライン，2023.3.4.
https://yomidr.yomiuri.co.jp/article/20230220-OYTET50009/
31) 北村真吾：「気合いが足りないから」ではない…「朝型・夜型」には " 生まれつき " 備わった体内時計が影響している．FRIDAY デジタル，2023.12.6.
32) 北村真吾：間違いだらけの健康常識 生活習慣編. Tarzan 特別編集，2024.3.15.
33) 吉池卓也：死別後の悲嘆で共感低下 脳活動の測定で判明．47NEWS，2023.10.25.
34) 吉池卓也：死別後の悲嘆で共感低下 脳活動の測定で判明．MEDIFAX web，2023.9.21.
35) 吉池卓也：死別後の悲嘆で共感低下 脳活動の測定で判明．山陰中央新報デジタル，2023.9.20.
36) 吉池卓也：死別後の悲嘆で共感低下 脳活動の測定で判明．東京新聞，2023.9.20.
37) 吉池卓也：死別後の悲嘆で共感低下 脳活動の測定で判明．室蘭民報，2023.9.17.
38) 吉池卓也：死別後の悲嘆で共感低下 脳活動の測定で判明．千葉日報，2023.9.17.
39) 吉池卓也：死別後の悲嘆症状強い人 他者への共感低下 結びつき回復へ支援大切．福井新聞 D 刊，2023.9.14.
40) 吉池卓也：近親者死別の悲嘆 1 年以上→他者への「共感」弱まる 脳活動低下「周りの支援大切」．北海道新聞，2023.9.12.
41) 吉池卓也：死別後の悲嘆で共感低下 脳活動の測定で判明．山口新聞，2023.9.6.
42) 吉池卓也：死別後の悲嘆で共感低下 脳活動の測定で判明．佐賀新聞，2023.9.6.
43) 吉池卓也：死別後の悲嘆で共感低下 脳活動の測定で判明．デーリー東北，2023.9.3.
44) 吉池卓也：睡眠休養感の意義．MSD～エキスパートが語る～精神疾患と「不眠」．2023 年 7 月.
45) 吉池卓也，栗山健一：「睡眠休養感」これが低いと寿命に関わる．令和なコトバ．日経新聞電子版，2024.2.3.

9. 知的・発達障害研究部

Ⅰ. 研究部の概要

知的・発達障害研究部は，知的障害研究室，発達機能研究室の二室体制で構成され，知的能力障害，自閉スペクトラム症，注意欠如・多動症，限局性学習症，トゥレット症などの神経発達症の病態解明，治療・支援に関する研究を幅広く実施している．研究においては，部局内だけではなく，国立精神・神経医療研究センター内，ならびに，国立国際医療研究センター国府台病院とのナショナルセンター間の連携，東京大学，筑波大学，京都大学，名古屋大学，名古屋市立大学などの中核的研究機関との連携を幅広く構築している．加えて研究者のキャリア・パス形成を基本方針の一つに掲げており，競争的研究資金の確保，研究計画の立案と遂行，論文執筆まで，共同性と相互研鑽を通して研究者としての成長を図り，知的・発達障害ならびに関連領域における次世代のリーダーシップを国内外で発揮できる人材育成を強く意識している．また，厚生労働省から委託された国研修として発達障害者支援研修を実施し，各地でかかりつけ医対応力向上研修を実施する高度な知識と技能を有する医師の育成を行っているほか，注意欠如・多動症のペアレントトレーニング実施者養成研修を実施し，各地で心理社会的治療を普及させるリーダーシップを発揮する人材の育成を行うなど，知的・発達障害の支援を拡充するための人材育成の拠点として機能できるよう努めている．

部長の岡田 俊（児童精神医学）は，自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症をはじめとするとその精神医学的併存症に関し操作的診断技術開発（K-SADS, CAT），療育手帳判定における知的能力障害の簡易診断法 ABIT の開発と実装（中京大学との共同〔厚生労働科学研究〕），トゥレット症ガイドライン外部委員，オンラインメンタルヘルスケアシステム KOKOROBO-J の開発（トランスレーショナルメディカルセンター竹田和良室長，当部の高田美希科研費研究員との共同）22q11.2 欠失症候群のコホート研究に携わるほか，厚生労働省障害者総合福祉推進事業費補助金を受託し，強度行動障害を有する者の一般医療受診に関する実態調査を実施した．また，請園正敏リサーチフェロー（行動科学，生物統計学）や高田美希科研費研究員（臨床心理学）とともに新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大下における神経発達症の子どもと親のメンタルヘルスに関する前向き調査研究を実施した．また，NCNP 病院の児童精神科外来において診療を提供した．また，環境省（エコチル）精神科専門委員として，知的・発達障害に関連する国の施策に寄与してきた．

石井礼花（児童精神医学）室長（発達機能研究室）は，注意欠如・多動症のペアレントトレーニングの有効性について，ランダム化比較試験を完結し，その有効性を行動特性だけではなく，親子の愛着や脳画像からも検討を進めている．また，ペアレントトレーニング実施者養成研修プログラムを作成し，岡田部長とともに実施者養成研修を定期開催した．さらに，石井は，岡田とともに，国立がんセンター島津太一らとの共同でペアレントトレーニングの普及を阻害している要因を明確化し，その実装を図る取り組みを継続している．

江頭優佳リサーチフェロー（神経生理学，実験心理学）と林 小百合リサーチフェロー（神経生理学，実験心理学），高田美希科研費研究員（臨床心理学）との共同のもと，定型発達ならびに神経発達症当事者のデータサンプリングを精力的に進めてきた．江頭は，神経発達症における多様な時間知覚に着目し，その神経基盤の同定と神経発達症における障害の解明に取り組んでいる．また，林は，注意欠如・多動症等において見いだされる実行機能障害，特に抑制機能の障害に対して社会的報酬が促進的な影響を及ぼすことに着目し，年齢層ごとの両機能の連関や神経発達症における障害の解明を進めている．江頭，林は，国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部横断的研究推進費若手研究助成を得て，国立国際医療研究センター国府台病院子どものこころ総合診療センターの宇佐美政英センター長，魚野翔太筑波大学准教授と共同して，児童症例の前方視的追跡を開始し，併存障害との関係を明らかにする研究へと開始している．また，脳統合イメージングセンター（IBIC）との連携をはかり，バイオマーカーを取り入れて，臨床表現型や神経心理学的機能の背後にある神経学的病態を明らかにする研究への展開を図っている．

さらに，請園は，高野裕治客員研究員との共同のもと，バルプロ酸自閉症モデルマウスを用いて，社会性を反映する新規行動指標としてのリーチング課題を作成し，その妥当性を検証し，介入技法の検討をしている．続いて，社会性の神経メカニズム解明のため，ラットにおいて ACC の活動をコントロールすることで，他個体の存在によって生じる特定の社会行動はみられなくなるが，他個体が飲食していると，共同的に同じ飲食行動が生じることを示し，独自性のある研究を展開している．また，高田は，行動上の問題のある児童の養育を変容する行動的介入である親子相互交流療法(PCIT)に焦点を当て治療継続を阻害する要因を明確化し，さらに個別的要因に依拠したプロトコール開発を目指して前向き研究を開始している．

上述のように，岡田部長，石井室長に加え，リサーチフェローとして，江頭優佳，林 小百合，請園正敏，科研費研究員として高田美希が研究に参加したことに加え，科研費研究補助員の飯島鈴音，奥貫奈津恵，熊澤 綾，小谷暁子，崎原ことえ，白川由佳，田中美歩，眞神花帆，松田千皓，山口利緒が研究を支えた．また，併任研究員の中川栄二，客員研究員として，會田千重，稲垣真澄，稲田尚子，岩垂喜貴，宇佐美政英，魚野翔太，小川しおり，小沢 浩，加我牧子，加賀佳美，金生由紀子，久島 周，黒田美保，軍司敦子，小平雅基，佐藤 弥，鈴木 太，高野裕治，竹市博臣，趙 朔，辻井農亜，波多野文，堀内史枝，安村 明，山内 彩，吉川 徹，義村さや香が研究に参加している．また，秋月由紀子，井上さゆり，鈴木道久，増喜奈由子が，研究，研修活動を支えた．

令和 5 年 11 月からは，岡田部長は奈良県立医科大学精神医学講座教授に着任し，令和 5 年度末までクロスアポイントメントで部を牽引した．また，林小百合は令和 5 年度末をもって，筑波大学に特任助教としての転出が内定している．さらに請園正敏リサーチフェローの人間環境大学教授就任も決定しており，部員がアカデミックポジションに着任し，国内の基幹施設における研究の牽引を担える人材となったことも令和 5 年度の当部の成果といえる．また，岡田が大会長としての役割を果たし，当部の部員が中心になって国際学会 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions を開催したことも特記すべき成果である．

Ⅱ．研究活動

1）　認知神経科学的手法を用いた神経発達症と併存精神疾患の病態研究

注意欠如・多動症ならびに自閉スペクトラム症の臨床表現型（神経発達症特性，適応行動，不安・抑うつなどの精神病理学的評価）と神経心理学的機能（表情認知，視線認知，実行機能，報酬系，時間知覚）との関係についてデータを蓄積している．科学研究費（岡田，魚野，江頭，林）ならびに精神・神経疾患研究開発費（岡田，魚野）に基づいて研究を遂行しており，その成果の一部を The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions で発表し（岡田，江頭，林），岡田，江頭，林が優秀発表賞を受賞した．また，Journal of Psychiatric Research にその結果を発表した．さらに，江頭と林は，それぞれ国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部横断的研究推進費若手研究助成を得て，国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科宇佐美政英（客員研究員）らとともに神経発達症児・者および定型発達児・者を対象としたデータサンプリングできる体制を構築した．江頭は国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部より若手研究課題最優秀演題賞を，日本児童青年精神医学会から研究奨励賞を授与された．

2）　注意欠如・多動症のペアレントトレーニングに関する実装研究

注意欠如・多動症の心理社会的治療として，ペアレントトレーニングはその有効性が実証され，第一選択治療とされているにもかかわらず，本邦におけるエビデンス構築は不十分であり，その普及が十分ではない．石井室長は，東京大学との連携のもと，ペアレントトレーニングのランダム化比較試験を完結し，行動特性のみならず愛着形成，MRI 撮像を行い，多様なアウトカムを用いてそのエビデンス構築を進めている．また，石井は，ペアレントトレーニング実施者養成研修テキストを作成し，岡田らとともにペアレントトレーニング実施者養成研修を実施した．石井は，The 11th

Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions においてペアレントトレーニングに関する教育講演を行ったほか，研究成果を Psychiatry and Clinical Neurosciences に 2 本の論文を発表した．石井は，国立がんセンター島津太一，齊藤順子との連携のもと，ペアレントトレーニング普及の促進要因，阻害要因を明確化した上で実装化を図る研究を推進している．また，日本児童青年精神医学会の医療経済に関する委員会の委員としてペアレントトレーニングを学会からの診療報酬要望に組み込むなど，社会的な活動も活発に実施している．

3）　自閉スペクトラム症の齧歯類モデルの確立と動物モデルを用いた治療法開発

自閉スペクトラム症の治療法開発の支障となっているのは，齧歯類モデルが数多く存在し，どのモデルを対象に検討すればいいか不明瞭なことである．齧歯類モデルが多数存在する理由の一つとして，一側面の社会性の行動指標のみで，自閉症モデルか否かの判断をしていることがあげられる．さらに重要な点として，治療法開発の障害はモデルが定められないことだけでなく，効果判定の指標となる行動が同定されていないことである．請園正敏リサーチフェローは，高野裕治客員研究員（人間環境大学教授）と共同して，ラットのリーチング行動を用いた，齧歯類の社会性検討のための新規行動指標を確立し，国際誌にも発表した．これは，リーチング行動を学習した個体同士であれば，以下 2 つの社会的な行動が生じる指標である．1 つは，リーチング行動を行っている他個体へ注視する行動が生じる．リーチング行動を学習している観察個体は，他個体が行っているリーチング行動に対して接近行動だけでなく，注視行動が頻繁に生じることを示した．もう一つは，他個体から注視されていると，リーチング行動の速度が促進されることである．すなわち，リーチング行動を実施している個体は，他個体から見られていることを知覚することが可能であることが示された．この現象は，リーチング行動を学習した個体同士でしかみられず，未学習個体では他個体への注視行動が頻繁には生じず，速度の促進の強度も減少する．加えて，リーチング行動をする個体がケージメイトか否かも影響しており，未学習個体でかつ他個体がケージメイトではない場合は，ほとんどその行動を注視しなかった．この新規行動指標を，胎児期にバルプロ酸を投与されたマウスを対象に検討したところ，バルプロ酸モデルでは，リーチングを行っている他個体へ注視することがなく，また他個体から注視されても，リーチング行動の促進が生じなかった．興味深いことに，バルプロ酸モデル動物がリーチング行動を行っていても，健常個体は注視する頻度が減少していることがみられた．今後，炎症モデルでも同様の結果がみられるかどうかの検討を展開していく．さらに，ACC 破壊による自閉症モデル動物を作成し，注視されることで飲食量に促進が生じるかを検討した．その結果，統制群では，他個体から注視されることで飲食量が促進されるが，ACC 破壊群では飲食量の促進が生じず，バルプロ酸モデル動物での促進行動消失と同じ結果となった．しかしながら，他個体が飲食をしていると，ACC が破壊されていても，統制群同様，飲食量が促進することが示された．現在，ACC 破壊範囲の解析中である．今後，バルプロ酸モデル動物においても，他個体が飲食していると飲食量に促進が生じるのか，また，学習した特定の行動を共同で行うことで促進行動が生じるかを検討する．現在は，リーチング行動の指標を用いつつ，同じ行動であれば促進が生じるかを指標とした治療法開発研究を遂行している（科研費：請園，開発費：岡田）．

4）　神経発達症の中間表現型と候補となる認知基盤の認知神経科学研究

江頭優佳リサーチフェロー，林小百合リサーチフェローらは，岡田部長，高田科研費研究員，魚野客員研究員とともに，神経発達症の表現型とその神経心理学的基盤を調べるため，情動的表情とともに提示した視線方向への反射的注意定位，情動的表情を課題達成のフィードバックに設定し，報酬出現頻度を操作した実行機能課題，感覚—運動同期，時間長弁別，時間長再生という異なる時間知覚課題を併せて実施した．NCNP 病院ならびに精神保健研究所における検査実施に加え，国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科との連携，市川市教育委員会との連携のもと，小児のデータを集積している．現在 376 名の検査を終了している．また，脳病態統合イメージングセンター(IBIC)との連携において脳画像（T1, T2，安静時 fMRI，拡散テンソル画像等）を取得した．社会

認知機能課題に用いた視線手掛かり課題では，定型発達者と比べて，成人注意欠如・多動症群で視線方向への注意シフトが弱いことが示唆され，本成果を論文化した．また，社会的報酬を伴う行動抑制課題では，定型発達者では社会的報酬による抑制精度の向上を認めたが，注意欠如・多動症の成人では異なる知見を見いだし，国内外の関連学会にてその成果を報告した．認知機能計測の一部である時間知覚課題では，併存群では注意欠如・多動症群よりも時間認知の歪みが重篤で，外的時間の認識や外的時間と内的時間のずれを修正できないなどの時間知覚の異常を見いだしている．

5）養育困難を抱える児童のペアレンティング・スキル向上を目指した介入の有効性検証

神経発達症の児童は，親の養育困難と結びつきがちであり，親の不安や抑うつ，虐待リスクとも関連する．ペアレンティング・スキル向上と子どもの行動上の問題の減少に PCIT の有効性が示されているが，その一方で，中断率が高く，十分に効果が出るまで治療が継続できない，などの課題も存在する．高田美希科研員は岡田部長と共同して，システマティックレビューを実施し，中断に関与する要因を特定した．

また，COVID-19 感染拡大下で，発達障害の子どもや養育者のメンタルヘルス悪化が懸念されたことから，2020 年 5 月の緊急事態宣言発令中に日本心身障害児協会島田療育センターはちおうじ小沢浩所長（当部，客員研究員）と共同し，発達障害がある子どもとその養育者を対象にして，生活の質に関連しうる精神症状，心理社会的状況，日常生活状況との関連を調べ，1 年おきの継続的フォローアップを実施している（岡田，請園，高田）．高田科研費研究員は，この成果を韓国ソウルで開催された国際シンポジウム ACONAMI で発表した．

6）22q11.2 欠失症候群の精神障害発生に関するフォローアップ研究

22q11.2 欠失症候群は，先天性心疾患，精神発達遅延，特徴的顔貌を主徴とする症候群で，胸腺低形成・無形成による免疫低下，口蓋裂・軟口蓋閉鎖不全，鼻声，低カルシウム血症などを合併することの多い遺伝子疾患であるが，成人期までに統合失調症などの精神疾患を高率に発症することが知られているが，その実態は明確でない．岡田部長は，名古屋大学（尾崎紀夫教授），愛知学院（夏目長門教授，早川統子准教授）の構築するコホートにおいて，山内彩心理士（当部，客員研究員），久島周名古屋大学講師（当部，客員研究員）とともに経時的評価を実施している．その成果は日本児童青年精神医学会で発表した．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

当研究部では，NCNP および部のホームページに神経発達症に関する支援情報を含めた医学的情報を掲示した．岡田部長は，生徒指導提要の作成に関与した経緯から教育に関わる取材を日本教育新聞，またアンガーマネージメントに関連した取材を中日新聞/東京医新聞，プレジデントオンラインから，トウレット小児関連した取材を東京新聞から受けた．また，石井室長はペアレントトレーニングに関連する取材を朝日新聞から受けたほか，ウクライナ教育支援に関連する取材を NHK から受けている．請園リサーチフェローは，社会的促進に関する取材を有限会社ノオトから受けるなど，社会的な啓発に励んでいる．

(2) 専門教育面における貢献

岡田部長は，奈良女子大学において心理職を目指す博士課程大学院生，高知県立大学において精神科専門看護師を目指す博士課程大学院生の教育に関与するほか，国立リハビリテーションセンターの研修において，発達障害の専門的支援を目指す児童指導員，保健師，看護師，臨床心理士などへの教育を実施した．また，岡田は奈良県立医科大学において，精神科症状学・診断学，知的・発達障害と児童精神医学における講義を担当した．岡田は早稲田大学の客員教授として，心理実習に関与したほか，千葉大学連携大学院客員教授として院生 1 名の指導に当たっている．

また，魚野室長は同志社大学，武庫川女子大学，石井室長は東京大学医学部，江頭リサーチフェ

ローは九州大学，立教大学，東海大学，請園正敏リサーチフェローは神奈川大学において，心理職の大学教育に関与している．

(3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援法に示されている専門家養成のため，全国で開始された，かかりつけ医等発達障害対応力向上研修の基盤研修として，発達障害支援者研修パート 1（2023 年 6 月 28 日～29 日），パート 2（2023 年 9 月 27 日～28 日），パート 3（2023 年 11 月 15 日～16 日），および，行政実務研修（2024 年 1 月 17 日～18 日）を実施した（課程主任：岡田，課程副主任：石井）．COVID-19 の感染拡大下にあることから，オンライン実施とした．岡田は「かかりつけ医研修の実際」「発達障害のある子の育ちと医療の役割，石井は「ペアレントトレーニング」の講演を行った．また，石井と岡田は医療におけるペアレントトレーニング実施者養成研修（2023 年 7 月 4 日）を実施した．

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

岡田部長が，環境省エコチル調査企画評価委員会委員，国立障害者リハビリテーションセンター情報分析会議委員，独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員に携わるなど，国あるいは関連機関の施策への協力を行った．また，小平市教育委員会いじめ問題対策委員会委員，小平市特別支援教育専門家委員会委員，江戸川区児童相談所協力医として，知的・発達障害の支援情報の発信，特別支援教育の研究・実践，小平市の特別支援教育に関する貢献活動を行っている．

(5) センター内における臨床的活動

岡田部長が NCNP 病院児童精神科外来において新患（うちコンサルテーション，セカンドオピニオンを含む），また，これらの患者に対する再診診療を提供した．この外来は 10 月でいったん閉鎖したが，1 月より石井室長が引き継いでいる．

(6) その他

岡田は一般社団法人日本児童青年精神医学会の代表理事，日本 ADHD 学会理事，日本精神神経学会児童精神科研修委員会委員長として学術活動に貢献した．また，石井は小児精神神経学会認定委員会委員，日本児童青年精神医学会医療経済に関する委員会委員，日本精神神経学会児童精神科研修委員会委員，江頭は日本生理人類学会代議員，総務幹事，若手の会顧問，日本生理人類学会誌編集委員，ヒューマンインタフェース学会誌編集委員，林は日本生理人類学会代議員，若手の会副会長，和文誌編集員として学術活動に貢献している．岡田は，部員の協力のもと，The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (ASCAPAP)を京都で大会長として主宰した．

Ⅳ．研究業績

Ａ．刊行物

(1) 原著論文

1) Ishii-Takahashi A, Kawakubo Y, Hamada J, Nakajima N, Kawahara T, Hirose A, Yamaguchi R, Kuwabara H, Okada T, Kano Y: Changes in child behavioral problems and maternal attachment towards children with attention-deficit/hyperactivity disorder following behavioral parent training: A pilot study. Psychiatry and Clinical Neurosciences 77(7): 412-413, 2023.4.28. DOI: https://doi.org/10.1111/pcn.13558

2) Yamaguchi R, Kawahara T, Kotani T, Yazawa R, Suzuki A, Kano Y, Ishii-Takahashi A: The effectiveness of exercise programs accessible from home on children's and adolescents' emotional well-being: Systematic review & meta-analysis. Psychiatry and Clinical Neurosciences 2023.5.25. DOI: https://doi.org/10.1002/pcn5.103

3) Ukezono M, Nishiyama N, Maruyama H, Saika K: The influence of the type of rice served at school lunches on COVID-19 infection in kindergartens and nursery schools. Glycative Stress Research 10(2): 64-69, 2023.6. DOI: https://doi.org/10.24659/gsr.10.2_64

4) Motomura Y, Hayashi S, Kurose R, Yoshida H, Okada T, Higuchi S: Effects of others' gaze

and facial expression on an observer's microsaccades and their association with ADHD tendencies. Journal of Physiological Anthropology 42(1): 19, 2023.9.7. DOI: https://doi.org/10.1186/s40101-023-00335-2

5) Lo T, Kushima T, Kimura T, Aleksic B, Okada T, Kato H, Inada T, Nawa Y, Torii Y, Yamamoto M, Kimura R, Funabiki Y, Kosaka H, Numata S, Kasai K, Sasaki T, Yokoyama S, Munesue T, Iwata N, Ikeda M, Hashimoto R, Itokawa M, Arai M, Ohi K, Someya T, Watanabe Y, Egawa J, Takahashi T, Suzuki M, Yamasue H, Ozaki N: Association between copy number variations in parkin (PRKN) and schizophrenia and autism spectrum disorder: A case–control study. Neuropsychopharmacology Reports 2023.10 DOI:https://doi.org/10.1002/npr2.12370

6) Uono S, Egashira Y, Hayashi S, Takada M, Ukezono M, Okada T: Reduced gaze-cueing effect with neutral and emotional faces in adults with attention deficit/hyperactivity disorder. Journal of Psychiatric Research 168: 310-317, 2023.12. DOI: https://doi.org/10.1016/j.jpsychires.2023.10.045

7) Horike K, Ukezono M: Efficacy of chronic neck pain self-treatment using press needles: a randomized controlled clinical trial. Frontiers in Pain Research 2024.3.22. DOI: 10.3389/fpain.2024.1301665

8) 向井隆代，小山直子，石井礼花，徳田若奈，森千夏：児童期における愛着の測定：Child Attachment Interview の妥当性の検討．発達心理学研究 35(1): 39-52, 2024.3.20. DOI: https://doi.org/10.11201/jjdp.35.0043

(2) 総説

1) 岡田 俊：児童期の強迫症．精神科 Resident 4(1): 20-21, 2023.4.

2) 小川しおり，岡田 俊：発達障害の定義はどのようになっていますか．精神医学 5(特大): 519-521, 2023.5.

3) 岡田 俊：発達障害と精神疾患～併存のなりたちとみたて．日精診ジャーナル 49(3): 13-43, 2023.5.

4) 岡田 俊：発達障害のある子の発達をどう捉えるか，どう支えるか．精神分析的精神医学 13: 12-16, 2023.6.

5) 岡田 俊：子どものうつ病の神経生物学．精神医学 65(7): 996-999, 2023.7.

6) 岡田 俊：発達障害のある子の思春期ー二次性徴と対人関係の混乱をめぐってー 発達障害研究 45(2): 95-102 2023.8.

7) 小川しおり，岡田 俊：神経発達症群－DSM-5 から DSM-5-TR への変更点－．精神医学 65(10): 1345-1351, 2023.10.

8) 岡田 俊：自閉スペクトラム症．診断と治療 112: 118-123, 2024.3.

9) 江頭優佳，林 小百合，魚野翔太，高田美希，請園正敏，岡田 俊：COVID-19 パンデミック下での神経発達症研究とこれから．心理学評論 67(1)，印刷中．

(3) 著書

1) 岡田 俊：かいじゅうポポリはこうやっていかりをのりきった（監修，解説） 新井洋行著．パイインターナショナル，東京，pp1-42, 2023.5.24.

2) 岡田 俊：知的能力障害 法研 BIGDOC 家庭医学大全科, 2023.5.

3) 岡田 俊：コミュニケーション障害 法研 BIGDOC 家庭医学大全科，東京，2023.5.

4) 岡田 俊：限局性学習症（学習障害） 法研 BIGDOC 家庭医学大全科，東京，2023.5.

5) 岡田 俊：自閉スペクトラム症（ASD） 法研 BIGDOC 家庭医学大全科，東京，2023.5.

6) 岡田 俊：注意欠如・多動症（ADHD） 法研 BIGDOC 家庭医学大全科，東京，2023.5.

7)　岡田 俊：素行障害 法研 BIGDOC 家庭医学大全科，東京，2023.5.
8)　岡田 俊：分離不安障害 法研 BIGDOC 家庭医学大全科，東京，2023.5.
9)　岡田 俊：選択性緘黙 法研 BIGDOC 家庭医学大全科，東京，2023.5.
10)　岡田 俊：チック症 法研 BIGDOC 家庭医学大全科，東京，2023.5.
11)　岡田 俊：児童生徒のメンタルヘルス（In 学校保健の動向 令和 5 年度版 日本学校保健会） 丸善出版，東京，2023.10.
12)　岡田 俊：注意欠如多動症，限局性学習症（成人） In 今日の治療指針 2024（福井次矢，高木誠，小室一成 編） 医学書院 2024.1.
13)　岡田 俊：人口動態と子ども In 日本子ども史料年鑑 2024（社会福祉法人恩師財団母子愛育愛育研究所編集）KKTC 中央出版，2024.2.
14)　石井礼花：「自閉症スペクトラム症」 私の治療 P.56 日本医事新報社 2023.11.18
15)　石井礼花：発達「障害」でなくなる日 p126-129 朝日新聞取材班，朝日新書 2023.11.30
16)　小川しおり，岡田 俊：発達障害の定義はどのようになっていますか.（In 発達障害 Q&A 臨床の疑問に応える 104 問）医学書院，東京，2024.3.31.

(4) 研究報告書

1)　江頭優佳，林 小百合，魚野翔太，高田美希，請園正敏，岡田 俊：ADHD 児における時間知覚機能不全と不適応行動との関連の解明：介入方略の開発を目指して ： 中間報告. 発達研究 ： 発達科学研究教育センター紀要 (37)：75-79, 2023.1.
2)　江頭優佳，林 小百合，魚野翔太，高田美希，請園正敏，森圭史，岡田 俊：時間知覚と脳構造・脳機能に基づく ADHD 病態の類型化の試み. 明治安田こころの健康財団研究助成論文集 (58)： 63-70 2023.11.
3)　江頭優佳，林 小百合，魚野翔太，高田美希，請園正敏，岡田 俊：ADHD 児における時間知覚機能不全と不適応行動との関連の解明 ： 介入方略の開発を目指して. 発達研究: 発達科学研究教育センター紀要 38 印刷中.

(5) 翻訳

なし

(6) その他

1)　Okada T, Hirota T: The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (ASCAPAP), World Child & Adolescent Psychiatry: WPA, Child and Adolescent Psychiatry Section's Official Journal, Geneva, 2023.9.
2)　岡田 俊：コロナ禍おけるこどものメンタルヘルス-神経発達症のこどもを中心に. 児童青年精神医学とその近接領域 64(3): 376-381, 2023.6.
3)　木村唯子，飯島圭哉，吉富宗健，浮城一司，金子 裕，大森まゆ，岡田 俊，岩﨑真樹：トゥレット症に対する社会障害度を考慮した脳深部刺激療法の適応 トゥレット研究会会誌，東京，2023.11.
4)　石井礼花：書評『カモフラージュー自閉症女性の知られざる生活』（明石書店）サラ・バーギエラ（著），ソフィー・スタンディング（絵） 田宮 裕子，田宮 聡（訳）小児の精神と神経 63(3): 2, 2023.10.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1)　Okada T: Broadening Perspectives of Child and Adolescent Psychiatry Toward Post COVID-19 era. Opening Remarks & Keynote Lecture The 11th Congress of The Asian

Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.

2) Ishii-Takahashi A: Behavioral parent training for Attention deficit hyperactivity disorder. Symposium 14 Medical support for Parents of children with neurodevelopmental disorders in healthcare facilities The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.

3) Ukezono M, Takano Y, Furuie H, Nakatake Y, Shirakawa Y, Hayashi S, Egashira Y, Uono S, Takada M, Okada T: The effect of lesion in the anterior cingulate cortex on social facilitation in rat. Symposium 10 The research of social facilitation to promote the performance in rodents The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.

4) Furuie H, Ukezono M, Okada T, Yamada M: Social facilitation of feeding behavior in a schizophrenia rat model. Symposium 10 The research of social facilitation to promote the performance in rodents The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.

5) Kasahara Y, Yoshida C, Widatalla N, Ukezono M, Ida E, Ito R, Momono Y, Ishikawa K, Kimura Y, Saito M: Evaluation of changes in autonomic nervous system activity and maternal and fetal heart rate similarity during fetal period in mouse models of autism based on DOHaD theory. Symposium 10 The research of social facilitation to promote the performance in rodents The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.

6) Takada M: Language and cultural differences in PCIT –Insights from clinical practices and PCIT attrition studies–. Symposium 13 Does the Difference in Language and Culture Alter the Efficacy of Evidence-Based Parent Training Treatments in Japan? The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.

7) Okada T: Plenary Lecture 7 Mental health and well-being of children and adolescents in child welfare systems: the roles of child and adolescent mental health professionals working for child welfare. The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.27.

8) Okada T: Pharmacotherapy for Children With ADHD: Based on Treatment Guidelines in Japan. Sponsored Seminar 3 What is the appropriate diagnosis and treatment of ADHD based on the updated Japanese guidelines? The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.28.

9) Okada T: Heterogeneity in ADHD: possible contributions of cognitive neuroscience and their clinical implications. Symposium 33 Elucidating pathology of ADHD: updates from recent neuropsychological studies The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.28.

10) Egashira Y, Hayashi S, Uono S, Takada M, Ukezono M, Okada T: Investigation of the Characteristics of “Genuine” Time Perception in ADHD. Symposium 33 Elucidating pathology of ADHD: updates from recent neuropsychological studies The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26-27.

11) Hayashi S, Uono S, Egashira Y, Ukezono M, Takada M, Okada T: Executive function in attention deficit hyperactivity disorder and its impact on reward feedback. Symposium 33 Elucidating pathology of ADHD: updates from recent neuropsychological studies The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions,

Kyoto, 2023.5.26-27.

12) Takada M: Impact of COVID-19 on Mental Health in Children and Adolescents in Japan. 7th Asian Consotium of National Mental Health Instututes, Seoul, 2023.9.12.

13) Ishii-Takahashi A: Longitudinal MRI studies of children with Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder. Research Topics 24 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.28.

14) 江頭優佳: 認知の多様性を考慮した適応的な環境構築の可能性. 日本生理人類学会第 84 回大会フロンティアミーティング 5，福岡，2023.6.16.

15) 岡田 俊：知的能力障害あるいは知的発達症の診断概念の変遷とこれから．委員会シンポジウム 1 ICD-11/DSM-5-TR から児童青年期精神医学の診断の近未来を考える 第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.

16) 竹田和良，根本 敦，岡田 俊，今井 健，吉見明香，山田悠至，金田匠海，大庭真梨，小居 秀紀，中込和幸： メンタル・ウェルビーイングの向上をめざしたメンタルヘルスプラットフォーム開発 と社会実装（JST COI-NEXT）．シンポジウム 54 ウィズ・ポストコロナ社会におけるメンタルヘルスケアー遠隔メンタルヘルスケアシステムの社会実装にむけてー 第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川， 2023.6.23.

17) 岡田 俊：発達障害のある子の心の育ちと育みの支え ～トラウマとレジリエンスの観点から～. 第 14 回日本子ども虐待医学会学術集会，兵庫，2023.7.2.

18) 田子美津子，請園正敏，西山直希，丸山寛典，雑賀慶二：幼稚園保育園における給食で提供される米飯の種類が COVID-19 感染に与える 影響の検討．第 46 回栄養改善学会，長野，2023.10.21.

19) 岡田 俊：発達障害と思春期．日本発達障害学会第 58 回研究大会，京都，2023.11.5.

20) 岡田 俊：ライフステージに応じた支援ー成人期．第 30 回記念トゥレット研究会実践セミナー，東京，2023.11.19.

21) 岡田 俊：シンポジウム 3　ADHD と双極性障害の併存・鑑別を巡って：児童期双極性障害と神経発達症との併存・鑑別をめぐる課題．第 26 回日本精神保健・予防学会学術集会，千葉，2023.11.26.

22) 岡田 俊：本邦ガイドラインの改訂を踏まえた ADHD の診断と治療．第 130 回日本小児精神神経学会学術集会，高松，2023.11.26.

23) 岡田 俊：発達障害と思春期．日本発達障害学会第 58 回研究大会，京都，2023.11.5.

(2) 一般演題

1) Kimura N, Takehisa C, Onishi T, Okada T: Reconsidering comorbidity of ADHD and eating disorders. The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.

2) Uono S, Egashira Y, Hayashi S, Takada M, Ukezono M, Okada T: Reflexive attention orienting triggered by gaze cues in adults with ADHD. The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.

3) Takada M, Okada T: Is There Any Difference in PCIT Attrition Rates Among Different Cultural Backgrounds? Insights from a Systematic Review. The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.

4) Okada T, Uno Y: Social dysfunctions and its hormonal background in autism spectrum disorders. The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.27.

5) Yamauchi A, Okada T: A study of parent-child relationships in children with 22q11.2

deletion syndrome –Toward parent-child support based on the emotional aspects of mothers and children–. The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.27.

6) Egashira Y, Kaga Y, Gunji A, Kita Y, Kimura M, Hironaga N, Takeichi H, Hayashi S, Kaneko Y, Takahashi H, Hanakawa T, Okada T, Inagaki M: Neuropsychological Investigation of Parafoveal Recognition of Japanese Kanji Compound Words in Children with Specific Learning Disabilities Co-morbid Attention Deficit/Hyperactivity Disorder. The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.27.

7) Hayashi S, Kurose R, Yoshida H, Higuchi S, Okada T, Motomura Y: Correlation between individual's trait of attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD) and microsaccadic responses following presentation of other's gaze with fearful expression. The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.27.

8) Takada M, Ukezono M, Oiji A, Okada T: Relationship Between Parent's Child-Rearing Experience, Defense Mechanisms, Internal Working Model, and Postpartum Depression and Bonding Difficulties: A Study on Japanese Mothers. The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.27.

9) Hayashi S, Uono S, Egashira Y, Ukezono M, Takada M, Okada T: Effects of Positive Feedback from Others in Adults With Autism Spectrum Disorder: An Investigation Focusing On Its Short-Term Effects on the Executive Function. 16th International congress of physiological anthropology, Kota Kinabalu, 2023.9.7.

10) 江頭優佳，林 小百合，魚野翔太，請園正敏，高田美希，岡田 俊：時間知覚課題の認知処理の違いによる分類可能性．日本心理学会第 87 回大会，神戸，2023.9.15.

11) 江頭優佳，林 小百合，魚野翔太，請園正敏，高田美希，岡田 俊：複数の時間知覚課題の認知的共通点の検討．2023 年度日本生理人類学会フロンティアミーティング（秋期），東京，2023.11.18.

12) 林 小百合，江頭優佳，魚野翔太，高田美希，請園正敏，岡田 俊：成人期 ADHD における笑顔の効果：実行機能の低下および不注意特性との関連．日本生理人類学会 2023 年度フロンティアミーティング（秋期），東京，2023.11.18.

(3) 研究報告会

1) 請園正敏，江頭優佳，林 小百合，魚野翔太，高田美希，岡田 俊： ACC 破壊ラットにおける社会的促進の検討．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 5 年度研究報告会（第 35 回）2024.3.18

2) 江頭優佳，林 小百合，魚野翔太，請園正敏，高田美希，岡田 俊：注意欠如・多動症の病態解明のための時間知覚課題の検討．国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 5 年度研究報告会（第 35 回）2024.3.18

3) 石井礼花：更年期の母の育児に関する実態調査と脳神経基盤の解明～サポートシステム構築に向けて．生涯学 2023 年度第 1 回 領域会議 金沢，2023.08.24

4) 石井礼花：令和 5 年度 N-EQUITY 進捗報告会（第 5 回）オンライン 2024.2.22

5) 石井礼花：領域内共同研究について．生涯学 2023 年度第 2 回領域会議 神奈川， 2024.3.15

6) 石井礼花，眞上花帆，山口利緒：Maternal perception of spousal support in parenting, child attachment and associated brain structures in children with attention-deficit/hyperactivity disorder. 生涯学　2023 年度第 2 回 領域会議 神奈川，2024.3.15.

7) 小谷暁子，草間千絵，奥貫奈津恵，山口利緒，吉丸ゆず，鳥羽翔太，石川菜津美，金生由紀子，

石井礼花：コロナ禍における ADHD 児の internalized problem と externalized problem－母親のコロナ前後でのソーシャルサポートの変化、抑うつ状態、養育態度、母親の年齢との関連についての予備的検討－．2023 年度 2 回領域会議 神奈川，2024.3.15.

(4) その他

1) Ishii-Takahashi A: Art Exhibition Theme: “SAISAISAI～差異才彩”. The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26-28.

C．講演

1) 岡田 俊：県民向け講演会「発達障害のある子どもの育ちと育みの理解と支え」埼玉県発達障害総合支援センター 2023. 11.4.
2) 岡田 俊：発達障害診断の最新の知見．発達障害医学セミナー（青山学院大学）公益社団法人日本発達障害連盟 2023.12.21.

D. 学会活動

（1）学会主催

1) Okada T: Congress Chair The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, 2023.5.26-28.

（2）学会役員

1) Okada T: Organizing Committee The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions
2) Okada T: ASCAPAP Committee President-Elect The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions
3) 岡田 俊：日本児童青年精神医学会 代表理事
4) 岡田 俊：第 65 回日本児童青年精神医学会 プログラム委員
5) 岡田 俊：第 54 回日本神経精神薬理学会/第 34 日本臨床精神神経薬理学会 プログラム委員
6) 岡田 俊：日本精神神経学会 児童精神科医医療研修委員会 委員長
7) 岡田 俊：日本 ADHD 学会 理事
8) 石井礼花：日本精神神経学会 児童精神科医医療研修委員会 委員
9) 林 小百合：代議員，若手の会副会長（関東地区） 日本生理人類学会
10) 江頭優佳：日本生理人類学会 代議員，総務幹事，若手の会顧問
11) 石井礼花：日本児童青年精神医学会 医療経済に関する委員会委員
12) 石井礼花：日本小児精神神経学会 認定委員会委員

（3）座長

1) Ishii-Takahashi A: Longitudinal follow-up studies on neurodevelopmental disorders: Cognition and Brain Structures. Symposium 1 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.
2) Ishii-Takahashi A: Medical support for Parents of children with neurodevelopmental disorders in healthcare facilities. Symposium 14 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.
3) Ukezono M: The research of social facilitation to promote the performance in rodents. Symposium 10 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.

4) Takada M: Implementation and Dissemination of Parent-Child Interaction Therapy (PCIT) in Japan. Symposium 8 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.26.
5) Okada T: Mental health and well-being of children and adolescents in child welfare systems: the roles of child and adolescent mental health professionals working for child welfare. Plenary Lecture 7 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.27.
6) Ishii-Takahashi A: Neuroimage studies on neurodevelopmental disorders. Symposium 19 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.27.
7) Ukezono M: Application of Artificial Intelligence in Biological Studies on Neurodevelopmental Disorders. Symposium 23 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.27.
8) Okada T: Tourette syndrome and related disorders in Asia. Symposium 35 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.28.
9) Egashira Y: Elucidating pathology of ADHD: updates from recent neuropsychological studies. Symposium 33 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.28.
10) Hayashi S: Elucidating pathology of ADHD: updates from recent neuropsychological studies. Symposium 33 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, 2023.5.28.
11) Okada T: Psychiatric Medical Techniques in the Field of Digital Technology. Agenda 2 7th ACONAMI Mental Health International Symposium, Seoul, 2023.9.12.
12) 岡田 俊：委員会シンポジウム 1 ICD-11/DSM-5-TR から児童青年期精神医学の診断の近未来を考える．第 119 回日本精神神経学会学術総，神奈川，2023.6.22.
13) 岡田 俊： ワークショップ 2 児童精神科医療入門：新シリーズ（6）子どもの精神医学における治療論－技法・その 2．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.
14) 岡田 俊，辻井農亜：神経発達症に併存する不安，不安症．（シンポジウム 4 神経発達症とさまざまな精神症状）第 42 回日本精神科診断学会，富山，2023.9.22.
15) 岡田 俊：パート 1 ライフステージに応じた支援，第 30 回記念トゥレット研究会，東京，2023.11.19.
16) 岡田 俊：会長講演 中村和彦 神経発達症群の生物学的研究と子どもの疫学研究．第 64 回日本児童青年精神医学会総会，弘前，2023.11.14.
17) 岡田 俊：共催セミナー 八木淳子 神経発達症とトラウマとアタッチメント－子どもを多角的にみたて包括的に支援すること．第 64 回日本児童青年精神医学会総会，弘前，2023.11.15.
18) 岡田 俊：日本精神神経学会 第 19 回児童精神科医療研修委員会セミナー，仙台，司会，助言者 2023.10.15.
19) 岡田 俊：日本 ADHD 学会第 15 回総会 シンポジウム 2「ADHD のバイオマーカーを探る」司会 2024.3.3.
20) 岡田 俊：日本精神神経学会 第 20 回児童精神科医療研修委員会セミナー，高知，司会，助言者 2024.3.17.

（4）学会誌編集員等

1) 岡田 俊：Psychiatry and Clinical Neurosciences Field Editor
2) 岡田 俊：発達障害研究 常任編集委員

3)　江頭優佳：ヒューマンインタフェース学会論文誌 論文誌編集委員
4)　林 小百合：日本生理人類学会和文誌「日本生理人類学会誌」 編集委員

E. ガイドラインへの貢献

1)　岡田 俊，金生由紀子：小児チック症診療ガイドライン（日本小児神経学会監修） 外部評価者

F. 教育

1)　岡田 俊：奈良女子大学 非常勤講師（小児・児童の精神障害）
2)　岡田 俊：高知県立大学看護学科 非常勤講師（精神診断治療学 1）
3)　岡田 俊：奈良県立医科大学（精神・行動疾患：精神医学の症候学と診断学，知的・発達障害と児童精神医学）
4)　江頭優佳：立教大学現代心理学部 兼任講師（神経心理学（神経・生理心理学））
5)　江頭優佳：九州大学大学院統合新領域学府 非常勤講師（感性人類学）
6)　林 小百合：東京工科大学医療保健学部臨床検査学科 演習講師（生理検査学実習Ⅱ：脳波・誘発脳波検査）
7)　林 小百合：前橋工科大学 建築・都市・環境工学群 非常勤講師（人間工学基礎）
8)　石井礼花：東京大学医学部医学科 小児科学 非常勤講師

G. 研修

（1）研修企画

1)　岡田 俊，石井礼花：令和 5 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 4 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅠ．オンライン，2023.6.28-29.
2)　石井礼花，岡田 俊：令和 5 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 2 回医療機関における注意欠如・多動性(ADHD)児の親へのペアレントトレーニング実施者要請研修．オンライン，2023.7.4.
3)　岡田 俊，石井礼花：令和 5 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 4 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅡ．オンライン，2023.9.27-28.
4)　岡田 俊，石井礼花：令和 5 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 4 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅢ．オンライン，2023.11.15-16.
5)　岡田 俊，石井礼花：令和 5 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 4 回発達障害者支援研修：行政実務研修．オンライン，2024.1.17-18.

（2）研修会講師

1)　岡田 俊：かかりつけ医研修の実際（演習）． 令和 5 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 4 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅠ オンライン， 2023.6.29.
2)　石井礼花： ペアレント・トレーニング． 令和 5 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 4 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅠ オンライン，2023.6.29.
3)　石井礼花，岡田 俊：注意欠如・多動性(ADHD)とペアレント・トレーニング．令和 5 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 2 回医療機関における注意欠如・多動性(ADHD)児の親へのペアレントトレーニング実施者要請研修 オンライン，2023.7.4.
4)　石井礼花：ペアレント・トレーニングの実践に向けて．令和 5 年度 精神保健に関する技術研修課程 第 2 回医療機関における注意欠如・多動性(ADHD)児の親へのペアレントトレーニング実施者要請研修 オンライン，2023.7.4.
5)　岡田 俊：発達障害と生物学的背景． 令和 5 年度 『東京都発達障害者支援体制整備推進事業』～医療従事者向け講習会～ オンライン， 2023.9.24.
6)　岡田 俊：発達障害のある子どもの育ちと医療の役割．令和 5 年度 精神保健に関する技術研修

課程 第 4 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅢ オンライン，2023.11.15.

7) 岡田 俊：発達障害診断の最近の知見．令和 5 年度 発達障害医学セミナー，2023.12.23.

8) 岡田 俊：発達障害と精神疾患の合併． 発達障害地域支援機能強化に向けた実践力向上研修会 国立障害者リハビリテーションセンター， 2023.11.30.

9) 岡田 俊：発達障害診断の最近の知見．令和 5 年度 発達障害医学セミナー 日本発達障害連盟，2023.12.23.

10) 岡田 俊：発達障害を持ち子どもたちの育ちを支援する．社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 地域母子保健研修会 8，2024.1.25.

H. 取材・報道

1) 石井礼花：発達障害の子どもを叱り自己嫌悪 親を救うペアレント・トレーニング．医療サイト 朝日新聞アピタル 朝日新聞 DIGITAL, 朝日新聞紙面， 2023.4.24. https://www.asahi.com/articles/ASR4N2JP5R4LUTFL00X.html

2) 岡田 俊：多くの子に「多様な背景」があり得る．日本教育新聞，2023.5.22.

3) 岡田 俊：発達障害 適切な配慮，認め合う学級づくりを．日本教育新聞，2023.6.5.

4) 岡田 俊：自分のいかりと上手につきあう．朝日小学生新聞，2023.6.30.

5) 岡田 俊：怒りとうまく付き合おう．中日新聞，2023.8.23.

6) 岡田 俊：怒りとうまく付き合おう．東京新聞，2023.8.23.

7) 岡田 俊：これを知れば，わが子の感情に振り回されなくなる…児童精神科医が解説「子どもが癇癪を起こす本当の理由」 子どもは大切な相手にほど怒りの感情をぶつける．PRESIDENT Online，東京，2023.9.15.

8) 岡田 俊：「あなたはどうしてそうなの!」は逆効果．公共の場で癇癪を起こした子がすんなり落ち着く〝声かけフレーズ〟「朝，何食べたっけ?」コーピング行動で怒りの爆発を防ぐ．PRESIDENT Online，東京，2023.9.16.

9) 請園正敏：「画面の向こうに誰か居る」だけで集中できる？オンラインもくもく会の効果を試してみた！． 有限会社ノオト，2023.11.6.

10) 岡田 俊：意思に反して声や体が… トゥレット症とチック症の苦しみを知ってほしい 当事者が情報発信しています．東京新聞朝刊， 2023.11.30. https://sukusuku.tokyo-np.co.jp/education/78542/

11) 石井礼花：国際報道 2023 ウクライナ教育支援，日本放送協会，2023.12.29.

I. その他の活動

1) 林 小百合：国立環境研究所 人を対象とする研究（生命科学・医学を除く）に関する倫理審査委員会 所外委員

2) 石井礼花：環境省 エコチル調査企画評価委員

J. 受賞

1) Okada T: The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions Best Poster Award Okada T, Uno Y: Social dysfunctions and its hormonal background in autism spectrum disorders. 2023.5.27.

2) Egashira Y: The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions Best Poster Award Egashira Y, Kaga Y, Gunji A, Kita Y, Kimura M, Hironaga N, Takeichi H, Hayashi S, Kaneko Y, Takahashi H, Hanakawa T, Okada T, Inagaki M: Neuropsychological Investigation of Parafoveal Recognition of Japanese Kanji Compound Words in Children with Specific Learning Disabilities Co-morbid Attention Deficit/Hyperactivity Disorder. 2023.5.27.

3) Hayashi S: The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions Best Poster Award Hayashi S, Kurose R, Yoshida H, Higuchi S, Okada T, Motomura Y: Correlation between individual's trait of attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD) and microsaccadic responses following presentation of other's gaze with fearful expression. 2023.5.27.

4) Takada M: The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions Best Poster Award Takada M, Ukezono M, Oiji A, Okada T: Relationship Between Parent's Child-Rearing Experience, Defense Mechanisms, Internal Working Model, and Postpartum Depression and Bonding Difficulties: A Study on Japanese Mothers. 2023.5.27.

5) 江頭優佳，箱島有輝，宇佐美政英，岡田 俊，魚野翔太，林 小百合，請園正敏，高田美希：2022年度若手研究課題最優秀演題賞，発達障害の二次障害発症リスクを形成する心理社会的要因と認知神経機能の解明．国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 2023.4.13.

6) 江頭優佳：研究奨励賞，Detection of deviance in Japanese kanji compound words，一般社団法人日本児童青年精神医学会．2023.11.14.

7) 岡田 俊：PCN Reviewer Awards 2023　2024.3.

10. 地域精神保健・法制度研究部

Ⅰ. 研究部の概要

当研究部は，生物・心理・社会的観点から精神障害を多面的に捉え，地域に暮らす精神障害者とその家族が主体的な生活を送るための支援技法やシステムの開発，その効果に関する実証的研究を当事者のリカバリー支援の観点から実施することを活動の中心としている．また，精神保健福祉法，障害者総合支援法等の精神科保健医療福祉に関連する法律に基づく保健医療福祉体制のあり方についての検討，医療観察法に基づく医療の検証や一般精神科医療への適用に関する検討を行うことも重要な柱のひとつである．研究活動を通じて政策としても取り入れることが可能な支援モデルを提示し，自治体や専門職，市民への教育研修等を実施してそれらの普及を図ることにより，研究成果の社会への還元を行っている．

研究の実施にあたっては，以下の人員構成で活動を行うとともに，訪問看護ステーション PORT，所沢市アウトリーチ支援チーム，司法精神診療部との協働，研究所内の他部との連携および外部機関とのネットワークの構築についても重視している．

令和 5 年度の当研究部の構成は以下の通りである．部長：藤井千代，精神保健サービス評価研究室長：山口創生，臨床援助技術研究室長：佐藤さやか，司法精神保健研究室長：小池純子，制度運用研究室長：黒田直明，常勤研究員：小塩靖崇，リサーチフェロー：塩澤拓亮（~4.30），川口敬之，岩永麻衣，臼井 香，阿部真貴子（6.1~），科研費研究員：阿部真貴子（~5.31），岡野茉莉子，五十嵐百花，羽田彩子，高嶋里枝，奈良麻結（6.1~），科研費研究補助員：石塚公太（~5.31）：併任研究員：平林直次，竹田康二，柏木宏子，客員研究員：伊藤順一郎，瀬戸屋雄太郎，吉田光爾，橘（北村） 薫子，杉山直也，美濃由紀子，三澤孝夫，河野稔明，松本（市川）桂子，柑本美和，横山惠子，稲垣 中，堀口雅則，北村俊則，野口正行，鈴木浩太，菊池安希子，曽雌崇弘，松長麻美，下平美智代，安間尚徳，佐竹直子，吉浜文洋（5.1~），関 英一（5.1~），研究生：田村早織，小黒早紀（~11.30），山田裕貴，小川 亮，上嶋大樹，塩澤拓亮（5.1~），杉浦寛奈（12.1~），所沢市アウトリーチ支援チームについては，統括管理責任者：中西清晃，看護師：榎本美智子，医療社会事業専門員：西内絵里沙，作業療法士：大迫直樹（~12.31），山崎さおり（1.1~），科研費テクニカルフェロー山崎さおり（~12.31），科研費研究員：糸繰朝美，科研費心理療法士：河原崎容佳．

Ⅱ. 研究活動

1） 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する政策研究（藤井，杉山，山口，小池，岩永，阿部，羽田，高嶋，松長，佐竹）

市町村の包括ケアシステム構築状況，精神科医療機関の市町村・保健所への協力状況，措置入院関連ガイドラインの実施状況，危機介入の実態，包括的支援マネジメント及び精神科訪問診療に係る診療報酬改定の影響，地域包括ケアシステムにおける総合病院精神科の役割，精神科救急体制 整備状況，精神障害者の権利擁護に関する精神科医療機関の取組等を明らかにするとともに，権利擁護のための個別支援の効果検証を行う．研究結果を精神保健医療福祉関係諸団体，当事者団体等と共有したうえで上記の課題につき検討し，包括ケアシステム構築のための政策提言を行う．本研究は，以下の分担班で実施している．

A. 精神障害者の権利擁護に関する研究
B. 自治体における包括的ケアの推進に関する研究
C. 地域における精神科医療の役割に関する研究
D. 地域における危機介入のあり方に関する研究
E. 総合病院精神科の機能に関する研究
F. 精神科救急医療体制に関する研究

2)　**包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究（藤井，山口，小池，川口，岡野，五十嵐，安間，竹田，塩澤）**

「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築に資する包括的精神保健サービス（医療・福祉を含む）を実現するにあたって，当事者や家族，医療機関，地域の福祉事業所，行政など，さまざまな立場の人々の協働のあり方について検討するとともに，包括的支援体制の実装のための人材育成のための研修方法を開発するため，以下 4 つの分担班により研究を実施している．

A. 地域精神保健領域におけるコアアウトカムセットの開発に関する研究
B. 精神障害当事者との協働に基づく災害時の精神保健福祉体制に関わるガイダンスの開発
C. 地域精神保健医療福祉に関わる支援者，行政職員を対象とした地域精神保健医療福祉研修プログラムの開発に関する研究
D. PPI の視点を取り入れた地域司法精神医療制度の開発

3)　**精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に向けた精神保健医療福祉に関わるサービスの提供体制構築に資する研究（山口，佐藤，小池，岩永，藤井）**

A.　障害者福祉サービス事業所調査・当事者調査 B. 包括的支援マネジメントの効果検証 C. ウェブサイトの開発および検証 D. 精神科医療機関ニーズの調査と包括的支援マネジメントの患者特定調査.

4)　**地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制における入院医療による支援のための研究（藤井，臼井，高嶋，奈良）**

医療保護入院の適応となっている病像や背景事情などの質的分析，質的分析から抽出された課題に関する全国状況の量的分析を行い，医療保護入院等の精神科における入院に係る課題を明らかにする．さらに法学・社会学的な観点から医療保護入院に関する法整備の歴史や本邦の文化的背景について検討し，諸外国における精神科入院医療に関する障害者権利条約への対応状況や，当事者・家族の意見も踏まえて，多角的に検討する．

5)　**精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究（杉山，藤井，阿部，奈良）**

行動制限最小化を推進するため，①ピアレビューの方法論（チェックリスト等を含む）の開発，②取組事例の精査，③普及啓発のための一連の教材資料等の作成を実施する．これにより，実効的で本質的な最小化の浸透普及がわが国の医療現場で実現される可能性がある．

6)　**個別援助付き雇用に関する研究（山口，佐藤，小池，小塩，川口，五十嵐，臼井，岩永，塩澤）**

精神障害者に対する就労支援として最も効果的とされる indiviudal placement and support (IPS)に準ずる個別型援助付き雇用の均てん化と質の評価に関する調査に取り組んだ．具体的には実践者とネットワークを構築し，日本版個別型援助付き雇用フィデリティ調査を実施した．また，個別型援助付き雇用事業所における包括的なアウトカムを検証し，論文化として発表した．

7)　**地域精神保健研究における患者・市民参画の推進（山口，岩永，五十嵐，山田）**

東京大学先端研熊谷研究室と定期的に勉強会を開催し，PPI の在り方や将来の PPI センターの構築に向けた話合いをしている．

8)　**多職種アウトリーチに関する研究（山口，佐藤，川口，臼井，岩永，羽田）**

当事者・家族・支援者と協働し，多職種アウトリーチに関する縦断調査に取り組んだ．本研究には国内 23 のアウトリーチ機関が参加しており，2023 年 10 月から 2025 年 9 月までにこれらの機関を新規で利用した当事者と家族を 10 年間継続的に追跡する調査を実施中である．

9)　重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発（佐藤，山口，藤井，菊池）

本研究は，重症精神障害者への地域生活支援においても効果的な支援技法と考えられる CBT について，アウトリーチ等に従事する心理職以外の精神保健福祉スタッフを対象に，研修やスキルトレーニングを遠隔会議形式で行うシステム（=遠隔トレーニングシステム）を開発し，その実施可能性および効果に関する予備的検討を行うことを目的とする．今年度は遠隔会議のためのオンラインシステムの整備を進めつつ，月 1 回程度の頻度でオンラインでの多職種カンファレンスを実施し，事例検討用フォーマットの形式について検討した．

10) 処遇の難しい精神障害者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究（小池，藤井，岡野，菊池）

共生社会の実現を目指す中で，処遇が難しいとされている者への治療戦略や，社会復帰支援策の強化を検討するため，処遇困難となる要因の本質を明らかにし，処遇困難例への効果的な治療及び支援体制の構築に寄与することを目的とする．本年度は，「重度かつ慢性」の精神障害者と医療観察法対象者の特性と臨床経過に関わるデータをカルテから収集したデータを分析した．コロナ等で新規の調査に着手できず，次年度に実施予定である．

11) 第 8 期障害福祉計画の精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に係る成果目標の見直しに資する研究（黒田，阿部，五十嵐，奈良）

市区町村が障害による生活のしづらさを持った人の地域生活を支援するサービス（社会的ケア）の提供体制を確保するために定める障害福祉計画のうち，精神障害を持つ人々に対するサービスに関する，新たな成果目標，活動指標の提案するための研究を行っている．今年度は，公的な精神障害を持つ人への社会的ケアの評価方法に関する国際的な動向の文献調査，既存オープンデータの分析研究，市区町村の課題調査，社会的ケア関連 QOL 尺度の精神疾患を持つサービス利用者における妥当性・信頼性の検証を行った．来年度は，モニタリングに活用しうる未活用のデータ項目も収集し，新たな成果目標や活動指標の候補を探索していく．

12) アスリートのメンタルヘルスケアシステム開発に関する研究（小塩，松長，山口，塩澤，藤井）

日本ラグビーフットボール選手会のアスリートと共同し，日本スポーツ界におけるメンタルヘルスケアシステム開発のための研究を実施している．2023 年度は，「よわいはつよいプロジェクト」というアスリートが情報発信の担い手となり，メンタルヘルスに関する経験や情報を一般市民向けに届ける web サイト，また複数のマスメディア取材への協力を通じて，メンタルヘルス普及啓発に取り組んだ．その他，IOC Mental health action plan（行動計画）の日本語翻訳版を作成，公開した．

13) 共同意思決定の基盤となる関係構築プロセスに関する研究（川口）

地域精神保健福祉サービスにおける共同意思決定（shared decision making: SDM）の普及のために，円滑な SDM の基盤となる当事者と専門職の間の関係構築プロセスに焦点をあてた研究を実施した．2023 年度は，当事者および専門職を対象とした関係構築をはかるために必要な関わりやコミュニケーションに関するインタビュー調査の分析結果に基づき，関係構築における概念モデルを作成した．次年度は，共同意思決定に向けて当事者と専門職双方が行う関係構築プロセスに関する合意形成調査の実施を予定している．

Ⅲ．社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

・地域の保健センターにおける思春期精神保健相談およびアウトリーチによる相談支援を定期的に実施した．（藤井）
・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した．（藤井）
・特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・コンボ　理事（山口）
・一般社団法人ルンアルン　理事（山口）
・つくば市保健部顧問（黒田）
・内閣府児童手当システム標準化検討会座長（黒田）
・東京都多摩地域依存症関連期間地域連携会議委員（小塩）
・文京区子ども・子育て会議委員（岩永）
・文京区地域福祉推進協議会子ども部会員（岩永）
・品川区認知症本人ミーティング（阿部）

(2) 専門教育面における貢献

・愛媛大学　医学部　非常勤講師（藤井）
・愛媛大学大学院　医農融合公衆衛生学環　非常勤講師（藤井）
・文教大学　人間科学部　非常勤講師（山口）
・法政大学　現代社会学部　非常勤講師（山口）
・東洋大学　福祉社会システム専攻　非常勤講師（山口）
・神戸大学大学院　保健学研究科　非常勤講師（山口）
・大正大学　社会福祉調査論　非常勤講師（山口）
・早稲田大学　人間科学部　非常勤講師（佐藤）
・立教大学　現代心理学部　非常勤講師（佐藤）
・目白大学　心理学部　非常勤講師（佐藤）
・筑波大学　人間総合科学　非常勤講師（黒田）
・筑波大学　医学群　非常勤講師（黒田）
・法政大学　キャリアデザイン学部　非常勤講師（小塩）
・東京都立大学人文社会学部人間社会学科　非常勤講師（岩永）
・東海大学　教養学部芸術学科音楽学課程　非常勤講師（阿部）
・東京都立産業技術大学院大学　非常勤講師（阿部）
・上野学園大学短期大学　非常勤講師（阿部）

(3) 精研の研修の主催と協力

・第３回精神科救急医療体制整備研修の主任（藤井）

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

・厚生労働省　社会保障審議会障害者部会　委員（藤井）
・厚生労働省 地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制の実現に向けた検討会構成員（藤井）
・厚生労働省 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築支援事業広域アドバイザー（藤井）
・厚生労働省　市町村における精神保健に係る相談支援体制整備の推進に関する検討チーム　座長（藤井）
・厚生労働省令和 5 年度推進事業　精神科医療における行動制限最小化に関する調査研究委員（藤井）

・厚生労働省 診療報酬改定結果検証委員会　委員（藤井）
・東京都措置入院者退院後支援体制整備推進会議委員長（藤井）
・東京都医療体制整備検討委員会委員長（藤井）
・東京都精神科救急医療体制整備検討委員会　委員長（藤井）
・World Health Organization 西太平洋地域事務局 Temporaly Advisor（藤井）
・日本学校保健会「精神疾患に関する指導参考資料作成委員会」委員（小塩）

(5) センター内における臨床的活動

・国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーションにて週に 0.5 程度，訪問時を中心に利用者本人および家族に認知行動療法を提供した．（佐藤）

(6) その他

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

1) Uchino T, Fukui E, Takubo Y, Iwai M, Katagiri N, Tsujino N, Imamura H, Fujii C, Tanaka K, Shimizu T, Nemoto T: Perceptions and attitudes of users and non-users of mental health services concerning mental illness and services in Japan. Front Psychiatry. 2023;17;14:1138866.

2) Koike J, Kono T, Takeda K, Yamada U, Fujii C, Hirabayashi N: Data resource profile of an online database system for forensic mental health services. BMC Medical Informatics and Decision Making, 2024.

3) Fujii T, Mori T, Komiyama J, Kuroda N, Tamiya N: Factors associated with non-initiation of osteoporosis pharmacotherapy after hip fracture: analysis of claims data in Japan. Arch Osteoporos 21;18(1):103. 2023.

4) Kuroda N, Tamiya N: Excess mortality among adults with mental disorders treated in psychiatric and general medical settings: A population-based cohort study using municipal medical claims data in Japan. Asian J Psychiatr, in press, 2023.

5) Ojio Y, Kawamura S, Horiguchi M, and Gouttebarge V: Preliminary report of the Japanese version of the International Olympic Committee Sport Mental Health Assessment Tool 1. Sports Psychiatry 2023.

6) Oguro S, Ojio Y, Matsunaga A, Shiozawa T, Kawamura S, Yoshitani G, Horiguchi M, Fujii C: Mental health help-seeking preferences and behaviour in elite male rugby players. BMJ Open Sport Exerc Med 2023 May 26;9(2): e001586.

7) Oulevey M, Lavallee D, Ojio Y, Kohtake N: The design of a career transition psychological support program for retired Olympic athletes in Japan. Asian Journal of Sport and Exercise Psychology, Advance online publication 2024.

8) Iida M, Sawada U, Usuda K, Hazumi M, Okazaki E, Ogura K, Kataoka M, Sasaki N, Ojio Y, Matsunaga A, Umemoto I, Makino M, Nakashita A, Kamikawa C, Kuroda N, Kuga H, Fujii C, Nishi D: Effects of the Mental Health Supporter Training Program on mental

health-related public stigma among Japanese people: A pretest/posttest study. Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports 2024; 3(1): e176.

9) Watanabe A, Kawaguchi T, Matsuoka K, Kotaki H, Suzuki M, Fukuda M: Validation of the difficulty of behavioral disturbances in patients with Alzheimer-type dementia based on sub-items of the Dementia Behavior Disturbance Scale. Asian Journal of Occupational Therapy 19: 108-116, 2023.

10) Watanabe A, Kawaguchi T, Nobematsu A, Sasada S, Kanari N, Maru T, Kobayashi T: Estimation of a Structural Equation Modeling of Quality of Life Mediated by Difficulty in Daily Life in Survivors of Breast Cancer. Healthc 11(14): 2082, 2023.

11) Iwanaga M, Iida M, Sasaki N, Kotake R, Morita Y, Asaoka H, Nozawa K, Iwanaga H, Kawakami N: Association between school bullying experience and work-related subjective well-being: a systematic review. Environmental and Occupational Health Practice, 2023.

12) Eguchi H, Watanabe K, Kawakami N, Ando E, Imamura K, Sakuraya A, Sasaki N, Inoue A, Tsuno K, Otsuka Y, Inoue R, Nishida N, Iwanaga M, Hino A, Shimazu A, Tsutsumi A: Work-related psychosocial factors and inflammatory markers: a systematic review and meta-analysis. Journal of Psychosomatic Research 111349, 2023.

13) Iwanaga M, Yamaguchi S, Sato S, Nakanishi K, Nishiuchi E, Shimodaira M, So Y, Usui K, Fujii C: Service intensity of community mental health outreach among people with untreated mental health problems in Japan. A retrospective cohort study, Psychiatry and Cllinical Neuroscience Reports 2023.;2:e138.

14) Iwanaga M, Yamaguchi S, Hashimoto S, Hanaoka S, Kaneyuki H, Fujita K, Kishi Y, Hirata T, Fujii C, Sugiyama N: Ranking important predictors of the need for a high-acuity psychiatry unit among 2,064 inpatients admitted to psychiatric emergency hospitals: a random forest model. Frontiers in Psychiatry 2024;15:1303189.

15) Iwanaga M, Yamaguchi S, Sato S, Nakanishi K, Nishiuchi E, Shimodaira M, So Y, Usui K, Fujii C: Comparison of the 12-item and 36-item versions of the World Health Organization Disability Assessment Schedule (WHODAS) 2.0 using longitudinal data from community mental health outreach service users. Neuropsychopharmacology Reports 00:1-7, 2024.

16) Tada M, Kirihara K, Koshiyama D, Nagai T, Fujiouka M, Usui K, Satomura Y, Koike S, Sawada K, Matsuoka J, Morita K, Araki T, Kasai K: Alterations of auditory-evoked gamma oscillations are more pronounced than alterations of spontaneous power of gamma oscillation in early stages of schizophrenia. Transl Psychiatry, 2023 Jun 27;13(1):218.

17) Usui K, Kirihara K, Araki T, Tada M, Koshiyama D, Fujioka M, Nishimura R, Ando S, Koike S, Sugiyama H, Shirakawa T, Toriyama R, Masaoka M, Fujikawa S, Endo K, Yamasaki S, Nishida A, Kasai K: Longitudinal change in mismatch negativity (MMN) but not in gamma-band auditory steady-state response (ASSR) is associated with psychological difficulties in adolescence. Cereb Cortex, 2023 :bhad346.

18) Koshiyama D, Nishimura R, Usui K, Fujioka M, Tada M, Kirihara K, Araki T, Kawakami S, Okada N, Koike S, Yamasue H, Abe O & Kasai K: Cortical white matter microstructural alterations underlying the impaired gamma-band auditory steady-state response in schizophrenia. Schizophrenia 10, 32, 2024.

19) Satoh M, Tabei K, Ogawa J, Abe M, Kamikawa C, Ota Y: An Online Version of Physical Exercise with Musical Accompaniment Might Facilitate Participation by Subjects Who Cannot Participate in Person: A Questionnaire-Based Study. Dementia and geriatric cognitive disorders extra 31;13(1):10-17, 2023.

20) Tabei K, Ogawa J, Kamikawa C, Abe M, Ota Y, Satoh M: Online physical exercise program with music improves working memory. Front Aging Neurosci 2023 Jul 13:15:1146060

21) Shoda H, Tabei K, Abe M, Nakahara J, Yasuda S, Williamon A, Isaka T: Effects of choir singing on physiological stress in Japanese older adults, its relationship with cognitive functioning and subjective well-being. Arts & health 1-13, 2023.

22) Shinohara E, Hada A, Minatani M, Wakamatsu M, Kitamura T: The Insomnia Severity Index: Factor Structure and Measurement and Structural Invariance across Perinatal Time Points. Healthcare 11(8): 1194, 2023.

23) Kitamura T, Usui Y, Wakamatsu M, Minatani M, Hada A: What are the core symptoms of antenatal depression? A study using Patient Health Questionnaire-9 among Japanese pregnant women in the first trimester. Healthcare 11(10): 1494, 2023.

24) Hada A, Takeda S, Imura M, Kitamura T: Development and Validation of a Short Version of the Scale for Parent to Baby Emotions (SPBE-20): Conceptual Replication among Pregnant Women in Japan. Psychology 14(6): 1085-1110, 2023.

25) Hada A, Ohashi Y, Usui Y, Kitamura T: A scale of parent-to-child emotions: Adaptation, factor structure, and measurement invariance. Family process 00: 1-25, 2023.

26) Ohashi Y, Takegata M, Takeda S, Hada A, Usui Y, & Kitamura T: Is Your Pregnancy Unwanted or Unhappy? Psychological Correlates of a Cluster of Pregnant Women Who Need Professional Care. Healthcare 11(15), 2196, 2023.

27) Hada A, Ohashi Y, Usui Y, Kitamura T: A Scale of Parent-to-Child Emotions (SPCE): Development and validation of a short form. Psychiatry Clin Neurosci Rep 2023, 10; 2:e148.

28) Hada A, Usui Y, Ohashi Y, Kitamura T. Adaptation of the CAD Scale to Japanese Parents: The Domains for Moral Violations in the CAD Triad Hypothesis. Psychology, 15, 58-76. 2024.

29) Hada A, Usui, Y, Ohashi Y, Takeda S & Kitamura T: Typology of pregnant women's bonding emotions towards their foetus: A study of Japanese women in the first trimester. Psychol 15:329-340, 2024.

30) Igarashi M, Yamaguchi S, Sato S, Shiozawa T, Matsunaga A, Ojio Y, Fujii C: Influence of multi-aspect job preference matching on job tenure for people with mental disorders in supported employment programs in Japan. Psychiatr Rehabil J 46(2): 101-108. 2023.

31) Igarashi M, Kawaguchi T, Shiozawa T, Yamaguchi S: Conversation topics in psychiatric consultations conducted with and without a shared decision-making tool: A qualitative content analysis. Patient Educ Couns 2024 Jan;118: 108045.

32) 山口創生，曽雌崇弘，永田真一，八重田 淳：就労継続支援 B 型事業所を利用する精神障害当事者における一般就労への関心に関連する要因：横断調査データの機械学習分析．職業リハビリテーション 36(2)：11-19，2023.

33) 米倉裕希子，山口創生，三野善央，植垣紀久代，中島 玲：障害のある子どもの感情表出を評価する自己記入式質問紙に関する研究：日本語版 Family Questionnaire の信頼性と妥当性．臨床精神医学 52(5)：571-578，2023.

34) 山口創生，五十嵐百花：IPS 研究の最前線：Individual Placement and Support の効果に関する系統的レビューのミニレビュー．精神神経学雑誌 125(8)：677-687，2023.

35) 小池純子，池田朋広，松長麻美，常岡俊昭，小池 治，佐藤裕大，黒田 治，稲本淳子：精神障害者の危機的状況を未然に防ぐ地域支援のあり方について：他害行為を要件に非自発的入院を行った精神障害者の家族に対するアンケート調査から．日社精医誌 32：1-3，113，2023.

36) 清家庸佑，川口敬之，小原一葉：リカバリーカレッジへの参加が支援職に与える影響について―スコーピングレビュー．精神医学 65(4)：489-498，2023.

37) 松岡太一，川口敬之，清家庸佑：認知機能障害を呈した地域在住統合失調症者に対する作業機能障害に焦点を当てた評価および介入．作業療法 42(2)：206-212，2023.

38) 氏井直樹，松岡太一，原田美和子，中村深雪，川口敬之，渡邊愛記：強度行動障害を呈する長期間保護室対応の自閉スペクトラム症患者に対する作業に焦点を当てた実践の効果．作業療法 42(3)：337-344，2023.

39) 川口敬之，阿部真貴子，山口創生，五十嵐百花，小川 亮，塩澤拓亮，安間尚徳，佐藤さやか，宮本有紀，藤井千代：地域精神保健福祉研究における患者・市民参画の研究段階および研究テーマに関する見解：複数の立場の視点に基づく質的内容分析．医療と社会 33(2)：257-270，2023.

40) 古屋慶一郎，松岡太一，川口敬之，渡邊愛記：作業機能障害に焦点を当てた実践により服薬に伴う活動性低下の改善をもたらした認知症治療病棟における一事例．作業療法 43(1)：106-113，2024.

41) 臼井 香，長谷川智恵，市橋香代，森田健太郎，金生由紀子，金原明子，大路友惇，里村嘉弘，山口創生，笠井清登，多田真理子：精神的不調を抱える AYA 世代に対するリカバリー志向型早期支援プログラムの開発．ブリーフサイコセラピー研究 31 (2)：37-48，2023.

42) 五十嵐百花，宮本有紀，渡辺慶一郎：学生がメンタルヘルス支援を受ける中で経験した困難と助かったこと―利用者視点の探索的研究―．大学のメンタルヘルス 5：92-100，2023.

(2) 総説

1) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアにおける認知行動療法の活用．最新精神医学 28(6)：513-520，2023.

2) 藤井千代：精神保健福祉法改正 研究者の立場から．日本精神科病院協会雑誌 42(9)：945-951，2023.

3)　藤井千代：精神科医療における非自発的入院の今後の方向性について教えてください．Depression Journal11(1)：24-25，2023.
4)　藤井千代：統合失調症の医療政策上の支援．精神科治療学 38(7)：839-844，2023.
5)　藤井千代：地域共生社会のために精神医療ができること．精神神経学雑誌 125(4)：258-265，2023.
6)　藤井千代：措置入院制度における警察との連携．精神神経学雑誌 125(5)：383-390，2023.
7)　藤井千代，西 大輔，久我弘典：地域共生社会の実現のための政策 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムから心のサポーター養成事業まで．精神科臨床 Legato 9(1)：62-64，2023.
8)　山口創生，川口敬之，塩澤拓亮：統合失調症の心理社会的支援．精神医学 65(4)：479-487，2023.
9)　山口創生：就労にまつわる「思いこみ」あるある．こころの元気＋：8-9，2023.
10)　山口創生，塩澤拓亮，川口敬之：統合失調症の社会的支援の現状．精神科治学 38(7)：815-820，2023.
11)　山口創生，大石 智：統合失調症のスティグマと社会参加．医学のあゆみ 286(6)：511-516，2023.
12)　福田正人，熊倉陽介，山口創生：統合失調症の治療ガイドと学会の未来－共同創造を通じた研究と治療の橋渡し．医学のあゆみ 286(6)：614-620，2023.
13)　小池純子，河野稔明，岡野茉莉子，竹田康二，藤井千代，平林直次：医療観察法対象者の入院期間に影響する因子について．精神科 43(1)：100-108，2023.
14)　河野稔明，小池純子，竹田康二，壁屋康洋，曽雌崇弘，岡野茉莉子，藤井千代，平林直次：医療観察法類型化の試み．精神科 43(1)：109-116，2023.
15)　黒田直明：つくば市における筑波大学と協働したデータ活用の取り組み–ニーズ調査から在宅医療・介護連携推進事業との連動まで．公衆衛生 87(4)：346-350，2023.
16)　黒田直明：精神疾患のヘルスサービスリサーチ．日本医事新報 5173：39，2023.
17)　切原賢治，多田真理子，越山太輔，藤岡真生，臼井 香，西村亮一，荒木 剛，笠井清登：統合失調症の早期段階におけるミスマッチ陰性電位．臨床神経生理学 51(3)：126-130，2023.
18)　小黒早紀，小塩靖崇，松長麻美，藤井千代：アスリートの精神不調・障害に対する薬物治療の検討―IOC 声明文を踏まえて．スポーツ精神医学 20：58-65，2023.
19)　小塩靖崇，小黒早紀，塩澤拓亮，岩永麻衣，川口敬之：日本スポーツ界のメンタルヘルスケアのあり方を考える～アスリートのメンタルヘルス実態調査から～．スポーツ精神医学 20：34-40，2023.
20)　中島 俊，小塩靖崇：市民・当事者・各種専門家が共創し、インクルーシブな支援を実現する．認知療法研究 16：2，103-106，2023.
21)　小塩靖崇，川村 慎，木村真光：アスリートと小学校図画工作科の教師が連携して小学 5 年生を対象に行ったメンタルヘルスイベントの紹介．日本社会精神医学会雑誌 32(2)：174-177，2023.
22)　高嶋里枝：令和 4 年精神保健福祉法改正について―関連する近時の動向をふまえて．年報医事法学 38 号：244-250，2023.

(3) 著書

1) 山口創生：就労定着支援.（編集者：吉田光爾，遠藤紫乃，岩崎 香）福祉職のための精神・知的・発達障害者アウトリーチ実践ガイド:生活訓練・自立生活アシスタントの現場から．金剛出版，東京，pp257-259，2024.

2) 小塩靖崇：海外における中高生への精神保健教育-カナダ-．水野雅文，森 良一(編)：学校におけるメンタルヘルス教育の進め方，大修館書店，東京，pp147-152，2023.

3) 小塩靖崇：メンタルヘルスリテラシー教育の評価，水野雅文，森 良一(編)：学校におけるメンタルヘルス教育の進め方，大修館書店，東京，pp153-155，2023.

4) 小塩靖崇：スポーツとメンタルヘルス．水野雅文，森 良一(編)：学校におけるメンタルヘルス教育の進め方，大修館書店，東京，pp190，2023.

5) 川口敬之：リカバリー評価尺度（RAS）．早坂友成，岩根達郎，森元隆文（編）：精神科リハビリテーション評価法ハンドブック，中外医学社，東京，pp196-201，2023.

6) 川口敬之：世界保健機関・障害評価面接基準（WHODAS 2.0）．早坂友成，岩根達郎，森元隆文(編)：精神科リハビリテーション評価法ハンドブック，中外医学社，東京，pp237-241，2023.

(4) 研究報告書

1) 瀬戸秀文，朝倉為豪，稲垣 中，岩永英之，牛島一成，太田順一郎，大塚達以，小口芳世，奥野栄太，木﨑英介，来住由樹，小池純子，椎名明大，島田達洋，鈴木 亮，酢野 貢，竹澤翔，田崎仁美，戸高 聰，冨田真幸，中西清晃，中濱裕二，中村 仁，平林直次，松尾寛子，満留朱里，宮崎大輔，山田直哉，横島孝至，吉川 輝，吉住 昭，芳野昭文，渡辺純一，藤井千代：措置通報および措置入院の実態に関する研究．厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究（22GC2004）令和 4 年度 分担研究報告書 pp100-269，2023.

2) 椎名明大，五十嵐禎人，伊豫雅臣，稲垣 中，太田順一郎，小口芳世，大塚達以，鎌田 雄，小池純子，竹澤 翔，島田達洋，瀬戸秀文，中西清晃，中村 仁，新津富央，西中宏史：地域における危機介入のあり方に関する研究．厚生労働行政推進調査事業費補助金（障害者政策総合研究事業）精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する政策研究（22GC2003）令和 4 年度 総括・分担研究報告書 pp45-92，2023.

(5) 翻訳

1) 小塩靖崇，西多昌規：日本語版 IOC メンタルヘルス行動計画（原文: IOC Mental Health Action Plan）July 2023. MentalHealthActionPlanJapanesefinalR1.pdf (olympics.com)

(6) その他

1) Iida M, Sakuraya A, Imamura K, Asaoka H, Arima H, Ando E, Inoue A, Inoue R, Iwanaga M, Eguchi H, Otsuka Y, Kobayashi Y, Komase Y, Kuribayashi K, Sasaki N, Tsuno K, Hino A, Watanabe K, Ebara T, Shimazu A, Kawakami N, Tsutsumi A: Effects of participatory organizational interventions on mental health and work performance: A protocol for systematic review and meta-analysis. medRxiv. preprint 2023.

2) 統合失調症の最新情報 2022 作成委員会編(宇野晃人，市橋香代，大島紀人，笠井清登，金田渉，金原明子，熊谷晋一郎，熊倉陽介，里村嘉弘，澤井大和，高橋優輔，福田正人，松﨑淳子，

宮本有紀，村井俊哉，森田健太郎，柳下 祥，山口創生)：私と統合失調症：統合失調症のいま．日本統合失調症学会ウェブサイト，東京，2023.

3) Deegan P，（編集・翻訳：坂本明子，久永文恵，宮本有紀，栄 セツコ，山口創生）：ディーガンさんとの対話：ピアサポーター，パーソナル・メディスン，身体的健康．精神障害とリハビリテーション 27(1)：97-104，2023.

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演，教育講演，シンポジウム，ワークショップ，パネルディスカッション等

1) Fujii C, Nishiuchi E, Usui K: Agenda4 Introduction of Mental Health Policy Issues in the Three Countries「Community Mental Health Policy in Japan and Significance of Outreach Support」.7th ACONAMI Mental Health International Symposium, National Center for Mental Health, South Korea, 2023.9.12-13.

2) Yamaguchi S: Evidence based effective community mental health services and its implementation. 25th Anniversary Congress of the Korean Society for Schizophrenia Research, Soul, 2023.10.13.

3) Shoda H, Ono K, Abe M, Tabei K: Music and bodily movement: Perspectives from performance science, cognitive neuroscience, and evidence-based music therapy, Conference on Music Perception and Cognition 17 - The Asia-Pacific Society for the Cognitive Sciences of Music7 (ICMPC17-APSCOM7), Tokyo, 2023.8.24.

4) 藤井千代：統合失調症の外来治療の今後について考える　統合失調症の外来治療はどうあるべきか　政策面から．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.

5) 藤井千代：日本の精神科医療・保健福祉の未来を考える　地域ケアにおける自立支援のためのアウトリーチ．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.

6) 藤井千代：地域ケアにおいて求められるアウトリーチ支援を考える　精神科領域におけるアウトリーチ支援の重要性．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.

7) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けた取り組み．日本地域看護学会第 26 回学術集会 パネルディスカッション（オンデマンド），神奈川，2023.9.2-3.

8) 藤井千代：精神科領域の医療技術評価における診療ガイドラインとレジストリの役割とは? 地域精神科医療における診療の質評価．第 53 回日本神経精神薬理学会年会，東京，2023.9.7-9.

9) 藤井千代：教育講演 2「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」．第 82 回日本公衆衛生学会総会，茨城，2023.11.1.

10) 藤井千代：Sessin1 講演「施設としての実績・取り組み SDM 指導のきっかけ～明日から一歩踏む出すためには～」SDM Forum 2024（司会）（Web 配信），住友ファーマー株式会社，2024.1.20.

11) 藤井千代：Sessin3「SDM を実装するためには～みんなで踏み出す SDM～」SDM Forum 2024（パネリスト）（Web 配信），住友ファーマー株式会社，2024.1.20.

12) 藤井千代，川口敬之，山田悠平，相良真央，佐竹直子，須藤康宏：誰一人取り残さない防災・減災に向けて～精神障害当事者の経験知・支援者の専門知による共同創造のこれから～. 第 42 回日本社会精神医学会 シンポジウム（司会，オーガナイザー）宮城，2024.3.14-15.

13) 藤井千代：教育講演 9「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムにおける早期介入と多職種連携．第 42 回日本社会精神医学会，宮城，2024.3.14-15.

14) 山口創生：精神疾患と糖尿病に関するスティグマ：ミニレビュー．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.

15) 山口創生：当事者団体への参加と臨床的アウトカムとの関連についての文献的検討．第 20 回日本うつ病学会総会 仙台大会，宮城，2023.7.22.

16) 山口創生，小川 亮，安藤俊太郎，松長麻美，小塩靖崇，近藤伸介，市橋香代，藤井千代，笠井清登：医学生に対する国際アンチ・スティグマ教育の効果：参加サイトと日本サイトとの比較. 第 55 回日本医学教育学会大会 長崎大会（オンライン）2023.7.28.

17) 山口創生：就労サービス において、なぜ個別支援が重要なのか？：伴走型支援が求められる時代の就労サービスを共に考えよう！．第 30 回日本精神障害者リハビリテーション学会，岡山，2023.12.3.

18) 山口創生:リハビリテーション専門職がリカバリーの応援のためにできることは？：概念の再確認から実装に向けた再始動へ．第 30 回日本精神障害者リハビリテーション学会，岡山，2023.12.3.

19) 山口創生：経験者に聞く「地域で求められるアウトリーチとは．第 2 回コミュニティ・メンタルヘルス・アウトリーチ協会全国大会，福岡，2024.1.28.

20) 山口創生：当事者と専門職による協働する 研究・支援の先に見えたもの．東京大学，2023 年度課題解決型高度医療人材養成プログラム「職域・地域架橋型－価値に基づく支援者育成」，東京，2024.1.21.

21) 山口創生：精神疾患の予防戦略を一度立ち止まって考えませんか？：スティグマ・環境要因の観点から．第 42 回日本社会精神医学会学術総会，宮城，2024.3.14.

22) 山口創生，岩永麻衣，川口敬之，臼井 香，吉田光爾，西尾雅明，梁田英麿，渡邉真理子，谷口研一朗，青木裕史，久島勇一郎，佐藤さやか，藤井千代：多職種アウトリーチ支援利用者・家族の 10 年間の軌跡：多施設共同縦断研究の研究計画．第 42 回日本社会精神医学会学術総会，宮城，2024.3.15.

23) 山口創生：精神科臨床ガイドラインと市民参画. 第 42 回日本社会精神医学会学術総会，宮城，2024.3.15.

24) 山口創生：統合失調症に対するアンチスティグマの再戦略化に向けたエビデンスの整理. 第 42 回日本社会精神医学会学術総会，宮城，2024.3.15.

25) 山口創生：IPS 個別就労支援の品質管理とチェックリスト．第 8 回 IPS 全国研修会，東京，2024.3.17.

26) 小池純子：政策と臨床の連携を実現する地域移行・定着支援 －複雑なニーズを持つ困難ケースが教えてくれる多様な意義．第 42 回日本社会精神医学会学術総会，宮城，2024.3.14.

27) 黒田直明：研究者と自治体の「みぞ」を読み解く．第 82 回日本公衆衛生学会，茨城，2023.11.1.

28) 中西清晃：シンポジウム「クライシスへの予防、予見、早期介入~地域包括ケアシステムと精神科救急医療体制~」自治体アウトリーチにおける早期加入．第 31 回日本精神科救急学術総会，山口，2023.10.6.

29) 中西清晃：シンポジウム「地域支援の新たな展開－地域移行定着支援の背景と実践例の紹介」自治体アウトリーチによる退院後支援．第 42 回日本社会精神医学会，宮城，2024.3.14.

30) 切原賢治，多田真理子，越山太輔，藤岡真生，臼井 香，西村亮一，荒木 剛，國井尚人，宇賀貴紀，笠井清登：統合失調症の早期段階における translatable brain marker としてのミスマッチ陰性電位．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.

31) 小塩靖崇：教育研修講演「アスリートのメンタルヘルス実態とケアシステム構築について」．第 34 回日本臨床スポーツ医学会学術集会，神奈川，2023.11.11.

32) 小塩靖崇：特別講演「研究者にできること～IOC Mental Health Action Plan の活用について～」．第 14 回スポーツメディスンフォーラム，東京，2024.3.10.

33) 阿部真貴子，正田 悠，田部井賢一，近藤真由：ポストコロナ時代のオンライン音楽療法を考える．第 23 回日本音楽療法学会学術大会，岐阜，2023. 9. 3.

34) 阿部真貴子，今村ゆかり，岡田幸法：「ワークショップ 音楽療法の歴史と基礎を振り返り、今後更にエビデンスを構築するには」．第 17 回日本音楽医療研究会学術集会，神奈川，2024.2.11.

(2) 一般演題

1) Kawaguchi T, Watanabe A, Sakimoto M, Oikawa Y, Furuya K, Matsuoka T, Ojio Y: Structural relationship between changes in recovery and difficulties in severe and persistent mental illness. ACMHN 47th International Mental Health Nursing Conference 2023. Melbourne, Australia. 2023.9.14.

2) Iwanaga M, Kawakami N: The long-term impact of being bullied at school on satisfaction with life and job among middle-aged workers: Findings from a 50-year prospective study of the 1958 British Birth Cohort. ICOH-WOPS & APA-PFAW 2023. Tokyo, Japan. (22 September 2023)

3) Iwanaga M, Yamaguchi S, Sato S, Nakanishi K, Nishiuchi E, Shimodaira M, So Y, Usui K, Fujii C: Service Use Patterns in Community Mental Health Outreach: A Sequence Analysis of 35-month Longitudinal Data. ACMHN 47th International Mental Health Nursing Conference 2023. Melbourne, Australia. 2023.9.14.

4) Koshiyama D, Nishimura R, Usui K, Fujioka M, Tada M, Kirihara K, Kawakami S, Morita K, Okada N, Koike S, Yamasue H, Abe O, Kasai K: Associations between white matter microstructural alterations and impaired gamma-band auditory steady-state response in schizophrenia, Society of Biological Psychiatry, US, April 2023.

5) Abe M, Tabei K, Satoh M: What Are the Measures and Outcomes Used in Music Therapy for Dementia? The World Congress of Music Therapy 2023, Canada (online), 2023.7.24.

6) Igarashi M, Kawaguchi T, Shiozawa T, Ojio Y, Yamaguchi S: Conversation topics in psychiatric consultations with and without a shared decision-making tool. ACMHN 47th International Mental Health Nursing Conference 2023. Melbourne, Australia.2023.9.14.

7) 山口創生, 青木千帆子，岩上洋一，大村美保，坂入竜治，種田綾乃，増田和高，水野雅之，吉野智，岩崎 香：障害福祉サービス人材に関するオンライン横断調査：新入職員と退職職員の実態把握．日本精神保健福祉学会 第 11 回学術研究集会 東京大会，東京，2023.6.25.

8) 山口創生：多職種アウトリーチ支援利用者・家族の 10 年間の軌跡：多施設共同縦断研究の研究計画．第 2 回コミュニティ・メンタルヘルス・アウトリーチ協会全国大会，福岡，2024.1.28.

9) 岡村 泰，荒川育子，西 宏隆，佐藤さやか，吉田光爾，山口創生，藤井千代，水野雅文：松沢病院における包括的支援マネジメントに関する研究．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.

10) 瀬戸秀文，稲垣 中，太田順一郎，小口芳世，島田達洋，椎名明大，中西清晃，中村 仁，小池純子，藤井千代：措置診察を担当する精神保健指定医の招聘システムの各自治体における現状について．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.22.

11) 瀬戸秀文，稲垣 中，太田順一郎，小口芳世，島田達洋，椎名明大，中西清晃，中村 仁，小池純子，藤井千代：精神保健福祉法第 24 条に基づく検察官通報の現状把握に関する研究（その 1）通報・事前調査について．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.23.

12) 瀬戸秀文，稲垣 中，太田順一郎，小口芳世，島田達洋，椎名明大，中西清晃，中村 仁，小池純子，藤井千代：精神保健福祉法第 24 条に基づく検察官通報の現状把握に関する研究（その 2）指定医診察例について．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.23.

13) 小池純子，河野稔明，竹田康二，岡野茉莉子，阿部真貴子，藤井千代，平林直次：医療観察法入院対象者における前科前歴のある者の特性について―医療観察法データベースを用いた予備的検討．第 19 回司法精神医学会大会，東京，2023.9.8-9.

14) 小池純子，阿部真貴子，久保彩子，竹田康二，中西清晃，岡野茉莉子，島田明裕，松田太郎，高尾 碧，五十嵐百花，平林直次，藤井千代：医療観察法通院処遇における臨床課題と支援上の困難―多機関多職種支援者に対するグループインタビュー調査. 第 19 回司法精神医学会大会，東京，2023.9.8-9.

15) 河野稔明，小池純子，竹田康二，壁屋康洋，曽雌崇弘，岡野茉莉子，藤井千代，平林直次：医療観察法データベースを用いた基礎的変数による入院対象者の類型化．第 19 回司法精神医学会大会，東京，2023.9.8-9.

16) 河野稔明，小池純子，竹田康二，岡野茉莉子，阿部真貴子，藤井千代，平林直次：静的因子により類型化した医療観察法入院対象者の動的因子による検証―主診断が精神病性障害の事例の分析．第 19 回司法精神医学会大会，東京，2023.9.8-9.

17) 瀬戸秀文，稲垣 中，太田順一郎，小口芳世，小池純子，椎名明大，島田達洋，中西清晃，中村仁，藤井千代：検察官通報の現状について．第 19 回司法精神医学会大会，東京，2023.9.8-9.

18) 瀬戸秀文，稲垣 中，太田順一郎，小口芳世，小池純子，椎名明大，島田達洋，中西清晃，中村仁，藤井千代：措置入院となった精神障害者の前向きコホート研究―隊員 2 年後の治療継続・再入院の状．第 19 回司法精神医学会大会，東京，2023.9.8-9.

19) 遠田大輔，中西清晃，小池純子，竹澤 翔，鈴木 亮，田崎仁美，酢野 貢，吉野昭文，朝倉為豪，中村 仁，稲垣 中，島田達洋，椎名明大，太田順一郎，藤井千代，瀬戸秀文：措置入院患者に

対する知音後の訪問看護導入の狙いと訪問感の介入目的ー入院医療機関と精神科訪問看護従事者へのグループインタビュー調査．第 31 回精神科救急学会総会，山口，2023.10.6-7.

20）石丸美穂，黒田直明，大野幸子，佐藤美寿々，小宮山 潤，相田 潤，田宮菜奈子：地域歯科検診事業が成人住民の歯科利用促進に与える効果の検証:差分の差解析． 第 82 回日本公衆衛生学会，茨城，2023.10.31.

21）藤原怜峰，宇田和晃，小宮山 潤，黒田直明，田宮菜奈子：緊急入院した高齢者における在院日数と 30 日以内再入院率に影響する要因の検討．第 82 回日本公衆衛生学会，茨城，2023.11.1

22）松田智行，黒田直明，田宮菜奈子：介護保険制度による利用者負担割合変更前後のリハビリテーション利用と経済状況の関連．第 82 回日本公衆衛生学会，茨城，2023.11.1.

23）山本行子，井花庸子，木村晶子，山岡巧弥，今井健二郎，黒田直明，杉山雄大，田宮菜奈子：糖尿病患者の眼科受診勧奨経験と知識・受診の関連：つくば市調査票レセプト突合解析．第 82 回日本公衆衛生学会，茨城，2023.11.2.

24）木村晶子，井花庸子，今井健二郎，山本行子，山岡巧弥，黒田直明，杉山雄大，田宮菜奈子：糖尿病のある方の困難へのアプローチ：つくば市調査票レセプト突合解析． 第 82 回日本公衆衛生学会，茨城，2023.11.2.

25）瀬戸秀文，稲垣 中，島田達洋，大塚達以，岩永英之，中西清晃，中村 仁，渡辺純一，横島孝至，奥野栄太：措置入院となった精神障害者の前向きコホート研究 退院 2 年後の治療状況．第 119 回日本精神神経学会学術総会，神奈川，2023.6.23.

26）瀬戸秀文，稲垣 中，島田達洋，大塚達以，岩永英之，中西清晃，中村 仁，渡辺純一，木崎英介，冨田真幸，横島孝至，奥野栄太，来住由樹，太田順一郎，吉住 昭：措置診察を担当する精神保健指定医の招聘システムの各自治体における現状について．第 19 回日本司法精神医学会大会，東京，2023.9.8.

27）瀬戸秀文，稲垣 中，太田順一郎，小口芳世，小池純子，椎名明大，島田達洋，中西清晃，中村仁，藤井千代：措置診察を担当する精神保健指定医の招聘システムの各自治体における現状について．第 31 回日本精神科救急学術総会，山口，2023.10.6-7.

28）澤田宇多子，飯田真子，臼田謙太郎，羽澄 恵，岡﨑絵美，小倉加奈子，片岡真由美，小塩靖崇，松長麻美，梅本育恵，牧野みゆき，中下綾子，神川ちあき，黒田直明，久我弘典，藤井千代，西 大輔：日本の地域住民における、心のサポーター養成事業による地域住民のスティグマ低減に関する効果評価：前後比較試験．第 30 回日本行動医学会，東京，2023.12. 3.

29）山田悠平，相良真央，川口敬之，白田幸治，本多清寛，岩永麻衣，塩澤拓亮，小池純子，山口創生，藤井千代：災害関連調査を通じた当事者主導型研究のプロセスの検討：DIARY プロジェクトの実践報告．第 20 回日本うつ病学会総会，宮城，2023.7.21-22.

30）相良真央，山田悠平，須藤 雫，藤井千代，川口敬之，小池純子，山口創生，塩澤拓亮：発達障害当事者団体の立場として実施する精神科医療とのかかわり方の調査に関する報告．第 10 回成人発達障害支援学会，神奈川，2023.10.21-22.

31）川口敬之，村田雄一，山元直道，渡邊愛記，森田三佳子：精神科急性期病棟入院患者のセルフマネジメントと失体感症における要因構造の推定：交差遅延効果モデルに基づく予備的研究．第 57 回日本作業療法学会，沖縄，2023.11.10-12.

32) 松岡太一，川口敬之，清家庸佑：精神障害領域における作業機能障害の状態に基づいた個別作業療法の介入効果の予備的検討．第 57 回日本作業療法学会，沖縄，2023.11.10-12.

33) 村田雄一，川口敬之，山元直道，須賀裕輔，森田三佳子：精神科作業療法における MHSQ-J および失体感症尺度の臨床応用可能性：精神科急性期病棟における予備的検討．第 57 回日本作業療法学会，沖縄，2023.11.10-12.

34) 山元直道，古賀 誠，村田雄一，川口敬之，森田三佳子：精神科急性期病棟の個別作業療法における健康管理意識の変容に向けたセルフモニタリングの実践．第 57 回日本作業療法学会，沖縄，2023.11.10-12.

35) 松岡耕史，渡邊愛記，川口敬之，福田倫也：脳卒中麻痺側上肢に対する有用度評価の妥当性の検証．第 57 回日本作業療法学会，沖縄，2023.11.10-12.

36) 中村麻幸，川口敬之，小林奈々，勝山基史：作業機能障害に焦点を当てた面接と Illness Management and Recovery の実践が奏功した回避性パーソナリティ障害をもつ一事例．第 57 回日本作業療法学会，沖縄，2023.11.10-12.

37) 川口敬之，森川公彦，三木恵美，児玉匡史，牧野秀鏡，山口創生，藤井千代，来住由樹：精神障害をもつ入院患者の地域定着に関わる重点支援期間の推定：後ろ向きコホート研究．第 30 回日本精神障障害者リハビリテーション学会 岡山大会，岡山，2023.12.2-3.

38) 安間尚徳，塩澤拓亮，川口敬之，山田裕貴，五十嵐百花，岩永麻衣，臼井 香，小池純子，佐藤さやか，山口創生，藤井千代：地域精神保健において当事者・家族を交えて考える多職種・多機関連携研修の開発．第 30 回日本精神障障害者リハビリテーション学会 岡山大会，岡山，2023.12.2-3.

39) 森島 遼，金原明子，相澤俊明，岡田直大，臼井 香，野口晴子，笠井清登：COVID-19 流行下の思春期における情緒行動症状と援助希求困難の長期的傾向および社会・人口統計学的不均衡．第 22 回日本トラウマティック・ストレス学会，東京，2023.8.5-6.

40) 臼井 香，糸繰朝美，中西清晃，西内絵里沙，山口創生：自治体精神障害者アウトリーチ支援事業利用者における小児逆境的体験の実態調査，第 82 回日本公衆衛生学会総会，茨城，2023.10.31-11.2.

41) 倉持桃子，那須田桂，古川由己，市橋香代，臼井 香，長谷川智恵，多田真理子，藤川慎也，笠井清登：統合失調症初発期にある一名の患者に思春期向けの早期支援プログラムを実施した報告．東京精神医学会 第 129 回学術集会，東京，2023.11.11.

42) 切原賢治，多田真理子，越山太輔，藤岡真生，臼井 香，西村亮一，荒木 剛，笠井清登：統合失調症の早期段階におけるバイオマーカーとしてのミスマッチ陰性電位．日本臨床神経生理学会，福岡，2023.11.30-12-2.

43) 阿部真貴子，岡野茉莉子，小池純子，田部井賢一，正田 悠：遠隔音楽療法実施に関するインタビュー調査–テキストマイニングによる検討．第 17 回日本音楽医療研究会学術集会，神奈川，2024.2.11.

44) 阿部真貴子，久保彩子，岡野茉莉子，島田明裕，高尾 碧，松田太郎，小池純子，竹田康二，平林直次，藤井千代：医療観察法における通院処遇上の課題の抽出：KH-coder による検討．第 42 回日本社会精神医学会，宮城，2024.3.14-15.

45) 高嶋里枝「日本の精神保健福祉法について―障害者権利条約と韓国との比較の視点から―」日韓次世代学術フォーラム 20 周年記念国際学術大会，韓国，2023.6.24.

46) 高嶋里枝：精神保健福祉法による入院に関する裁判例の研究．第 42 回日本社会精神医学会，宮城，2024.3.14-15.

47) 奈良麻結，松長麻美，高野 歩，谷口麻希：精神疾患を有する人々における非自発的入院中の医療スタッフとの治療的関係とセルフスティグマに関する研究：横断研究．第 42 回日本社会精神医学会，宮城，2024.3.14-15.

(3) 研究報告会

1) 黒田直明，田宮菜奈子：精神科・身体で固定された精神疾患を有する人の超過死亡：つくば市国民健康保険被保険者コホートを用いた推定．国立精神・精神医療研究センター精神保健研究所 令和 5 年度 研究報告会（第 35 回），東京，2023.3.18.

2) 臼井 香，髙橋 徹，熊野宏昭：大規模コホート研究「WASEDA'S Health Study」脳 MRI プロジェクトの紹介．早稲田大学応用脳化学研究所カンファレンス 2024，Zoom，2024.2.19.

3) 臼井 香，糸繰朝美，岩永麻衣，中西清晃，西内絵里沙，下平美智代，曺 由寛，山口創生，佐藤さやか，藤井千代：地域における精神障害者多職種アウトリーチ支援利用者の逆境的小児期体験に関する実態調査．国立精神・精神医療研究センター精神保健研究所 令和 5 年度 研究報告会（第 35 回），東京，2023.3.18.

4) 高嶋里枝：精神科における身体拘束と非自発的医療―名古屋高裁金沢支部令 2・12・16 を中心に―．いほうの会，東京，2023.7.29.

5) 高嶋里枝：精神科の強制入院の運用について―医療保護入院の判例を素材に―．明治大学医事法センター判例研究会，東京，2023.9.27.

6) 高嶋里枝：医療保護入院をめぐる判例の動向―東京地裁令和 4 年 11 月 16 日判決を中心に―．精神医療法研究会，東京，2023.10.1.

(4) その他

C．講演

1) Kuroda N: City-led community-based informal care network for older adults in Tsukuba City，第 82 回日本公衆衛生学会つくば保健所テクニカルビジット，茨城，2023.11.2.

2) Ojio Y: Co-creative research project with Japan Rugby Players' Association for developing mentally healthy sport setting, ANZSLA/JSLA Webinar, keynote lecture, online, 2024.2.20.

3) 藤井千代：精神科病院における虐待防止について．東京精神科病院協会，東精協会会員総会講演会，東京，2023.5.24.

4) 藤井千代：「精神保健福祉法改正−精神科医療はどう変わる？−」．ルンドベック・ジャパン株式会社主催，Lundbeck Psychiatry Expert Seminar（特別講演），東京，2023.5.30.

5) 藤井千代：精神科救急・急性期医療における包括的アプローチ．愛知県精神科医会学術講演会，武田製薬工業株式会社/ルンドベック・ジャパン株式会社共催，愛知，2023.6.10.

6) 藤井千代：「改正精神保健福祉法と精神保健福祉士に期待するもの」．令和 5 年度定期総会記念講演，三重県精神保健福祉士協会，三重，2023.6.25.

7) 藤井千代：「精神科医療の「これまで」と「これから」-法改正と国際動向を踏まえて-」大塚製薬株式会社関西第一支店，第 1 回 Conference for Pioneering Future Psychiatry，大阪，2023.7.7.

8) 藤井千代：「精神医療保険福祉の動向について」．令和 5 年度中国・四国精神保健福祉センター所長及び同主管課担当者合同会議（講演）（オンライン），2023.8.24.
9) 藤井千代：長崎県地域医療介護総合確保基金事業補助金事業オンライン講演会（講師）．2023.8.28.
10) 藤井千代：「虐待関連」．令和 5 年度看護管理者講習会，公益社団法人日本精神科病院協会，オンライン配信，2023.9.1-11.30.
11) 藤井千代：「地域精神保健、入院者訪問支援事業への期待とにも包括の面白さを語ります」．大塚製薬株式会社医薬営業本部，チキクラフォーラム 8，東京，2023.9.10.
12) 藤井千代：「精神科医療の「これまで」と「これから」-法改正と国際動向を踏まえて-」大塚製薬株式会社仙台支店，第 19 回会津地域統合失調症研究会，福島，2023.10.4.
13) 藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築．島根県精神科病院医療連携促進事業，精神障がい者地域移行・地域定着支援　従事者研修会，島根，2023.11.3.
14) 藤井千代：「地域包括ケア・精神保健福祉法改正により、今後の精神科医療はどう変わる」．（公社）日本精神科病院協会福島県支部研修会，福島，2023.11.24.
15) 藤井千代：「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム・措置入院者の退院後支援」．令和 5 年度精神保健福祉相談員資格講習会，広島市精神保健福祉センター，広島，2024.1.29.
16) 山口創生：IPS の可能性から、改めて働くことを考える．第 2 回世田谷ひきこもり・就労支援部会．東京，2023.9.28.
17) 山口創生：メンタルヘルスへのスティグマを減らすための教育の可能性と課題．世界メンタルヘルスデー2023 オンラインセミナー「10 代、20 代のメンタルヘルス」, オンライン, 2023.10.4.
18) 山口創生：専門職の理解のためのリカバリーの再整理．福島県精神障がい者アウトリーチ推進事業研修会，オンライン，2023.10.18.
19) 山口創生：当事者・市民との協働による精神保健サービスの可能性：最新の研究から．2023 年度 札幌医科大学保健医療学部 作業療法学科 卒後教育講習会シリーズ, オンライン, 2023.11.3.
20) 山口創生：利用者主体の就労支援とは?：IPS 援助付き雇用モデルから多様な就労支援のあり方を考える. 令和 5 年度大阪府社会福祉協議会障がい児者・救護施設課程, オンライン, 2023.12.20.
21) 山口創生：精神障がいのあるご本人の意思決定と家族ができること：当事者参画が必要といわれるけれど（話題提供）．2023 年度みんなねっとフォーラム，オンライン，2024.3.20.
22) 中西清晃，西内絵里沙：令和 5 年度第 2 回川口市精神障害者訪問支援強化事業評価会議講師，埼玉，2024.3.26.
23) 西内絵里沙：2023 年度精神疾患の基礎知識講座（連続 5 回）「家族に届ける」 第 4 回目治療や支援につながっている家族の課題．NPO 法人名古屋市精神障害者家族会連合会 講師，オンライン，2024.2.18.
24) 小塩靖崇：児童生徒の心の健康思春期の「こころ」の支え方. 令和 5 年（2023 年）度「教育相談実践研修会」, 岐阜, 2023.11.22.
25) 小塩靖崇：若者のメンタルヘルスを考える～学校教育・スポーツにできること～. 県民公開講座, 三重, 2024.2.18.

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1) 藤井千代：日本精神神経学会 代議員
2) 藤井千代：日本精神神経学会 医療倫理委員会委員長
3) 藤井千代：日本精神神経学会 地域ケアにおける自立支援のあり方検討委員会委員長
4) 藤井千代：日本精神神経学会 滝山病院に関する特別委員会委員長
5) 藤井千代：日本社会精神医学会 副理事長
6) 藤井千代：日本精神科救急学会 理事
7) 藤井千代：日本精神保健福祉政策学会 理事
8) 藤井千代：日本司法精神医学会 評議員
9) 藤井千代：日本精神保健・予防学会 評議員
10) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 理事
11) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 実践賞委員会委員長
12) 山口創生：日本社会精神医学会 理事
13) 山口創生：日本社会精神医学会 他職種協働委員会委員長
14) 山口創生：日本統合失調症学会 評議員・理事
15) 山口創生：こころのバリアフリー研究会 評議員
16) 山口創生：日本精神保健・予防学会 評議員
17) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 理事
18) 佐藤さやか：公認心理師の会 医療部会委員
19) 佐藤さやか：VCAT-J 研究会 理事
20) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
21) 黒田直明：日本公衆衛生学会 代議員 2023.7-2025.6
22) 黒田直明：日本公衆衛生学会（茨城，2023.11.1）学術部会委員
23) 西内絵里沙：日本精神障害者リハビリテーション学会 実践賞委員
24) 西内絵里沙：一般社団法人コミュニティメンタルヘルスアウトリーチ協会 研修委員
25) 西内絵里沙：一般社団法人ジャパンファミリーワークプロジェクト 理事
26) 小塩靖崇：日本精神保健・予防学会 評議員
27) 小塩靖崇：日本スポーツ精神医学会 研究推進委員

(3) 座長

1) 藤井千代：Ⅰ：救急科・精神科の連携について／Ⅱ：ソーシャルワーカーの在り方について．第 2 回多摩地域リエゾン会議，住友ファーマ株式会社，東京，2023.12.5.
2) 藤井千代：教育講演 12「精神保健福祉法体制はどこえゆくのか–障害者権利条約の時代に–」．第 42 回日本社会精神医学会，宮城，2024.3.15.
3) 水野雅文，藤井千代：シンポジウム 2「地域支援の新たな展開–地域移行定着支援の背景と実践例の紹介」．第 42 回日本社会精神医学会，宮城，2024.3.1.
4) 藤井千代，根本隆洋：シンポジウム 6「精神保健相談における都道府県・保健所・市区町村の重層的連携体制の構築に向けて」．第 42 回日本社会精神医学会，宮城，2024.3.15.
5) 藤井千代：シンポジウム 12「誰一人取り残さない防災・減災に向けて〜精神障害当事者の経験知・支援者の専門知による共同創造のこれから〜」．第 42 回日本社会精神医学会シンポジウム（座長，オーガナイザー）．宮城，2024.3.15.
6) 藤井千代：ランチョンセミナー1「VR を用いた精神科リハビリテーションの実践と可能性」．第 42 回日本社会精神医学会，宮城，2024.3.15.

7)　黒田直明：自治体職員と研究者が織りなす公衆衛生の有機的実装―認識の「みぞ」を乗り越える（座長）. 第 82 回日本公衆衛生学会, 茨城，2023.11.1.

8)　黒田直明：English Session5（座長）. 第 82 回日本公衆衛生学会，茨城，2023.11.1.

(4) 学会誌編集委員等

1)　藤井千代：日本社会精神医学会雑誌 編集委員長
2)　藤井千代：日本精神神経学会雑誌 編集委員
3)　山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
4)　山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 英文監修者
5)　山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 学会誌編集委員
6)　山口創生：学会誌投稿論文等査読小委員会及び査読制度の在り方検討小委員会
7)　山口創生：BMC Psychtry Editorial borad member
8)　山口創生：Journal of Epidemiology Editorial board member
9)　小塩靖崇：IACAPAP テキストブック翻訳委員会委員
10)　小塩靖崇：予防精神医学 編集委員
11)　小塩靖崇：日本社会精神医学会雑誌 編集委員
12)　川口敬之：日本臨床作業療法研究 査読委員
13)　川口敬之：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員

E．研修

(1) 研修企画

1)　西内絵里沙：2023 年度アウトリーチネット地域づくり部会企画「ケアと地域づくりとしてのヒューマンライブラリー～誰もがつながり合う一つの手がかり～」．一般社団法人コミュニティメンタルヘルスアウトリーチ協会，オンライン，2023.8.19.

2)　西内絵里沙：2023 年度アウトリーチネット研修委員会企画「若者世代のメンタルヘルスとアウトリーチ」．一般社団法人コミュニティメンタルヘルスアウトリーチ協会，オンライン，2023.10.8.

(2) 研修会講師

1)　藤井千代：精神障がい者の地域支援と措置入院制度．令和 5 年度措置入院制度の運用に係る合同研修会，岐阜県保健医療課，岐阜，2023.6.1.

2)　藤井千代：「精神科病院における虐待防止」．医療法人財団厚生協会大泉病院 院内研修会，東京，2023.8.7.

3)　藤井千代：「精神科における虐待予防」. 医療法人社団鶴永会鶴が丘ガーデンホスピタル研修会，東京，2023.11.28.

4)　藤井千代：精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に向けた地域課題の集約．精神保健に関する地域課題研修会，名古屋市役所健康福祉局健康部健康増進課，愛知，2023.11.29.

5)　藤井千代：病院と保健所の連携について（措置入院者の退院後支援を円滑に進めていくために）．令和 5 年度「東京都における措置入院者退院後支援ガイドライン」応用研修，一般社団法人日本精神科看護協会，東京，2024.1.10.

6)　山口創生：ストレングスモデル．所沢市保健センター，埼玉，2023.6.27.

7)　山口創生：リカバリーの再整理：前編．訪問看護ステーション PORT 勉強会，東京，2023.7.25.

8)　山口創生：リカバリーの再整理：後半．訪問看護ステーション PORT 勉強会，東京，2023.7.27.
9)　山口創生：共同意思決定（SDM）：精神科治療の文脈から．NCNP 身体リハビリテーション室勉強会，東京，2023.9.12.
10）山口創生：ストレングスモデル入門編．訪問看護ステーション PORT 勉強会，東京，2023.10.2.
11）山口創生：Individual placement and support 入門編．訪問看護ステーション PORT 勉強会，東京，2023.10.5.
12）山口創生：量的調査の組み立て方：「変化」の見える化に向けて．愛知県スクールーソーシャルワーク研修，愛知，2023.11.19.
13）小池純子：法務省保護局 第 2 回処遇指針開発研究会講師　2023.7.21　法務省
14）黒田直明：こころのサポータ養成事業 指導者養成研修会講師 2023.6.25. @ZOOM
15）黒田直明：こころのサポータ養成事業 自治体職員研修会講師 2023.8.7. @ZOOM
16）黒田直明：こころのサポータ養成事業 指導者交流会講師 2023.9.3. @ZOOM
17）黒田直明：こころのサポータ養成事業 指導者養成研修会講師 2023.10.2. @ZOOM
18）黒田直明：こころのサポータ養成事業 自治体職員研修会講師 2023.10.16. @ZOOM
19）黒田直明：第 1 回精神保健医療福祉データ行政活用研修会講師 2023.11.6.@ZOOM
20）黒田直明：公開データのレンズを通して精神保健福祉サービスを捉え直す―「にも包括」に向けた我が県の現在地．令和 5 年度「茨城県精神障害者地域移行支援」に係る研修会，茨城，2024.2.28.
21）西内絵里沙：2023 年度第 1 回メリデン版訪問家族支援基礎研修. 講師. オンライン，2023.9.24.

Ｆ．その他

11. ストレス・災害時こころの情報支援センター

Ⅰ. 研究部の概要

平成 23 年東日本大震災の被災者に対する継続的な対応，及び今後発生が予想されるその他の災害の発生に備えた体制づくりのための研究や調査を行うことを目的として，災害時こころの情報支援センターが平成 23 年 12 月に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に設置され，平成 30 年 4 月に「ストレス・災害時こころの情報支援センター」に改称された．災害及び事故・事件後の精神保健医療に係る助言・技術的支援，情報発信・連携に取り組んでいる．

令和 5 年度の当センターの構成は以下の通りである．センター長（併任）：金 吉晴，併任研究員：関口 敦，小川眞太朗，大沼麻実，成田 瑞，井野敬子，客員研究員：宮本有紀，種市康太郎，前田正治，高橋 晶，秋山 剛，富田博秋，本橋 豊，木津喜雅．

Ⅱ. 研究活動

1) WHO 版の心理的応急処置（PFA）の普及活動と e-learning 普及研究
2) 災害後の心理的リカバリースキルの研究
3) 「コロナ心の支援情報」の発信

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

1) 国立精神・神経医療研究センターHP上の「コロナ心の支援情報」に「コロナ心の支援情報 不安との付き合い方」の掲載を継続（https://www.ncnp.go.jp/nimh/behavior/anxiety/index.html）．感情調整，セルフケア，コミュニケーション，呼吸法スキルを掲示した．（金，大沼）
2) 下記(3)の研修会を通じて研究成果の社会還元を行った．

(2) 専門教育面における貢献

1) WHO 版 PFA を日本に導入し，WHO との契約の下で，一般研修および講演を継続し，1,440 名が参加した．
2) PFA 1日研修を実施できるファシリテーターを養成するための研修会を実施し，9 名のファシリテーターを育成した．また，PFA ファシリテーター有資格者のためのスーパーヴァイズ研修会を 2 回開催した．
3) PFA の e-learning を作成し，自治体保健師・IHEAT 要員向け 1,073 名，歯科医師・歯科衛生士向け 453 名，能登半島地震派遣者向けの動画配信は 2,771 名が視聴した．
4) 令和 5 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）
災害時に被災した患者等の受入れを行う災害拠点精神科病院及び災害拠点精神科連携病院が，発災直後から中長期までの患者等へのこころのケアを適切に行うことができるよう，必要な知識と技術を有する人材の養成を図ることを目的として，実施した（64 名受講）．2024.2.28, 3.6.
5) 各種学術団体で，心のマネジメントや災害時の精神的健康について講演を行った．
6) 専門家向けに PTSD や災害精神医療等についての講演を行った．
7) メディア取材を通じて専門知識の社会普及を行った．

(3) 精研の研修の主催と協力

1) 令和 5 年度精神保健に関する技術研修．第 11 回および第 12 回災害時 PFA と心理対応研修を開催した．2023.6.8,15（46 名受講）, 2023.11.22,12.7（54 名受講）.（金，大沼）

2)　令和5年度「こころの健康づくり対策事業」補助金によるPTSD対策専門研修事業
災害・事故・犯罪・児童虐待などのトラウマ的体験をされた方々に対して，基本的な精神保健医療対応（こころのケア）を提供する人材を確保するため，精神保健医療福祉業務従事者等に対し，下記3コースをオンラインで実施した．
・心理的トラウマに関する理解を深め，初期対応，PTSD等の治療の知識を得，基本的対応スキルを習得する通常コース（773名受講）
A.通常コース1　令和5年10月20日
A.通常コース2　令和5年11月16日
・認知行動療法（持続エクスポージャー療法）による実際の治療事例を呈示し，患者の回復の可能性と経路を学習し，高度な専門支援のあり方を学ぶ専門コース（461名受講）
B.専門コース1　令和5年12月20日～21日
B.専門コース2　令和6年1月17日～18日
・犯罪・性犯罪被害者への適切な対応を行うために必要な専門的知識と心理社会的支援・治療対応について習得する犯罪・性犯罪被害者コース（399名受講）
C.犯罪・性犯罪被害者コース　令和6年2月8日～9日

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

1)　公的委員会
・　ふくしま心のケアセンター　顧問（金）
・　みやぎ心のケアセンター　顧問（金）

2)　研究成果の行政貢献
・　「岳南広域消防本部に対する心のケア活動・検討会議」での今後のケア方針に関する助言．2023.6.13.（金）
・　JICAウクライナ保健省支援に関する助言．2024.3.21.（金）

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

1)　国際緊急援助隊(JDR)医療チーム登録者（井野）
2)　警察庁 令和5年度犯罪被害類型別等調査に係る企画分析会議 構成員（井野）
3)　全ゲノム解析等事業実施組織準備室 総務チームマネージャー（難病）（大沼）

Ⅳ．研究業績

A．刊行物

(1) 原著論文

(2) 総説

1)　大沼麻実：サイコロジカル・ファーストエイドについての一般の人々の理解を深めるための解説，こころの健康シリーズⅣ 現代の災害とメンタルヘルス No.8，日本精神衛生会，1-7，2024.3.15.

(3) 著書

(4) 研究報告書

(5) 翻訳

(6) その他

B．学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

(2) 一般演題

(3) 研究報告会

(4) その他

C．講演

1) 金 吉晴：地域における健康危機管理 ～災害時の心のケア～．令和 5 年度専門課程Ⅰ保健福祉行政管理分野分割前期・専門課程Ⅲ地域保健福祉専攻科，国立保健医療科学院，オンライン，2023.6.2.
2) 大沼麻実：災害時の心理的応急処置（Psychological First Aid: PFA）について．令和 4 年度専門課程Ⅰ保健福祉行政管理分野及び専門課程Ⅲ地域保健福祉専攻科，国立保健医療科学院，オンライン，2023.6.2.
3) 大沼麻実：「至誠と愛」の実践学修「Psychological First Aid(1), (2), (3)」．医学教養，東京女子医科大学，東京，2023.10.5.
4) 大沼麻実：災害時の心理的支援～サイコロジカル･ファーストエイドについて～．令和 5 年度災害･事故時のこころのケア対策事業関係職員研修)，北九州市保健福祉局精神保健福祉センター，福岡，2023.12.1.
5) 大沼麻実：「サイコロジカル・ファーストエイド」PFA 研修．富士市，静岡，2023.12.19.
6) 大沼麻実：災害時の心理社会的支援（PFA）と支援者支援．大分県こころとからだの相談支援センター，大分，オンライン，2023.12.22.
7) 大沼麻実：Psychological First Aid．合同会社メンタルヘルスケア・ネットワーク，埼玉，オンライン，2024.1.7.
8) 大沼麻実：災害時の被災者と支援者自身のこころのケア-サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）-．埼玉県歯科医師会，埼玉，2024.2.15.
9) 大沼麻実：大規模災害時の心理社会的支援（サイコロジカル・ファーストエイド）．長崎県歯科医師会，長崎，2024.2.24.

D．学会活動

(1) 学会主催

(2) 学会役員

1) Kim Y：WPA（世界精神医学会），災害時精神医療に対応に関する諮問委員会委員
2) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会，理事
3) 金 吉晴：自殺予防学会，理事
4) 関口 敦：日本心身医学会　幹事，代議員
5) 関口 敦：日本摂食障害学会　評議員，学術交流委員会，ガイドライン作成委員
6) 井野敬子：トラウマティック・ストレス学会，理事，広報委員長
7) 井野敬子：日本精神神経学会，災害対策委員

(3) 座長

(4) 学会誌編集委員等

1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
2) Narita Z: Asian Journal of Psychiatry, early career editorial board member

E．研修

(1) 研修企画

1) 金 吉晴，大沼麻実：2023 年度精神保健に関する技術研修．第 11 回災害時 PFA と心理対応研修．東京，2023.6.8，オンライン，2023.6.15.
2) 金 吉晴：令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　A.通常コース 1．オンライン，2023.10.20.
3) 金 吉晴：令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　A.通常コース 2．オンライン，2023.11.16.
4) 金 吉晴，大沼麻実：2023 年度精神保健に関する技術研修．第 12 回災害時 PFA と心理対応研修．オンライン，2023.11.22，東京，2023.12.7.
5) 金 吉晴：令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　B.専門コース 1．オンライン，2023.12.20-21.
6) 金 吉晴：令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　B.専門コース 2．オンライン，2024.1.17-18.
7) 金 吉晴：令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　C.犯罪・性犯罪被害者コース．オンライン，2024.2.8-9.
8) 金 吉晴，大沼麻実：東京都令和 5 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）．東京，2024.2.28，オンライン，2024.3.6.

(2) 研修会講師

1) 金 吉晴，大沼麻実，加藤郁子，伊東史ヱ，佐野弘枝，中村夕貴：サイコロジカル・ファーストエイド研修．2023 年度精神保健に関する技術研修　第 11 回災害時 PFA と心理対応研修，東京，2023.6.8.
2) 金 吉晴：災害時のこころのケアー総論．2023 年度精神保健に関する技術研修　第 11 回災害時 PFA と心理対応研修，オンライン，2023.6.15.
3) 金 吉晴：トラウマの基本対応．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　A. 通常コース 1，オンライン，2023.10.20.
4) 金 吉晴：PTSD の概念と診断．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　A. 通常コース 2，オンライン，2023.10.20.
5) 金 吉晴：PTSD の概念と診断．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　A. 通常コース 2，オンライン，2023.11.16.
6) 金 吉晴，井野敬子：PTSD 治療．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　A. 通常コース 2，オンライン，2023.11.16.
7) 金 吉晴：災害時のこころのケアー総論．2023 年度精神保健に関する技術研修　第 12 回災害時 PFA と心理対応研修，オンライン，2023.11.22.
8) 金 吉晴，大沼麻実，久保千晶，原島あゆみ，佐々木貴代，長下部穣：サイコロジカル・ファーストエイド研修．2023 年度精神保健に関する技術研修　第 12 回災害時 PFA と心理対応研修，東京，2023.12.7.
9) 金 吉晴：被災者の中長期的なメンタルヘルス支援について．「心のケア」三県連携事業新潟県広域避難者支援研修会及び　令和 5 年度ふくしま支援者サポート事業支援担当者連携会議，オンライン，2023.12.26.
10) 金 吉晴，大沼麻実，滝友秀，東海林渉，石川真紀，酒井裕美，松本謡子：災害時の PFA．東京都令和 5 年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修），東京，2024.2.28.
11) 金 吉晴：災害時のこころのケアー総論．東京都令和 5 年度災害時精神科医療体制整備事業（災

害時精神科医療研修)，東京，2024.3.6.

12) 丹羽まどか，金 吉晴：複雑性 PTSD．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2023.12.20-21.

13) 丹羽まどか，金 吉晴：複雑性 PTSD．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2，オンライン，2024.1.18-19.

14) 井野敬子：PTSD 治療．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1，オンライン，2023.10.20.

15) 井野敬子：PTSD の心理療法各論 2．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1，オンライン，2023.12.20-21.

16) 井野敬子：PTSD の心理療法各論 2．令和 5 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2，オンライン，2024.1.17-18.

17) 大沼麻実：WHO 版 PFA ファシリテーターブースター研修，宮城県精神保健福祉センター，宮城，2023.5.22.

18) 大沼麻実：サイコロジカル・ファーストエイド指導者育成研修．ワールド・ビジョン・ジャパン，協力：ストレス・災害時こころの情報支援センター，東京，2023.7.11-14.

19) 大沼麻実：WHO 版 PFA ファシリテーターブースター研修．沖縄県立総合精神保健福祉センター，沖縄，2023.10.27.

20) 大沼麻実，土屋左弥子：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修．外務省領事中堅研修，外務省，東京，2023.11.16.

21) 大沼麻実：リラクセーション演習．2023 年度精神保健に関する技術研修 第 12 回災害時 PFA と心理対応研修，東京，2023.12.7.

Ｆ．その他

1) 金 吉晴：被災者の心の健康 守るには．公明新聞，2023.4.10.

2) 金 吉晴，大沼麻実：支援の質とアカウンタビリティ向上ネットワーク(JQAN)ウェブサイト．協力：国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 ストレス・災害時こころの情報支援センター，国際協力 NGO センター(JANIC)，2023.6. https://jqan.info/hsp/

3) 金 吉晴，大沼麻実：宮城県 これから被災地支援に入る支援者に向けた事前研修動画(急性期)「おぼえておいてほしい災害時心のケア知識」．宮城県精神保健福祉センター，みやぎ心のケアセンター(講師:福地成)，協力：国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 ストレス・災害時こころの情報支援センター，2024.1.

4) 金 吉晴：子どもが“地震ごっこ”を始めたら どうすれば？．NHK NEWS WEB，N らじ，2024.1.5.

5) 金 吉晴：被災者の心の健康守るには．公明新聞，2024.1.18.

6) 金 吉晴：子供の感情受け止めて／災害時のストレスで不調／徐々に回復 医療機関に相談も．河北新報，2024.1.23.

7) 金 吉晴：被災した子の心に「安心感」を．日本経済新聞（夕刊），日経電子版，2024.2.13.

8) 金 吉晴，大沼麻実：能登半島地震への心理的・社会的支援「心理的応急処置と対策 PFA（サイコロジカル・ファースト・エイド)」，助言：国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 ストレス・災害時こころの情報支援センター，株式会社北國フィナンシャルホールディングス，2024.2.

9) 大沼麻実：e ラーニングコンテンツ「心理的応急処置 危機的出来事に見舞われた人々への支援と支援者自身のケア」．厚生労働省令和 5 年度健康危機緊急時対応体制整備事業「IHEAT 登録者向け教育」，日本公衆衛生協会，東京，2023.10.10.

10) 大沼麻実：文部科学省委託事業「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究（春山班)」における自然災害に係る e ラーニング教材への助言．一般社団法人日本看護大学系協議会，

2023.11.1-2024.3.31.

Ⅲ. 研 修 実 績

令和 5 年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は，国，地方公共団体精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師，保健師，看護師，作業療法士，臨床心理業務に従事する者，精神科ソーシャルワーカー等を対象に，精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである. 令和 5 年度は，発達障害者支援研修（4 回），医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修，強迫症対策医療研修（基本コース），災害時 PFA と心理対応研修（2 回），摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療（2 回），統合失調症の標準治療研修，うつ病の標準治療研修，PTSD 持続エクスポージャー療法研修，薬物依存臨床医師研修，薬物依存症臨看護等研修，摂食障害治療研修，精神保健医療福祉データ行政活用研修，認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修，精神科救急医療体制整備研修，PTSD 対策専門研修（5 回）の計 24 回の研修を合計 3,012 名に対して実施した.

《摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療》

令和5年4月20日から5月13日まで，第6回摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療を実施し，「摂食障害患者への初期対応、外来診療、医療連携」を主題に，病院，診療所，保健所，精神保健福祉センター等に勤務し，摂食障害診療・支援に従事する医療従事者（原則有資格者とする）等175名に対して研修を行った．4月20日（木）～5月12日（金）はオンデマンド配信，5月13日はライブ配信を実施した．

課程主任　　関口　敦

4月20日（木）～5月12日（金）

摂食障害の今	安藤　哲也
一般医でもできる初期治療修	髙倉　修
摂食障害の理解 患者，家族にどう伝えるか	佐藤　康弘
一般医で行うべき検査・身体管理・専門家との連携	吉内　一浩
摂食障害の専門的治療と紹介の方法	山内　常生
小児領域の摂食障害　小児の特徴と外来	作田　亮一
産婦人科領域における摂食障害への対応	小川　真里子

5月13日（土）

症例からみる摂食障害の治療の流れとコツ	田村 奈穂
質疑応答	（全講師）

講師名簿

関口　敦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
安藤　哲也	国際医療福祉大学成田病院心療内科教授
髙倉　修	九州大学病院心療内科講師
佐藤　康弘	東北大学病院心療内科講師
吉内　一浩	東京大学医学部附属病院心療内科准教授
山内　常生	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
作田　亮一	獨協医科大学埼玉医療センター子どものこころ診療センター長
小川　真里子	東京歯科大学市川総合病院産婦人科准教授
田村　奈穂	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科医師

《災害時 PFA と心理対応研修》

令和 5 年 6 月 8 日及び 6 月 15 日，第 11 回災害時 PFA と心理対応研修を実施し，「「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」に関する基本技能を習得する．またトラウマ，悲嘆，子どもの反応を含む，災害時の心理的反応を理解し，基本的な対応スキルを習得する．」を主題に，自然災害，甚大事故，犯罪，テロ等のトラウマ的出来事に際して，実際に被災者，被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある，精神保健医療福祉業務に従事する医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，臨床心理技術者，行政職員，教育関係者等 46 名に対して研修を行った．6 月 8 日は対面研修，6 月 15 日はオンライン研修に変更し開催した．

課程主任　　金　吉晴　　課程副主任　　大沼　麻実

6 月 8 日（木）

PFA の定義と枠組み	金　吉晴・大沼 麻実・加藤 郁子・
PFA の活動原則(1)	伊東 史ヱ・佐野 弘枝・中村 夕貴
PFA の活動原則(2)	
PFA ロールプレイ	
セルフケアとチームのケア	

6 月 15 日（木）

災害時のこころのケア-総論	金　吉晴
心理的リカバリーについて(1)	金　吉晴・福地 成
心理的リカバリーについて(2)	金　吉晴・福地 成・大滝　涼子
リラクゼーション実習	
災害時の子どものトラウマと反応	小平　雅基

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
大沼　麻実	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
大滝　涼子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部客員研究員
加藤　郁子	さいたま市子ども家庭総合センター参事
伊東　史ヱ	医療法人財団青溪会駒木野病院公認心理師
佐野　弘枝	特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパンサポートサービス部部長
中村　夕貴	特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン支援事業部 シリア・プログラム・コーディネーター
福地　成	東北医科薬科大学精神科学教室病院准教授
小平　雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長

《発達障害者支援研修》

令和 5 年 6 月 28 日から 6 月 29 日まで，第 4 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅠを実施し，「ライフステージごとの発達障害児・者の課題と支援の実際」を主題に，病院，保健所，発達障害支援センター等に勤務し，発達障害に関心を有する医師（特に指導につて責任的立場にある者），自治体（都道府県，政令指定都市）において，行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員 91 名に対して研修を行った．対面研修からオンライン研修に変更し開催した．

課程主任　　岡田　俊　　課程副主任　石井　礼花

6 月 28 日（水）

発達障害児・者に対する行政施策	西尾　大輔
発達障害のある子と養育者の支援	小平　雅基
発達障害のある子への療育	吉川　徹
成人期の日常生活、就労への支援	宇野　洋太

6 月 29 日（木）

特別支援教育の現状と課題	笹森　洋樹
ペアレント・トレーニング	石井　礼花
学童期・思春期の課題とその支援	小野　和哉
かかりつけ医研修の実際（演習）	岡田　俊

講師名簿

岡田　俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
石井　礼花	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
西尾　大輔	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活・発達障害者支援室 発達障害対策専門官
小平　雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長
吉川　徹	愛知県医療療育総合センター中央病院児童精神科部長
宇野　洋太	よこはま発達クリニック副院長
笹森　洋樹	常葉大学教育学部教授
小野　和哉	聖マリアンナ医科大学神経精神医学教室特任教授

《医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修》

令和5年7月4日，第2回医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修を実施し，「医療機関における注意欠如・多動症児の親へのペアレント・トレーニング実施のための養成研修である，ペアレント・トレーニングについての講義を受け，ワークやロールプレイを実際に体験する」を主題に，注意欠如・多動症と診断される児童の診療に関わる医療機関の専門家（医師・公認心理師等の臨床心理技術者・看護師・精神保健福祉士・作業療法士・言語聴覚士）29名に対してオンライン研修を行った．

課程主任　　岡田　俊　　課程副主任　石井　礼花

7月4日（火）

注意欠如・多動症（ADHD）とペアレント・トレーニング	岡田　俊・石井　礼花
導入／プログラムの進め方 行動を3種類に分ける してほしい行動に注目する／ほめることを習慣にする してほしくない行動への注目を取り去る	濱田　純子
指示の出し方・ほめほめ表・限界設定のルールを提示する・ 環境調整／学校との連携・まとめ	草間　千絵
ペアレント・トレーニングの実践に向けて／質疑応答	石井　礼花

講師名簿

岡田　俊　　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
石井　礼花　　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長

濱田　純子　　東京大学医学部附属病院こころの発達診療部学術専門職員
草間　千絵　　東京大学医学部附属病院こころの発達診療部学術専門職員

《摂食障害治療研修》

令和 5 年 7 月 12 日から 7 月 14 日まで，第 20 回摂食障害治療研修を実施し，「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に，病院，保健所，精神保健福祉センター等に勤務し，摂食障害に関心を有する医療従事者（精神科，心療内科，一般内科，小児科で臨床に従事している医師，臨床心理業務等に従事する者，看護師および保健師，作業療法士，精神保健福祉士，栄養士等）94 名に対してオンライン研修を行った．

課程主任　　関口　敦

7 月 12 日（水）

摂食障害の疫学・病態・治療概論	安藤　哲也
初期対応と外来診療	髙倉　修
入院治療	山内　常生
心理教育	小原　千郷

7 月 13 日（木）

身体合併症・身体的管理	鈴木　眞理
小児例の初期対応と診療	宇佐美　政英
精神障害・パーソナリティー障害を合併する摂食障害	西園　マーハ文
過食症に対するガイデッド・セルフヘルプ	中里　道子

7 月 14 日（金）

児童・思春期摂食障害患者さんとそのご家族への家族療法的アプローチ	森野 百合子
当事者の話を聞く	武田　綾
症例検討	佐藤　康弘
質疑応答	佐藤　康弘・関口　敦
	井野　敬子

講師名簿

関口　敦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
安藤　哲也	国際医療福祉大学成田病院心療内科教授
髙倉　修	九州大学病院心療内科講師
山内　常生	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
小原　千郷	文教大学人間科学部臨床心理学科特任専任講師
鈴木　眞理	跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科特任教授
宇佐美　政英	国立国際医療研究センター国府台病院子どものこころ総合診療センター長 児童精神科診療科長
西園　マーハ文	明治学院大学心理学部心理学科教授

中里　道子	国際医療福祉大学医学部精神医学教授
森野　百合子	医療法人社団翠会成増厚生病院成増子どもの心ケアセンターセンター長
武田　綾	NPO 法人のびの会心理療法士
佐藤　康弘	東北大学病院心療内科講師

《強迫症対策医療研修 基本コース》

令和5年7月26日，第2回強迫症対策医療研修 基本コースを実施し，「OCDの患者に対応できる人材を育てるため，精神医療従事者に対して，診断，評価，治療方針のために必要な知識を系統的に習得する.」を主題に，精神保健医療福祉業務に従事する医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，社会福祉士，作業療法士，公認心理師，臨床心理士の資格を有する方．または公的機関や教育機関に勤務し，精神保健医療福祉業務に従事する方147名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　金　吉晴

7月26日（水）

OCDの診断と評価	松永　寿人
OCDの標準治療Ⅰ	久我　弘典
OCDの標準治療Ⅱ	中尾　智博
事例検討	亀井　士郎・松尾　陽 中尾　智博・松永　寿人

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
久我　弘典	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センターセンター長
松永　寿人	兵庫医科大学精神科神経科学主任教授
中尾　智博	九州大学大学院医学研究院精神病態医学教授
亀井　士郎	京都大学精神医学教室客員研究員
松尾　陽	九州大学大学院医学研究院

《統合失調症の標準治療研修》

令和 5 年 8 月 27 日，第 2 回統合失調症の標準治療研修を実施し，「統合失調症の標準的治療の基本的な知識及び治療技術の習得」を主題に，病院，診療所，保健所，精神保健福祉センター等に勤務し，統合失調症に関心を有する医療従事者(医師，看護師，保健師，薬剤師，公認心理師，臨床心理士，作業療法士，精神保健福祉士などの，原則医療系の有資格者)など 39 名に対して研修を行った．対面研修からオンライン研修に変更し開催した．

課程主任　　橋本　亮太

8 月 27 日（日）

統合失調症の標準治療研修とは	橋本　亮太
治療計画の策定	稲田　健
急性期	柏木　宏子
安定・維持期	木本　啓太郎
薬剤性錐体外路系副作用	中村　敏範
その他の副作用	飯田　仁志
治療抵抗性統合失調症	橋本　亮太
その他の臨床的諸問題 1	稲田　健
その他の臨床的諸問題 2	安田　由華

症例①グループディスカッション

症例②グループディスカッション　　橋本　亮太，柏木　宏子，安田　由華，木本　啓太郎
中村　敏範，飯田　仁志，稲田 健，堀之内　徹
越山　太輔，川俣　安史

まとめ・質疑応答　　橋本　亮太

講師名簿

橋本　亮太	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部部長
柏木　宏子	国立精神・神経医療研究病院司法精神診療部第三司法精神科医長
稲田　健	北里大学医学部精神科学教授
木本　啓太郎	東海大学医学部付属病院総合診療学系精神科学講師
中村　敏範	信州大学医学部附属病院精神科助教
飯田　仁志	福岡大学医学部精神医学教室講師
安田　由華	医療法人フォスター理事長
堀之内　徹	北海道大学病院　精神科神経科助教
越山　太輔	東京大学医学部附属病院精神神経科助教
川俣　安史	獨協医科大学精神神経医学講座助教

《PTSD 持続エクスポージャー療法研修》

令和5年8月31日から9月1日，9月20日から9月22日まで，第4回PTSD持続エクスポージャー療法研修を実施し，「PTSD の持続エクスポージャー療法を実施できる人材を育てるため治療原理，手続，スキルを系統的に習得する.」を主題に，精神保健医療福祉業務に従事する医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，社会福祉士，作業療法士，公認心理師，臨床心理士の資格を有する方，または公的機関や教育機関に勤務し，精神保健医療福祉業務に従事する方 23 名に対して研修を行った．8月31日から9月1日はオンラインで，9月20日から9月22日は対面で開催した．

課程主任　　金　吉晴

8月31日（木）

PTSD の診断と評価	金　吉晴
PTSD の病理	金　吉晴
PE の治療研究	金　吉晴

9月1日（金）

PE の概観	金　吉晴
治療プログラムの説明，治療同盟	金　吉晴
治療プログラムの説明，治療同盟，ロールプレイ	金　吉晴
心理教育，呼吸法	成田　恵・井野　敬子
心理教育，呼吸法，ロールプレイ	成田　恵・井野　敬子

9月20日（水）

現実エクスポージャー	井野　敬子
現実エクスポージャー，ロールプレイ	井野　敬子

9月21日（木）

想像エクスポージャー	金　吉晴
ホットスポット，ロールプレイ	井野　敬子
回避の取扱い，最終セッション	金　吉晴・井野　敬子
PTSD 治療の維持	金　吉晴

9月22日（金）

症例検討1	大友　理恵子
技法の修正　アンダーエンゲージメント　ロールプレイ	金　吉晴
症例検討2	成田　恵
PE を円滑に遂行するために　質疑応答	金　吉晴・井野　敬子

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
成田　恵	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部 テクニカルフェロー
大友　理恵子	黒崎中央医院臨床心理部長

《薬物依存臨床医師研修》　《薬物依存臨床看護等研修》

令和 5 年 9 月 6 日から 9 月 8 日まで，第 36 回薬物依存臨床医師研修ならびに第 24 回薬物依存臨床看護等研修を実施し，「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に，精神科病院，精神保健福祉センター等に勤務する医師 9 名，看護師等 33 名に対してオンライン研修を行った．

課程主任　松本　俊彦　課程副主任　嶋根　卓也・富山　健一

9 月 6 日（水）

薬物依存症臨床総論	松本　俊彦
行動薬理学からみた薬物依存（精神依存，身体依存）	舩田　正彦
大麻成分の医療用途と海外の状況	富山　健一
ドパミンモデルで捉える薬物依存症：生物学的理解のために	沖田　恭治

9 月 7 日（木）

薬物乱用・依存の疫学：一般住民および青少年	嶋根　卓也
精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	藤城　聡
民間回復支援施設の活動と課題	嶋根　卓也・栗坪　千明
大麻によって発現する動物の異常行動	三島　健一

9 月 8 日（金）

薬物依存症女性の理解と支援	大嶋　栄子
薬物依存症者家族の支援について	吉田　精次
回復と自助活動（当事者による体験談）	当事者・家族
ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	稲田　健

講師名簿

松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
嶋根　卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
富山　健一	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
沖田　恭治	国立精神・神経医療研究センター病院精神診療部第一精神科医長
舩田　正彦	湘南医療大学薬学部教授
藤城　聡	愛知県精神保健福祉センター所長
栗坪　千明	栃木ダルク代表
三島　健一	福岡大学薬学部生体機能制御学研究室教授
大嶋　栄子	NPO 法人リカバリー理事長
吉田　精次	藍里病院副院長／あいざと依存症研究所所長
稲田　健	北里大学医学部精神科学教授

《うつ病の標準治療研修》

令和 5 年 9 月 10 日，第 2 回うつ病の標準治療研修を実施し，「うつ病の標準的治療の基本的な知識及び治療技術の習得」を主題に，病院，診療所，保健所，精神保健福祉センター等に勤務し，うつ病に関心を有する医療従事者(医師，看護師，保健師，薬剤師，公認心理師，臨床心理士，作業療法士，精神保健福祉士などの，原則医療系の有資格者)など 41 名に対して研修を行った．対面研修からオンライン研修に変更し開催した．

課程主任　　橋本　亮太

9 月 10 日（日）

うつ病の標準治療研修とは	橋本　亮太
治療計画の策定	渡邊　衡一郎
軽症	中川　敦夫
中等症・重症	中村　敏範
精神病性	村岡　寛之
児童思春期	橋本　亮太
睡眠障害とその対応	柏木　宏子
その他の臨床的諸問題	根本　清貴

症例①グループディスカッション

症例②グループディスカッション　　橋本　亮太，柏木　宏子，根本　清貴，渡邊　衡一郎
中川　敦夫，村岡　寛之，中村　敏範，堀之内　徹
川俣　安史

まとめ・質疑応答　　橋本　亮太

講師名簿

橋本　亮太　　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部部長
柏木　宏子　　国立精神・神経医療研究病院司法精神診療部第三司法精神科医長

渡邊　衡一郎　杏林大学医学部精神神経科学教室教授
中川　敦夫　　聖マリアンナ医科大学神経精神科学教室教授
中村　敏範　　信州大学医学部附属病院精神科助教
村岡　寛之　　北里大学医学部精神科学講師
根本　清貴　　筑波大学医学医療系精神医学准教授
堀之内　徹　　北海道大学病院精神科神経科助教
川俣　安史　　獨協医科大学精神神経医学講座助教

《発達障害者支援研修》

令和 5 年 9 月 27 日から 9 月 28 日まで，第 4 回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅡを実施し，「発達障害児・者の多様な支援ニードと支援の実際」を主題に，病院，保健所，発達障害支援センター等に勤務し，発達障害に関心を有する医師（特に指導につて責任的立場にある者），自治体（都道府県，政令指定都市）において，行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員 98 名に対して研修を行った．オンライン研修に変更し開催した．

課程主任　　岡田　俊　　課程副主任　石井　礼花

9 月 27 日（水）

高齢期の発達障害	日詰　正文
発達障害とジェンダー	館農　勝
発達障害と司法的問題	熊上　崇
強度行動障害	會田　千重

9 月 28 日（木）

発達障害と精神疾患の併存	辻井　農亜
女性の発達障害	砂川　芽吹
発達障害と権利擁護	安保　千秋
発達障害と当事者活動	田中　尚樹

講師名簿

岡田　俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
石井　礼花	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
日詰　正文	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園総務企画局研究部部長
館農　勝	さっぽろ悠心の郷ときわ病院理事長
熊上　崇	和光大学現代人間学部教授
會田　千重	国立病院機構肥前精神医療センター統括診療部長
辻井　農亜	富山大学附属病院こどものこころと発達診療学講座客員教授
砂川　芽吹	お茶の水女子大学生活科学部心理学科助教
安保　千秋	都大路法律事務所弁護士
田中　尚樹	青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科講師

《令和 5 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 5 年 10 月 20 日，令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　A.通常コース 1 を実施し，「災害被災者，犯罪・事故被害者，災害遺族，被虐待児童等，トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため，精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得する．受講者名簿を自治体に送付し，今後の災害，犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する.」を主題に，精神保健医療福祉業務に従事する医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，社会福祉士，作業療法士，公認心理師，臨床心理士の資格を有する方，または公的機関や教育機関に勤務し，精神保健医療福祉業務に従事する方 322 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　金　吉晴

10 月 20 日（火）

トラウマの基本対応	金　吉晴
PTSD の概念と診断	金　吉晴
PTSD 治療	井野　敬子
子どものトラウマ	小平　かやの

講師名簿

金　吉晴　　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長

井野　敬子　　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長

小平　かやの　東京都児童相談センター治療指導課課長

《精神保健医療福祉データ行政活用研修》

令和 5 年 11 月 6 日，第 1 回精神保健医療福祉データ活用研修を実施し，「医療計画（精神疾患）や障害福祉計画等の現状と課題について理解したうえで，精神保健医療福祉関係の公的データ（患者調査，NDB データ，630 調査）の見方，またそのマップデータベースである地域精神保健医療福祉資源分析データベース（ReMHRAD）の見方と使い方等を学び，各自治体の実態把握とモニタリングをするためのスキルを習得する」を主題に，各都道府県，政令指定都市，市区町村の精神保健福祉主管課担当者、医療政策主管課担当者 37 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　西　大輔　　課程副主任　臼田　謙太郎

11 月 6 日（月）

医療計画，障害福祉計画の概要	厚生労働省
各計画のモニタリングとロジックモデルの活用	黒田 直明
NDB データとその活用	奥村 泰之
630 調査とその活用，NDB 以外のデータソース	立森 久照・臼田 謙太郎
ReMHRAD とその活用	吉田 光爾

講師名簿

西　大輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部部長
臼田　謙太郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部室長
黒田　直明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域精神保健・法制度研究部室長
立森　久照	国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第七部特任研究室長
奥村　泰之	一般社団法人臨床疫学研究推進機構代表理事
吉田　光爾	東洋大学福祉社会デザイン学部教授

《認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修》

令和 5 年 11 月 6 日から 11 月 8 日まで，第 15 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修を実施し，「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し，直面化を避けた動機づけ面接の重要性を理解し，薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶとともに，家族支援への理解を深める」を主題に，医療機関，行政機関，司法機関，民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者 79 名に対して研修を行った．

課程主任　　松本　俊彦　　課程副主任　今村　扶美

11 月 6 日（月）

薬物依存症患者への対応の基本	成瀬　暢也
SMARPP の理念と意義	松本　俊彦
SMARPP の実際	松本　俊彦
SMARPP ビデオ学習	松本　俊彦
グループワーク（1）	今村　扶美
薬物依存症臨床における司法的問題への対応	松本　俊彦

11 月 7 日（火）

薬物乱用・依存の疫学	嶋根　卓也
社会資源（1）～精神保健福祉センターにおける支援～	山田　俊隆
社会資源（2）～民間リハビリ施設と自助グループ～	加藤　隆
入院病棟における薬物依存症治療	沖田　恭司
デモセッション	今村　扶美
グループワーク（2）	今村　扶美
まとめとディスカッション	松本　俊彦

11 月 8 日（水）

動機づけ面接の基礎	澤山　透
ハームリダクションの理念に基づく個別支援	高野　歩
インドネシアにおけるオンライン SMARPP の実践	山田　千佳
ディスカッション	松本　俊彦

講師名簿

松本　俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
嶋根　卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
高野　歩	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
今村　扶美	国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理部臨床心理室室長
沖田　恭司	国立精神・神経医療研究センター病院精神診療部医長

成瀬　暢也　　埼玉県立精神医療センター副病院長
山田　俊隆　　東京都立多摩総合精神保健福祉センター統括課長代理
加藤　隆　　NPO 法人八王子ダルク代表理事
澤山　透　　相模ヶ丘病院院長
山田　千佳　　京都大学東南アジア地域研究研究所助教

《摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療》

令和 5 年 11 月 10 日から 12 月 3 日まで，第 7 回摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療を実施し，「摂食障害患者への初期対応、外来診療、医療連携」を主題に，病院，診療所，保健所，精神保健福祉センター等に勤務し，摂食障害診療・支援に従事する医療従事者（原則有資格者とする）等 211 名に対して研修を行った．11 月 10 日（金）～12 月 2 日（土）はオンデマンド配信，12 月 3 日（日）はライブ配信を実施した．

課程主任　　関口　敦

11 月 10 日（金）~12 月 2 日（土）

摂食障害の今	安藤　哲也
一般医でもできる初期治療	髙倉　修
摂食障害の理解 患者，家族にどう伝えるか	佐藤　康弘
一般医で行うべき検査・身体管理・専門家との連携	吉内　一浩
摂食障害の専門的治療と紹介の方法	山内　常生
小児領域の摂食障害　小児の特徴と外来	作田　亮一
産婦人科領域における摂食障害への対応	小川　真里子

12 月 3 日（日）

症例からみる摂食障害の治療の流れとコツ	田村　奈穂
質疑応答	（全講師）

講師名簿

関口　敦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
安藤　哲也	国際医療福祉大学成田病院心療内科教授
髙倉　修	九州大学病院心療内科講師
佐藤　康弘	東北大学病院心療内科講師
吉内　一浩	東京大学医学部附属病院心療内科准教授
山内　常生	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
作田　亮一	獨協医科大学埼玉医療センター子どものこころ診療センター長
小川　真里子	東京歯科大学市川総合病院産婦人科准教授
田村　奈穂	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科医師

《発達障害者支援研修》

令和5年11月15日から11月16日まで，第4回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅢを実施し，「発達障害児・者の支援に求められる基本的姿勢とかかりつけ医研修」を主題に，病院，保健所，発達障害支援センター等に勤務し，発達障害に関心を有する医師（特に指導について責任的立場にある者），自治体（都道府県，政令指定都市）において，行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員87名に対して研修を行った．オンライン研修に変更し開催した．

課程主任　　岡田　俊　　課程副主任　　石井　礼花

11月15日（水）

発達障害と被虐待	山下　浩
発達障害のある子どもの育ちと医療の役割	岡田　俊
発達障害にかかわる支援情報	山脇　かおり
外国にルーツを持つ子どもの支援	小川　しおり

11月16日（木）

発達障害支援における地域連携	堀内　史枝
発達障害と摂食障害	中土井　芳弘
発達障害とゲームやインターネットの世界	関　正樹
小児科医からみた移行期の課題と対応	岡田　あゆみ

講師名簿

岡田　俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
石井　礼花	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
山下　浩	医療法人慶仁会天神病院児童精神科
山脇　かおり	国立障害者リハビリテーションセンター病院第三診療部小児科医長 企画・情報部発達障害情報・支援センター長
小川　しおり	日本福祉大学教育・心理学部心理学科准教授
堀内　史枝	愛媛大学大学院医学系研究科児童精神医学講座教授
中土井　芳弘	国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター成育こころの診療部長
関　正樹	大湫病院児童精神科
岡田　あゆみ	岡山大学学術研究院医歯薬学域 岡山大学病院小児医療センター小児心身医療科准教授

《令和 5 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 5 年 11 月 16 日，令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　A.通常コース 2 を実施し，「災害被災者，犯罪・事故被害者，災害遺族，被虐待児童等，トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため，精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得する．受講者名簿を自治体に送付し，今後の災害，犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する.」を主題に，精神保健医療福祉業務に従事する医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，社会福祉士，作業療法士，公認心理師，臨床心理士の資格を有する方，または公的機関や教育機関に勤務し，精神保健医療福祉業務に従事する方 451 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　金　吉晴

11 月 16 日（木）

トラウマの基本対応	西　大輔
PTSD の概念と診断	金　吉晴
PTSD 治療	金　吉晴・井野　敬子
子どものトラウマ	福地　成

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
西　大輔	東京大学大学院医学系研究科教授
福地　成	東北医科薬科大学医学部精神科学教室病院准教授

《災害時 PFA と心理対応研修》

令和 5 年 11 月 22 日及び 12 月 7 日，第 12 回災害時 PFA と心理対応研修を実施し，「「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA)」に関する基本技能を習得する．またトラウマ，悲嘆，子どもの反応を含む，災害時の心理的反応を理解し，基本的な対応スキルを習得する.」を主題に，自然災害，甚大事故，犯罪，テロ等のトラウマ的出来事に際して，実際に被災者，被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある，精神保健医療福祉業務に従事する医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，臨床心理技術者，行政職員，教育関係者等 54 名に対して研修を行った．11 月 22 日はオンライン研修，12 月 7 日は対面研修に変更し開催した．

課程主任　　金　吉晴　　課程副主任　　大沼　麻実

<u>11 月 22 日（水）</u>

災害時のこころのケア-総論	金　吉晴
災害時の子どものトラウマと反応	小平　雅基
心理的リカバリーについて（1）	金　吉晴・福地　成
心理的リカバリーについて（2）	金　吉晴・福地　成・大沼　麻実
リラクゼーション実習	

<u>12 月 7 日（木）</u>

PFA の定義と枠組み	金　吉晴・大沼　麻実・久保千晶
PFA の活動原則（1）	原島あゆみ・佐々木貴代・長下部穣
PFA の活動原則（2）	
PFA ロールプレイ	
セルフケアとチームのケア	

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
大沼　麻実	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
小平　雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長
福地　成	東北医科薬科大学精神科学教室病院准教授
久保 千晶	聖マリアンナ会東横惠愛病院
原島あゆみ	千葉県精神保健福祉センター
佐々木貴代	特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン支援事業第 2 部部長
長下部　穣	特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン

《令和 5 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 5 年 12 月 20 日から 12 月 21 日，令和 5 年度 PTSD 対策専門研修　B.専門コース 1 を実施し，「精神保健福祉センター，病院，保健所等において，PTSD に関する専門家が必要とされていることを踏まえ，精神保健医療従事者等に対し，最先端の専門的知識あるいは技術の習得をさせ，有効かつ安全に治療を行うことができる人材を養成する．受講者名簿を自治体に送付し，今後の災害，犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する．」を主題に，症例呈示のため，職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，社会福祉士，作業療法士，公認心理師，臨床心理士），過去に PTSD 研修 A.通常コースまたはその治療法に関する何らかの研修を受講している，あるいは専門的な教育，研修を受けている方 269 名に対してオンライン研修を行った．

課程主任　　金　吉晴

12 月 20 日（水）

PTSD の診断と評価	大江　美佐里
PTSD のソーシャルワーク	大岡　由佳
PTSD の心理療法各論 1	伊藤　正哉
PTSD の心理療法各論 2	井野　敬子

12 月 21 日（木）

トラウマ後の急性期対応と長期対応～新潟県中越地震と東日本大震災のこころのケア活動の経験から～	塩入　俊樹
遷延性悲嘆症の心理療法	中島　聡美
複雑性 PTSD	丹羽　まどか・金　吉晴
PTSD の神経科学と薬物療法	堀　弘明

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
堀　弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
丹羽　まどか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部 リサーチフェロー
伊藤　正哉	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部部長
大江　美佐里	久留米大学医学部神経精神医学講座准教授
大岡　由佳	武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科准教授
塩入　俊樹	岐阜大学大学院医学系研究科教授
中島　聡美	武蔵野大学人間科学部教授

《発達障害者支援研修》

令和6年1月17日から1月18日まで，第4回発達障害者支援研修：行政実務研修を実施し，「地域における発達障害児・者の支援ニードと機関連携」を主題に，行政的な立場で各自治体の「かかりつけ医等発達障害対応力向上研修」の企画・実施に携わる者，もしくは発達障害者支援センター職員，かかりつけ医研修にかかわることが期待される医師 50 名に対して研修を行った．対面研修からオンライン研修に変更し開催した．

課程主任　　岡田　俊　　課程副主任　　石井　礼花

1月17日（水）

発達障害者支援の施策について	西尾　大輔
発達障害と児童福祉	上野　千穂
発達障害に関する支援情報の活用	与那城　郁子
発達障害と就労支援の実際	西村　浩二

1月18日（木）

自治体における発達障害児者とその家族への支援体制整備	今出　大輔
強度行動障害を有する者への支援施策	山根　和史
医療における課題－初診待機解消，初期診療医の育成，医療連携	本田　秀夫
発達障害支援における家庭・教育・福祉の連携	笹森　洋樹

講師名簿

岡田　俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
石井　礼花	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
西尾　大輔	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活・発達障害者支援室 発達障害対策専門官
上野　千穂	京都市第二児童福祉センター診療所診療課長
与那城　郁子	国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センター 発達障害情報分析専門官
西村　浩二	静岡県東部発達障害者支援センターアスタ発達障害者支援コーディネーター
今出　大輔	こども家庭庁支援局障害児支援課発達障害児支援専門官
山根　和史	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域生活・発達障害者支援室 発達障害施策調整官
本田　秀夫	信州大学医学部子どものこころの発達医学教室教授
笹森　洋樹	常葉大学教育学部教授

《令和 5 年度 PTSD 対策専門研修》

令和 6 年 1 月 17 日から 1 月 18 日，令和 5 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2 を実施し，「精神保健福祉センター，病院，保健所等において，PTSD に関する専門家が必要とされていることを踏まえ，精神保健医療従事者等に対し，最先端の専門的知識あるいは技術の習得をさせ，有効かつ安全に治療を行うことができる人材を養成する．受講者名簿を自治体に送付し，今後の災害，犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する.」を主題に，症例呈示のため，職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，社会福祉士，作業療法士，公認心理師，臨床心理士）．過去に PTSD 研修 A.通常コースまたはその治療法に関する何らかの研修を受講していること，あるいは専門的な教育，研修を受けている方 192 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　金　吉晴

1 月 17 日（水）

PTSD の診断と評価	大江　美佐里
PTSD のソーシャルワーク	大岡　由佳
PTSD の心理療法各論 1	伊藤　正哉
PTSD の心理療法各論 2	井野　敬子

1 月 18 日（木）

トラウマ後の急性期対応と長期対応～新潟県中越地震と東日本大震災のこころのケア活動の経験から～	塩入　俊樹
遷延性悲嘆症の心理療法	中島　聡美
複雑性 PTSD	丹羽　まどか・金　吉晴
PTSD の神経科学と薬物療法	堀　弘明

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
堀　弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
井野　敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
丹羽　まどか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部 リサーチフェロー
伊藤　正哉	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部部長
大江　美佐里	久留米大学医学部神経精神医学講座准教授
大岡　由佳	武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科准教授
塩入　俊樹	岐阜大学大学院医学系研究科教授
中島　聡美	武蔵野大学人間科学部教授

《令和５年度 PTSD 対策専門研修》

令和６年２月８日から２月９日まで，令和５年度 PTSD 対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コースを実施し，「犯罪・性犯罪被害者への適切な対応を行うために必要な専門的知識と心理社会的支援・治療対応について習得する.」を主題に，精神保健医療福祉業務に従事する医師，看護師，保健師，精神保健福祉士，社会福祉士，作業療法士，公認心理師，臨床心理士の資格を有する方，または公的機関や教育機関に勤務し，精神保健医療福祉業務に従事する方 399 名に対してオンライン研修を行った.

課程主任　　金　吉晴

2月８日（木）

犯罪被害者のメンタルヘルスと治療・対応	中島　聡美
子どもの性暴力被害者のメンタルヘルス・治療・対応	野坂　祐子
犯罪被害者遺族の心理・ケア・治療	白井　明美
犯罪被害者に係る司法制度	柑本　美和

2月９日（金）

性暴力被害者への治療	齋藤　梓
虐待を受けた子どもの治療	小平　雅基
犯罪被害者支援	大岡　由佳
犯罪被害者の PTSD と治療	小西　聖子

講師名簿

金　吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
中島　聡美	武蔵野大学人間科学部教授
野坂　祐子	大阪大学大学院人間科学研究科教授
白井　明美	国際医療福祉大学赤坂心理･医療福祉マネジメント学部心理学科教授
柑本　美和	東海大学法学部法律学科教授
齋藤　梓	上智大学総合人間科学部心理学科准教授
小平　雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長
大岡　由佳	武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科准教授
小西　聖子	武蔵野大学人間科学部教授

《精神科救急医療体制整備研修》

令和 6 年 2 月 10 日，第 3 回精神科救急医療体制整備研修を実施し，「精神科救急医療体制整備事業の現状と課題について理解したうえで，精神科救急医療体制整備に関連する課題やデータの見方，ReMHRAD の見方と使い方等を学び，各自治体の精神科救急体制整備に係る施策の立案やモニタリングのためのスキルを習得する」を主題に，都道府県精神科救急医療体制整備事業担当者および精神医療相談窓口相談担当者 36 名に対してオンライン研修を行った．

課程主任　　藤井　千代

2 月 10 日（土）

精神科救急医療体制整備事業について	土屋　達郎
精神科救急医療の現状と課題	杉山　直也
精神科救急医療体制の現状と課題	平田　豊明
2022 年度自治体アンケート調査の速報	花岡　晋平
各自治体の精神科救急医療体制整備事業の現状と課題等に関する グループワーク	塚本　哲司

講師名簿

藤井　千代	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域精神保健・法制度研究部部長
土屋　達郎	厚生労働省社会援護局障害保健福祉部精神・障害保健課課長補佐
杉山　直也	公益財団法人復康会沼津中央病院院長
平田　豊明	千葉県総合救急災害医療センター名誉病院長
花岡　晋平	千葉県総合救急災害医療センター医長
塚本　哲司	埼玉県立医療センター療養援助部部長

研修の推移

	国立精神衛生研究所			
	36年6月～		54年度～	61年度
研修課程	・医学科研修 ・心理学科研修 ・社会福祉学科研修 ・精神衛生指導科研修	→	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修

	国立精神・神経センター精神保健研究所					
研	61年度		62年度～	18年度～	20年度	21年度
修課程	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修	→ →	・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神保健指導過程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修	・精神保健指導過程研修 ・精神科ﾃﾞｲ・ｹｱ課程研修 ・発達障害支援課程研修 ・摂食障害治療課程研修 ・社会復帰ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ研修 ・ACT研修 ・薬物依存臨床課程研修 ・児童思春期精神医学研修 ・司法精神医学課程研修 ・犯罪被害者ﾒﾝﾀﾙｹｱ研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者ﾒﾝﾀﾙｹｱ研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修	・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者ﾒﾝﾀﾙｹｱ研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修

	独立行政法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所		
研	22年度	23年度	24年度
修課程	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・司法精神医学研修 ・PTSD医療研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・発達障害精神医療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・ACT研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・不眠症の認知行動療法研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・PTSD認知行動療法基本研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
研修課程	25年度	26年度	27年度
	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ並びに訪問による生活訓練研修 ・ACT研修 ・自殺予防のための自傷行為とﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修	・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・精神保健指導課程研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・司法精神医学研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ（福祉型）研修 ・ACT・多職種アウトリーチ研修 ・自殺予防のための自傷行為とﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー	・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・ｱｳﾄﾘｰﾁによる地域ｹｱﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ（福祉型）研修 ・医療における包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・司法精神医学ワンデイセミナー ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・心理職自殺予防研修 ・メンタルヘルス問題への初期対応指導者研修 ・司法精神医学研修 ・摂食障害看護研修 ・薬物依存症に対する認知行動療法研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・精神科急性期医療の質を考える研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修

	国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所		
研修課程	28年度	29年度	30年度
	・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・地域自殺対策推進企画研修 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害精神医療研修 ・自殺対策・相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・司法精神医学研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・摂食障害看護研修	・発達障害地域包括支援研修：早期支援 ・発達障害支援医学研修 ・摂食障害治療研修 ・地域精神科モデル医療研修プレセミナー ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・自殺対策・相談支援研修 ・発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療 ・精神保健指導課程研修 ・司法精神医学研修 ・摂食障害看護研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修：早期支援 ・摂食障害治療研修 ・精神障害者地域包括支援研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療 ・摂食障害看護研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修
	31・令和1年度	令和2年度	令和3年度
	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修：早期支援 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修：精神保健・精神医療 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・発達障害者支援研修：行政実務研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修	・摂食障害治療研修 ・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・発達障害者支援研修：行政実務研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和3年度PTSD対策専門研修

	国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所		
研	31・令和1年度	令和2年度	令和3年度
修	・災害時PFAと心理対応研修 ・精神保健指導課程研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害地域包括支援研修：早期支援 ・摂食障害治療研修 ・多職種による包括型アウトリーチ研修 ・医療における個別就労支援研修 ・地域におけるリスクアセスメント研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・発達障害地域包括支援研修： 精神保健・精神医療 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修	・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・発達障害者支援研修：行政実務研修 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修	・摂食障害治療研修 ・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・発達障害者支援研修：行政実務研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和3年度PTSD対策専門研修
課			
程			

	国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所		
研	令和4年度	令和5年度	
修	・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・医療機関における注意欠如・多動症 (ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング 実施者養成研修 ・強迫症対策医療研修基本コース ・災害時PFAと心理対応研修 ・摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～ ・統合失調症の標準治療研修 ・PTSD持続エクスポージャー療法研修 ・うつ病の標準治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・摂食障害治療研修 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修 ・発達障害者支援研修：行政実務研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和4年度PTSD対策専門研修 ・STAIR Narrative Therapyワークショップ ・強迫症対策医療研修認知行動療法コース	・摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～ ・災害時PFAと心理対応研修 ・発達障害者支援研修：指導者養成研修 ・医療機関における注意欠如・多動症 (ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング 実施者養成研修 ・摂食障害治療研修 ・強迫症対策医療研修基本コース ・統合失調症の標準治療研修 ・PTSD持続エクスポージャー療法研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・うつ病の標準治療研修 ・精神保健医療福祉データ行政活用研修 ・認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修 ・精神科救急医療体制整備研修 ・令和5年度PTSD対策専門研修	
課			
程			

令和5年度精神保健に関する技術研修課程 実施計画表

研 修 日 程	課 程 名	申込み方法 WEB	申込み方法 自治体推薦	申込み期間（センター書類必着日）	受講料	定員	主任 / 副主任
令和5年 オンデマンド配信 4/20（木）～5/12（金） ライブ配信：5/13（土）	【オンライン開催】 （第6回）摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～	○		2月16日（木）～3月9日（木）	¥3,000	300	関口 敦
対面：6月8日（木） オンライン：6月15日（木）	【対面開催／オンライン開催】 （第11回）災害時PFAと心理対応研修	○※		3月27日（月）～4月17日（月）	¥12,000	50	金 吉晴 大沼 麻実
6月28日（水）～6月29日（木）	【オンライン開催】 （第4回）発達障害者支援研修： 指導者養成研修パートⅠ		○	4月7日（金）～4月27日（木） （5月12日（金））	無料	50	岡田 俊 石井 礼花
7月4日（火）	【オンライン開催】 （第2回）医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修	○※		4月14日（金）～5月11日（木）	¥10,000	30	岡田 俊 石井 礼花
7月12日（水）～7月14日(金)	【オンライン開催】 （第20回）摂食障害治療研修 （後援：日本摂食障害学会）	○※		5月1日（月）～5月22日（月）	¥15,000	100	関口 敦
7月26日（水）	【オンライン開催】 （第2回）強迫症対策医療研修 基本コース	○		5月15日（月）～6月5日（月）	¥6,000	100	金 吉晴
8月27日（日）	【オンライン開催】 （第2回）統合失調症の標準治療研修	○		6月16日（金）～7月6日（木）	¥7,000	36	橋本 亮太
オンライン： 8月31日（木）～9月1日（金） 対面： 9月20日（水）～9月22日（金）	【オンライン開催／対面開催】 （第4回）PTSD持続エクスポージャー療法研修	○		6月19日（月）～7月10日（月）	¥60,000	20	金 吉晴 井野 敬子
9月6日（水）～9月8日(金)	【オンライン開催】 （第36回）薬物依存臨床医師研修	○		6月16日（金）～7月6日（木）	¥24,000	50	松本 俊彦 嶋根 卓也
	（第24回）薬物依存臨床看護等研修					50	
9月10日（日）	【オンライン開催】 （第2回）うつ病の標準治療研修	○		6月23日（金）～7月13日（木）	¥7,000	36	橋本 亮太
9月27日（水）～9月28日（木）	【オンライン開催】 （第4回）発達障害者支援研修： 指導者養成研修パートⅡ		○	7月4日（火）～7月24日（月） （8月7日（月））	無料	50	岡田 俊 石井 礼花
10月20日(金)	【オンライン開催】 令和5年度PTSD対策専門研修 A.通常コース1	○※		9月4日（月）～9月25日（月）	無料	200	金 吉晴
11月6日（月）	【オンライン開催】 （第1回）精神保健医療福祉データ 行政活用研修	○		8月25日（金）～9月15日（金）	¥4,000	100	西 大輔 臼田 謙太郎
11月6日（月）～11月8日（水）	【対面開催】 （第15回）認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修	○		8月25日（金）～9月15日（金）	¥24,000	60	松本 俊彦 今村 扶美
オンデマンド配信 11/10（金）～12/2（土） ライブ配信：12/3（日）	【オンライン開催】 （第7回）摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～	○		9月5日（火）～9月26日（火）	¥3,000	300	関口 敦

研修日程	課程名	申込み方法		申込み期間 （センター書類必着日）	受講料	定員	主任 副主任
		WEB	自治体推薦				
令和5年 11月15日（水）～11月16日（木）	【オンライン開催】 （第4回）発達障害者支援研修： 指導者養成研修パートⅢ		○	8月22日(火)～9月11日（月） （9月25日（月））	無料	50	岡田　俊 石井　礼花
11月16日（木）	【オンライン開催】 令和5年度PTSD対策専門研修 A.通常コース2	○※		9月4日（月）～10月17日（火）	無料	200	金　吉晴
オンライン：11月22日（水） 対面：12月7日（木）	【オンライン開催／対面開催】 （第12回）災害時PFAと心理対応研修	○※		9月26日（火）～10月17日（火）	¥12,000	50	金　吉晴 大沼　麻実
12月20日（水）～12月21日（木）	【オンライン開催】 令和5年度PTSD対策専門研修 B.専門コース1	○※		9月4日（月）～11月20日（月）	無料	150	金　吉晴
令和6年 1月17日（水）～1月18日（木）	【オンライン開催】 （第4回）発達障害者支援研修： 行政実務研修		○	10月24日（火）～11月13日（月） （11月27日（月））	無料	50	岡田　俊 石井　礼花
1月17日（水）～1月18日（木）	【オンライン開催】 令和5年度PTSD対策専門研修 B.専門コース2	○※		9月4日（月）～12月14日（木）	無料	150	金　吉晴
2月8日（木）～2月9日（金）	【オンライン開催】 令和5年度PTSD策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース	○※		9月4日（月）～1月5日（金）	無料	300	金　吉晴
2月10日（土）	【オンライン開催】 （第3回）精神科救急医療体制整備研修	○		11月24日（金）～12月14日（木）	無料	60	藤井　千代

※
推薦状
が必要
な研修

Ⅳ．ランチョンセミナー開催実績および研究報告会プログラム・抄録集

1．令和5年度 精神保健研究所 ランチョンセミナー開催実績

日付	回次	演　題	発表研究部	演　者	参加人数
2023年5月22日	第58回	精神科医療の世界を変えるための研究を展望する ～病態研究から社会実装研究まで～	精神疾病病態研究部	部長　橋本 亮太	62名
2023年6月26日	第59回	PTSDの病態理解と新規治療法開発を目指した研究	行動医学研究部	室長　堀 弘明	44名
2023年7月24日	第60回	精神疾患のトランスレーショナルリサーチ -生理学的指標によるバイオマーカー探索-	精神薬理研究部	室長　三輪 秀樹	30名
2023年9月25日	第61回	インクルーシブな子育て支援	公共精神健康医療研究部	室長　堀口 寿広	42名
2023年10月23日	第62回	自閉症的特性とは何か：一般人口における精神疾患	児童・予防精神医学研究部	室長　白間 綾	42名
2023年11月27日	第63回	睡眠・生体リズムに対する光の非視覚作用	睡眠・覚醒障害研究部	室長　北村 真吾	43名
2023年12月18日	第64回	医療観察法対象者の特性と支援体制の現況および課題	地域精神保健・法制度研究部	室長　小池 純子	41名
2024年1月22日	第65回	「助けて」が言えない子どもたち ―市販薬の乱用・依存を例として―	薬物依存研究部	室長　嶋根 卓也	71名
2024年2月26日	第66回	ADHDの神経基盤に成育環境が与える影響	知的・発達障害研究部	室長　石井 礼花	49名

（毎月第4月曜日　12:00~13:00　オンライン開催）

令和5年度　精神保健研究所リサーチ委員会
岡田 俊　三浦健一郎　小池純子　白間 綾　小塩靖崇

２．令和5年度 精神保健研究所 研究報告会 プログラム・抄録集

令和５年度 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所　研究報告会

会　期：令和 6 年 3 月 18 日 （月）
会　場：教育研修棟　ユニバーサルホール

9:15	開場
9:30	開会の辞（理事長　中込和幸）　ご挨拶（所長　金　吉晴）
9:40	行動医学研究部（座長　金　吉晴） 演者　井野敬子 演者　堀　弘明
10:10	地域精神保健・法制度研究部（座長　藤井千代） 演者　黒田直明 演者　臼井　香
10:40	休憩
10:50	知的・発達障害研究部（座長　岡田　俊） 演者　請園正敏 演者　江頭優佳
11:20	薬物依存研究部（座長　松本俊彦） 演者　高野　歩 演者　水野聡美
11:50	昼食
12:50	公共精神健康医療研究部（座長　西　大輔） 演者　片岡真由美 演者　羽澄　恵
13:20	精神疾患病態研究部（座長　橋本亮太） 演者　橋本亮太 演者　三浦健一郎
13:50	休憩
14:00	精神薬理研究部（座長　金　吉晴） 演者　中武優子 演者　古家宏樹
14:30	児童・予防精神医学研究部（座長　住吉太幹） 演者　長谷川由美 演者　末吉一貴
15:00	睡眠・覚醒障害研究部（座長　栗山健一） 演者　伊豆原宗人 演者　羽澄　恵
15:30	閉会の辞（所長　金　吉晴）
15:40	

令和５年度　精神保健研究所リサーチ委員会
岡田俊　三浦健一郎　小池純子　白間綾　小塩靖崇

お知らせとお願い

〈発表者の皆様へのお願い〉

1. 発表時間について
   発表時間は、1 演題につき 14 分（発表 10 分、質疑応答 4 分）です。発表者の交替を含め 1 演題 15 分の時間内でおさめて下さい。
2. 発表形式および発表用ファイルの仕様
   発表は、Power Point で作成したファイルを投影して発表して下さい。発表スライドは当日に USB で持参し､開始前や休憩時間に発表用 PC(Windows)のデスクトップにコピーして下さい。発表後のファイルは事務局が責任を持って削除します。持ち込み PC の利用も可能ですが、ご自身で接続して下さい（Macintosh の場合、コネクターをご持参ください)。
3. お願い
   当日は、少なくともひとつ前の回に行われている発表までには待機して下さい。発表時間の経過時間に合わせて、卓上ベルを鳴らして合図いたします。発表時間終了時（10 分）にベルを 1 回、質疑応答の終了時（4 分）に 2 回ならします。時間の遵守をお願いします。

〈座長の方へのお願い〉

1. 座長について
   座長は、各部長にお願いします。
   タイトなスケジュールですので、発表スケジュールの厳守にご協力をお願いいたします。
2. お願い
   座長も発表者と同様に、ひとつ前の発表までには待機をお願いいたします。

<すべての参加者の皆様へ>

1. 対面開催で、オンラインあるいはハイブリッドでの配信はありません。
2. すべてのセッションにご参加いただいた先生には、若手奨励賞の投票をいただきます。
   投票方法は当日にご案内を申し上げます。
3. 各部長は、若手奨励賞とともに青申賞の投票をお願い申し上げます。投票方法につきましては当日にご案内を申し上げます。
4. 研究報告会終了後に参加者全員で集合写真を撮影する予定です。

プログラム

【開会】　9:30 ～ 9:40

開会の辞　国立精神・神経医療研究センター　理事長　中込和幸

ご挨拶　精神保健研究所　所長　金　吉晴

【報告1】　9:40 ～ 10:10　行動医学研究部　座長　金　吉晴

心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性 と血液バイオマーカーとしての卵巣ホルモンの予備的検討
○井野敬子，堀弘明，成田恵，伊藤真利子，喜田聡，加茂登志子，西松能子，鬼頭諭，齊藤卓弥，金吉晴

心的外傷後ストレス障害における再体験症状の指標としてのcAMPシグナル伝達経路による恐怖記憶制御
○堀 弘明，福島穂高，長葭大海，石川理絵，Min Zhuo，吉田冬子，功刀 浩，岡本賢一，金 吉晴，喜田 聡

【報告2】　10:10 ～ 10:40　地域精神保健・法制度研究部　座長　藤井千代

精神科・身体科で同定された精神疾患を有する人の超過死亡：つくば市国民健康保険被保険者コホートを用いた推定
○黒田直明，田宮菜奈子

***地域における精神障害者多職種アウトリーチ支援利用者の逆境的小児期体験に関する実態調査**
○臼井香，糸繰朝美，岩永麻衣，中西清晃，西内絵里沙，下平美智代，曺由寛，山口創生，佐藤さやか，藤井千代

（休憩）

【報告3】　10:50 ～ 11:20　知的・発達障害研究部　座長　岡田　俊

***ACC破壊ラットにおける社会的促進の検討**
○請園正敏，江頭優佳，林小百合，魚野翔太，高田美希，岡田俊

***注意欠如・多動症の病態解明のための時間知覚課題の検討**
○江頭優佳，林小百合，魚野翔太，請園正敏，高田美希，岡田俊

【報告4】　11:20 ～ 11:50　薬物依存研究部　座長　松本俊彦

覚醒剤使用が心拍数・睡眠に与える影響：ウェアラブル活動量計とスマホアプリを用いた計測
○高野歩，大野昴紀，梅村二葉，松本俊彦，佐藤牧人，奥田華代，瀬々潤

***睡眠薬を常用する一般住民の心理社会的特徴に関する研究：薬物使用に関する全国住民調査の結果より**
○水野聡美，嶋根卓也，猪浦智史，松本俊彦

（昼食）

【報告5】　12:50 ～ 13:20　公共精神健康医療研究部　座長　西　大輔

***新型コロナウイルス感染者における子ども期逆境体験と感染経験によるストレスイベントと抑うつと不安の関連**
○片岡真由美，羽澄恵，臼田謙太郎，岡崎絵美，西大輔

***COVID-19感染拡大初期と後期の感染者における被差別体験と精神的苦痛の関連の相違**
○羽澄恵，片岡真由美，臼田謙太郎，成田瑞，岡崎絵美，西大輔

【報告6】　13:20 ～ 13:50　精神疾患病態研究部　座長　橋本亮太

脳画像のデータ駆動型スクリーニングによる側脳室拡大と認知機能障害をもつ新たな診断分類の提案
安田由華，伊藤颯姫，松本純弥，岡田直大，福永雅喜，根本清貴，三浦健一郎，橋本直樹，
大井一高，高橋努，肥田道彦，山森英長，藤本美智子，長谷川尚美，小池進介，中村元昭，
岡田剛，宮田淳，沼田周助，鬼塚俊明，吉村玲児，中川伸，渡邊嘉之，尾崎紀夫，○橋本亮太

精神疾患における視覚サリエンス処理の異常―計算論的モデルを用いた解析による疾患間の比較―
○三浦健一郎，吉田正俊，森田健太郎，藤本美智子，安田由華，山森英長，髙橋潤一，
宮田聖子，岡﨑康輔，松本純弥，豊巻敦人，牧之段学，橋本直樹，鬼塚俊明，笠井清登，
尾崎紀夫，橋本亮太

（休憩）

【報告7】　14:00 ～ 14:30　精神薬理研究部　座長　金　吉晴

＊島皮質内オキシトシンシグナルは心理的ストレスの伝達を仲介する
○中武優子，古家宏樹，山田光彦

アミノ酸神経伝達とラットの行動調節における硫化水素およびポリサルファイドの機能の検討
○古家宏樹，木村由佳，山田美佐，山田光彦，木村英雄

【報告8】　14:30 ～ 15:00　児童・予防精神医学研究部　座長　住吉太幹

＊The Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry(SCIP)日本語版の信頼性・妥当性に関する研究
○長谷川由美，末吉一貴，松尾幸治，住吉太幹

＊The Brief Assessment of Cognition in Affective Disorders (BAC-A)日本語版の信頼性・妥当性に関する研究
○末吉一貴，長谷川由美，松尾幸治，住吉太幹

【報告9】　15:00 ～ 15:30　睡眠・覚醒障害研究部　座長　栗山健一

＊SARS-CoV-2 mRNAワクチンによる抗体価と睡眠時間の関連
○伊豆原宗人，松井健太郎，吉池卓也，河村葵，内海智博，長尾賢太朗，都留あゆみ，大槻怜，北村真吾，栗山健一

＊日本語版Bedtime Procrastination Scaleの開発
○羽澄恵，河村葵，吉池卓也，松井健太郎，北村真吾，都留あゆみ，長尾賢太朗，内海智博，伊豆原宗人，髙橋恵理矢，伏見もも，岡部聡美，江藤太亮，西大輔，栗山健一

【閉会】　15:30 ～ 15:40

閉会の辞　精神保健研究所　所長　金　吉晴

＜凡例＞　＊ 若手奨励賞選考対象演題　○ 発表者

抄　録

行動医学研究部

心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性 と 血液バイオマーカーとしての卵巣ホルモンの予備的検討

○井野敬子[1)]，堀　弘明[1)]，成田　恵[1)]，伊藤真利子[2)]，喜田　聡[3)]，加茂登志子[4)]，西松能子[5)]，鬼頭　諭[6)]，齊藤卓弥[6)]，金　吉晴[1)]

1) 行動医学研究部, 2) 北海道大学環境健康科学研究教育センター, 3) 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻, 4) 若松町こころとひふのクリニック, 5) 金沢大学国際基幹教育院臨床認知科学研究室, 6) あいクリニック神田

【背景】PTSD は、トラウマ体験をきっかけとして発症し、再体験症状・回避などの症状のために日常生活に支障を来す精神疾患である。PTSD の治療選択肢は少なく、新しい薬物療法の開発は喫緊の課題である。NMDA 受容体アンタゴニストであるメマンチンは、神経保護作用と認知機能改善効果に加え、海馬神経新生促進による恐怖記憶忘却作用（Ishikawa et al., 2016）が報告されている。最近の研究ではメマンチンが、PTSD 治療において有望な薬剤であることが示唆されている（Ramaswamy et al,2014,Hori et al., 2021, Fatemeh, et al. 2023）。一方、estrogen と progesterone は恐怖記憶に関与すること（Olga et al. 2021; Hsu et al. 2021）が示されている。

【目的】単群オープンラベル臨床試験により PTSD に対するメマンチンの有効性を検討する。また血液中の卵巣ホルモン濃度が治療効果の予測因子となるか、また治療効果に関連して変化するかを検討する。

【方法】本研究は NCNP 臨床研究審査委員会の承認を受け、各被験者から IC を得た。20 名の PTSD 成人女性患者が研究にエントリーした。NCNP 病院または共同研究機関の外来で、患者は服用中の薬に追加する形で 12 週間にわたりメマンチンを投与された。メマンチンは 5mg/日から開始し、20mg/日を超えない範囲で漸増した。主要アウトカム指標は、PTSD 診断尺度（PDS）で評価された PTSD 診断および重症度とした。治療前後で採血を行い、estrogen と progesterone の血清中濃度を測定した。

【結果】介入を受けた 20 例のうち、フォローアップデータの得られた 17 例について分析した。PDS 合計得点の平均値は、ベースラインの 33.6±9.7 からエンドポイントの 17.9±13.2 へと有意に減少し、効果量も大きなものであった（$t = 4.9$, $p < 0.01$、$d = 1.16$）。また 17 名のうち 8 名が治療後に PTSD 診断を満たさなくなった。Progesterone のベースライン値が高いほど、PTSD 症状、とりわけ再体験症状が大きく改善した（PTSD 症状　$r = 0.607$, $p < 0.01$, 再体験症状 $r = 0.727$, $p < 0.01$）。また治療前後での progesterone 値の低下が大きいほど、再体験症状が大きく改善した（$r = 0.615$, $p < 0.01$）。

【考察】メマンチンの PTSD に対する有効性が確認された。小さなサンプル数での予備的検討ではあるものの、治療前の progesterone が高値であるほどメマンチンによる効果改善が大きい、という有意な関連が認められたことから、progesterone はメマンチンの効果メカニズムを反映した効果予測マーカーとなる可能性が示唆された。

行動医学研究部

心的外傷後ストレス障害における再体験症状の指標としての cAMP シグナル伝達経路による恐怖記憶制御

○堀 弘明[1)]，福島穂高[2)]，長葭大海[3)]，石川理絵[3)]，Min Zhuo[4)]，
吉田冬子[1)5)]，功刀 浩[5)6)]，岡本賢一[7)8)]，金 吉晴[1)]，喜田 聡[3)]

1) 行動医学研究部, 2) 東京農業大学生命科学部バイオサイエンス学科, 3) 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻, 4) Department of Physiology, Faculty of Medicine, University of Toronto, 5) 神経研究所疾病研究第三部, 6) 帝京大学医学部精神神経科学講座, 7) Lunenfeld-Tanenbaum Research Institute, Mount Sinai Hospital, 8) Department of Molecular Genetics, Faculty of Medicine, University of Toronto

心的外傷後ストレス障害 (PTSD) は、トラウマ記憶に関連する精神疾患であるが、その病因は未だ不明である。中核症状である再体験症状は、ストレス関連精神疾患や不安関連疾患の中でも、PTSD に特有である。重要なことに再体験症状は、トラウマ記憶の動物モデルにおいて、恐怖記憶の想起に関連した出来事によって模倣することが可能である。最近の研究において、PTSD 候補遺伝子として環状アデノシン一リン酸 (cAMP) シグナル伝達経路に関連する遺伝子が見出されている。本研究では、恐怖記憶活性化マウスおよび再体験症状を有する PTSD 女性患者においてトランスクリプトームを分析し、さらにマウスの恐怖記憶に対する cAMP シグナル伝達の喪失および獲得の効果を解析することにより、cAMP シグナル伝達促進と PTSD との密接な関連を検討する。PTSD 患者の再体験症状に関連する末梢血トランスクリプトームおよび恐怖記憶想起後のマウス海馬トランスクリプトームを統合的に解析したところ、これらのヒト・マウス病態に共通して cAMP の分解酵素である phosphodiesterase 4B (PDE4B) の mRNA 発現が低下していることが明らかになった。同じ PTSD 患者において、より重度の再体験症状および低い *PDE4B* mRNA 発現はいずれも *PDE4B* の遺伝子座の DNA メチル化の減少と相関していたことから、PTSD のメカニズムにおける DNA メチル化の関与が示唆された。さらに、cAMP シグナル伝達の薬理学的および光遺伝学的 up-regulation または down-regulation は、マウスにおける恐怖記憶の回復とその後の維持をそれぞれ増強または阻害した。これらの結果は、*PDE4B* 発現の down-regulation を介する cAMP シグナル伝達促進がトラウマ記憶を強化し、それによって PTSD 患者の再体験症状に重要な役割を果たす、という可能性を示唆するものである。

地域精神保健・法制度研究部

精神科・身体科で同定された精神疾患を有する人の超過死亡：つくば市国民健康保険被保険者コホートを用いた推定

○黒田直明[1)2)3)]，田宮菜奈子[3)4)]

１）国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　地域精神保健・法制度研究部、２）つくば市保健部、３）筑波大学ヘルスサービス研究開発センター、４）筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野

【背景】精神疾患を有する人は合併する心血管系疾患等の身体疾患に起因する死亡リスクが高いことが指摘されている。しかしながら、超過死亡のエビデンスの多くが欧米からの報告であり、日本において地域住民全体を代表する研究はこれまで行われていない。また先行研究の多くが精神医療サービスを受療中の serious mental illnesses の患者のみを対象としており、プライマリケアで把握される common mental disorders の患者まで含めた研究が不足している。

【目的】本研究は serious mental illnesses から common mental disorders まで全て包含した精神疾患全体の超過死亡リスクを日本の地域レベルで推定することを目的とした。

【方法】茨城県つくば市の 2014 年度から 2019 年度の医療レセプト及び被保険者台帳の匿名データベースを用いた。2015 年 4 月時点で国民健康保険または後期高齢者医療保険に 12 ヵ月以上加入している 20～74 歳の被保険者を研究対象者とし（n =41,618、20～74 歳の市人口の 29%）、2014 年 4 月から 2015 年 3 月のベースライン期間中（12 ヵ月）に 1 回でも精神疾患（ICD-10 コード：F00～F99）の傷病名記録があった者を精神疾患有病者、それ以外を一般住民対照群とした。2015 年 4 月から 2019 年 3 月の 48 ヶ月間の全死亡を被保険者台帳から同定し、対照群に対する精神疾患有病者全体の age/sex-adjusted all-cause mortality rate ratios (aMRRs)を算出した。次に精神疾患有病者を以下のグループに分けて aMRRs を推定した。(1) 治療場所ごと：精神科外来群（ベースライン期間中に 1 回以上精神科専門療法の算定があり精神科入院がなかったもの）、精神科入院群、身体科群（精神科専門療法の算定がなかった者）、(2) ICD-10 の F コードによる診断グループごと：serious mental illnesses 群（統合失調症、双極性障害）、common mental disorders 群（うつ病、不安障害）、物質関連障害群、その他の精神疾患群

【結果】研究対象者の 12.0%が精神疾患有病者（身体科群：7.2%、精神科群：4.8%）であった。精神疾患有病者全体の aMRR は 1.98（95%CI：1.70-2.29）で、精神科群が身体科群より高値であった（2.64［2.12-3.29 vs. 1.70［1.42-2.04］）。serious mental illnesses 群全体の aMRR は 3.57（2.71–4.70）で、入院患者群では外来患者群より高値であった（5.74 [3.76–8.78] vs. 2.84 [2.00–4.04]）。common mental disorders 群全体の aMRR は 1.53（1.27-1.84）であった。

【結論】精神疾患で受療中の人は精神科においても身体科においても、同地域の一般住民と比べて死亡率の上昇を認め、特に精神科受診者、中でも入院歴のある人で死亡率比が高かった。医療レセプトと死亡記録をリンクしたデータベースを整備し、精神疾患と関連する潜在的な健康不平等の要因を特定する研究の推進が必要である。

地域精神保健・法制度研究部

地域における精神障害者多職種アウトリーチ支援利用者の逆境的小児期体験に関する実態調査

〇臼井香[1)]，糸繰朝美[1)]，岩永麻衣[1)]，中西清晃[1)]，西内絵里沙[1)]，

下平美智代[1)]，曺由寛[2)]，山口創生[1)]，佐藤さやか[1)]，藤井千代[1)]

１）国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　地域精神保健・法制度研究部,
２）明星大学大学院人文学研究科

【背景】逆境的小児期体験（adverse childhood experiences, ACEs）の生涯にわたる心身の健康への影響は甚大である。精神疾患をもつ人では ACEs の頻度が高いことが報告され、ACEs が重なると対人関係における不安定さ、認知機能の低下など、日常のあらゆる面へ影響を及ぼす。自治体が行う精神障害者多職種アウトリーチ支援事業では、未受診・未治療やひきこもりの状態にある人といった多様なニーズをもつ人が対象に生活圏へ赴いて柔軟で包括的な支援を提供する。このような利用者の背景には ACEs があり、トラウマケアのニーズを要する可能性があるが、実態は明らかではない。

【目的】本研究は、自治体が行う地域の精神障害者アウトリーチ支援事業の利用者における ACEs の実態を後方視的に調査することを目的とした。

【方法】埼玉県所沢市精神障害者アウトリーチ支援事業において 2015 年から 2022 年までに本事業を利用開始したサービス利用者の支援記録を用いて後方視的調査を実施した。参加者の人口統計学的特徴および臨床的特徴は支援開始時の臨床記録から取得した。ACEs の評価は「小児逆境的出来事／体験評価尺度（Yamagishi et al., 2022）」を用い、本事業利用者への支援経過の各時期（支援開始前の情報、支援開始後半年、1・2・3・4 年間）における 18 歳未満の ACEs の個数・種類を支援記録から調べた。さらに、統計的分析により ACEs と対象者の特徴との関連、支援経過による ACEs の個数の変化も調べた。なお、本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得て実施した（No. A2020-081, A2023-024）。

【結果】対象者の特徴として、診断は統合失調症が最も多く（143 名中 57 名；39.9%）、平均年齢は 40.4 歳であった。ACEs の該当者を調査した結果、78 名（54.5%）に 1 つ以上の ACEs が該当した。また、ACEs の該当する群は非該当の群に比べて年齢が有意に低く（$t141 = 7.60$, $p < 0.001$）、生活保護を受けている人の割合が多かった（$\chi^2 = 3.97$, $p < 0.05$）。さらに、支援経過における ACEs の個数の変化を比較したところ、支援開始前から開始後 2 年間において有意に増加し、その後、水平になるという軌跡がみられた（$F = 19.88$, $p < 0.001$）。

【結論】結論として、地域のアウトリーチ支援利用者は、半数以上の高い割合で ACEs を体験し、トラウマケアに関する潜在的なニーズがあることが考えられた。また、利用者が支援者に ACEs を報告するには 2 年程の長い期間が必要になる可能性があり、過去のトラウマ体験の評価をするには、包括的な支援で関係性を深めていく中で継続的に評価するという長期的な視点が必要であることが考えられる。

知的・発達障害研究部

ACC 破壊ラットにおける社会的促進の検討

○請園正敏 [1)]，江頭優佳 [1)]，林小百合 [1)]，

魚野翔太 [1) 2)]，高田美希 [1) 3)]，岡田　俊 [1)]

1）国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部，
2）筑波大学，3）千葉大学

【背景】他個体が存在する時は、単独で行うときと比べ、自身の課題遂行量が増加することを社会的促進と呼ぶ。社会的促進は、他個体が観察者として存在する際に起きる「観察効果」と、他者が共に課題を行う共行為者として存在する際に起きる「共行動効果」と二つに大別されている。自閉スペクトラム症の成人では、非典型的に社会的促進が生じることが報告されている。しかしながら、その神経基盤についてはこれまで検討されてこなかった。そこで本研究ではラットを対象に広く脳部位を破壊し検討した。着目した部位は、すでにげっ歯類において、前部帯状回（ACC）にミラーニューロン様の活動があることが報告されている ACC に着目した。本研究は、ラットにおける ACC 破壊による、観察効果と共行動効果への影響を検討した。

【方法】Long-evans ラットを 120 匹用意した。ラットは破壊群（60 匹）と偽手術群（60 匹）に分けた。破壊群のラットは ACC に電気的破壊を受けた。偽手術群のラットは、破壊群と同様に麻酔下で頭皮切開と頭蓋骨穴あけを受けたが、電極は挿入されなかった。行動試験は飲水行動と摂食行動とした。隣接する 2 つの透明の箱を用意し、一つの箱にラットを入れ、隣の箱が空箱（単独条件）、他個体（観察条件）、同じ課題に取り組む他個体（共行動条件）の 3 つの条件下で検討した。飲水量および摂食量を指標とし、一個体単独での摂取量と比較して、観察条件および共行動条件における摂取量を検討した。本研究の実施には国立精神・神経医療研究センター動物実験倫理委員会の承認を受けた（承認番号 2023009R1）。

【結果・考察】ACC 破壊群では、飲水および摂食行動において、単独条件と比較して観察条件との間に有意な差は生じなかった。一方、単独条件よりも共行動条件では、有意に多く飲水および摂食行動がみられた。偽手術群では、単独条件と比較して、観察条件、共行動条件ともに有意な差がみられた。これらの結果から、ACC が他個体から観察され、行動促進が生じるのに重要な役割を果たしている可能性が示唆された。共行動効果が生じることを説明するのは、本研究結果からでは困難である。アリやショウジョウバエでは、観察効果は生じず、共行動効果のみが生じることがすでに報告されていることから、ACC の活動が観察効果には必要であり、より深部の脳機能が共行動効果に必要である可能性がある。ヒヨコを対象に、線条体破壊による共行動効果消失が報告されていることから、今後ラットを対象に線条体の D1 と D2 受容体をそれぞれブロックし、共行動効果への影響を検討する。

利益相反の開示：本発表に関して、開示すべき利益相反はない。

知的・発達障害研究部

注意欠如・多動症の病態解明のための時間知覚課題の検討

○江頭優佳[1)]，林小百合[1)]，魚野翔太[1) 2)]，

請園正敏[1)]，高田美希[1) 3)]，岡田　俊[1)]

1）国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部，
2）2）筑波大学，3）千葉大学

【背景と目的】注意欠如・多動症（ADHD）は時間知覚機能不全を有することが報告されているが、検討に用いられる課題は反応抑制、持続的注意やワーキングメモリなど、ADHD の機能不全とも関連する。課題成績には時間知覚機能と共にこれらの認知機能が反映されると考えられるが、程度は不明である。更に時間知覚には運動タイミング、知覚タイミングといった複数の側面があるが、各課題が時間知覚機能の同一の側面を反映しているかは不明である。本研究では ADHD の時間知覚機能計測において多く用いられる 3 種類の課題と、反応抑制・持続的注意課題の課題成績、総合知能、ワーキングメモリのそれぞれの関連を検討し、各課題の認知的共通点を明らかにすることを目的とした。

【方法】日本人成人 71 名（平均年齢：24.8 歳、SD：10.1、男性：19 名）を研究対象とした。時間知覚課題は時間長再生（TR）、時間長識別（DD）、タッピング（同期・非同期）を用いた。TR では視覚的に提示される先行刺激（5000ms）の時間長を目指してボタン押しを持続した。DD では連続して提示される 3 つの純音に 1 つ含まれる刺激音を識別した（基準音：1200ms、刺激音：400、700、800、900、1000、1100ms）。タッピングでは刺激間間隔 450ms で呈示される 50ms の音刺激に同期したボタン押し（同期）に続いて手掛かりなしのボタン押し（非同期）を行った。この他に反応抑制・持続的注意課題として Sustained Attention to Response Task（SART）を実施した。総合知能およびワーキングメモリの指標は WAIS-IV の FSIQ と WMI を用いた。本研究の実施には国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を受けた（承認番号 A2020-125）。

【結果と考察】ピアソンの積率相関係数を用いて各課題間の相関を調べた結果、時間知覚課題間に有意な相関はなく、それぞれが異なる認知機能を反映していると考えられた。各時間知覚課題と他の各指標との関連では、TR において課題精度は反応抑制・持続的注意、ワーキングメモリ指標が高いほど高く、再生時間の安定性は持続的注意が保たれたほど高かった。DD およびタッピングは持続的注意が保たれたほど時間長弁別力が鋭敏で、リズム運動の安定性が高かったが、総合知能、ワーキングメモリとの関連は見られなかった。従って、特に TR の低成績には時間知覚機能以外の機能低下が関連する可能性がある。ADHD 病態と時間知覚機能不全の関連を詳細に検討するには、ADHD の認知機能不全と時間知覚機能の複数の側面を反映する課題を同時に計測する必要があると考えられた。

利益相反の開示：本発表に関して、開示すべき利益相反はない。

薬物依存研究部

覚醒剤使用が心拍数・睡眠に与える影響：ウェアラブル活動量計とスマホアプリを用いた計測

○高野 歩[1)]，大野 昂紀[1)]，梅村 二葉[1)]，松本俊彦[1)]，
佐藤 牧人[2)]，奥田 華代[2)]，瀬々 潤[2)]
1) 国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所　薬物依存研究部
2) 株式会社ヒューマノーム研究所

【目的】モバイルアプリやデバイスは、日常生活における物質使用の予測や健康被害を調査するための有望なアプローチの 1 つである。本研究は、日々の薬物使用状況を記録するセルフモニタリング・スマホアプリとウェアラブル活動量計（Fitbit）を用いて、日常生活における覚醒剤使用の状態や覚醒剤使用前後の心拍数や睡眠状態を明らかにすることを目的とした。
【方法】研究参加者は、覚醒剤使用障害を有する 20 歳以上の通院患者で、研究期間 8 週間にわたり、日々の薬物使用と薬物使用に関連する要因（薬物使用の欲求の程度や引き金など）をセルフモニタリングアプリに記録し、Fitbit を 24 時間装着した。Fitbit により 1 分あたりの心拍数、1 日当たりの睡眠時間や睡眠の質、1 日あたりの歩数などを収集した。研究参加者ごとに日ごとの Fitbit データとセルフモニタリングデータを同期させ、覚醒剤使用前後の心拍数と睡眠状態を可視化し、覚醒剤使用時の心拍数と睡眠状態の傾向を確認した。本研究は、東京医科歯科大学医学部倫理審査委員会による承認を得て実施した。
【結果】研究参加者は計 13 名で、多くが男性 （n=12、92.3%）であり、平均年齢は 46.9 歳（SD：9.0）であった。研究期間中（56 日間）の覚醒剤使用日数は、10.4 日 （SD：14.9）、安静時心拍数は 72.6 回／分（SD：8.0）、1 日当たりの睡眠時間は 408.3 分 （SD：192.8）であった。ほとんどの参加者において、覚醒剤使用直後に心拍数が急激に上昇していた。運動時の心拍数上昇をコントロールした場合でも、覚醒剤使用直後は数時間～数日間にわたり高い心拍数が維持されていた。また、覚醒剤使用後数日間は、不眠や断眠が持続し、睡眠の質の低下が観察された。さらに、研究期間中の睡眠時間のばらつきが大きく、睡眠リズムの乱れが日常的に観察された。
【考察】覚醒剤使用が心臓血管系と睡眠状態に及ぼす悪影響が明らかになった。これらのデータを詳細に解析し、覚醒剤使用の予測や個々のパターンを特定することで、覚醒剤使用による健康被害を低減する予防行動を促す個別介入の開発につなげたいと考えている。

薬物依存研究部

睡眠薬を常用する一般住民の心理社会的特徴に関する研究：薬物使用に関する全国住民調査の結果より

○水野 聡美，嶋根 卓也，猪浦 智史，松本 俊彦
国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所　薬物依存研究部

【背景】睡眠薬服用は不眠症に対する一般的な治療の一つであるが、睡眠薬の過剰服用や長期服用は、運動機能や認知機能の低下、気分障害を引き起こす。日本では、使用障害を引き起こすベンゾジアゼピン受容体作動薬が諸外国に比べて多く処方されており問題となっている。このような日本の臨床状況を受け、睡眠薬の適切な処方に関する政策が検討されており、その中でも、睡眠薬常用者の特徴は、ガイドライン作成に必要な情報として注目されている。診療報酬情報を用いて実施された先行研究では、睡眠薬を処方された患者の特徴を報告しており、ベンゾジアゼピン受容体作動薬の処方が多く、そのほとんどが精神科で処方されており、平均処方期間は約3ヵ月で、12か月以上睡眠薬を処方された患者が全体の11%を占めることを明らかにした。これらの先行研究は、睡眠薬を処方された患者の特徴を理解する上では非常に有用であるが、研究結果が診療報酬請求データのみに依存していることを考えると、患者個人の実際の服薬行動を忠実に反映しておらず、患者の社会的背景や服薬状況を含む生活習慣についての情報も得られていなかった。さらに、睡眠薬服用に対する患者の意識に関しても不明である。本研究では、全国住民調査から得られたデータをもとに、処方された睡眠薬の常用者と非常用者と比較することで、睡眠薬常用者の特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】本調査は、自記式質問票による全国住民を対象とした横断観察研究である。データは2015年から2021年に実施された4回分の全国調査から抽出した。本研究の参加者は、過去1年以内に、処方睡眠薬を服用した経験がある、または全く服用しなかった日本人である。参加者13,396人を、過去1年間で、睡眠薬を週3日以上毎日使用し続けていた人（常用者：Habitual user [HU]）、週1・2回もしくは数か月に数回程度使用した人（使用者：Occasional user [OU]）、全く使用しなかった人（非使用者:Non user [NU]）の3群に分け、社会的背景、抗不安薬や鎮痛薬の服薬状況、飲酒、喫煙、規制薬物使用状況、睡眠薬使用に対する意識を独立変数として3群比較した。

【結果】HUはNUより年齢が高く（HU＞NU／OU, p＜0.001,p＝1.000）、女性（HU＞NU／OU, p＝0.039, p＝0.308）、失業（HU＞OU＞NU, p＜0.001, p＜0.001）、抗不安薬常用（HU＞OU＞NU, p＜0.001, p＜0.001）、鎮痛薬常用（HU＞OU＞NU, p=0.049, p＜0.001）だった。さらに、HUはOUより常用喫煙者で（HU＞OU／NU, p=0.001, p=0.091）、副作用を心配しながらも睡眠薬を使用する人が多かった。飲酒と規制薬物使用状況は3群間で差はなかった。

【結論】本研究結果から、睡眠薬の非常用者と比較した常用者の特徴は、高齢、女性、失業、抗不安薬・鎮痛薬の常用、常用喫煙者であることが示唆された。これらの情報は睡眠薬の適切な使用を促すのに役立つであろう。

公共精神健康医療研究部

新型コロナウイルス感染者における子ども期逆境体験と感染経験によるストレスイベントと抑うつと不安の関連

○片岡真由美，羽澄恵，臼田謙太郎，岡崎絵美，西大輔

国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所　公共精神健康医療研究部

【目的】

新型コロナウイルス感染者は感染後に心理的苦痛や精神症状を悪化、遷延させうることが新たな公衆衛生問題となっており、リスクのある人々への早期対応が重要である。心理的苦痛や精神症状と関連する要因として感染経験によるストレスイベントが挙げられる。特に感染者に子ども期逆境体験がある場合、ストレスへの感受性が高く心理的苦痛や精神症状を悪化させやすい可能性がある。本研究では感染経験によるストレスイベントと抑うつや不安の関連を子ども期逆境体験が修飾するか検討した。

【方法】

調査会社パネルを利用したWebベースの自記式質問紙調査によってデータを収集した。研究参加者はPCR検査による新型コロナウイルス陽性経験を自己報告した20歳以上を対象とした。2021年7月から9月のT1調査と、2022年7月から9月のT2調査で得られた縦断データを分析に使用した。従属変数にはT2調査におけるPatient Health Questionnaire-9とGeneralized Anxiety Disorder-7のスコアを用い、それぞれ10点以上を抑うつ、不安があるとした。暴露変数の感染経験によるストレスイベントは、先行研究に基づきT1調査で報告された感染経験による就業状況、収入、仕事や私生活における人間関係のトラブルなど16項目の合計値を用いた。子ども期逆境体験はAdverse Childhood Experience in Japanの14項目の合計値を用いた。T1調査の感染経験によるストレスイベント数と子ども期逆境体験数の交互作用項をモデルに加え、ストレスイベントと抑うつと不安の関連に対する子ども期逆境体験による効果修飾を修正ポアソン回帰分析を用いて解析した。本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理審査委員会の承認を得て行われた（A2021-34）。

【結果】

解析対象者は2168人であった。T1の感染経験によるストレスイベント数が同じでも、子ども期逆境体験数が多いとT2での抑うつのリスクが高く、ストレスイベント数と抑うつの関連を子ども期逆境体験数が効果修飾する傾向が見られた。不安については子ども期逆境体験数が一定数以上の場合、ストレスイベント数と不安の関連を効果修飾する傾向が見られた。

【結論】

新型コロナウイルス感染者では、子ども期逆境体験がある場合、そのような体験がない場合と感染経験によるストレスイベント数が同じでも、抑うつや不安のリスクが高くなる可能性が示唆された。

公共精神健康医療研究部

COVID-19 感染拡大初期と後期の感染者における被差別体験と精神的苦痛の関連の相違

○羽澄恵[1)]，片岡真由美[1)2)]，臼田謙太郎[1)]，
成田瑞[3)]，岡﨑絵美[1)]，西大輔[1)2)]

[1]国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所　公共精神健康医療研究部
[2]東京大学大学院医学系研究科 公共健康医学専攻 精神保健学分野
[3]国立精神・神経医療研究センター　精神保健研究所　行動医学研究部

【目的】COVID-19 感染拡大禍では、感染者に対する差別やそれに伴う精神的苦痛が問題視されてきた。一方、社会的風潮の変化や社会全体の COVID-19 に対する理解促進に伴い、感染拡大当初と感染拡大後期とでは、こうした傾向に相違がみられると推測される。そこで、本研究では、感染拡大当初と感染拡大後期における、COVID-19 感染者の被差別体験と精神的苦痛の関連の相違を検討した。

【方法】横断デザインにて、COVID-19 感染者を対象に 2021 年 7～9 月および 2022 年 9 月にオンライン調査を実施した。選択基準は、20 歳以上かつ PCR 検査で COVID-19 陽性になった経験があると自己報告した者とした。ただし、2022 年の対象者は、2022 年 2 月以降に初めて感染した者、との基準も追加した。前者を感染拡大初期の感染者、後者を感染拡大後期の感染者と定義した。測定指標に関し、アウトカムには Kessler 心理的苦痛尺度を用い、5 点以上を精神的苦痛があると判断した。暴露変数として、感染に伴う各被差別体験の有無（感染に伴って周囲に責められた、何らかの差別を受けたと感じた、自分や家族が悪口を言われた）、および感染時期（感染拡大初期/後期）も用いた。解析にあたっては、p=0.05 を有意水準とし、ロバストな標準誤差による修正ポアソン回帰分析を行った。最初に、各被差別体験を従属変数、感染時期を独立変数とした解析を行った。その後、精神的苦痛を従属変数、感染に伴う被差別体験、感染時期、両変数の交互作用を独立変数とした解析を行った。有意な交互作用がみられた場合は、時期ごとに被差別体験と精神的苦痛の関連の強さを検討するサブグループ解析を行った。本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理審査委員会の承認を得て行われた（A2021-34）。

【結果】感染拡大初期 6010 人および感染拡大後期 5344 人が解析対象となった。各被差別体験を従属変数とした修正ポアソン回帰分析の結果、感染拡大当初の感染者であることと各被差別体験が有ることに有意な関連がみられた。精神的苦痛を従属変数とした修正ポアソン回帰分析の結果、感染拡大後期の感染者であること、各被差別体験があることに加え、被差別体験のうち周囲に責められた体験と感染時期の交互作用が、有意な関連を示した。サブグループ解析の結果、感染拡大後期の感染者のほうが、周囲に責められた体験と精神的苦痛との関連が高かった。

【結論】感染拡大当初の感染者に比べて感染拡大後期の感染者のほうが、感染に伴って差別される経験をすること自体は少ない一方、感染拡大後期のほうが差別を受けた場合に精神的苦痛が生じやすい可能性が示唆された。

精神疾患病態研究部

脳画像のデータ駆動型スクリーニングによる側脳室拡大と認知機能障害をもつ新たな診断分類の提案

安田由華，伊藤颯姫，松本純弥，岡田直大，福永雅喜，
根本清貴，三浦健一郎，橋本直樹，大井一高，高橋努，肥田道彦，
山森英長，藤本美智子，長谷川尚美，小池進介，中村元昭，
岡田剛，宮田淳，沼田周助，鬼塚俊明，吉村玲児，中川伸，
渡邊嘉之，尾崎紀夫，〇橋本亮太

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　精神疾患病態研究部

精神疾患の診断と治療の課題の一つは，病態を考慮しない，症状に基づく診断に依る。近年，診断カテゴリーにとらわれず，生物学的視点や疾患横断的視点を取り入れたデータ駆動型解析が提案されている。我々はこれまでに 14 施設の健常者 3,077 人,統合失調症 1,499 人，双極性障害 234 人，大うつ病性障害 598 人，自閉症スペクトラム障害 189 人，その他の精神疾患 5 人の合計 5,602 例が皮質下容積に基づく 4 つの脳バイオタイプ（BB1-4）・クラスターに分類されることを報告した。そして，この４つの分類は認知機能及び社会機能と関連していた。本研究では，これらの４つのバイオタイプのうち，大脳辺縁系が非常に小さく，認知社会機能障害が重度であるバイオタイプ１に関しての生物学的及び臨床的特徴の詳細な検証を行った。尚，本研究は国立精神・神経医療研究センター及び各施設の倫理委員会の承認を得ており，各被験者からは書面による同意を得て実施した。

ブレインバイオタイプ１は側脳室の両側合計体積が健常者の 3 標準偏差以上であることより，感度 99.1%，特異度 98.1%で判別できた。よってブレインバイオタイプ１を側脳室体積 3 標準偏差以上の脳構造特徴にて再定義した。再定義した被験者のうち詳細なデータを有する 33 例を，中等度以上の認知機能障害のある 9 例と軽度以下の 24 例の 2 群に層別化し比較した。前者では後者と比較し，脳波異常，統合失調症の診断，知能の低さが高率に認めた。更に，前者のみに稀な病的 CNV(22q11.21 deletion, 7q11.23 duplication, DPP6 deletion)を高率に認めた。

我々は，統合失調症を中心とする精神疾患に側脳室体積 3 標準偏差以上と認知機能障害中等度以上が認められる患者群において，脳波異常，精神病症状，病的レアバリアントが高率に認められる新規の精神疾患分類候補を見出した。 以上の様に，大規模のデータ駆動型解析のスクリーニングから個々の患者の詳細な臨床症状に立ち戻り新規精神疾患を提案し，その概念と精神疾患を客観的指標により見出す方法論を初めて提案した。

精神疾患病態研究部

精神疾患における視覚サリエンス処理の異常
―計算論的モデルを用いた解析による疾患間の比較―

○三浦健一郎[1)]，吉田正俊[2)]，森田健太郎[3)]，藤本美智子[1)4)]，安田由華[1)5)]，
山森英長[1)6)]，髙橋潤一[7)]，宮田聖子[8)]，岡﨑康輔[9)]，松本純弥[1)]，
豊巻敦人[10)]，牧之段学[9)]，橋本直樹[10)]，鬼塚俊明[11)]，
笠井清登[12)13)]，尾崎紀夫[14)]，橋本亮太[1)]

[1]国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部，[2]北海道大学人間知・脳・AI研究教育センター，[3]東京大学医学部付属病院リハビリテーション部精神科デイホスピタル，[4]大阪大学大学院医学系研究科情報統合医学講座精神医学教室，[5]医療法人フォスター，[6]地域医療機能推進機構大阪病院，[7]九州大学大学院医学研究院精神病態医学分野，[8]名古屋大学大学院医学系研究科精神医療学寄附講座精神医学分野，[9]奈良県立医科大学精神医学講座，[10]北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室，[11]国立病院機構榊原病院，[12]東京大学大学院医学系研究科精神医学分野，[13]東京大学ニューロインテリジェンス国際研究機構，[14]名古屋大学大学院医学系研究科精神疾患病態解明学

画面に提示される絵や写真を自由に見る際には，画面上のある場所から次の場所へと視線を移す様子が観察される。統合失調症では，この時の視線シフトの様子に健常者と異なる性質が見られることが多い。健常者に比べて視線シフトの数が少なく，シフト量も小さい傾向が見られ，スキャンパス長が健常者に比べて短い。スキャンパス長はケースコントロール比較における効果量が大きく，統合失調症と健常者を判別する際の有効な指標として知られる。一方で，その異常の背後にあるメカニズムはまだ良くわかっていない。

目の前に提示される画像上の特徴的な部分は観察者の興味を惹きやすい。Itti と Koch は明るさや色，形状などといった画像特徴に基づく視覚的目立ちやすさを計算論的に定義するサリエンスマップモデルを提案している。このモデルはボトムアップ的な視覚情報による脳の視覚サリエンス処理のモデルとして広く受け入れられている。われわれはこれまでの研究で，統合失調症群と健常群の間で，フリービューイング課題遂行中の視覚サリエンス処理が異なる可能性を示唆する所見を得ている。

本研究では，統合失調症におけるフリービューイングの際の視線シフトの異常の再現性の確認および，精神疾患間の類似点と相違点を明らかにすることを目的とし，主要な４つの疾患群と健常群の視線データを解析した。国内の７施設において収集された 1012 症例（健常群 550 名，統合失調症群 238 名，双極性障害群 41 名，大うつ病性障害群 50 名，自閉スペクトラム症群 133 名）のフリービューイング時の眼球運動を調べた。尚，本研究は国立精神・神経医療研究センター及び各施設の倫理委員会の承認を得て参加者からは書面による同意を得て実施した。Itti と Koch のサリエンスマップモデルを用い，被験者が 16 枚の画像をそれぞれ８秒間自由に見ている際の，視線の先の平均視覚サリエンスを計算した。その結果，統合失調症と健常者の間の視覚サリエンスの差異が再現された。精神疾患間の比較では，統合失調症群においてサリエンスが高い所を見る傾向が強く，次いで双極性障害，大うつ病性障害，自閉スペクトラム症の順であり，統合失調症群とその他に有意な違いが認められた。本結果は，統合失調症において視覚サリエンス処理の異常が最も顕著であることを示唆する。

精神薬理研究部

島皮質内オキシトシンシグナルは心理的ストレスの伝達を仲介する

○中武優子[1)]，古家宏樹[1)]，山田光彦[1)2)]

1)国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神薬理研究部,
2)東京家政学院大学人間栄養学部病態生理学研究室

【背景】過度な心理的ストレスはうつ病の発症要因の一つである。我々はこれまでに、マウスに同種他個体が攻撃的な別種マウスから攻撃される社会的敗北場面を目撃させることで心理的ストレスを負荷するストレスモデルを確立し、心理的ストレスが身体的ストレスとは一部異なる脳部位の活性化・免疫系の変化・顕著なうつ様行動を引き起こすことを見出した。本研究では、社会行動や情動伝染に関わるオキシトシンに着目し、社会的敗北の目撃により心理的ストレスが伝達され情動変容が生じる神経基盤の解明を目標とし、行動神経科学的手法を用いて検討を行った。

【方法】被験体には、オキシトシン受容体に蛍光蛋白質 tdTomato を発現する Oxtr-PA-T2A-tdTomato、組換え酵素 Cre を発現する Oxtr-PA-T2A-iCre マウスを用いた。これらのマウスに社会的敗北場面を目撃させ心理的ストレスを負荷した。ストレス負荷後、免疫組織化学染色を用いて活性化した脳部位を調べ、ELISA により血中コルチコステロン値を測定した。また、アデノ随伴ウイルスベクターの局所投与と黄色光照射によりストレス負荷時のオキシトシン受容体発現細胞の活動を抑制し、その後、社会的相互作用試験とスクロース嗜好性試験にてうつ様行動を評価した。

【結果】島皮質では社会的敗北の目撃時にのみ c-Fos 発現が増加し、オキシトシン受容体発現細胞の活性化が観察された。島皮質へオキシトシン受容体拮抗薬を投与すると、目撃によるすくみ反応と血中コルチコステロン値の上昇が抑制された。一方、社会的敗北を経験した個体では拮抗薬の効果は観察されなかった。島皮質内のオキシトシン受容体発現細胞は側坐核への神経投射を持ち、この経路を社会的敗北の目撃中に抑制すると、後の社会性の低下や報酬感受性の低下が抑制された。

【考察】島皮質におけるオキシトシンシグナルは社会的敗北の目撃によるストレス伝達を担う一方、身体的ストレスの処理には関与しないことが示唆された。また、島皮質のオキシトシン受容体を発現する神経細胞から側坐核への神経投射が、ストレスの伝達から抑うつ状態への移行に関与している可能性が示された。

精神薬理研究部

アミノ酸神経伝達とラットの行動調節における硫化水素およびポリサルファイドの機能の検討

○古家宏樹[1)]，木村由佳[1)2)]，山田美佐[1)]，山田光彦[1)3)]，木村英雄[1)2)]

1)国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神薬理研究部，
2)山口東京理科大学薬学部，3）東京家政学院大学人間栄養学部病態生理学研究室

【背景】 一般に有毒ガスとして知られる硫化水素（H_2S）とポリサルファイド（H_2S_n）は、人体内でも生合成され生理活性物質として作用することがわかっている。硫化水素およびポリサルファイドは中枢神経系にも存在し、神経伝達調節物質として機能している可能性が示唆されているものの、その詳細は明らかとなっていない。本研究では、アミノ酸神経伝達の調節における H_2S と H_2S_n の機能を明らかにすることを目的とし、H_2S と H_2S_n の海馬内投与によるアミノ酸放出量の変化を in vivo マイクロダイアリシス法により検討した。また、精神機能における H_2S と $H2S_n$ の役割を明らかにするため、脳内の H_2S/H_2S_n の主要な合成酵素である 3-mercaptopyruvate sulfurtransferase（3MST）とその作用標的と考えられる transient receptor ankyrin 1（TRPA1）チャネルを欠損したラットを用いて行動解析を行い、野生型ラットと比較した。

【方法】 H_2S と H_2S_n がアミノ酸放出に及ぼす効果を調べるため、F344 系ラットの海馬にカニューレを留置する手術を行った。回復期間の後、カニューレに透析プローブを差し込みリンゲル液を灌流し、細胞外液を回収した。60 分のベースライン測定の後、H_2S あるいは H_2S_2（1, 3, 10 mM）を灌流させ投与した。回収後、サンプル中のグルタミン、グルタミン酸、GABA、D/L-serine、glycine の量を HPLC により測定した。また精神機能における H2S/H2Sn の機能を調べるため、野生型ラット（F344）、3MST 欠損ラット、TRPA1 欠損ラットを用いてオープンフィールド、Y 字型迷路、プレパルス抑制、MK-801 誘発性過活動試験を行った。

【結果・考察】 マイクロダイアリシスの結果、H_2S と H_2S_n の灌流により海馬のグルタミン酸、D/L-serine、glycine、GABA の放出量がベースラインと比較して有意に増加した。また行動試験の結果、3MST-KO および TRPA1-KO の活動性の低下が観察されたほか、3MST-KO ラットにおいて MK-801 の移動活動量亢進作用に対する感受性が有意に増加していることが示された。本研究より、H_2S/H_2S_n が脳における主要な神経伝達物質であるグルタミン酸と GABA に加え、NMDA 受容体内在性コアゴニストである D-serine と glycine の放出を制御していることが明らかとなった。また、H_2S/H_2S_n の不足は興奮性および抑制性神経伝達の不均衡をもたらすことで統合失調症関連行動を生じさせることが示唆された。今後、H_2S/H_2S_n とその生合成酵素および標的分子が新たな創薬開発に繋がることが期待される。

児童・予防精神医学研究部

The Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry(SCIP)日本語版の信頼性・妥当性に関する研究

○長谷川由美[1)]，末吉一貴[1)]，松尾幸治[2)]，住吉太幹[1)]

1）国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部
2) 埼玉医科大学 医学部 神経精神科・心療内科

【背景・目的】

精神疾患患者の社会復帰を左右する要因として、記憶、実行機能、注意、処理速度、語流暢性など、認知機能の障害が注目されている。気分障害における認知機能障害は統合失調症よりも軽微であるが、影響を受ける認知機能領域や相対的な障害の程度、および機能的転機への影響は共通する。国際双極症学会（ISBD）は、気分障害における認知機能障害をターゲットとした治療法の開発や日常診療における認知機能の評価を奨励しており、短時間で簡便に認知機能を測定できる評価バッテリーScreen for Cognitive Impairment in Psychiatry（SCIP）を開発した。SCIP は認知機能障害のスクリーニングツールであり、記録用紙 1 枚と筆記具だけで約 15 分で実施可能であるが、日本語版の信頼性・妥当性の検討および標準化は実施されていない。今回，SCIP 日本語版の信頼性・妥当性を明らかにする調査研究の予備的解析の結果を報告する。

【対象・方法】

本研究は，健常者 50 名，双極性障害患者 40 名，大うつ病性障害患者 40 名を目標症例数とした。疾患群は外来通院中で検査実施が可能である、症状が軽度以下の患者を対象とした。SCIP および基準連関妥当性の検討のため MATRICS Consensus Cognitive Battery（MCCB）、主観的認知機能障害評価尺度（COBRA）を実施した。

【結果】

2023 年 12 月時点で，健常者 38 名，うつ病患者 27 名，双極性障害患者 27 名の検査が完了した。クロンバックのα係数は.660 であった。SCIP の合計得点と MCCB のコンポジットスコアの間に有意な相関を認めた（r=.716，p<.01）。また、SCIP の下位検査と MCCB の対応する下位検査との間に低～中等度の有意な相関が示された（r=.263～.694，p<.05）。SCIP の合計得点と COBRA との間に有意な負の相関が示された（r=-.275，p<.01）。健常者と気分障害患者群の SCIP の得点を比較した結果、有意な差はなかった

【考察】

現時点までの予備的データから、SCIP は良好な基準連関妥当性があること、および主観的な認知機能とも関連があることが示唆された。現在、データ収集を継続して行っている。

児童・予防精神医学研究部

The Brief Assessment of Cognition in Affective Disorders (BAC-A) 日本語版の信頼性・妥当性に関する研究

○末吉一貴[1)]，長谷川由美[1)]，松尾幸治[2)]，住吉太幹[1)]

2）国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部
3）埼玉医科大学 医学部

【背景・目的】

認知機能障害は気分障害患者の社会的転帰を左右する。一方，気分症状の背景には，ネガティブな感情価をもつ情報を選択的に符号化する情報処理バイアスが存在する。同バイアスの影響を踏まえた認知機能を測定するために，Keefe ら（2014）は Brief Assessment of Cognition In Affective Disorders (BAC-A)を開発した。このように BAC-A は感情干渉検査と情動抑制検査を取り入れることで，気分障害患者の認知機能低下のみならず，情動刺激が認知処理へ与える影響も評価しうる。今回，BAC-A 日本語版の妥当性を明らかにする調査研究の予備的解析の結果を報告する。

【対象・方法】

本研究は，健常者 50 名，双極性障害患者 40 名，大うつ病性障害患者 40 名を目標症例数とした。BAC-A の利用場面を想定して疾患群は症状が軽度（Hamilton Rating Scale for Depression；HAM-D 得点 14 点以下、Young Mania Rating Scale:；YMRS 得点 14 点以下）の患者を対象とした。認知機能評価には BAC-A，および基準連関妥当性の検討のため MATRICS Consensus Cognitive Battery（MCCB）、主観的認知機能障害評価尺度を実施した。診断は精神疾患簡易構造化面接法（Mini-International Neuropsychiatric Interview）を用いておこない、臨床症状の評価には HAM-D や YMRS、ベック抑うつ質問票を使用した。また、人口統計学的特徴や機能水準など背景情報を得た。

【結果】

2023 年 12 月時点で，健常者 38 名，うつ病患者 27 名，双極性障害患者 27 名の検査が完了した。うつ病と双極性障害患者を併せた患者を対象とした解析において，BAC-A の認知機能下位検査成績と MCCB の対応する下位検査成績との間に，低～中等度の有意な相関を認めた（$r=.39\sim.64$, $p<.05$）。健常者と患者群全体（うつ病群＋双極性障害群）の BAC-A 成績を比較した結果，情動抑制検査、運動機能、および情報処理速度を反映する下位検査において，患者群の成績が有意に低かった($p<.05$)。

【考察】

BAC-A 日本語版は良好な基準連関妥当性を有することが示唆された。また、疾患群の判別には、情報処理バイアスの測定が有用である可能性が示された。

睡眠・覚醒障害研究部

SARS-CoV-2 mRNA ワクチンによる抗体価と睡眠時間の関連

○伊豆原 宗人[1)2)3)]，松井 健太郎[1)2)]，吉池 卓也[1)]，河村 葵[1)]，
内海 智博[1)4)]，長尾 賢太朗[1)5)]，都留 あゆみ[1)2)]，大槻 怜[6)]，
北村 真吾[1)]，栗山 健一[1)]

[1] 精神保健研究所 睡眠・覚醒障害研究部，[2] センター病院　臨床検査部，[3] 国立療養所多磨全生園，[4] 東京慈恵会医科大学 精神医学講座，[5] センター病院 精神診療部，[6] 日本大学医学部 精神医学系精神医学分野

睡眠制御系と免疫応答系は相互に影響を及ぼし機能することが知られている。不活化ワクチンを用いた先行研究では、ワクチン接種前後の睡眠時間が長いほどワクチンによる抗体価が上昇することが示されている。しかし、近年開発された mRNA ワクチンは従来の不活化ワクチンと異なり、比較的長期に抗原に曝露される性質を有するため、ワクチンによる抗体獲得に睡眠がおよぼす影響も異なる可能性がある。

本研究では、SARS-CoV-2 mRNA ワクチン接種による抗体の獲得とワクチン接種前後の睡眠時間との関係を、活動量計（アクチグラフ）と睡眠日誌を用いて前方視的に評価した。2021 年 6 月から 2022 年 1 月までにホームページなどを通じて募集した 20 歳から 60 歳の基礎疾患のない一般地域住民 48 人（BNT-162b2, n=34; mRNA-1273, n=14; 女性, n=30, 62.5%; 年齢中央値, 39.5 歳）を対象に、初回ワクチン接種前から 2 回目ワクチン接種 2 週間後まで観察を行った（観察期間中央値 43 日, 四分位範囲 42-49 日）。抗体価の最高値が見込まれる 2 回目ワクチン接種 2 週間後に SARS-CoV-2 抗体価を計測した。

2 回目のワクチン接種後 3 日間及び 7 日間の活動量計で評価した平均睡眠時間と、ワクチン抗体価が正の相関を示した。年齢、性別、ワクチン種別、副反応を共変量として調整した後も、この相関関係は維持された。一方で、睡眠日誌で評価した平均睡眠時間とワクチン抗体価との関連は認めなかった。

mRNA ワクチンであっても、長時間の（充分な）睡眠がより高い抗体価獲得に貢献する可能性が示された。さらに、不活化ワクチンとは異なり、ワクチン接種後の比較的長期にわたり、睡眠時間が抗体価獲得に影響を及ぼす可能性が示された。

睡眠・覚醒障害研究部

日本語版 Bedtime Procrastination Scale の開発および信頼性・妥当性の検討

○羽澄恵[1)2)]，河村葵[1)]，吉池卓也[1)]，松井健太郎[1)3)]，北村真吾[1)]，
都留あゆみ[1)3)]，長尾賢太朗[1)4)]，内海智博[1)]，伊豆原宗人[1)3)]，
髙橋恵理矢[1)3)]，伏見もも[1)]，岡部聡美[1)]，江藤太亮[1)]，西大輔[2)]，栗山健一[1)4)]

[1]睡眠・覚醒障害研究部，[2]公共精神健康医療研究部，[3]国立精神・神経医療研究センター病院
臨床検査部，[4]国立精神・神経医療研究センター病院　第一診療部

【目的】特段の用事がないにもかかわらず、就寝すべき時刻になっても床に就かず夜更かしする行動を就寝先延ばし行動と呼び、睡眠不足や睡眠相後退などの心理的機序として重視されている。本研究では、睡眠時間が特に短くなりやすい就労者を対象に、就寝先延ばし傾向を測定する尺度 Bedtime Procrastination Scale （Kroese ら，2014）の日本語版（BPS-J）を開発し、信頼性・妥当性および、睡眠スケジュールとの関連を検討した。

【方法】Kroese らが開発した尺度の翻訳、逆翻訳、睡眠不足を自己申告した 100 名を対象とした紙面による認知的インタビュー、専門家による精査を経て BPS-J を開発した。その後、20～65 歳の日勤労働者を対象にオンライン調査を行い、BPS-J の信頼性と妥当性を評価した。再検査信頼性の検討のため、一部回答者に対し 14 日後に再度 BPS-J への回答を求めた。各指標の基準関連妥当性を検討するため、Brief Self-Control Scale（BSCS）、General Procrastination Scale（GPS）、原版尺度の開発で用いられた倦怠感を感じる日数、睡眠不足と感じる日数、就寝先延ばしを問題視する程度を問う質問項目を収集した。さらに、BPS-J と睡眠スケジュールとの関連を検討するため、ミュンヘンクロノタイプ質問紙（MCTQ）のうち平日の睡眠中央時刻、休日の睡眠中央時刻、睡眠不足度、社会的ジェットラグ、平日の睡眠時間、休日の睡眠時間も収集した。

【結果】データ収集の結果 574 人が解析対象となり、うち 280 人が再検査信頼性の解析対象となった。構造的妥当性を検討する確認的因子分析の結果、原版尺度から 1 項目を除外した二因子モデルが BPS-J に適していることが確認された。信頼性指標（Cronbach's α、McDonald's ω、再検査信頼性を示す Interclass correlation coefficient）はいずれも十分に高い値を示した。基準関連妥当性を評価するため、BPS-J と上記指標の相関分析を行ったところ、就寝先延ばしを問題視する程度を問う質問項目以外の全ての指標において有意な相関が示された。さらに、BPS-J が睡眠スケジュールと関連する程度を、性別と年齢を共変量としてロジスティックまたは線形による回帰分析にて検討し、BPS-J の高さは、平日および休日の睡眠時間の短さ、平日および休日の睡眠中央時刻の遅さ、睡眠不足の程度と有意な関連を示した。また、BPS-J と就寝先延ばしを問題視する程度の関連を検討するロジスティック回帰分析も行ったところ、BPS-J が高い群で問題視する傾向が有意に低かった。

【結論】BPS-J は日本の日勤労働者を対象とした測定において十分な妥当性と信頼性が示された。さらに就寝を先延ばしする傾向が強いほど、睡眠時間が短く、就床・起床時刻が遅く、睡眠不足になりやすい一方、こうした傾向への問題意識が低い可能性が示された。本尺度を疫学調査に活用することで、睡眠不足、遅寝遅起き傾向の強い労働者や若年者の睡眠衛生改善に貢献しうる。

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
令和５年度　研究報告会
（第 35 回）

プログラム・抄録集

©発行者　国立研究開発法人 国立精神･神経医療研究センター

本書の内容の一部または全体の複写･引用については事前にご一報下さい。
無断での複写･転載を固く禁じます。
©2024, All rights reserved, Printed in Japan

Ⅴ．令和5年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任,代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
公共精神健康医療研究部	西 大輔	主担当者	「心のサポーター養成に係る調査・分析業務等一式」	委託事業	厚生労働省
	西 大輔	主任研究者	「良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	西 大輔	主任研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	羽澄 恵	分担研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」内「COVID-19感染後の予後に関連する要因の検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	臼田謙太郎	分担研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」内「感染時期による罹患後精神症状の比較検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	片岡真由美	分担研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」内「COVID-19罹患経験の有無による精神症状の比較」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	臼田謙太郎	研究分担者	「精神保健医療福祉施設におけるトラウマ（心的外傷）への対応の実態把握と指針開発のための研究 」内「精神科医療機関に対するトラウマインフォームドケア研修の効果に関する検討」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	羽澄 恵	研究代表者	「睡眠不足の維持増悪に関連する心理的機序の解明」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））	日本学術振興会
	三宅美智	研究代表者	「精神障害者当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会
	三宅美智	研究分担者	「BPSD緩和を目的とした生活リズムの調整に着目した看護-介護共同介入モデルの作成」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会
	三宅美智	研究分担者	「精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究」	厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）	厚生労働省
	三宅美智	研究代表者	「行動制限最小化の活動に参加する精神障害当事者のための育成プログラムの開発」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会
	堀口寿広	研究協力者	身体的・精神的・社会的（biopsychosocial）に乳幼児・学童・思春期の健やかな成長・発達をポピュレーションアプローチで切れ目なく支援するための社会実装化研究	厚生労働科学研究費補助金(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業)	厚生労働省
薬物依存研究部	松本俊彦	主任研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	分担研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」内「覚醒剤使用障害患者の臨床像の経年的変化に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	研究代表者	「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」内「処方薬・市販薬依存症患者の実態と通院治療プログラムの開発に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	分担研究者	「アルコール・薬物使用者の行動変容促進アプリと適切なフィードバックAIモデルの開発」内「RCTリクルート、アプリ有用性評価」	文部科学省基盤研究（B）	文部科学省
	松本俊彦	分担研究者	「精神障害と物質使用障害を併せ持つ者への日本版統合治療支援ツールの開発と普及」内「研究全体に対して、依存症治療の立場からの助言」	文部科学省基盤研究（C）	文部科学省
	松本俊彦	共同代表	拠点センター（薬物依存症）	厚生労働省依存症対策全国拠点機関設置運営事業	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「薬物乱用・依存状況の実態把握のための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究」内「薬物使用に関する全国住民調査（2023年）」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省

薬物依存研究部	嶋根卓也	研究分担者	「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」内「大手チェーンドラッグストアにおける市販薬販売の実態に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「危険ドラッグと関連代謝物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究」内「大麻を乱用する少年における新たな大麻関連製品、危険ドラッグの乱用実態に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	「覚醒剤事犯者の理解とサポートに関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	分担研究者	「薬物使用と生活に関する全国高校生調査」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「ダルク等の当事者団体による依存症回復支援の現状と課題に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	富山健一	研究代表者	危険ドラッグの依存性等に関する評価	厚生労働省危険ドラッグの依存性等に関する評価業務事業	厚生労働省
	富山健一	分担研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」内「NMDA受容体機能解析のための細胞作成」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	富山健一	分担研究者	精神活性物質の化学構造に基づく乱用危険性予測に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）	厚生労働省
	富山健一	研究協力者	「危険ドラッグと関連代謝産物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究」内「新規オピオイド化合物の薬理学的特性並びに薬物依存性の評価」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	富山健一	研究協力者	「若年者を対象としたより効果的な薬物乱用予防啓発活動の実施等に関する研究」内「大麻を巡る国際社会の動向：米国及びカナダの規制状況について」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	高野 歩	研究代表者	飲酒・薬物使用のリアルタイム測定と機械学習に基づく即時介入モデルの開発	文部科学省基盤研究（B）	文部科学省
	高野 歩	研究代表者	飲酒に関する心理的・行動的データのリアルタイム測定と飲酒予測モデルの開発	研究助成金（特定研究領域）	お酒の科学財団
	高野 歩	分担研究者	ハームリダクションに基づく支援の導入・普及に関する研究：グループインタビュー調査	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	高野 歩	研究分担者	炎症性腸疾患患者への認知行動療法による疲労感管理プログラム考案と予備的介入研究	文部科学省基盤研究（C）	文部科学省
	高野 歩	研究分担者	日本版Moral Injury尺度の作成と信頼性・妥当性の検証	文部科学省基盤研究（C）	文部科学省
	近藤あゆみ	分担研究者	「女性薬物依存症者の回復支援に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
行動医学研究部	金 吉晴	研究代表者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	金 吉晴	研究代表者	トラウマを有する者における自殺行動の予測と予防に向けた認知機能・認知バイアスの検討	革新的自殺研究推進プログラム委託研究	厚生労働大臣指定法人いのち支える自殺対策推進センター
	金 吉晴	研究代表者	対話型カウンセリングAIの構築に向けたカウンセラーの効果的なコミュニケーションのパターン解析	共同研究	フロンティアリンク株式会社
	金 吉晴	研究分担者	「電子化医療情報を活用した疾患横断的コホート研究情報基盤整備事業」内「コホート研究を用いた研究連携と精神・神経疾患医療からみた疾患横断的予防」	医療研究連携推進本部 横断的研究推進費研究	国立高度専門医療研究センター
	金 吉晴	研究分担者	実装科学推進基盤構築支援事業	医療研究連携推進本部　JH横断的事業推進費	国立高度専門医療研究センター
	金 吉晴	参画機関研究開責任者	「「共生社会」をつくるアートコミュニケーション共創拠点」内「「文化的処方」のエビデンス構築と実践知の蓄積・共有システムの開発	共創の場形成支援プログラム・本格型（共創分野）	国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)
	金 吉晴	研究分担者	「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証」内「PTSDに対するメマンチンRCTの実施」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	堀 弘明	研究代表者	遺伝子発現プロファイリングによるストレス対処方略の個別最適化	武田科学振興財団医学系研究助成（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	堀 弘明	研究代表者	幼少期トラウマがもたらす生化学的・生理学的変化：概日リズムに着目した検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会

行動医学研究部	堀 弘明	研究分担者	「PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療」内「PTSDの遺伝子解析」	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究分担者	情動記憶における文脈情報喪失の発生機序の解明とこれを防止する心理介入法の開発	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究分担者	トラウマを有する者における自殺行動の予測と予防に向けた認知機能・認知バイアスの検討	革新的自殺研究推進プログラム委託研究	厚生労働大臣指定法人いのち支える自殺対策推進センター
	堀 弘明	研究代表者	心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究助成（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出	日本医療研究開発機構　戦略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究代表者	疼痛性障害の新規治療プログラムの脳科学的エビデンスの構築	中冨健康科学振興財団研究助成	中冨健康科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	新型コロナウイルス感染症後症候群に対する経皮的耳介迷走神経刺激を用いた新規治療法の開発	日本医療研究開発機構　『統合医療』に係る医療の質向上・科学的根拠収集研究事業	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究代表者	良画で悪画を駆逐する～摂食障害の正しい知識の啓発および予防・支援に資する動画の作成・普及活動～	三菱財団社会福祉事業	三菱財団
	関口 敦	研究代表者	摂食障害の治療支援センター設置運営事業（全国拠点機関分）	精神保健対策費補助金	厚生労働省
	関口 敦	研究代表者	東京都_摂食障害治療支援体制整備事業委託	補助金	東京都
	関口 敦	研究分担者	過敏性腸症候群の認知行動療法を社会実装する	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	精神疾患の新規治療法開発に向けた経皮的耳介迷走神経刺激の作用メカニズムの解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（B）	日本学術振興会
	小川眞太朗	研究代表者	プラズマローゲンを新たな軸とした精神疾患の前臨床研究―治療・病態・バイオマーカー	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	小川眞太朗	研究代表者	逆境的小児期体験とうつ症状の発現に関連するバイオマーカーの開発―リン脂質を軸に―	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	ウェブ持続エクスポージャー療法の効果検証と普及　コロナ禍にトラウマ治療を届ける	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	難治性パニック障害の予後予測因子解明と発達特性にマッチした修正型心理療法の開発	文部科学省科学研究費補助金 若手研究	日本学術振興会
	成田 瑞	研究代表者	AI機械学習を用いた食行動によるうつ病予防モデルの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	成田 瑞	分担研究者	「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証」内「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの効果と脳MRIの関連についての研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	成田 瑞	参画機関研究員	「「共生社会」をつくるアートコミュニケーション共創拠点」内「「文化的処方」のエビデンス構築と実践知の蓄積・共有システムの開発	共創の場形成支援プログラム・本格型（共創分野）	国立研究開発法人科学技術振興機構
	成田 瑞	分担研究者	ICD-11の適用を通じて我が国の死因・疾病統計の向上を目指すための研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	成田 瑞	分担研究者	「PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療」内「PTSD治療の脳画像研究」	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	大沼麻実	研究代表者	心理的応急処置（PFA)e-ラーニング開発と効果検証及び有効な普及方法の考察	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	伊藤(丹羽)まどか	研究代表者	複雑性PTSDに対する診断評価尺度の整備と治療法の検証	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	伊藤(丹羽)まどか	分担研究者	「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証」内「複雑性PTSDに対するSTAIR Narrative Therapyの無作為化比較試験」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	船場美佐子	研究代表者	過敏性腸症候群に対する認知行動療法のランダム化比較試験と治療効果の神経基盤の解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	船場美佐子	研究代表者	過敏性腸症候群の認知行動療法を社会実装する	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	船場美佐子	研究代表者	過敏性腸症候群に対する内部感覚曝露を用いた認知行動療法(CBT-IE)の実装研究	公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団研究助成金	公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団

児童・予防精神医学研究部	住吉太幹	研究代表者	経頭蓋直流刺激による統合失調症治療効果のモノアミン神経活動に基づく生体指標の開発	科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究 (B))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究代表者	バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	分担研究者	認知機能、身体機能に対する機能再建に着目したニューロモジュレーションの機序解明と臨床応用に向けての基盤整備	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	生体モニタリング情報に基づく疾患横断的精神機能評価	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究 (C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	神経伝達系と神経ネットワークの異常に着目した統合失調症の個別化治療システムの開発	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究 (C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	気分障害における認知機能評価バッテリー日本語版の信頼性・妥当性に関する研究	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究 (C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	身体活動低下によるフレイルの包括的病態解明とフレイルバイオマーカー探索および予防医療への展開(JH-Frailty Biomarker Study: JH-FBI Study)	医療研究連携推進本部横断的研究推進事費	国立高度専門医療研究センター
	住吉太幹	研究代表者	気分障害センター	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	多様なソースから収集するデータの蓄積と利活用のための個人情報の非特定化手法の開発とデータ加工技術の確立並びにデータの質担保に関する研究開発	日本医療研究開発機構　障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究代表者	大うつ病性障害患者を対象とした中央評価の妥当性に関する予備研究　～対面評価と情報通信機器を介入した遠隔評価との一致性の検討～	共同研究	大日本住友製薬株式会社／武田薬品工業株式会社／Meiji Seika ファルマ株式会社／塩野義製薬株式会社／大塚製薬株式会社／ヤンセンファーマ株式会社
	住吉太幹	研究分担者	超ハイリスク基準群における生体情報評価及びサイトカイン測定による統合失調症の発現予測因子の探索研究	共同研究	ヤンセンファーマ株式会社
	住吉太幹	研究分担者	気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対するLurasidone併用療法(ELICE-BD)の有効性評価のための6週間ランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験	共同研究	British Columbia大学
	住吉太幹	研究分担者	前治療抗精神病薬からブレクスピプラゾールの切り替えを実施する統合失調症患者及び統合失調感情障害患者を対象とした服薬継続率に関する多施設共同単群非盲検介入研究	共同研究	大塚製薬株式会社
	松元まどか	研究分担者	「メンタル・ウェルビーイングの客観的生体指標の開発と検証」	JST共創の場形成支援プログラム（COI-NEXT）【共創分野】「全世代対応型遠隔メンタルヘルスケアシステム(KOKOROBO-J)によるメンタルヘルスプラットフォームの開発・社会実装拠点」	国立研究開発法人科学技術振興機構
	松元まどか	研究代表者	「ヒトMEGによる喜びと志の神経回路ダイナミクス」	JSTムーンショット型研究開発事業 目標9「2050年までに、こころの安らぎや活力を増大することで、精神的に豊かで躍動的な社会を実現」 コア研究「脳指標の個人間比較に基づく福祉と主体性の最大化」	国立研究開発法人科学技術振興機構
	白間 綾	研究代表者	生体モニタリング情報に基づく疾患横断的精神機能評価	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
	白間 綾	研究分担者	3つの神経伝達系の非侵襲的同時測定法を用いた統合失調症の認知機能障害の解明	科学研究費助成事業 基盤研究B	日本学術振興会
	白間 綾	研究分担者	神経伝達系と神経ネットワークの異常に着目した統合失調症の個別化治療システムの開発	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
	白間 綾	研究分担者	ADHDの世界認識はなぜ「ズレ」るのか；表現学習における質的・量的変化の検証	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
	末吉一貴	研究代表者	精神疾患における認知的効率が社会機能へ及ぼす影響ならびにその機序の解明	若手研究	日本学術振興会　科学研究費助成事業
	末吉一貴	研究分担者	気分障害における認知機能評価バッテリー日本語版の信頼性・妥当性に関する研究	基盤研究 (C)	日本学術振興会　科学研究費助成事業
	長谷川由美	研究代表者	気分障害における認知機能評価バッテリー日本語版の信頼性・妥当性に関する研究	基盤研究 (C)	日本学術振興会　科学研究費助成事業
	山田理沙	研究代表者	アルコール依存症における飲酒量低減薬の反応性の客観的計測：前頭葉機能に基づく検討	科学研究費助成事業　研究活動スタート支援	日本学術振興会

精神薬理研究部	三輪秀樹	研究代表者	統合失調症における注意機構異常の神経基盤	科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金	日本学術振興会
	三輪秀樹	研究代表者	トランスレータブル脳指標による精神疾患横断的機能解析	第11回第一三共TaNeDS	第一三共(株)
	三輪秀樹	研究代表者	アルツハイマー病発症機構におけるGABA神経機能不全	武田科学振興財団　ビジョナリーリサーチ研究（スタート）	(株)武田科学
	三輪秀樹	研究代表者	睡眠による脳機能回復	リバネス研究費ウェルネス・エイジングケア賞	(株)リバネス
	三輪秀樹	分担研究者	「バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築」内「トランスレータブル脳指標による異なる精神・神経疾患間に共通の病態基盤の解明」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三輪秀樹	分担研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」内「フェンサイクリジン(PCP)やケタミンなどNMDA受容体拮抗薬の中枢作用の解析と薬物依存治療標的の探索」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三輪秀樹	分担研究者	「脳老化を抑制する転写抑制因子RP58とそのメカニズムの解析」内「生理学的解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「神経同期活動を軸とした統合失調症の橋渡し研究：病態解明と新規治療法開発にむけて」内「疾患モデル動物基礎研究の遂行」	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「ヒストン修飾異常がげっ歯類の統合失調症様行動異常を生じるメカニズムの解明」内「電気生理学的解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「手術検体を用いた脳腫瘍細胞と正常神経細胞間のてんかん原性回路の解明」内「パッチクランプ法・Ca imagingを用いた機能的アプローチ」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「恐怖記憶の処理過程に対するリルゾールの作用メカニズムの検討」の内「電気生理学的検討」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「細胞周期離脱遅延を用いた大脳皮質の人為的進化」内「脳機能解析}	科学研究費助成事業 （挑戦的研究（萌芽））	日本学術振興会
	古家宏樹	研究代表者	ヒストン修飾異常がげっ歯類の統合失調症様行動異常を生じるメカニズムの解明	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	古家宏樹	分担研究者	「ゲノム編集技術を用いたモデル動物作出による精神神経疾患の病態解明」内「ストレス性精神疾患モデル動物の作成と評価」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	古家宏樹	研究分担者	「恐怖記憶の処理過程に対するリルゾールの作用メカニズムの検討」の内「行動薬理学的検討」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	上條諭志	研究代表者	発達期の小脳活動異常によるASD病態形成過程の解明・発達期の小脳活動による「社会脳」の形成	研究助成金	明治安田こころの健康財団
	上條諭志	研究代表者	発達期の小脳活動抑制ASDモデルマウスにおける性特異的発症機構の解明	小児医学研究助成費	(公財)母子健康協会
	中武優子	研究代表者	凄惨な場面の目撃による幼少期トラウマがストレス脆弱性に及ぼす影響と脳内基盤の解明	研究活動スタート支援	日本学術振興会
	山田美佐	研究代表者	恐怖記憶の処理過程に対するリルゾールの作用メカニズムの検討	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
精神疾患病態研究部	橋本亮太	研究代表者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究代表者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究」内「疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究の統括発」	脳とこころの研究推進プログラム(精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト)	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究代表者	「精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究」内「精神科治療ガイドラインの社会実装検証研究の統括」	長寿・障害総合研究事業　障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	「縦断的MRIデータに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明」内「気分障害と統合失調症の疾患連続性に関する脳画像等の総合的解析研究」	戦略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	「精神疾患レジストリの利活用による治療効果、転帰予測、新たな層別化に関する研究」内「脳神経画像の解析と縦断データに基づく、精神疾患の治療効果及び予後に関する層別化」	長寿・障害総合研究事業　障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構

精神疾患病態研究部	橋本亮太	研究分担者	「精神疾患の個別化医療を実現するためのゲノム・空間オミクス多施設共同研究」内「解析対象ASD/SCZ家系の選定と臨床情報の収集」	ゲノム医療実現バイオバンク利活用プログラム:B-Cureゲノム医療実現推進プラットフォーム・先端ゲノム研究開発事業	日本医療研究開発機構
	橋本亮太	研究分担者	「発達障害に関わる神経生物学的機構の霊長類的基盤の解明」内「発達障害のリスク遺伝子の同定」	科学研究費助成事業　特別推進研究	日本学術振興会
	橋本亮太	研究分担者	ヒト精神疾患のバイオタイプにアプローチする疾患モデル脳の構造・機能解析と創薬	科学研究費助成事業　基盤研究（A）	日本学術振興会
	橋本亮太	分担研究者	「バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築」内「精神病症状に関連する生物学的評価指標の検討と患者層別化研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	橋本亮太	研究代表者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発」	知的財産プロデューサー派遣事業	独立行政法人工業所有権情報・研修館
	三浦健一郎	研究代表者	精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究	科学研究費助成事業　基盤研究（C）	日本学術振興会
	三浦健一郎	研究分担者	「双方向トランスレーショナルアプローチによる精神疾患の脳予測性障害機序に関する研究開発」内「眼球運動の状況予測性解析法の研究開発と疾患横断的理解」	革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	「精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究」内「理解度、実践度、治療に関するデータ管理」	長寿・障害総合研究事業　障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断のエビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究」内「中間表現型とゲノムの特徴量抽出とデータ駆動型解析」	脳とこころの研究推進プログラム(精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト)	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	アスリートにおける「能動視覚」の機構解明とバイオマーカーの開発	科学研究費助成事業　基盤研究（B）	日本学術振興会
	三浦健一郎	研究分担者	クロザピン抵抗性統合失調症のバイオマーカーの開発	科学研究費助成事業　基盤研究（C）	日本学術振興会
	三浦健一郎	研究分担者	精神疾患の病前推定知能と脳構造画像についての疾患横断的大規模多施設研究	科学研究費助成事業　基盤研究（C）	日本学術振興会
	三浦健一郎	分担研究者	「データサイエンスと計算論研究の融合による脳病態研究の推進」内「精神神経疾患の中間表現型情報による分類・層別化の研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本純弥	研究代表者	精神疾患の病前推定知能と脳構造画像についての疾患横断的大規模多施設研究	科学研究費助成事業　基盤研究（C）	日本学術振興会
	松本純弥	研究分担者	「精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究」内「理解度、実践度、治療に関するデータ収集」	長寿・障害総合研究事業　障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究分担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断のエビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究分担者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究」内「中間表現型情報と生体試料の収集とバイオマーカーの測定」	脳とこころの研究推進プログラム(精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト)	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究分担者	クロザピン抵抗性統合失調症のバイオマーカーの開発	科学研究費助成事業　基盤研究（C）	日本学術振興会
	松本純弥	研究分担者	精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究	科学研究費助成事業　基盤研究（C）	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究代表者	精神疾患の処方行動における治療ガイドラインの普及と教育の効果検証	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究代表者	精神科領域の治療ガイドラインの普及と教育が実臨床の治療行動に及ぼす効果の検証	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究分担者	精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究	科学研究費助成事業　基盤研究（C）	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究分担者	精神疾患の病前推定知能と脳構造画像についての疾患横断的大規模多施設研究	科学研究費助成事業　基盤研究（C）	日本学術振興会
	安田由華	研究分担者	「精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究」内「精神科診療ガイドラインの講習と医師に対する理解度の検証」	長寿・障害総合研究事業　障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	安田由華	研究分担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断のエビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構

睡眠・覚醒障害研究部	栗山健一	主任研究者	睡眠ポリグラフデータバンクの拡充およびこれを活用した睡眠障害・精神神経疾患の病態解明と生理学的診断マーカー・治療法開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	栗山健一	研究代表者	適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備	厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	栗山健一	研究開発分担者	オンライン診療を介したリアルワールドデータを活用した「睡眠脳波と問診デジタルデータによるうつ病の検査-問診-診断支援システム」の開発・事業化	日本医療研究開発機構研究費	日本医療研究開発機構
	栗山健一	研究分担者	次期健康づくり運動プラン作成と推進に向けた研究	厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	栗山健一	研究代表者	睡眠時間の主観ー客観乖離と健康不安が不眠症診断・健康転機に及ぼす影響の包括的検討	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	科学研究費助成事業(基盤研究Ａ)	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	アルツハイマー病の病理と睡眠障害ーアミロイドPET・タウPETと睡眠指標との関連	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	更年期女性の不眠の病態生理と身体運動に着目した睡眠改善プロトコルの開発と効果検証	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	栗山健一	研究代表者	アルツハイマー型認知症に伴う不規則睡眠覚醒リズム障害（ISWRD）を対象としたE2006の国際共同第3相試験	受託研究	エーザイ株式会社
	栗山健一	研究代表者	モディオダール錠100mg使用成績調査	受託研究	田辺三菱製薬株式会社
	北村真吾	研究代表者	個人の概日リズム特性の決定に対する出生後環境の寄与	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究開発分担者	ヒトの時計老化年齢を評価する血液バイオマーカーの探索とその応用	日本医療研究開発機構研究費	日本医療研究開発機構
	北村真吾	研究分担者	睡眠の自然免疫機能への寄与解明のための実態調査および発展的介入試験	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	子どもの健康睡眠習慣を考慮したスクリーンタイム／グリーンタイムガイドラインの開発	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	北村真吾	研究代表者	木材を用いた空間が睡眠に与える影響について 木材を用いた空間が睡眠に与える影響について	受託・共同研究	国立大学法人東京大学／三井不動産株式会社
	吉池卓也	研究代表者	脳構造の可塑性ダイナミクスと気分障害病態の関連探索	科学研究費助成事業(若手研究)	日本学術振興会
	吉池卓也	分担研究者	バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	吉池卓也	研究分担者	遷延性悲嘆症の生物学的基礎に関する研究の統括・実施	科学研究費助成事業(基盤研究B)	日本学術振興会
	吉池卓也	研究分担者	適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備	厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	河村 葵	研究代表者	月経前症候群・月経前不快気分障害の症状再燃と患者家族の感情表出の関連	ロート女性健康科学研究助成	ロート株式会社
	河村 葵	研究分担者	更年期女性の不眠の病態生理と身体運動に着目した睡眠改善プロトコルの開発と効果検証	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	肥田昌子	研究代表者	概日リズム睡眠覚醒障害の遺伝要因とその発症分子メカニズム	科学研究費助成事業(基盤研究C)	日本学術振興会
	内海智博	研究代表者	アルツハイマー型認知陵の病原因子と睡眠中の記憶定着・増強プロセスとの関連	学術研究助成	神経研究所　睡眠健康推進機構
知的・発達障害研究部	岡田 俊	研究代表者	表情認知障害を起点とする自閉スペクトラム症の二次障害の成立過程の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	岡田 俊	研究分担者	疾患コホートを用いた22q11.21欠失症候群の表現型の追跡とゲノムバリアント探索	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	岡田 俊	研究分担者	子どものための診断アセスメントとサービス改善プロジェクト	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	岡田 俊	研究分担者	自閉症スペクトラム障害をもつ人のための「未来語りのダイアローグ」実践モデルの開発	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	岡田 俊	研究代表者	神経発達症の多様性の基盤となる病態解明と個別性に応じた治療法の開発と普及	精神・神経疾患研究開発費（4-4）	国立精神・神経医療研究センター

知的・発達障害研究部	岡田 俊	分担研究者	児童青年精神疾患のコンピュータ適応型スクリーニング法およびコンピュータ支援診断面接法開発のためのプロトコル作成	AMED 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	岡田 俊	分担研究者	前世代対応型遠隔メンタルヘルスケアシステム（KOKOROBO-J）によるメンタルヘルスプラットホームの開発・社会実装拠点	研究成果展開事業　共創の場形成支援	JST
	岡田 俊	分担研究者	療育手帳の交付判定及び知的障害に関する専門的な支援等に資する知的能力・適応行動の評価手法の開発のための研究	厚生労働省科学研究費障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	岡田 俊	研究代表者	強度行動障害を有する者の一般医療受診に関する実態調査	厚生労働省障害者総合福祉推進事業費補助金	厚生労働省
	石井礼花	研究代表者	更年期の母の育児に関する実態調査と脳神経基盤の解明～サポートシステム構築に向けて	文部科学省科学研究費 学術変革領域研究（A）	文部科学省
	石井礼花	研究代表者	ADHD児へのペアレントトレーニングの医療機関での実装戦略/効果予測MRI指標開発と検証	文部科学省科学研究費 基盤研究（C）	文部科学省
	江頭優佳	研究代表者	「脳活動と行動に基づく注意欠如・多動症児の時間認知系機能検査バッテリーと治療法開発」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究）	文部科学省
	江頭優佳	分担研究者	表情認知障害を起点とする自閉スペクトラム症の二次障害の成立過程の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	江頭優佳	研究代表者	神経発達症（発達障害）の神経心理・心理社会的病態モデルの構築―疾患コホートと地域コホートの両面からの検証	横断的研究推進費　若手研究助成	国立高度専門医療研究センター
	江頭優佳	研究代表者	時間知覚と脳構造脳機能に基づくADHD病態の類型化の試み	明治安田こころの健康財団　研究助成	明治安田こころの健康財団
	江頭優佳	研究代表者	ADHD児における時間知覚機能不全と不適応行動との関係の解明-介入方略の開発を目指して-	発達科学研究教育奨励研究助成金	発達科学研究教育センター
	林 小百合	研究代表者	自閉スペクトラム症における共同注視障害の心理学的基盤と促進要因の解明	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究）	文部科学省
	林 小百合	分担研究者	表情認知障害を起点とする自閉スペクトラム症の二次障害の成立過程の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	林 小百合	研究代表者	臨床表現型-神経心理評価-脳構造画像からなる神経発達症のレジストリ構築と病態解明	横断的研究推進費　若手研究助成	国立高度専門医療研究センター
	請園正敏	研究代表者	社会的促進の観察効果と共行動効果の発生機序解明に向けて	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究）	文部科学省
	請園正敏	研究分担者	ヒトにおける嗅覚コミュニケーションの解明：嗅覚感度と社会駅認知および社会的行動	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	請園正敏	研究分担者	表情認知障害を起点とする自閉スペクトラム症の二次障害の成立過程の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	高田美希	研究代表者	親子総合交流療法の中断要因の解明と治療開始基準作成を目指したパイロット研究	文部科学省科学研究費補助金 奨励研究	文部科学省
	高田美希	研究代表者	親子相互交流療法（PCIT）の治療プロセスと中断要因の解明	ファイザーヘルスリサーチ研究助成	ファイザーヘルスリサーチ振興財団
	稲垣真澄	研究分担者	自治体3歳児健診における統一発達スクリーニングの開発及び社会実装	文部科学省科学研究費 基盤研究（B）	文部科学省
	稲垣真澄	研究分担者	適応的歩行障害における神経性制御メカニズムの解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
地域精神保健・法制度研究部	藤井千代	研究代表者	精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する政策研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に向けた精神保健医療福祉に関わるサービスの提供体制構築に資する研究　内「精神科医療機関ニーズの調査と包括的支援マネジメントの患者特定調査」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	障害者総合支援法の見直しを踏まえた、地域で暮らす障害者の地域生活支援の効果的な支援方法及び評価方法の検討のための研究　内「調査の企画」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制における入院医療による支援のための研究　内「非自発的入院に関する実態調査」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	主任研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	藤井千代	研究分担者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会

地域精神保健・法制度研究部	藤井千代	研究分担者	処遇の難しい精神障碍者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	ドメスティック・バイオレンス加害者の暴力重症化リスクアセスメントの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	行動制限最小化の活動に参加する精神障害当事者のための育成プログラムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	山口創生	研究代表者	精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に向けた精神保健医療福祉に関わるサービスの提供体制構築に資する研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	山口創生	研究代表者	精神障害者就労支援における当事者視点の評価とサービス品質の自己管理システムの開発	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	山口創生	研究代表者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	山口創生	研究分担者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	山口創生	研究分担者	スクールソーシャルワーカーの専門性と質の保証のためのアウトカム指標のパッケージ化	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究代表者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究分担者	精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に向けた精神保健医療福祉に関わるサービスの提供体制構築に資する研究内「ウェブサイトの開発および検証」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	佐藤さやか	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	小池純子	研究代表者	処遇の難しい精神障碍者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	小池純子	研究分担者	精神障害者就労支援における当事者視点の評価とサービス品質の自己管理システムの開発	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	小池純子	研究分担者	認知機能を軸とした急性期の気分障害における評価と包括的支援の開発及び効果の検証	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	黒田直明	研究代表者	第8期障害福祉計画の精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築に係る成果目標の見直しに資する研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	黒田直明	研究分担者	地域の実情に応じた在宅医療提供体制構築のための研究　内「市町村行政、公共精神保健学の立場からの分析」	厚生労働科学研究費補助金 地域医療基盤開発推進事業	厚生労働省
	小塩靖崇	研究代表者	運動競技選手におけるメンタルヘルス疫学調査とスクリーニング法に関する研究	科学研究費助成事業　若手研究	日本学術振興会
	小塩靖崇	研究代表者	アスリートのメンタルヘルスケアのあり方ー社会文化的背景の影響に関する日豪比較研究	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（A）	日本学術振興会
	小塩靖崇	研究代表者	アスリートの、アスリートによる、みんなのための、メンタルヘルス教育プログラム開発	イニシアティブプログラム助成金	トヨタ財団
	川口敬之	研究代表者	精神障害者におけるリカバリーと生活の困難さの関連に基づく生活支援システムの構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究	日本学術振興会
	川口敬之	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	川口敬之	研究代表者	精神障害当事者と支援者との共創によるリカバリー促進に向けた協働意思決定モデルの構築	三菱財団助成 社会福祉事業・研究助成	三菱財団
	川口敬之	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究　内「精神障害当事者との協働に基づく災害時の精神保健福祉体制に関わるガイダンスの開発」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター
	岩永麻衣	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	臼井 香	研究分担者	多職種アウトリーチ支援における精神障害者・家族の10年間の軌跡：多機関共同縦断研究	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会

地域精神保健・法制度研究部	阿部真貴子	研究分担者	オンライン演奏における身体性の認知神経基盤の解明および演奏教育・音楽療法への応用	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	杉山直也	研究代表者	精神科医療機関における行動制限最小化の普及に資する研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	杉山直也	研究分担者	精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する政策研究　内「精神科救急医療体制に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	河野稔明	研究代表者	自治体における精神保健福祉法の通報等事例と支援をモニタリングする基盤の構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	松長麻美	研究代表者	授乳に伴う心理的苦痛測定尺度の開発および標準化	調査研究助成	公益財団法人神経研究所
	安間尚徳	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究」内「地域精神保健医療福祉に関わる支援者、行政職員を対象とした地域精神保健医療福祉研修プログラムの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター
	塩澤拓亮	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究　内「地域精神保健領域におけるコアアウトカムセットの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立研究開発法人　国立精神・神経医療研究センター
ストレス・災害時こころの情報支援センター	金 吉晴	研究代表者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	金 吉晴	研究代表者	トラウマを有する者における自殺行動の予測と予防に向けた認知機能・認知バイアスの検討	革新的自殺研究推進プログラム委託研究	厚生労働大臣指定法人いのち支える自殺対策推進センター
	金 吉晴	研究代表者	対話型カウンセリングAIの構築に向けたカウンセラーの効果的なコミュニケーションのパターン解析	共同研究	フロンティアリンク株式会社
	金 吉晴	研究分担者	「電子化医療情報を活用した疾患横断的コホート研究情報基盤整備事業」内「コホート研究を用いた研究連携と精神・神経疾患医療からみた疾患横断的予防」	医療研究連携推進本部 横断的研究推進費研究	国立高度専門医療研究センター
	金 吉晴	研究分担者	実装科学推進基盤構築支援事業	医療研究連携推進本部　JH横断的事業推進費	国立高度専門医療研究センター
	金 吉晴	参画機関研究開責任者	「「共生社会」をつくるアートコミュニケーション共創拠点」内「「文化的処方」のエビデンス構築と実践知の蓄積・共有システムの開発	共創の場形成支援プログラム・本格型（共創分野）	国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)
	金 吉晴	研究分担者	「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証」内「PTSDに対するメマンチンRCTの実施」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	金 吉晴	実務担当者	令和5年度こころの健康づくり対策事業 PTSD対策専門研修事業	国庫補助金	厚生労働省
	金 吉晴 大沼麻美	事業担当者	東京都 令和５年度災害時精神科医療体制整備事業（災害時精神科医療研修）	委託事業	東京都
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究助成（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出	日本医療研究開発機構　戦略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究代表者	疼痛性障害の新規治療プログラムの脳科学的エビデンスの構築	中冨健康科学振興財団研究助成	中冨健康科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	新型コロナウイルス感染症後症候群に対する経皮的耳介迷走神経刺激を用いた新規治療法の開発	日本医療研究開発機構 『統合医療』に係る医療の質向上・科学的根拠収集研究事業	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究代表者	良画で悪画を駆逐する～摂食障害の正しい知識の啓発および予防・支援に資する動画の作成・普及活動～	三菱財団社会福祉事業	三菱財団
	関口 敦	研究代表者	摂食障害の治療支援センター設置運営事業（全国拠点機関分）	精神保健対策費補助金	厚生労働省
	関口 敦	研究代表者	東京都_摂食障害治療支援体制整備事業委託	補助金	東京都
	関口 敦	研究分担者	過敏性腸症候群の認知行動療法を社会実装する	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	精神疾患の新規治療法開発に向けた経皮的耳介迷走神経刺激の作用メカニズムの解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（B）	日本学術振興会
	小川眞太朗	研究代表者	プラズマローゲンを新たな軸とした精神疾患の前臨床研究―治療・病態・バイオマーカー	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会

ストレス・災害時こころの情報支援センター	小川眞太朗	研究代表者	逆境的小児期体験とうつ症状の発現に関連するバイオマーカーの開発―リン脂質を軸に―	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	ウェブ持続エクスポージャー療法の効果検証と普及 コロナ禍にトラウマ治療を届ける	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	難治性パニック障害の予後予測因子解明と発達特性にマッチした修正型心理療法の開発	文部科学省科学研究費補助金 若手研究	日本学術振興会
	成田 瑞	研究代表者	AI機械学習を用いた食行動によるうつ病予防モデルの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	成田 瑞	分担研究者	「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの有効性・安全性の検証」内「心的外傷後ストレス障害に対するメマンチンの効果と脳MRIの関連についての研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	成田 瑞	参画機関研究員	「「共生社会」をつくるアートコミュニケーション共創拠点」内「「文化的処方」のエビデンス構築と実践知の蓄積・共有システムの開発	共創の場形成支援プログラム・本格型（共創分野）	国立研究開発法人科学技術振興機構
	成田 瑞	分担研究者	ICD-11の適用を通じて我が国の死因・疾病統計の向上を目指すための研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	成田 瑞	分担研究者	「PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療」内「PTSD治療の脳画像研究」	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	大沼麻実	研究代表者	心理的応急処置（PFA)e-ラーニング開発と効果検証及び有効な普及方法の考察	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会

精神保健研究所年報No.37（通号No.70）2024

令和6年8月16日発行

編集責任者　金　吉晴・張　賢徳

発行所　国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所
〒187-8553
東京都小平市小川東町4-1-1
電話 042（341）2711

（非売品）

印刷：有限会社　太平印刷

©2024, All rights reserved, Printed in Japan